
Fight?with the DARKNESS! **-闇と共に戦う**

しう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fight? with the DARKNESS! -闇と共に戦う

【Nコード】

N8342N

【作者名】

しゅう

【あらすじ】

「死体洗いのアルバイト」? いいえ「死体作りの公務員」。人がみな魔法を使う国、セルタンティーヌに住む青年の仕事は「人殺し」。しかし暗殺なんて行きません。国もしくは警察から命令を受け、それに従って堂々と殺ります。納得がいなくても不条理であつても、とりあえず上司に従えば宜しい。そして身分は公務員。給料安定、失業なし!……死なない限りは。というのも危険な職業なもので、明日をも命は知れない身。保険に入るのも苦勞しそう。

おまけに『憲法 条にのっとって』だの、『守秘義務を破ったら三年以下の懲役又は五十万円以下の罰金』だの、身の回りには法律という名の枷かせがいっぱい。こうしてキッチリ縛られて、彼は今日も戦いに行きます。残酷描写は戦闘シーンによるもの。のんびりとどうぞ。

01・ハジマリ(前書き)

画像：<http://www.shosho.com/>
photo/|

01 - ハジマリ

> i 1 2 1 9 4 — 5 2 8 <

外出先で忘れ物に気が付いた？ そんなときは『召喚魔法』で呼び出せばいい。

学校に遅刻しそう？ でも大丈夫、『テレポーターション』を使えば一瞬でつく。

素人でも、ちょっとした魔法なら使うことが当たり前。それが帝国、セルタンティーヌ。

その東のはずれに、オステンという町があつた。豊かな緑に囲まれないながら、近代的なビルも立ち並ぶ。しかし全体的には、古い建築物が多い。その中でも、ひときわ大きく、高くそびえる建物があつた。

赤色のレンガがつみ重ねられた壁に、窓枠は白。青い屋根はやや色あせているものの、しっかりと雨風を避けている。敷地内のあちこちに女神やライオンの彫刻があるが、いくつかは残念ながら、蜘蛛の巣と埃で台無しになっている。

どことなく教会のような外見。しかし、外の門には『セルタンティーヌ国立 教指揮学園』という標識がさがっている。

この建物は、セルタンティーヌの国内で、もつとも大きな国立校。六歳から十五歳までの子供を主な対象としているが、実際は年齢も学歴もまったく構わず『学びたい』という意志を示せば、誰でも入学可能という、自由な校風の学校だつた。三歳や四歳の子供でも、三十や四十過ぎた大人でも、意志と所定の学力さえあれば入学できる。

年齢層がバラバラなため、授業は難航しそうなものの、キツチリしたカリキュラムと細やかな指導のおかげで、成績はおおむね優秀。

『この学校を卒業した者はシツカリしていて、社会に出てから役に立つ』という評価を多々受けている、良い学校だった。

そして、その学園の、二階の教室の片隅。ぽかぽかと日当たりのよい場所をじんどり、青年が一人、椅子に座って、ケータイを片手にしきりと声をあげていた。

「なあ、そう思うだろ、しーちゃんよ！ 考えてみてよ。どうして十六歳にもなって、一般人のガキどもに混じって授業を受けにやならんだ？ ……うん、うん。え、何？ 何だその言いぐさは。俺に常識が欠落しているとでもいいたいか、失礼な。ああ、しかし今日もいい天気だなあ。まるでお前の頭みたいに真っ青じゃねえか。

あ、ごめん間違えた。それを言うなら『頭が真っ白』だったね。いやでもお前の髪の毛、赤色じゃん？ 俺は青だけど。ってそれじゃあ俺の方が真っ青だ！ うわ、自滅した」

話のまとまりは兎に角として、本人が言うように彼の髪は青くバサバサ。ハサミの通し方が乱雑なのか、襟首や肩に適当に散らばっている。瞳は緑で右頬から右目にかけて、いれずみのようにある黒い模様が、実際より目つきを悪く見せている。

爪はネイルをいれたように黒く、携帯電話も、そして服も、上下真っ黒である。まるで喪中であるかのようなだが、アクセントなのか、胸の中央には青いブローチをとめていた。

彼は電話が壊れるのではないかという勢いで、電話口の相手に愚痴っていた。

「何が楽しくて今更『素因数分解』 『物質と化学変化』 『ボタンのつけ方』 『カレーの作り方』とかやらなきゃならんだ？ 素因数分解と物質うんぬんは十歳の時にやらされたし、カレーの作り方は一人暮らししてるから知ってるし、ボタンのつけ方に至っては六歳の時にばーちゃんから直に習ったよ！ え、何。言っている意味がよく分からない？ 畜生だったらお前もこの学校に来いや。……あ、

おい。ちょ、電話切るなよ。もうくひどいな」
彼はブツブツ言いながら電話を切った。

この、やたら口数の多い青年の名前は闇蝙蝠やみこうもり、十六歳。

闇蝙蝠というのは、本名ではなくあだ名である。ただ誰もが皆、彼をこの名で呼んでおり、本名は呼ばない。そして名前といえば、一つ普通の生徒とは違うことが一つあった。

この場に堂々と居座っているように、彼はこの学校の学生であり、学生証を持っている。そこに記載されているのは『苗字・名前』のきちんとしたフルネーム。だが、その名前も彼の本名ではない。いふなれば偽の名前である。

国が運営する学校に、偽名を用いて入学している。何ともおかしな話だが、れっきとした理由があった。

彼こと闇蝙蝠は、実は戦さ人だった。ケータイで友人に愚痴をこぼしている姿からは微塵みじんも想像できないが、己の肉体を使い、武器を手に取り戦って、国民を守る仕事を務めている。

しかし、立場は微妙な所だった。人の命を奪って金をもらうが、暗殺者のように闇に潜むことはせず、その辺を歩いている国民を適当に切り殺すこともない。また、死刑が確定した犯罪者の首を切る事もしない。

国、もしくは警察から依頼された時に限り、仲間と共に群れを作って、指定された相手を襲う。まるでイヌのようだが、それが、彼の役目だった。

ただ何にしせよ、殺人とは穏やかではない。そもそも何故、国が殺人など依頼するのか？

02 - 瀏華隊

それには、こんな事情があった。

表向き、麗しき平和を保っているセルタンティーヌ国。だが、実は別の顔も有していた。

知る人ぞ知る、裏通りを更に入った所に存在する闇市場。違法とされている物の売買が、もう百年以上にも行われていようか。今なお毎日のように売買されるのは、脱法ドラッグ、無駄に高価な偽薬、人をおとしいれ呪い、殺す、世にもおぞましき呪術用品。

麻薬、あるいは覚せい剤・あへん・けし・けしがら。シンナーやある種の有機溶媒も、この国では全て『ドラッグ』とまとめて呼ぶ。どれも人を墮落させ心身を破壊する恐ろしいシロモノ。

偽薬は、読んで字のごとく。驚くほど高い値段がつけられた何の効果も持たない『ニセモノ』だが、それを信じて財産をつぎ込み、破産した人も少なくない。もちろん医療機関で投与されるプラセボとは全く別物である。

呪術用品に至っては、これが、ある意味一番夕チが悪いかもしれない。魔法が使われるこの国では、呪術用品は単なるインテリアではなく本当に効果が出ることもある。

健康になんら問題のない人が、ある日、突然バタバタと死ぬ。おかしいと思つて調べれば、何か妙な魔法の痕跡。魔法はかければ必ず痕跡を残し、ほとんどの場合それによつてアシがついて捕まってしまう。だが、いくら犯人が捕まっても死んだ人は返つてこない。死人を生き返らせる魔法など無し、またそのような事件がおければ投獄の危険を犯してもやりたがる者が必ずいる。

どれもこれも、野放しにしていれば何も罪のない人まで『明日殺されるか、今日殺されるか』と心配するハメになる。取り締まらなければ治安が維持できない。普通なら国の法に則して警察が取り締まるのだが、しかし、それが出来なかつた。

このように大規模な危ない物の数々。買い手は道を誤った愚かな国民であるとして、売り手は誰か……と元をただせば、ただ一つの巨大な組織にいきつく。実はもう百年以上、代をかえ脈絡と続いていく『悪の』組織。

昔から国は、彼らを逮捕する努力をしていた。警察官を武装させ、居場所を突き止めて一斉逮捕にとりかかる。しかし相手は非常に強大　　というより凶悪で、ほとんど歯がたつていなかった。

個人や、小さな組織とはわけが違う。その組織は自ら武装し立ち向かい、警察官を殺してなお逃げ続けた。結果衝突のたびに殉死する警察官が多数出た。

百年以上の間に、そうして亡くなっていった警察官は何百人にも上るだろう。しかも、そういった犠牲を出しても、捕まえられないのは下っ端ばかり。本当に尾をひいている上の連中は捉えられない。

だが国としては決して屈するわけにはいかない。結果、苦肉の策をこつじた。

力には力で対抗する。相手が武装し戦闘をしかけてくるのなら、こちららもつと武装しもつと強い戦闘で返す。また相手がこちららを殺す気である以上、こちららも容赦は全くしない。殺人は非道だが、彼らがいなくなれば何百人、何千人もの人が救われる。

皆を守るために、悪の芽は徹底して殺すべき。その信念の下、およそ九十年前に国は特別な部隊を指揮してつくった。大元の名は『ていこくぐん帝国軍』、それが東・西・南・北の四のグループに分かれて、それぞれ定められた区域を担当している。ここ東の田舎オステンを担当しているグループは瀏華隊。りゅうかたい

だが『帝国軍』はその役目上、非常に物騒な組織となった。条件付きとはいえ『殺人をしても罪に問われない』という権限を持ち、人を殺して平和を守る殺人軍団。閻蝙蝠はそこに属していて、命令が下れば即座に駆けより人を殺す役目を担っていた。

しかし、そんな彼が何故この学校にいるのか。役目が悪者の討伐であるなら、そちらに行くのが筋なはず。なのに、どうしてかこの平和な『学校』にいる。……否。

むしろ、闇蝙蝠が学校にいるのは『普通』だ。この国では成人は十八歳から、対して彼はまだ十六歳。義務教育は十五歳までだが、だとしても年が若すぎる。

どうして殺人を仕事としているのか？ なぜ学生として普通に勉学に忙しんだり、就職したりしないのか？

つつけばつつくほど、謎は出てくる。……だが、また更に面倒なことが一つ。

この学校の生徒の中で、瀏華隊に属している者は他にもいる。そして今まさに、うち一人が闇蝙蝠の机の前にやってこようとしていた。

「あゝあ、大体なんでしーちゃんは学校行ってないんだよ。あいつこそ、むしろ行くべきだろうが。あの残虐っぷりはすでに常識の域を超えている。絶対エレメンタリースクールからやり直してエレメンタルにチェックを入れてもらうべきだ。」

あれ、精神ってエレメンタルじゃなくてメンタルだったかな。まあいいや、どうせ俺の独り言なんて誰も気にとめないもンッ」

傍に話を聞く人などだれもいないのに、閉じたケータイに向かつてブツブツ言う闇蝙蝠。その姿は、彼女に『別れて』と言われた男が未練たらたらに文句を言っているのと大差なかった。

要するにみつともないわけだが、彼は止めるどころか次々と文句を吐きだしていた。

「もう、これも親父のせいだ。親父が勝手に手続きするからこの学園に通うハメになるんだ。そりゃあ俺は一人暮らしだからサボったって別にいいよ？ でも俺、真面目だし順応だから行けっついでいわれたら行かざるを得ないんだド畜生があ！」

「うるさいよっ！」

突然、声と共にバシツと机が叩かれた。音に驚いたのもつかの間「何だよ」と声をあげて視線をあげれば、目に飛び込んできたのは一冊の黒い日誌。

「なんだ、それ」

さらに闇蝙蝠が視線を上にあげると、目に映ったのは誰かの白い服。肩丸出し白Tシャツの下に黒いタンクトップ、紺の短パンといったラフな服装。水色のショートカットは柔らかい癖っ毛で、ヘアピンで前を留めている。

紺色の瞳に、今はどこか小バカにしたような表情をうかべた一人の少女が、闇蝙蝠の前に仁王立ちしていた。

「もう、一人で喋ってんじゃないよっ。迷惑つてもものも考えなさい。ていうか、なんか怖いよっ？ 電話してるわけでもないのにケータイに向かってブツブツブツブツ……」

チビな上に幼児体型。しかしこれでも闇蝙蝠より一つ上の十七歳。彼女の名はピロロと言った。学生証にある名前は『ピロロ＝インガルス』で、皆も彼女をその通り呼ぶ。

だがこれも、彼女の本当の名前ではない。そして彼女もまた、闇蝙蝠と同じく瀏華隊の一人だった。

ピロロは闇蝙蝠の目の前にバサリと日誌を置き、次いでまくしたてた。

03・テレポーターション

「お前、なんで日誌なんて持ってるの？」

「日誌じゃない。これ、ノートよっ」

「へえ？ 見かけはどう見ても日誌だけどなあ。そういうデザイン？」

「それよりもっ、聞いて。あのね、アンタを呼んでる人がいるよっ」

「え、呼び出し？ 誰。先生か？」

「違う。扉のとこ見てっ」

言われるがまま教室の扉 スライド式の、ごく普通の白い扉
を見ると、なるほど確かに、人がいた。

男性。空色の髪はストレートで長く、腰まである。着ているものはキツチリとした黒のスーツで、胸元には赤いネクタイ。薄紫の瞳に銀色のメガネをかけていて、全体的に知的な印象がある。ただ、どうみても大人だった。

「やっぱり先生じゃん」

「違うって、あの人も生徒。二十八歳だけど生徒なのっ」

「二十八歳？ なんで年を知ってるんだよ」

「本人から聞いたからっ。兎に角、ほら。待たせちゃ悪いでしょっ。早く行きなさいよっ」

「ああ、分かった」

誰がよく分からなかったが、闇蝙蝠は言われるがままに扉に向かった。途中でチラッとピロロの方を振り返ると、彼女は早々に、同じくらいの年の女の子と親しげに喋っていた。

相手は淡いピンク色の、柔らかそうな髪をした子だった。見覚えのない人物だったが、しかし同じ学年の生徒は二百人を下らない。今、戸口で待っている男性のように特徴が かなりの年長ということだが があればまた別として、一人一人の顔など覚えていない。闇蝙蝠は特に気にせず、男性のもとに近づいた。

「こんにちは」

近づくと、男性は先に挨拶をした。ずっと年下の闇蝙蝠に対しても丁寧な物腰だ。

「少し、宜しいでしょうか？」

「俺は別に構いませんが、あんた、誰です？ 見たことがないね」

「あ、失礼しました。私、フェイアントといいます。……そして」
ぐっと相手は声をひそめた。

「貴方と同じ、帝国軍のひとつ瀏華隊の隊員です。後でリーダーから会議のメールがあるかと思いますが、ただ貴方も此処にいられたもので。他の方より一足先にご挨拶をと」

「そ、それは丁寧ありがとうございます。俺、闇蝙蝠っていうんだ。変な名前だけど、まあ宜しく」

やたらシツカリとした礼をされ、闇蝙蝠は少々たじろぎつつ答えた。

一足先に挨拶をしてくれるのはいいが、どうして自分だけ？ ピ

ロロは？ そんな疑問を抱く彼を、相手はメガネごしにじっと見つめた。

「瞬間移動魔法使用者という話をリーダーよりうかがっていました。そうなのですか？」

「うん、そうだけど」

「おまけに、珍しい一級免許所持者であると。凄いですね。四級なら持っている方は多いですが、一級となると本当に」

「ああ」

と、ここでようやく闇蝙蝠は理解した。

「ひょっとしてあんた、俺がテレポーターと知って訪ねてきたのか？」

「ええ、そうです」

フェイアントは少しため息をついた。

「実はですね、私も所得しようと思っっているのです。が、なかなか

難しくて」

「独学じゃ難しいさ。あんた自動車の免許って持つてる？ あれと同じだよ」

闇蝙蝠は左右を見渡した。

「テレポの詳しい話、知りたいなら教えるぜ。でも此処は扉の前だから邪魔になる。移動するべきかな。話を、聞きたいならだけど」

「是非お願いします。スクールに行くとしても、ある程度の知識を前もって頭に入れておきたいんです」

「勉強熱心なんだねえ？」

「いえいえ。あ　ところで貴方、四時間目の授業は出席しますか？」

「うん」

「となると……時間が少し心配ですが」

「大丈夫」

闇蝙蝠は携帯電話を見、時間を確認した。

「あと三十分ある。この学校は昼休みが長いからな」

「それでは教室の中に。あっ、もし出来るならテレポーションで……」

「いや、悪いけど建物の中じゃ無理だ。残念だけど」

電話をしまうついでに、少しきまり悪そうに頭をかいた。

「理由は順番に説明するよ。とりあえず、入りな」

二人は連れ立って中に入った。先ほど座っていた席に闇蝙蝠は座り、フェイアントは隣に着席した。

「そうそう、ところで遅れましたが、私は西部の楼闕隊ろうけつたいから異動でこちらに来たのですよ」

「げっ、楼闕隊？」

闇蝙蝠はいささか妙な声をあげた。

「そ、そう……まあいいや。しかし、まさか異動先が瀏華隊させんとは。左遷されちまったねえ」

「いえいえ」

フェイアントは微笑んだ。

「私は元々此処の出身ですから。ちなみに名前は貴方と同じで偽名です。どうか悪しからず」

「分かってる。だって洋風だもん。それに、帝国軍内で偽名を使わない奴はあまりいないよ」

「そうですね。……今の時代、調べればすぐにわかっていますのに。古い習慣はなかなか直らないものですね」

「だよな。だけど、それで学生証まで作っちゃうもんな。考えてみりゃ、すごい事だね」

と言ったところで、彼は『さて』と話をかえた。

「で、そうそう。テレポの話だってね。何から話そうか」

「まずは基本的な概念から、お願いできますか？」

「いいよ。長くなるけどね」

「構いません。お願いします」

「分かった」

一呼吸おくと、闇蝙蝠は話しはじめた。

「テレポーションこと瞬間移動魔法は、場所から場所へと一瞬で移動できる、とても便利な魔法技だ。だがその使用はプライバシーをはじめ、危険防止のためとられた対策の規則と隣り合わせであるため、免許制になっている」

「制限とは？」

「色々ある。代表的なのは、国外へは何人も、一瞬では飛べないという事。」

だがこれは、宅配事業や国をまたいだ経営を行う会社の業者のような、一部の人以上は日常的に関係なさそうだからまずおこう。

日常においてまず問題になるのは、建物への移動だ。建物の中から外へは自由に飛べる。だが、原則として外から建物の中へは直接入れない。また、建物の中から中へも飛べない。それが同じビル内であろうと異なる家屋間であろうとも飛ぶことができない。何か建

物に損傷　火事、災害、人災など　　が起きれば話は別だが、とにかく出来ない」

「しかし、どうして」

「プライバシーの配慮。および不法侵入者による被害を防ぐためだ。この国では建物を立てるとき、テレポ避けのその対策を講じることが義務づけられている。」

で、統計によると国内のおよそ99.9%の建物がそういった仕様になっているんだ。残り0.01%は本当に古くて人が住んでないような建物や、取り壊し寸前のものだな。だから完全にはないけど、ほとんど無理だ」

「なるほど。どこでも飛べるわけではないですね」

「ああ。また、免許には段階がある。一級から四級の四つで、一級が一番難易度が高い。四級は比較的簡単だが、それでも取得するには専門のスクールにいつて勉強しないと難しい。」

それぞれ出来ることに違いがあり、四級だと自分一人だけが飛ぶだけ。三級は自分を含めた、最大で三人の人をつれて一緒に飛ぶ。二級は三級とほぼ同じだが、飛び方に違いがある。難易度が高いが、より便利な方の飛び方をするのが二級所得の条件だ。

『飛び方』の違いは重要だが、四級を目指すのなら知らない知識だ。省くぜ」

「はい」

「で、次に一級だ」

ファイアントが大人しく相槌をうち、まじめに聞くのを幸いに、とにかく喋り続ける。

「残る一級は、強制瞬間移動魔法フォーステレポレーションと呼ばれ、自分は飛ばず人や物だけを飛ばすことが条件。手に持っているものはもちろん、実技試験では自分の前方七メートル先にあるぬいぐるみを、所定の場所に正しく飛ばすことが合格条件。飛び方の指定は二級と同じだ。」

……ざっとこんなものかな。挑戦するなら、なるべく早くに免許をとってくれよ。今、瀏華隊の中でテレポが出来るのは俺だけなん

だ。おかげでアシ代わりにされてねえ」

「なるほど。それは確かに大変ですね。……でもそれなら、一ついい話がありますよ。ワピチとはお話されましたか？」

「いやしてない。ワピチって誰？」

「ほら、あそこ」

フェイアントは、ピロロとしゃべる女の子を指差した。

「彼女がワピチです。私や貴方と同じ隊員ですよ。主に治癒が担当……あとテレポーターシヨンの三級ライセンスを取得しています。現在二級にチャレンジ中とのことで」

「あ、そうなの。そりゃあ良かった」

闇蝙蝠はほつと息を吐いた。

「俺の負担が減る。……あ、ところで話は変わるけど。お前、戦闘は出来る？」

「出来ますよ。ですがまあ、体を使うより頭を使う方が得意ですね。それに、こちらには事務として派遣されましたし」

「事務う？ おいおい、瀏華隊は戦闘するのが役目だけ。ま、でもパソコンでデータ管理を行っている今日び、その知識を持った人も必要か。だが……残念だな」

何がおかしいのか、闇蝙蝠はニヤリと笑った。

「瀏華隊は人数が少ない。慢性的な人で不足でねえ……たとえ事務員でも戦闘力を有しているなら、駆り出されると思うぜえ。大体、こういつちゃ身もフタもなく失礼だとは思うんだけど、事務員なんて早々いらなからな。だって、俺らは帝国のイヌだぜ」

「イヌ？」

卑下した言い方に、フェイアントは少し訝いぶかしげな顔をした。

「なんですか、それは」

「番犬つてことよ。国という名のご主人様のいう事をきいて、敵を噛みつき食い殺す凶暴なワンちゃんさ。必要なのは、噛みつく能力。そして言われた事を素直に聞く能力だ。考える力はさほど要らない。特に戦闘隊員はね」

言ってから『おっと、でもお前はあくまで担当は事務だよな。あくまで』と付け足す。

なぜか自虐的に喋りまくる闇蝙蝠に、フェイアントは若干のまれていた。が、そこは大人。すぐに立ち直る。

「そうですか。まあ……でもそれなら、一緒に戦うかもしれませんね。その時は、よろしくお願いします」

「どうも、こちらこそ」

「ええ。ところで、そろそろ次の授業が始まる時間なので……」

「ん、そう?」

闇蝙蝠はぱつとケータイを出して確認した。

「本当だ。ところであんた、どのクラス?」

「隣ですよ。レポーターシヨンのこと、教えて下さってありがとうございます」

「こちらこそ、どうも。それじゃ、ね」

「はい」

フェイアントは立ち上がり、軽く会釈えしゃくをして帰っていった。とそれとまるで入れ違うように、ズボンのポケットに入れていた携帯電話が震え始めた。

「ん、メール?」

さっき電話をしていた相手こと『シーちゃん』だろうかと画面を開く。すると、そこには事務的に短くこう書かれていた。

「 今日集会を行う。午後四時いつもの所へ集合。汐椰木 凜」

汐椰木凜しほのぎほ。瀏華隊の『リーダー』で、二種類の剣を自在に操る諸刃使い。リーダーなだけあって言動は少々男らしいが、服装はいつも、肩にファーのついた白い着物。顔は色白で整っていて、いわゆる『和風美人』である。

その彼女の顔を思い浮かべつつ、闇蝙蝠はパターンと画面を閉じた。ふうと一人ため息をつく。

「なるほどねい。……あーあ、でもどうせ女からメール貰うんだったら『デートしない?』とかいう色っぽいヤツが良かったな。なあんて」

一人冗談をばやき、彼は閉じた電話をポケットにしまった。

04 - 開示制度

白い壁、薄いグレーのメラミンの床。窓際には光触媒の観葉植物が置いてあり、隅には流し台の備え付けがある。広さは、およそ十二畳ほど。扉は三つあるが、廊下と接しているのは一つしかない。残る二つは別の部屋に通じている。

外から見ると、小さなビル。だがここは、瀏華隊の本拠地である。そして、部屋は会議室。

時刻は午後八時四分、今はホワイトボードを背中にして、一人の女性が二人の人間 フェイアントとワピチ を傍にそえ、よく通る声で話をしていた。

「それでは、始めます。本日はまず新しい仲間の紹介、及び警察からの依頼についてです」

短い銀髪と白いファーつきの同色の着物が、エメラルドグリーン
の瞳によく映える。瀏華隊のリーダー、凜だ。

サイコロをくるくる手の中で回しつつ、闇蝙蝠は自席で静かに着席しながら、凜が言った言葉をじっと考えていた。ただし会議の内容ではなく、『なぜ夜八時という遅い時間から会議が始まったのか』についてを考えていた。

会議が嫌なわけではない。ただ今から会議をし、終え、帰宅すると十時はゆうに過ぎるだろう。明日もまた学校があることを考えると少々グツタリとしてしまうのである。

彼は目の前の液晶画面を、やや恨めしげに見た。コンピューターが据えられている机は円状で大きく、どんと部屋の中央にあった。一方、左隣にはピロロがあり、頭につけたヘアピンをいじりながら真面目に凜を見つめていた。

闇蝙蝠も、ピロロも、どちらも無言だった。が、一人。闇蝙蝠が心で思っているのと同じことを、声をあげて尋ねた者がいた。

「いらいが、あつたんですか？ それじゃあ、どうしてそれを、はやく言わなかったんですか？」

言葉はゆっくりとしていて、優しい。責めている様子は全くない。闇蝙蝠は今しゃべった相手に視線をむけた。

男性、二十歳。身長は二メートル近くあり、体格が大きく筋肉もかなり発達している。……と言うと強面こわもてのように思えるが、実際は優しげで和み系の雰囲気がある。立派な体から分かるように、彼は戦闘隊員の一人。技はただ一つ、愛用の武器・巨大ハンマーを召喚し、それを持って暴れまわること。ワンパターンといえそうですが破壊力は底知れず、それゆえ通称は「えんま」である。

「そうですね、申し訳ありません」

彼の質問に、凜は若干済まなさそうに頭を下げた。

「しかし警察からの正式な通達を待っていたので、ご理解ください。時間がおしているので、なるべく手短に済ませますね」

「え？ いや、ぼくはそういうつもりじゃ……あつ、ごめんなさい」
えんまは少し慌てた顔をした。一方で凜は手早く続けた。

「ただその前に、今日はまずは皆さんに新しい仲間の紹介をします。どうぞ」

彼女が手まねきすると、横にたっていた二人が前に進み出た。

凜はフェイアントから紹介を始めた。

「楼闕隊から異動の、フェイアント「バースィング」です。主に担当してもらっているのは事務ですが、状況に応じて戦闘も兼任してもらいます」

「どうも、よろしくお願ひします」

フェイアントは儀礼的に礼をした。まったく、何もおかしくはない行動。だがそれに一人、興奮のまじった高い声をあげた者がいた。

「フェイ……ヒメールスゲヴィルのお国の人ですか？」

少年の声。それもまだ幼い。

「ボクと一緒にですか？」

「シャオ」

声を聞きとがめ、闇蝙蝠は名前を呼んだ。

「名前だけで判断しちゃいかん。ここじゃ皆偽名使いまくりだぜ」

「ボクは偽名じゃありません。シャオ・ハイって、れっきとした本名です」

「そりゃ特殊例だ。早く偽の名前をつけるよ」

「ボクはボクの名前のままでいいです！」

そう主張する少年は、隊の中では最年少の七歳児。己の目の色と同じ、オレンジのパンダのぬいぐるみを抱えている。

ブラウンの髪に、あどけない顔は本当に子供だ。だが、彼もまた戦闘隊員。セルタンティーヌの東に、砂漠を挟んで隣接する国『ヒメールスゲヴィル』の出身だが、今は此処に住んでいる。

能力は主に二つで、一つは手から自在に雷を出すこと。もう一つは、今持っているぬいぐるみを自由に操ること。可愛いパンダのぬいぐるみは、もし少年が一言命令したなら即座に二本足で立ち上がり、両の前足から長いツメを出して暴れまわる。

とにかく、素人の大人なら顔負けする能力を、幼いながらに持っている。だが闇蝙蝠は完全に子供扱いしており、いつも適当にからかったりあしらっていた。

「ゴチャゴチャ言ってる、ワピチがいつまでたつても自己紹介できんだろぅが。そして俺らも帰宅が出来んぞ」

「ワピチ？」

「そうそう。かわいい女の子が首を長くして待っているぞ。男が女の子を待たしちゃいけませんッ！ って、まあ雑談はこの辺に。リーダー失礼しました。どうぞお続け下さい」

「あ？ …… あ、はい」

勝手に喋る闇蝙蝠に口を挟もうとしていた凜は、突然、主導権を戻されてきよんとした。しかしそれも一瞬で、すぐに戻って紹介を続けた。

「そして、今闇蝙蝠がチラッと名前を言いましたが、彼女はワピチといいます。治療の担当となります」

「えっ……と、僕はワピチと言います。こちらには初めて来るので分らないことが……た、たくさんあるんですけど、色々教えて下さい。よ、よろしくおねがいします」

ワピチは緊張気味に、ぺこりと頭を下げた。凜は頷き、二人に戻るよう促した。ワピチはえんまの、フェイアントはシャオの隣席だった。

「さて、それでは二人の詳しいデータを皆さんに開示致します。…えんじえらん、お願い」

二人が着席したのを見て、凜は、自分の一番近くに座っている少女に指示をした。

「はい！」

少女は元気よく返事をした。

彼女の、通称はえんじえらん。年は十三歳。黒いハイネックのセーターと長ズボンの上に、裾すそにフリルのあるAラインの赤いワンピースを着ている。髪は長い三つ編みで赤く、背中側に一本にまとめ垂らしている。瞳は金色の丸目で、まあ年相応の顔つきといえた。

本来は戦闘隊員だが、多少パソコンも扱える。そのため、今日だけ代理で、パソコン操作を担当していた。

彼女が目の中のキーボードを操作すると、全員の前にあるコンピュータの画面が一斉に切り替わって文字を映し出した。

「あれ、何ですか、これは」

皆じつとそれを見る。だが中で一人、シャオが首をかしげた。

「うーん、なんか見たことがある気がします」

「シャオ、てめえ、開示制度のこと忘れたのか」

闇蝙蝠は声をはりあげた。円状の机において互いに向い合せなので、顔をあげれば相手の顔が互いに正面から見れる。

「お前もやっただろう。忘れたか？」

「んう？」

「冗談じゃない、大事なことなのに。頑張っと思い出せよ。ほら、開示制度ッ！」

「かい、じ？」

だがシャオはきよとんとしている。見かねて、彼の両脇にいる大人二人に声をかけた。

「おい、えんま。あるいはフェイアント。教えてやれ」

シャオに話しかけたノリで言ったせいも、今日知り合ったばかりのフェイアントにまで、闇蝙蝠は命令口調を出した。そのまま、またシャオに説教をする。

「知らないんじゃない話にならんど。何のためにデータ表示されていると思ってるんだ」

「ぶーっ」

「膨れるなつての。お前はフグか、ええ？ 刺身にして食っちゃまうぞ」

「ボクは食べても美味しくありませんです」

「冗談だ。俺は男を食う趣味はねえよ。食われる趣味もない」

「……えーつと」

一方、いきなり『説明せよ』との話をふられ、えんまは少し困った顔をしていた。

「あのねえ、シャオ。これはね、パソコンのなかにはいつてるデータを開示することで、えつと」

頭をひねり、なんとか言葉にしようとするが、上手に言えない。

するとフェイアントが、少し大きめに咳払いをした。

「ゴホン。それでは僭越せんえつながら、私がお話させて頂きます。ええと、シャオくん。開示制度というのはですね」

そのまま、とうとうと喋り始める。

「開示制度とは、帝国軍に属している軍員のデータ 通称と顔写真、使う技名の三項目のみですが を表示し、軍員同士がその情報を共有することです。」

もつと簡単に言えば、互いに自分の能力を見せ合うこと。帝国軍はあくまで「軍」。戦闘することが役目ですが、仲間の技や能力を覚えておくことで、その作戦や計画を、有意義に進めることが出来

ます。

ただし、この情報が敵に渡ると、面倒なことになります。なので通常、今日のように新しい人が入隊してきた場合や、戦闘前に作戦会議をするときのみ行われます。

それ以外の時も、可能ではありませんが、開示はリーダーの許可が必要です。また此処で知りえた情報を外部に漏らした場合、三年以下の懲役又は五十万円以下の罰金に処せられます。

このように、我々にとって大変重要な制度なのですよ」

「そうだけ。さあ、覚えるんだ」

フェイアントの説明が終わったのを見計らい、闇蝙蝠はきっぱり言った。

「シャオ、お前だって腐っても瀏華隊だろう。となりや、ガキだから分かりませんという言い訳は通じない。俺ら帝国軍の軍員は、未成年であつても責任能力は成人扱いされるんだから」

「ボクはガキじゃありません！ まだ大人じゃないですけど、ガキでもないです！」

「そうかい？ なら、なおさらだ。入隊テストはマルバツだったけど、本来、俺達は法律を暗記する事が必要なんだぜ」

こうして偉そうにシャオに注意を促しつつ、闇蝙蝠は目の前の画面をじつと見た。

画面をスクロールすると、二人以外のデータも表示される。次々と現れる文字を、闇蝙蝠はじつと見た。

えんま、シャオ、春翅諳、デイザート。そして……。

「えんじえらんって手持ち技多いなあ」

「何か言ったっ？」

「いや、独り言だ」

見慣れた名前や写真にくわえ、書かれているのは、各個人が有する手持ちの技の名前と効果や特徴。中身は人によって違い、実にバラエティに富んでいる。独り言を聞きとがめられたついでに、闇蝙蝠はピロロに話しかけた。

「パソコンも使える、戦闘も出来る。あと五年もしたら彼女は大物になるぜえ」

「えっ？」

「少なくとも珍重はされるな。パソコン操作と戦闘は、軍員として重要な項目。だがその両方をマスターしている奴は、残念ながら殆どいない。かくいう俺だって、戦闘はとにかくパソコンは『コウモリのツメでもタイプピングが出来ます』程度だからなあ。だけど今更覚えるの面倒くせえし。必要最低限出来ればいいかな……器用貧乏とかいって、あれこれ能力があると面倒だろう。特に、うちのよう
に人手が足りない部署においては、有能な人はやたらコキ使われるんだから。能あるタカは爪をひっこめるだか何とかかんとか」

「……アンタ、本当よくしゃべるねっ」

ズラズラと続く言葉に、ピロロは呆れ半分感心半分といった声を出した。

「しょうがないじゃん。人手が足りないんだからっ。今の帝国軍はどこだって同じだよ」

「そんな事ないさ。楼闕隊ろうけつたいをしてみるよ、二人をコッチに派遣出来

るくらい余裕があるんだぜ。だが逆に、瀏華隊から二人抜けてみる、どえらい事になる。……あーあ、いつそ直々に本部にかけあってみようかなあ。最低でも二十人くらいは人が欲しいですって、お願いでもしようかなあ。でもかけあうってどうすればいいのかな。メール？ 電話？ それともファックス？ あるいは手紙、マジックレター？ ……どうだったっけ、忘れちゃった」

「はあ」

ピロロは何ともいえない顔をした。口を挟もうにも、闇蝙蝠が言葉をぶっ続けて言うために挟めないのだ。そここうしているうちに、喋りたかったこともどうでも良くなってしまう。

一方、言いたいことを喋った闇蝙蝠は、また画面をスクロールをして自分のデータを探した。

「結果、結界をはり攻撃を防ぐ。テレポーション、瞬間移動魔法。フォーステレポーション、対人及び、対物用の強制的な瞬間移動魔法」

「んっ？ 何言ってるのっ？」

「俺の手持ち技の説明だよ。見る、なんて手抜きな文章だ。説明が説明になってないよ。せめて『結界とは、相手の攻撃から身を守る、透明な盾みたいなものです』くらい書いてほしいぜ。ったく、人が苦労して身に着けた技だっというのによっ」

「気持ち分かるけど、でもそれ、今更説明するまでもない技だから書いてないんじゃないのっ？」

「確かに」

少しため息をつきながらも、彼女の言葉に頷く。

「この国の人なら何であるか大体知ってるよな。テレポは言うまでもなく、結界も工事現場とかでよく使われてるらしいし。だけど、あれにも細かい区分や種類があるんだ。知らずに使うと結構痛い目にあう。んでもって」

「それよりっ」

また長く話続けそうな闇蝙蝠に、ピロロは強引に口を挟んだ。

「二人のデータは見たのっ？」

「ん？ データ？ ……あ、ああ見たよ」

本来の目的をしばし忘れていたらしい。闇蝙蝠の声は一瞬うわずった。

「ワピチは治癒の専門家。ほか、初級レベルのテレポーターションおよび結界の使用が可能。ファイアントは特殊な魔法は特にないが、武器はある。大身槍おおみやりという名の大ぶりな槍。……ああ、なんて俺、説明的なんだろう！」

とここまで読み上げ、わざとらしく『感動した』というポーズを彼はとった。

「いやあ、頼まれてもないのに長々と朗読しちゃうなんて。ははは！ 人に親切なのも考えものだね」

「……」

「おいおい、そんな顔するな。冗談だよ冗談。……というか、何かツッコミいれてくれよ。悲しいじゃねえか」

そんな話を二人でしていると、トントんと机を軽くたたたく音がした。凜だ。

「さて、それでは表示を消します。まだ見終わってない人、いたら、拳手してください」

誰も手をあげない。彼女はえんじえらんと顔を見合わせて続けた。「では、先ほど少し言いました。告知について。19日、夜十一時半より、三つのグループに分かれ、警察と連動して三つの街道を見張ります」

「見張る？」

「はい」

言葉尻をとらえてボソリと呟いた闇蝙蝠に、凜は頷いた。

「まずこちらを見てください」

凜の言葉にあわせ、えんじえらんがパソコンを操作する。と、先

ほどまで隊員のリストを映していたモニターに、今度は妙なものが映った。

手紙。だが大きくちぎられていて、映っているのは、形から判断するに、おそらく元の四分の一ほど。おまけに水に浸かつたらしく、書かれている文字は滲んでいて部分的にしか解読が出来ない。何とかよめる部分にはこう書いてあった。

……街道、……は青いネオンが3つ見える方の店……Sに
いての……

19日、……12……指定……紺色のコートに金色の……ケ
ットをする。

暗

文字は、何の変哲もない黒色。だが最後の『暗』という文字だけ、赤いインクが使われていた。

「あれえ、なんですか、これは？」

まるで暗号のようなそれに、えんまが不思議そうな声をあげた。

「どうということ？」

「警察が入手したものだそうです。経緯はこうだそうです」

凜は紙をもって説明し出した。

「先日17日、三滝^{みたき}街道を巡回していた警察官が、信号無視した車を追跡、停止。その際運転手が不審な行為を見せたため、所持品を調査しました。その際に大麻を発見し、対象者は麻薬中毒者であることが判明。逮捕されましたが、その際大麻にまじって出てきたのがこちら。警察はこれを『新たな薬の取り引きに関わる文書』とし、該当場所を監視することを決定しました。それだけなら私達が出る幕はないのですが、問題はその相手です。皆様ご存知の通り我が国において、こういった類の売り手の大本は、強大な戦闘力を持つ組織が大半。何かあった場合、警察だけでは対処ができない可能性があります。そのため我々も駆り出されることとなりました。なお、

三つに分かれるのは、この手紙に記されている場所がハッキリしないためです」

だがその時、闇蝙蝠がハイッと拳手をした。

「でもリーダー、これってマジなんですか？」

どうぞと言われてないのに、勝手に喋りだす。凜は少し戸惑った顔をした。

「は……い、何ですか？」

「いやあ、だって何かわざとらしくないですか、これ。警察が見ている前で信号無視して、捕まって不審なそぶりをして、調べたら所持品に大麻。そりゃ、大麻持つてる時警察に飛びとめられたらキョドったって不思議じゃないが、メモなんて。」

一瞬で相手に文章が届くマジックレターやメールが普及しているこのご時世に、ずいぶん珍しいですね。ああいや、覚え書きなら理解できます。ただこの写真を見るに、どうもそれではなさそうだとントんと、画面を軽く指で叩く。

「にじんでいてよく分らんが、一番最後の『暗』っていうのはサインみたいに見える。俺の気のせいかもしれないが、売り手が、買手に懇談会の日時を記したメモでも渡したみたいだな。だが、さつきも言ったように今時そんな手法は珍しい。アシがつきやすくなるし……そこまでアホな組織じゃないはずだが、売り手は」

「確かに、そうですね」

フエイアントも頷いた。

「もしかしたら捕まったその人、おとりではないでしょうか。本当に行う取引は全く別の場所、ただしそれを隠すためにこうして……」

「可能性はあります」

凜は言った。

「ですが警察が『来てほしい』と言っているのです。我々には応じる義務があります」

「ふむ」

闇蝙蝠はイスの後ろ二本足だけで立ち、軽く唸った。

「警察の頼みじゃ、しょうがねえわな。だけど注進ちゆうしんくらいしておいたら？ って、今更遅えか」

凜に向かって言うも、つい素に戻ってタメ口になる。一方、フェイアントはまた別の所ところに目をつけた。

「しかし、三つに分かれて行くとなると、一か所あたりの人数がかなり少なくなりますね。此処こゝも留守にはしておけないでしょうし、人手が足りませんね。だって、今ここに何人いますか？ 私を含めて八人しかいません」

06 - 遅れて来た人

だが、フエイアントがそう言った時だった。ボタンと音をたてて扉を開け、誰かが部屋に入ってきた。

「お……くれ、まし、た……」

ハアハアと荒い息を吐き、一人、入り口に立っている。

赤くふちどられた淡いベージュの長いコート。黒く短いズボンに、白い靴下を黒いひもで幾重にも、足にまきつけている。靴は赤く、首からは先がリボンで結ばれた黒い紐をネックレスのようにさげている。瞳は蒼く、大きいが虚ろに見開かれていてまるで命のない人形のように。赤い髪はえりに少しかかる程度の長さで、前髪の一部だけがメツシユで茶色だった。

「すみません。電車が、人身事故で遅れました。後で……出します、遅刻届け」

「やあ。遅い登場だったね、しーちゃん」

苦しそくに息をする相手に、闇蝙蝠はイスをガタンと戻して二ヒルな笑顔で声をかけた。

「人身事故かい？ 一体誰を線路の真ん中に突き落としたのかな。どこでやったの？ ホーム、それとも踏切かい？」

「私、そんな事してません……失礼な」

相手はそういつて少し恨めしげに闇蝙蝠を睨んだ。

闇蝙蝠が呼ぶように、あだ名はしーちゃん。だが瀏華隊の中でそう呼ぶのは彼くらいで、皆は春翹諳しゅうせうおんと呼んでいる。

今朝、闇蝙蝠が学校で電話をしていた相手で、年は十五歳だが、童顔でずん胴のため十歳程度に見える。ただし身長は闇蝙蝠より少し下なくらいで、極端に低いわけではない。

「大変だったんですよ」

春翹諳は席につきながら言った。ちょうど場所は彼の右隣である。「私が乗ろうとしていた電車の前に、飛び降りたんです」

「誰が？」

「そんなの知りません。ただその上を電車が走ってしまい、大騒ぎです。おかげで遅れました、時間」

「そうか。そりゃあ確かに大変だ。あれ、でもちよつと待てよ」

ふと闇蝙蝠は首をかしげた。

「どうして電車に乗ったんだ。お前、この近くの山の中に住んでいたよな」

「え？ ええ」

その時、春翅諳は少しビクリと背筋を伸ばした。

「でも私、今日行っていたんです、隣国の図書館に」

「ヒメールスゲヴィルの？」

闇蝙蝠は声をあげた。

ヒメールスゲヴィルはセルタンティーヌの東隣の国。互いの行き来にパスポートは不要であり、特に、オステンはセルタンティーヌの最東部なので電車で日帰りできる距離である。ただ……

「えー、どうしてわざわざそっちまで行ったの？ セルタンティーヌにも立派な図書館があるのに。外国の図書館で本借りるのってちよつと面倒じゃなかった？」

「まあ……そうですね。要りますしね、身分証明書が」

「そうそう。なあに、思春期特有の反抗的な気分かい。それとも真夏の夜の淡い夢？ ないしは、新しい出会いを探して上京中？ しーちゃんよお、読書もいけど程ほどにしようぜ。たまには外で遊ぼうよ。下をむいて読書じゃなくって、上を向いて歩くんだけ。ほら！」

「何が『ほら』ですか」

関係のない事までベラベラ喋りまくる闇蝙蝠に、春翅諳は少し呆れた声を出した。

「もう……言いたい事はっかり言って。少しは脈絡のある話をして下さい。それに、嫌ですよ……上を向いて歩くななんて。転ぶじゃないですか」

「あはははは！ もう、冗談が通じないなあ。俺はただ明るく楽しく生きて行くって言っただけさあ。まあ、お前が足をボキッとやっちゃっても俺は痛くないからいいけど」

かなりおどけた口調だったが、闇蝙蝠のそれに春翅諳は「ひどいと真顔で言った。そして。

「そんな事いうなら、貴方……いつそ轢断れきだんされなさい？ 電車が通る間際の線路にとびこんで。ただし私が乗っていない電車をお願いします」

「ええー何でいきなり電車の話い？！ それこそお前、話の脈絡がすつとんでるだろ」

「お互い様です」

妙に元気のよい彼とは対称に、春翅諳はやや物憂げに返事をした。「ちなみに、切断されることです……轢断とは。電車などに、轢かれてね」

「怖ッ！ なにそれ、死んじゃうじゃないか」

「でしょうね。死にますね、胴体を切ったらね」

「嫌だよ、そんなのされたくないよ。あつ、でもそれなら即死するから苦しまずに逝けるかなあ。……とすると、考え方によってはいいのかな。でも後片付けが面倒だよねッ！ 俺、自分の死体をいろんな人に晒しにされるのは嫌だあ」

「そうですね」

「ね、俺が死んだらちゃんと火葬してよ？ 間違ってもその辺に放置したりするんじゃないぞ。保健所から苦情がくるからな」

「鳥葬はどうですか」

「それ、うちの国の法律で可能だったっけ」

「風葬は？」

「それも、やって良かったっけ？」

二人の会話は留まることは知らない。また内容こそひどいものの、傍から聞いているとまるで休み時間の学生のそれである。空いた時間にするなら何ら問題はないのだが、しかし、今は仕事の真っ最中。

ついに、見かねた凜が一言声をあげた。

「二人とも、黙りなさい」

大きな声では決してなかった。ただ妙に威厳を含んだそれに、二人はビクツとして一瞬で黙った。

「春翹諳。会議の前半の会議の内容、分からないわよね」

「……はい」

「えんじえらん、教えてあげて」

「わかりました。春翹諳、こっちに」

呼ばれ、春翹諳は立ち上がりえんじえらんの方へ行った。闇蝙蝠は、今度は黙って見送った。

他のメンバーも、じつと黙っている。ただ一人、シャオはぬいぐるみを抱きかかえて隣の席のえんまに尋ねていた。

「春翹諳って、テレポができませんですか？」

「うん、できないよ。ほら、データにあるじゃないか。それに、のってないもの」

「のってないと出来ないですか？」

「というより、出来ないとのせてもらえないんだよ」

「ふーん」

「……あの」

その時、えんまの逆隣から、フェイアントが声をあげた。

「貴方、どうして」

彼は妙に真顔だった。凜がえんじえらんと一緒に春翹諳に会議の内容の説明中なのを確認し、小さな声でシャオに尋ねる。

二十歳以上年下の相手に話しかけているとは思えぬほど、彼は非常に丁寧に話をはじめた。

「突然ですが、質問ひとつ宜しいですか？」

「？」

「貴方のことは、事前に凜から聞いていました。もちろん貴方だけ

でなく、此処にいる皆のことを聞いていました。なので、誰と会っても驚かないつもりではいました。……しかし、どうしても気になります。貴方は七歳という年齢でもう此処にいる。でも、それは何故ですか？」

「ん」

シャオは首をかしげた。

「ボクはたしかに子供ですけど、でも、みんな子供ですよ。闇蝙蝠も、えんじえらんも。二回目の成人を終えてない人はみんな子供って、聞きましたです」

「ああ、第二次成人ですね」

フエイアントは頷いた。

この国では「一次成人」と「第二次成人」がある。第二次は十八歳で、この年を過ぎれば法的に『大人』とみなされる。第一次は十六歳で、こちらは法的な効力はないが、国民の間で慣習的に「大人」と見なされる年頃だ。昔はこの年に元服や裳着もぎのような事をしていたためで、その習慣がすたれた今も言葉だけは健在していた。

「それは分かりますが、でもね。いくらなんでも十歳にも満たない貴方が」

「ボク、子供じゃないです。ちゃんと戦えますです！」

「いえ、あの、違うんです。ただ」

しかしその時、凜の声が響いてフエイアントはピタツと話をやめた。何事もなかったように前をむく。

「我々は警察からの要請に従い、三グループに分かれて警護を行います。そのグループ分けを発表致します。

まず1グループは三滝街道で、メンバーはピロロとえんま、フエイアント。2グループは荒海人街道あらかいと、シャオと春翹あつ、それと、今此処にはいませんがデザイナーさん。3グループは関街道せきで闇蝙蝠、ワピチ、えんじえらん。何かあつたらすぐ動けるよう、私は此処に残ります」

残る彼女を除き、九人を三つに分けてグループはちょうど三人ず

つととなった。だがそれに、闇蝙蝠は隣の席の春翅諳を見、ついで正面のシャオに目をむけてかなり横柄おうへいな口調で言った。

「へーい、リーダー！七歳のガキまでなんか入ってますけどお、そんな夜遅くまで子供を働かせていーんですかあ？」

「ちよ、闇蝙蝠っ」

直後、ピロロが慌てたように声をあげる。だが人が何か言う前に、シャオ本人がかみついた。

「だから、ボクは子供じゃありません！お仕事はちゃんとしてますです」

「へー、そう。まあ、しーちゃんの足ひっぱらないようにね」

「足をひっぱったりはしませんです。ボク、そんな技は使えませんです」

「技じゃねえよ。足を引っ張るつてのは慣用句だよ。要するに、しーちゃんの邪魔はすんなって事さ」

「しませんです！」

ムキになるシャオと、なぜかシャオに絡む闇蝙蝠。隣のピロロは困ったように顔をしかめ、春翅諳は完全に無視して無表情なままだ。だが、見ていたえんじえらんがボソリと呼びかけた。

「……闇蝙蝠」

「へい、何だ」

「一緒にいたいなの？」

「え、俺が？」

闇蝙蝠は一瞬、間抜けな顔になった。

「誰と？」

「春翅諳と」

「いや別に。遊びに行くわけじゃないし、仕事だし。……何でそんな事を聞く？」

「だって、なんかやつかんでるように見えるんだもん」

「妄想はよせや。誰がやつかみじゃない」

ブスツとして言う。

「ちげーよ、ただ俺は、シャオを心配してるんだよ。だってしーちゃん
は怖い子だよ？ ウカウカしてたらばつつんってされちゃうよ、
首とか、首とか、首とか」

「まさか、味方にそんな事しないでしょ」

「はずみって事があるじゃーないか。俺もそうだけど、しーちゃん
だって人を余裕でばつつんする能力を有し」

「……あの、いいかしら。闇蝙蝠」

凜が声をあげる。闇蝙蝠は話の途中だったが、リーダーの言葉に
『あ、失礼』と喋らずに黙った。

関係のない話を一蹴し、凜はさえぎられた話を続けた。

「より詳しい話は明日致します。19日の午後七時に、また此処に
集合してください。それでは、今日は解散します」

07 - 関街道(前書き)

画像：<http://www.ashinari.com/>

> i 1 2 8 2 7 — 5 2 8 <

翌日、19日。瀏華隊は、デイザート一人を除いた全員が夜の七時に一度会議室に集合した。そこで凜から注意事項や任務内容などを細かく言われ、準備を色々行い、警察ともコンタクトを何度かとって、たつぷり四時間後の十一時。かねての区分に従って全員が三つに分かれて移動した。

任務は、非常時の予備。先日示された三つの街道は、いずれも治安が非常に悪い場所。警察官など見つけたら半殺しの目にあわせかねない。

警察官を守る。特に胸躍る仕事ではないが、重要な事には違いない。

「ああああ」

今、闇蝙蝠がいるのは暗い街道。道の両脇に立ち並ぶのは居酒屋にキャバクラ、そしてバー。しかしいずれも薄汚くて品が無い。時々ミニスカートの若い女性が道行く男性を捕まえ『マッサージしませんか』という文句で店に来るよう誘っている。それだけならまだしも、道全体に、酒の匂いに混じって妙に甘い匂いが漂っていた。お菓子や果物のそれではない。はつきりとは分らないが、おそらくは大麻。刺激にくわえて独特の陶酔感がある。

何をとつても十八歳未満立ち入り禁止。そこに、闇蝙蝠は妙な息をはきながら、堂々と突っ立ち辺りをぐるっと見渡していた。

服装はいつもより若干派手めといえた。首にはコルセットのような太いベルトの赤いチョーカーを巻き、上はシルバーの鎖が無数にプリントされた、右が長くて左が短いアシメトリーなカットソー。

ズボンは普通の黒い長ズボン だったらシンプルで良いのだが、飾りベルトが十本くらいついている。裾には焰ほのおをアレンジした青と銀の刺繍が大きく入っており、更に、サイドには下から上にかけてずっと編み上げが入っていた。

顔に元々ある右頬から目にかけての黒い とも相俟あいまって、ライブに行った帰りかと聞きたくなる。が、場所が場所だけにこれというほどの違和感はない。キツチリ通りに溶け込んで、彼はブツブツ言っていた。

「で、此処で俺は何をすりゃいいんだ？ 守るべき可愛い子羊ちゃんこと、警官たちはどこにいるんだよ。おかしいなあ、てつきり移動したらすぐに合流できると思っただのに。一般人に紛れてサツパリ分かりやしねえ。探そうにも、広すぎて何をどうしたらいいのやら。それとも騒ぎが起きたら移動する でいいんだっけ？」

「やたら難しい顔をして言う。と、誰かが彼を後ろからつついた。」

「ん？」

「闇蝙蝠、静かにしてよ」

突いたのはえんじえらんだった。隣にはワピチもいる。闇蝙蝠とは対照的に、彼女ら二人はいたって地味な、黒いシフォンのワンピースを着ていた。細かい装飾は違うが、どちらも似たような恰好である。

「そんなにブツブツ言ったら、周りから変に思われるじゃない」

「ああ、失礼。つい癖で」

と言つて頭をかく彼の左手首には、いい具合に錆び加工の入った手錠がついていた。といつても片方だけで、何ら動きを制限するものではない。

本物ではなく手錠モチーフのブレスレットだったが、えんじえらはそれを見て少々呆れた顔をした。

「ていうか、あんたのその恰好は何？」

「あ、この手錠？ これな、前にしーちゃんから貰ったんだ。師匠さんにつけたら引き千切ちぎられたんだって。片方だけじゃ使えないか

ら捨てるって言ってたんだけど、気に入ったから貰ってきた」

「そうじゃなくって。あ、いやそれもあるけど」

彼女はそのまま闇蝙蝠を指差した。

「何でそんなに目立つ服着てるのよ」

「いいじゃん、何かあった時に俺を見つけやすくて。ていうか、そこまで目立つ恰好はしてねえよ。ほら」

コソコソと、闇蝙蝠は別の場所を指差した。

「あそこのおにイチちゃん見てみるよ。茶色のグラサンにピンクのシヤツとズボンだけ。おお、でもなかなか格好いい」

「でも肺は汚そうだよ。煙草吸ってるもん」

「ありゃあ煙草じゃない、多分別のナニカさ。だがまあ、その取り締まりは警察に任せよう」

「出来るの？」

「いや、多分無理だろう。こんな場所じゃ、袋叩きにあうのがオチさ」

「……あの、それはそうと」

うだうだ喋る二人の間に、ワピチが手首を見ながら、小さな声で言った。

「そろそろ時間じゃないですか？ 午後十二時」

細い手首には、小ぶりなピンクの腕時計が巻かれていた。それを見つつ、彼女はチラチラと通りに目を走らせた。

「今、十分前です。もし場所が此処、関街道せきであるならもうすぐ来るはずですけど」

「さあ、それはどうだろう」

し闇蝙蝠は否定的にぼやいた。

「19日の後、12と書いてあった。だから警察はそれが時間だと思つて、十二時を目安にするよう言ってきた。だが保障はないぞ。だってあくまで部外者の予想だろ？」

「えっと……」

「それに、もし本当に取り引き人が来るとしても、此処には警察が

ウロウロしている。今日来たばかりの俺らじゃ、誰が何だか見分けがつかん。だがここらによく出入りしている輩ならそれとなく気が付くだろう。警戒して、姿を見せないかもな。全く、うちの国の警察は頭がおめでたいよ。もうちょっとよく考えるべきだ」

全く面白くなさそうに、足元の石を蹴る。石は小さな音をたてて少しだけ転がった。

「瀏華隊である以上、警察からの要請に嫌とはいえん。だから言われるがまま来たが、警察官ってえのは魔法を全く使えないのかい？

監視カメラを通りにつけて、本部かどこかのモニターでチェック。怪しい奴を見つけてから、テレポで移動して追いつめりゃいいんだ。それを……何でウロウロするかねえ」

とその時、低いバイブ音がした。闇蝙蝠はぱっと、ポケットのあたりを手でおさえた。えんじえらんは訝しげな顔をした。

「何？」

「連絡だ」

音の主は携帯電話だった。取り出して画面を開き、三人で覗き込む。それにはこう書いてあった。

絶対配置 x : 5 9 3 7 8 m y : 4 9 8 8 9 m z : 3 m 店中

にて姿確認、慎重を帰し現場急行 テレポーション使用禁止。

「何これ？」

呼び出し命令であることは、三人が全員すぐに分かった。だが前半はまるで暗号、わけが分からない。しかしきよとんとしたのはえんじえらんだけで、ワピチも闇蝙蝠も『わかった』というように頷いた。

「なるほど。よし、行こう」

「え？」

「えんじえらん、行きましょう？」

「えっと」

まずは闇蝙蝠が率先、続いてワピチ。だがえんじえらんはどうにも解げせず、道すがら尋ねた。

「ねえ、あれどういう意味なの？ あの、絶対配置とか」

「場所の指定だよ、知らないのか？ あ、そうか、お前はテレポーターじゃないものな。ワピチは」

彼がチラツと目をむけると、ワピチはにこつと笑った。

「四級をとっています。今三級にむけて勉強中です」

「……と、いうことだ。よし、そいじゃワピチ、言ってみろ」

「は、はい？」

「えんじえらんに、絶対配置とは何であるのかを説明するんだ」

闇蝙蝠はニヤリと笑い、若干おどけた声をあげた。

「完璧なテレポーターの俺が、概念がちゃんと理解できているかを採点してやるう。さあ、言えるかい？」

「えつと、つまり」

しかし急に話をふられ、ワピチは何から言えばよかるうかと迷った風を見せた。だが少しすると考えがまとまったらしく、歩きながら説明しだした。

「テレポーターは、通常、二種類の方法で移動を行います。一つは想像配置といって、行き先をはつきり頭の中でイメージすることで移動します。この場合、自分がその場所をよく知っていることが前提となります。」

もう一つは絶対配置。前もって、行き先からセルタンティー又国の首都にある国会議事堂からの距離を算出して、記録しておきます。記録は、議事堂から縦・横・高さの三次元であらわされ、それを頭の中で想像し位置を指定することで移動します。こちらは自分の知らない場所でも行ける反面、空間的な認識能力が必要なので、それ相応の訓練が必要です」

「その通り！ すごい、よく言えた。うん、九十八点」

「ありがとうございます」

褒められて、ワピチは少し照れくさそうにした。

「でもこれ、実は僕が持つてる教科書の内容、そのまんまなんですけど」

「ってことは、暗記していたのか？ なら余計すごい。うん、お前はいいテレポーターになるよ。ただ、ワピチの言葉に一つ付け足しておく、後者の『絶対配置』で指定する方法は簡単なんだ。今の時代、行き先を検索すれば、コンピューターがはじき出してくれるからな。更に、二級以上のテレポーターなら、それを聞いて行き先の場所を知ることが出来るのさ。そう、俺みたいにな」

「へえ、テレポーションを使わない時でも聞いただけで分かるんだ。すごい」

一連の説明に、えんじえらんは素直に感心した。

「それなら絶対道に迷わないよね」

「まあな」

「でも、どうしてテレポ禁止って指定されたのかな。一瞬で行けた方が絶対いいと思うけど」

「ああ」

闇蝙蝠はその時、少しバツが悪そうな顔をした。

「目立つからだろう。テレポすると足元に魔法陣の光が、一時的とはいえ副産物として出るからな。今この界限かいわいでそれの中から三人の人間が現れてみる？」

「でも、此処に来るときは使ったじゃない」

「一応ね。でも目立たない場所に一度飛んで、そこから歩いてこの通りに入っただろ。いきなりボンツと出るのとはわけが違う。」

「と、ついたぞ」

三人は小さな居酒屋の前についた。赤い提灯に紺色ののれん。木製の黒い格子に縁どられた、扉に張られているのはビールを描いた大きなポスター。

普段なら特に注視もしないのだが、ここ関街道の端はしにありながら、この比較的まともな外装。それに早速、えんじえらんが首を傾げた。「此処なの？　なんか、意外」

「そうだな。若いおねエちゃんがかッチしてないと珍しい」

「で……あ、あの。僕たち中に入ってもいいんでしょうか？」

ワピチがオロオロしながら闇蝙蝠を見た。

「ずっと此処にいたら不審者になっちゃいます。でも、メールには入れとまでは書いていませんでしたし」

「ああ、そうだなあ」

闇蝙蝠は首を傾げた。

「おいワピチ、お前は今何歳だっけ」

「十七です」

「そうか。で、俺は十六。第一次成人だから一応は大人の仲間入りがして事にやなるが、飲酒は許されてないなあ。えんじえらんは実年齢うんぬんの前に、見た目で既にアウトだし」

その途端、えんじえらんはムツとした顔をした。

「ちよつと。いくら年下だからって子供扱いしないでよ！　お酒を飲まなきゃいいじゃない」

「だが、ガキ三人が店内ウロついてたら変な顔されるぞ」

「じゃ、ここで待機する？」

「それっきゃないなあ。でも戸口の真ん前じゃなくて、少しズレよう」

だがそう言った途端、闇蝙蝠はビクツと体を震わせた。

「お、おい。待て、下がれ！」

突然、警告を発する。ワピチとえんじえらんは一瞬躊躇を見せたが、流石に瀏華隊の隊員。あれこれ言わず、すぐに言われたとおりに後ろに下がった。

直後、居酒屋の扉を開けて誰かが出てきた。体からはどこことなく酒の匂いを漂わせているが、まだかなり若い男性。おそらく闇蝙蝠やワピチと大差ない年。着ているのは紺色のコートで、胸元には金色のネックレスが見えた。

それを見た瞬間、闇蝙蝠の頭には、先日見た手紙が思い浮かんだ。紺色のコートに、金色のなにか。何かは分からないが、もしかして、ネックレスか。

左手を体の影で極力隠しながら、彼は無言で掌てのひらにトランプを一枚呼び出した。

召喚。離れたところにある物や動物を、己の所に呼び出す魔法。世の中に数ある物のなかで、闇蝙蝠の場合はトランプとサイコロの二種類に限り、自在にそれを呼び出し、意のままに操ることが出来た。

その能力を用いてトランプを空中にすーっと滑らせ、今店から出てきた青年のコートの中に潜り込ませる。青年は何も気が付かずに歩いてゆく。少し距離があいたところで、闇蝙蝠はサイドの二人をつつついた。

「おい、あの野郎を追うぞ」

「え？」

「ほら、見失わないうちに」

言葉にえんじえらんはきょとんとしたが、ワピチは素直に頷いた。どうやら彼女も、闇蝙蝠と同じことを思ったようだった。だが同時に、少しためらいを見せた。

「でも……こんな事して、いいんですか？」

「ん？」

「僕たちの任務は、あくまで非常時の対応じゃ」

「まあな。だが事故は未然に防げた方がいいだろう？ それに、俺らただ追っかけてるだけじゃねえか。問題ないって」

「そうですね」

「え、ね……ねえ。どういう事？ 何？」

「いいから、気づかれんように、あの紺色のコートの男を追うんだ」
「紺色の男？」

えんじえらんの疑問とワピチの躊躇ちゆうちゆうをよそに、青年はそのまましばらく歩いた後、一本の細い小道へとはいつていた。店や街灯の明かりが届かないそこは真っ暗。そのあまりの暗さに、尾行していた三人は中に入ることを少しためらった。

「わ、暗いですね。どうしますか？」

「どうするってたって、入るしかねーだろ」

「で、でも僕こんなところ入るの怖いです。狭いし。そ、それに、いきなり襲われたら反撃できませんよ？」

「おいおい、こっちは三人、相手は一人だけ？」

「でも狭いから、並んでしか入れませんよ。暗いから、何があるか見えないし」

「いいよ、俺が先頭に立つ」

闇蝙蝠はぱつと一歩先に出た。その姿に、ワピチは勿論えんじえらんも、大丈夫かという目を向けた。

「平気なの？」

「全然。腐っても俺は『コウモリ』だ。暗い所でも物の位置を確認するテがあるからね。さ、あまり引き離されないうちに追

しかし、そうして順次入っていきこうとしたときだった。

「おい、ちよつと待ちなよ」

背後からガラの悪い声でした。三人そろって振り返ると、そこには二十代ほどの男性が五人いた。

茶髪からトサカ頭、スキンヘッドまで髪型は様々。全員腕や顔の

あちこちに刺青や注射痕があり、首からは髑髏のペンダントトップをもったネックレスをしていた。その髑髏の瞳は妙な光を発していて、見ているとなんだか酔いそうになる。何か、呪術用品のようだった。

「あんたら、見かけない顔だな」

ワピチは怯えて後ずさりをし、えんじえらんは警戒心むきだして相手を見つめ、闇蝙蝠は心もち体勢をななめに構えた。

「見りやあまだ子供じゃねえか。いいのかい、こんな夜遅くまでよ。明日学校があるんじゃないのか」

「心配いらんぜ。俺ら学校なんて行かねえから。勉強なんかやつてられっかってんだ」

闇蝙蝠が答えると、男たちはギャハハハと笑い声をあげた。

「ちげえねえや！ あははっ、そりゃいい。どうだ、それならちよいと俺達と遊ばねーか？ 面白エ場所色々知ってるんだぜえ。どうだい、お嬢ちゃんよ」

声をかけてきた男は、まず先にワピチに手をかけた。手首をぐいっとなつかみ、強制的に引き寄せる。

「あ、やつ」

ワピチは嫌がって逃げようとした。だが男はガツチリ体をつかんで離さない。すると、別の男が、えんじえらんに手をかけた。

「ははっ、あんた若いなあ。何歳？ 十二？ 十三？」

「ちよ、やめてよ。触らないで」

「中学生か？ たまんねえな。あ、安心しろ。いきなり襲ったりはしねえから」

とは言うが、男は相当いやらしい笑みを浮かべている。

煙草と酒、そして得体のしれぬクスリの臭いをまとったその男に、えんじえらんは嫌悪感をむき出しにした。必死に身をよじるが、抑え込まれて思うようには動いていない。

二人と同時に闇蝙蝠も捕まった。だがこちらは両脇を男にガツチ

り固められ、警官に連行されている犯罪者も同然だった。完璧に身動きを封じられている。その状態で、一番最初に声をかけてきた男がぐつと近寄って言った。

「お兄ちゃんよお、羨ましいぜえ。こおんなカワイイ子二人を横に連れてるとはアンタも隅におけねえな」

「ふふっ」

圧倒的に不利な状態。だが、そんな状態にあっても、闇蝙蝠は笑みを浮かべていた。

「俺に女のオトシ方を教えて欲しいのかい、オッサン」

「なっ」

面とむかってオッサン呼びわりされた男は、一瞬絶句した。直後、闇蝙蝠の右横をかためていた男がすごんだ。

「てめえ、ボスに向かって何ちゆう口の利き方さらすんじゃ。ああ？ ボスに話しかけられたら敬語使うんは基本じゃろうが！」

「その口調からして、お前ら、ヤクザかい」

闇蝙蝠は相手を見下した顔をした。

「だけど、三下だな。本物じゃない。ケガしないうちに帰りな」

「お前、腕え折られたいのか、あー？」

正面にいた男が、闇蝙蝠をものすごい勢いでにらんだ。だが次の瞬間、彼は何とも言えない声をあげ、コンクリートの上に転がった。

「う、あ……あぐっ」

腹を押さえて唸っている。尋常ならざる様子に、仲間二人はあつと声をあげた。

「ぼ、ボス」

「どうしたんですかい！」

だが直後、その二人も同じくコンクリートの上に転がされた。あつという間に、四人のうち、まともに立っていたのは闇蝙蝠ただ一人になった。

「オッサンよお、相手を殴る気なら気配消してやんねえとなあ」

地面に腹をおさえてうめく男の背中を、彼は軽く蹴飛ばした。

「いくら強い攻撃でも、あたらなきや意味がねーんだよッ」

「て、てめえ。オレらに何しやがった」

「ああ、俺の正面にいたオッサンは、蹴飛ばしてあばらにヒビ入れた。全治は一ヶ月くらいかな」

闇蝙蝠は悪びれもせず応える。

「で、お前と、その隣にいる奴は肉離れかな。骨折はしてねえだろ、加減したから」

「お前、いったい何者だ」

「いいから、ちよつと寝てろ」

闇蝙蝠は右足を一度軽く引き、勢いよく蹴りだして肉離れをさせた男をすつとばした。蹴られた男はボールのごとく、文字通り飛んでガンツと建物の角に体をぶつけた。それを見て、残る二人は悲鳴をあげた。

「心配するな。殺しはしない」

ぐいつと、一人の体を持ち上げる。そして勢いよく、もがくもう一人に振り下ろした。痛そうな音をたて、二人はそのまま気絶した。

「さて、雑魚の始末はこれでオワリだな。ワピチとえんじえらんは

おっ？」

さつさと自分の所のケリをつけると、闇蝙蝠は、残る二人はどうなったかを確認した。

見ると、えんじえらんは未だもがいていた。しかしワピチはとうと、少し状況が違っていた。

09 - 炎の魔法、その代償

「ねえ、どこの学校？」

「えっと、あの、教指揮学園です」

「え〜マジ？ あそこに行ってるの？ じゃあ毎日授業出たりとか？」

「は、はい」

楽しそうにかどうかは知らないが、少なくとも普通に話をしていた。その様子に、闇蝙蝠は思わず首を傾げた。

「ワピチ、ああいうのがタイプなのか？」

頭頂部が黒くなった茶髪、太い腕には派手な刺青。あれが彼女のタイプなのだろうかと、一瞬、真面目に考える。

だが次の瞬間、聞こえてきた高い声に顔を横にむけた。

「やめてよおつ、触らないで。変態！ いやあつ……ちよ、いやだつて、あつ」

声の主はえんじえらんだった。着衣こそまだ乱れていないが、後一步といったところだ。目の前で広げられそうな痴態に、闇蝙蝠は思わず引きつった笑いを浮かべた。

「おいおい、ムラムラさせてくれんじゃねえか。ロリコンかよ、あのヤロー。えんじえらんはまだ十三だぞ」

見ていられないが、正直、少し面白くもあつた。そもそもこんな状況をナマで見られる機会なんて、まずない。

だがこれ以上見ていると自分まで感化されそうので、闇蝙蝠は半ば無理矢理、もう一度、ワピチに目を戻した。

彼女もまた、えんじえらんの声を聞いていた。闇蝙蝠とは違って慌てた様子を見せ、声をあげ、助けようとする。

だがワピチが一步足を前に出した途端、相手の男が腕を掴んだ。自分の元に彼女を引っ張り、下賤けせんな笑みを浮かべる。

「大丈夫大丈夫、じゃれてるだけだつて。ね、それより俺といいコ

トしない？ あ、いや変な意味じゃないよ。そうじゃなくって
「

しかしその時、地面に倒れたえんじえらんが声をあげた。

「陣炎舞！」

途端、まるで間欠泉のように二人の男の足元から火柱が立った。

三メートルはあっただろうが、火の高さはその場にいた人間の身長を軽く超えている。すぐに消えたが、いきなり出現した炎に男たちは驚き、それぞれ狼狽うろたえた声をあげた。

「何だあ？」

「い、今のまさか」

その場が一瞬、妙なざわつきを見せる。彼女は手を上にあげ、また叫んだ。

「炎華」

すると今度は空から無数の火の花びらが舞い降りてきた。暗闇の中明るく光る火の粉がバラバラと、誰彼かまわず辺りにいる者に降り注ぐ。

「ひ、火だっ！ あちい、あちいっ」

「うえあっ、何だ。これ。み、水っ。おい、誰か水を」

「無理だっ、オレ召喚とかできねえから。うあ、ツぢいいい！」

先程の火の柱に比べれば、多少インパクトは弱かったかもしれない。だが火の粉は消える事なく次々舞い降りた。暗かった界隈かいわいが、炎で一気に明るくなる。

「しまった」

飛び散る火の粉をひよいひよい避けながら、闇蝙蝠は軽く頭をかいた。

「もう、特殊な魔法技なんか使いやがって。こんなプレイは見たことがないぞ。おいえんじえらん、止める。止める！」

「陣炎舞っ！」

「って、聞こえてないのか。てめえはタコか。繰り返すなよッ。お

い、人の話を　　チツ、ダメだ」

火の粉が舞う中だったが、彼は勇ましく飛び込んだ。どさくさにまぎれて右往左往する男の襟首をつかみ、勢いよく地面にたたきつける。続いてもう一人の男に勢いよく蹴りをかまし、一番最初にやつけた男と同じようにのさせた。

最後に、右手にえんじえらんを、左手にワピチを掴んで一言。

「ずらかるぞ！」

足元に、同じ大きさの魔法陣を三つ出す。それは波打つように青白く光り、三人の姿をその場から消した。

+++

広い公園。街灯が煌々と人工芝を照らしている細い道に、突如、青白く輝く魔法陣が出現した。

「しかしびつくりしたなあ、もう」

魔法陣が言葉を発し　　たわけでは勿論なく、中からは人が三人現れた。闇蝙蝠、えんじえらん、ワピチだ。

ごろつきに襲われ、火が乱舞。その現場に耐えられずに闇蝙蝠が己ともども二人を連れてさっさと移動したのだ。安全な場所について、ひとしきりきよろきよろとあたりを見合わずと彼はふうと息をはいた。

「ちつくしよ、あの青年逃がしちゃった。何だよあのクソ野郎どもは。いや、それより。えんじえらん」

「何？」

「お前ねえ、あの程度の相手に魔法の攻撃技なんか出しちゃダメだろっ」

「え？」

「えじゃない。お前ねえ、襲われて大変だったのは分かるけど、魔法で対処するなよ。それもあんな目立つ炎の技で」

彼はぶすつとした顔をして言った。

「俺らの今日の役目は、非常時の予備だぜえ？ その俺らが率先して事件をおこしちゃマズイだろうが。……いや、分かる。分かるよ？ 正当防衛ってことくらい」

えんじえらんの反論しそうな顔を見、慌てて付け足す。

「だけど使う技は考えないと。あんな攻撃に特化した危険な技、一般人は身につけていない。俺らが瀏華隊だってこと、更にはその場に瀏華隊がはってたってこと、バレルじゃねえか。あの青年は多分もうあそこには来ないぞ。あいつから手がかりを何かつかめたかもしれないのに」

彼の脳裏にあったのは、例の、紺色のコートの青年だった。顔もよく見えないうちに、すぐにどこかに消えていつてしまった。だがあれほどの騒ぎがおきた以上、こちらの事を知る余地は十分にあると言えた。

「第一、素人相手にワザを出すのはアウトだぜ。学校で教わらなかつたか？」

「学校って、教指揮学園？」

「違う、軍人育成の学校」

「知らない。だってあたし、そういう学校の出身じゃなもん。おじいちゃんから魔法を習ったんだもん」

「え？ ああ、道理で魔法の力はあるのに常識がないと思った」

「失礼ね！」

闇蝙蝠がボロツと出した本音に、えんじえらんは軽くむくれた。

「それに、あいつあたしの事」

「分かってる。まあ不安なら産婦人科にでも後で行って」

「闇蝙蝠ツ!!」

「はい、すみません。冗談がすぎました」

かなり強い口調で怒られ、言い過ぎたかとさすがに少し反省した。

「まあ、いざとなったら俺も証言してやるから。……ワピチも。な

? これはえんじえらん一人の問題じゃない。連帯責任だ」

「は、い」

ワピチは大人しく頷いた。そんな彼女に闇蝙蝠は少々目をむけ、ふとさっきの事を思い出した。

「そういえばお前、なあんか楽しそうにあいつと喋っていたねえ。

ああいうの好き？」

「え、い いえ、違います。ただ、ぼ……僕は治癒師だし、戦いとか、その、知らなくて。だから相手を刺激しないように、って思ってた」

「まあ、正解だわな。戦えないならその方がよからう」

「ていうか、闇蝙蝠。あたしは兎に角、どうしてすぐにワピチを助けてあげなかったの？」

「ここでえんじえらんが、批判的な視線を向けた。

「昨日、データは見たじゃない。ワピチが戦えない事くらい、知ってたでしょ? さっさと攻撃してれば良かったのに」

「無理だ。女の子のナンパ程度で俺から手エ出したのがバレたら警察が黙っちゃいない」

「そうやってゴチャゴチャ考えてるから!」

突然、彼女はブチ切れたように怒鳴った。

「こういう事になるんだよ。あんた、いつつも理屈っぽすぎる。もうわけわかない!」

「分からだど? だったら理解するノミソをつける。しょうがないだろ、俺らは法律違反スレスレの所でいつも行動してるんだ。

気をつけないと自分で自分の首イ絞めるぞ。……それに、だったらお前がやれば良かったじゃねえか。お前がワピチを助けてやりや良かっただろっ？」

「でも魔法使っちゃダメって言ったじゃない。悪いけどあたし、魔法使わないと攻撃出来ないの。物理攻撃は持つてない。それに魔法使うときはちゃんと手加減したよ！」

「ああ？ あれが手加減か？ んなの、加減のうちに入らんぜえ。火の粉はとにかく火炎柱は直撃してたらお陀仏じゃねえか。大体、何で格闘技を身に着けてないんだよ。お前腐っても戦闘員だろうが？」

「そんな事言ったって、戦場だったら魔法禁止なんて事はまずないし」

「いいや、ありえる。そんな事を言うのはお前が本当の戦場を知らないからだ。だから学校に行けっって言っただよ」

「何よ、インテリぶって！ あんたは学歴主義の批評家か何か？ 年上だからって偉そうにしないでよっ」

「じゃかあしい、俺がインテリなんじゃなくて貴様がアホなんだッ！」

「何いっ！」

「あの、ふ……二人とも。ケンカは止めてください」

「ガーガー」と言い争いを始めた二人を、ワピチが抑えた。

「な、仲間割れは良くないです。確かにえんじえらんのは……や、やりすぎだったかもしれません。でも女の子なら、ああいう襲われ方したらしょうがないです。それに彼女、ちゃんと手加減をしたって言いました。だけど僕ならきつとそんな事、出来ません。加減が出来ただけ、えんじえらんはすごく偉いと思う。闇蝙蝠、貴方も考えてみて下さい。いきなり知らない男の人に襲われたら、すごく……い、嫌じゃないですか？」

「ふん。ま、確かに」

間に入られて少し頭が冷えたのか、闇蝙蝠はぐつと語気を鎮めた。

「男に触られてギヤアツてなる気持ちは分かる。俺がもしやられていたら、我を忘れて相手を殺していたかもしれんな。だが、気をつける。過剰防衛っていう罪もあるんだぜ？ 特に俺らは普通の人よりも強いから、意識して加減しないとんでもない事になる。それくらいはお前も分かるだろう？」

彼の言葉に、えんじえらんは無言でうなだれた。

自分がやりすぎてしまった事、戦闘に特化した技を出すという目立つ行為。それに伴う代償。一般人にむかって戦闘に特化した強力な魔法をぶちかましたら、何かしら後にゴタゴタを残す。

三人は今回セットで行動している。一人が逸脱した行動をとれば、後の二人にもその責任は一緒にかかってくる。

それが分かって、彼女は少し泣きそうな顔になった。

10・テレポーターション

「とはいえ、やっちゃまったことはしょうがない」

闇蝙蝠はいつになく柔らかかな声を出した。

「まあ、何とかなるさあ。あいつらは誰も死んでない。それに俺だつて奴らの骨にヒビをいれたんだ」

小さな背中を慰めるようにぼんと叩き、言う。

「さつきお前は、俺を理屈っぽいと言ったな。だがその視点から見ても言い訳はそれなりにちゃんと立つ」

「本当？」

「ああ。元来、俺らは襲われたら相手を殺すことが出来るんだ。分かるか？ 何人も、人の生命・精神・身体・自由・財産を犯すことは許されない。しかし下記にあたる事項は除く」

闇蝙蝠は法律の書にある文章を音読するように言った。

「国が任命した帝国軍の正規隊員および隊長は、別に定める警察からの要請の他、三人以上の殺人、及び別項第九条、十条、十一条、十二条に定めた罪を犯した相手に、生命・精神・身体・自由・財産を犯されそうになり、自衛のためやむをえない場合にのみ、他人のそれを奪った あるいは奪おうとする未然の 罪に対し、相手を殺害あるいは傷害することにより、独断でその危機を絶つことが出来る」

「……えつと」

「瀏華隊の特権について記した憲法五十一条だよ。要するに俺らは相手が悪者ならそいつを殺傷できるってこと。条件つきだけど、まあそこらへんはうまく立ち回ろう」

言葉にうまく出来ない分は、適当なジェスチャーで補う。彼は手をぱたぱたと振った。

「とりあえず戻ろう。元々俺らの任務は警察の警備だ。勝手にいなくなっちゃマズいから」

「うん」

「そうですね」

「テレポを使うと早いだろう。　だが、おい。そうだ、ワピチ」

「は、はい?!」

突然名前を呼ばれ、ワピチは少しびっくりしたように顔をあげた。

「何ですか?」

「練習しろ。俺と、お前と、えんじえらん。合計三人を運ぶんだ」

「い、今ですか?」

「今くらいしかやれる時はないだろう」

闇蝙蝠は勝手に命令をした。

「見る、俺らの周りには今何もない。ただベンチがあるだけだ。あと街灯も。しかしいずれも、遠い」

ピツと腕を伸ばし、若干偉そうに辺りを指し示す。

「テレポ練習にはうってつけた。初級から中級へのステップ・アツブね。呼び出しがないならさほど急がなくても良からうから、な?」

まあ三人バラけちまっても俺が何とかしてやるから」

「わ　分かりました」

若干不安げではあったが、ワピチは早速、ブツブツとなにやら呪文めいたものを唱えだした。しかしその一連の会話と彼女の様子に、えんじえらんが首をかしげた。

「バラけるって、何?」

「ああ、説明しよう。お前も知つてのとおり、場所から場所へ、瞬時に移動する魔法　それが瞬間移動魔法だ」
テレポーション

闇蝙蝠はこれまた、教師か何かであるようにスラスラ言った。

「非常に便利だが、完璧なマスターは大変で、場合によっては危険をともしなう。移動できなかったというのはまだマシな方で、よくあるのは目標地点とは全然違つところへ行ってしまうというパターン。これは何となく、ありそうだなって思うだろ?」

「う、うん」

「あるいは、自分の周りにあるものを巻き込んで、一緒に連れて飛

ばしてしまつたというパターン。他、複数の人を同時に移動させた場合の失敗例として多いは、本人をふくめ、テレポをかけられた人全員が、てんでバラバラな方向に飛ばされる事故がある。これが俗にいう、バラけてやつた」

「怖いね」

「そう！　これが一番厄介だな。飛ばされた場所が無難な場所ならまだ良いが、崖っぷちとか海の中とか、そういう所についてしまう場合もあるんだ」

途端、えんじえらんはギョツとした顔をした。

「本当？」

「そう。うっかり高速道路のド真中に出、走っていた車にはねられて死亡という極端なケースも過去にはあった。今は全ての高速道路にはテレポ避け　それがつけられていると、たとえそこに移動しようとしても移動できない　がかかっているから、心配はいらないけどね」

「そうだったんだ」

感心したような声を出す。そんな彼女に、闇蝙蝠はこう勧めた。

「お前も習うか？　四級はわりと簡単だぞ」

「うーん」

「あ、あの」

その時、三人の足元に青白い光を放つ魔法陣がぼうつとうかびあがり、ワピチがおずおずと声をあげた。

「こ、これで大丈夫でしょうか」

「うむ？」

問われ、闇蝙蝠は足元のそれを見た。しゃがんでザツと目を走らせ　えんじえらんには何を見ているのかよく分からなかったが　うんと頷いた。

「大丈夫、問題ない。よし、移動だ」

「はい！」

ワピチは息をはくと、すっと目を閉じた。そして待つこと数秒。

魔方阵の光に包まれ、三人の姿はその場から消えた。

+++

飛んだのは、先ほどの乱闘の場所より二百メートルほど手前の場所だった。光に包まれて現れた三人の人間。夜の暗いなかでそれは目立ち、道行く人の好奇の目に一瞬、晒さらされる。

「あつ、そういえばテレポ使ったら目立つから」

「ふふん、心配ない。むしろ今はこの方が良からう」

「失礼します！」

闇蝙蝠が言葉を言い終わるか終わらないかのうちに、早速、誰かが三人に声をかけた。見ると、野暮ったい茶色のコートを着た男が一人立っていた。

「帝国軍、瀏華隊の第一グループの方でしょうか？」

「ああ、そうですが。そちらは？」

「私は警察の者です。どうも、お世話になっております」

言いながら、男は手帳を見せてくれた。それは開かれると同時に光を発し、暗がりでもハッキリと中を映し出していた。

中身を確認すると、闇蝙蝠は頷き、ついで首を傾げた。

「警察官の方ですね。何かあったんですか」

「ケンカがあったようで、負傷者が出まして」

「珍しくなかるう、こころへんじや」

「はい。ですが」

男 警察官は、今度はメモ用の手帳を取り出して見た。

「炎の魔法技が使われた形跡があるとのことです。通常では使用されない魔法で、おそらくこれを出した者はそれ相応の知識がある者であると」

「ああ」

思わず、チラツとえんじえらんとワピチと顔を見合わせる。

「ケガ人は救急搬送したか？」

「は、はい。通報をうけ、救急隊員が現場にテレポーターション、同技を用いて病院に搬送はんそうを済ませたと」

「なら、問題なかるう」

闇蝙蝠はいつもの口調で、キツパリ言い切った。

「命に別状がないならな。なあに、この辺にいるやつらはみんな夕フだ、ちよつとやそつとのケガならすぐ治る」

「は、はあ」

「ついでにメサドンでも投与してやることだね。奴ら腕に注射痕があった。きつと覚せい剤の中毒者だろ。おっと、だがヤクの治療の全部が全部にメサドン使うわけじゃねえか。でも俺、ドラッグの解毒といったらこれしか知らん」

「は……」

「ははっ、冗談だよ、きよとんとするな。それより、魔法ね。炎の魔法」

闇蝙蝠は、いささか不自然に首をかしげていた。

「只今ケンカが勃発中っていうのなら、俺らが出て止めることも出来るだろ。だが事後じゃ、何もては出せない。なあ、そっちに鑑識の人がいるんだろ」

「はい」

「なら、彼らに尋ねてくれ。ついでに搬送した被害者の手を調べるといいだろ。悪いが俺らは、それくらいしかコメント出来ない」

ぶつきらぼうにそう言い、闇蝙蝠は警官をその場に残し、勝手にスタスタと歩き出した。えんじえらんも慌てて後を追い、ただ一人、ワピチだけは一礼してそこを立ち去る。

しばらく歩くと、えんじえらんは闇蝙蝠に、心配そうに尋ねた。

「ねえ、大丈夫かな」

「さあな」

「あ、あたしのせいで」

「終わったことはしょうがねえよ」

いつになく、闇蝙蝠は短く答えた。

「心配するな。奴らは死んじやいない。願わくば、あの現場に監視カメラがあるように、だな。それがありゃ、どっちが先に手エ出したのか分かるだろう。誰だって仲間が襲われそうになり、自分の身が危つくなれば反撃する。証拠さえあれば俺らは無実だ」

「そうなるかな」

「願っておけ」

チツチツと舌打ちをする。そして少し小さな声で言った。

「さつきは悪かったね、一方的に責めて。人の事、俺も言えなかったのに」

「ごめん」

先程の事を謝罪した。するとえんじえらんも、しゅんとした顔で謝った。

「あたしも。闇蝙蝠は……悪く、ないよ。さつき言われた通りじゃない。あんたみたいに、ちゃんと考えて……い、いれば。魔法使わなかったら、あ……あたし達のこと、きつと、分からなかった！」
彼女はまた泣きそうな顔をした。

「こ、この騒ぎで、瀏華隊の事がバレて、そ、そしたら……あの、手紙の男も、もう此処には……あ、う……うっ」

「え、えんじえらん。な……泣かないでください。そ、それを言ったら僕なんて。瀏華隊なのに何もできなくて、役にたたなくて」

「だってワピチはもともと非戦闘員じゃない。でも、あたしは」
「おいおい、泣きなさんな」

闇蝙蝠は二人の肩にぼんと手をかけた。

「そういう涙は別の時にとっておけ。とにかく、泣く子も黙る戦闘力を持つ、瀏華隊がメソメソするもんじゃない。ほら、さっさと戻るぞ」

「え？ ど、どこに？」

「本部に。忘れたか？」

言いながら、闇蝙蝠はぱつと召喚をした。広げた手に、トランプが一枚現れる。その角には血がついていた。

「あの青年の背中に潜り込ませたカードの事。あれは悪戯にしたわけじゃない。奴の血を少し手に入れた。持って帰って、警察に渡そう。何か出てくるかもしれん」

11 - 報告と推測

20日、時刻は午前十一時。いつもの会議室にて、凜を中心に瀏華隊のメンバーは全員0字型をした細長い長机に集まっていた。それぞれ前にはコンピュータの液晶画面があり、くわえて資料として配布された紙があった。

話の内容は、昨日の調査の報告会。だが三つのグループのうち、他二つは特に何もなく、唯一、関街道を担当しに行った三人だけが怪しい人物を見かけていたため、焦点はそれにあてられていた。

「その不審な青年に、闇蝙蝠がカードをはりつかせました。そのカードで、えっと……」

「カードスラッシュ。魔法でカードを遠隔操作し、相手の皮膚を軽く切った。本当に軽くだがな」

「カードスラッシュをしてキズをつけて、血液を採取しました。その後、警察にそれを提出して前科犯リストと照合してもらいました」
報告は、ワピチが担当していた。それに時々、闇蝙蝠が補足を行う。

彼らをふくめ、この場に居並ぶメンバーは前と特に変わりはない。だが一人、前回は姿を見せなかった男がいた。

水色の瞳は切れ長で、ややシニカルな表情をしている。紺色の髪にはかなり白髪が混じっているが、そう年寄りというわけでもない。肩の部分に白薔薇のフロッキー加工が施された、紺色の長いローブをはおり、側には黒い宝玉が埋め込まれた、スネークウツドの長い杖を置いている。ぱっと見、魔道士か何かのように見える。

名前はデザイナー「レグルスクロー」。瀏華隊の戦闘隊員であると同時に、隊員の一人、春翹諳の養父だった。そのためか、時々一部で、冗談まじりに師匠とよばれたりもする。ただし少々不思議な人物で、無断欠勤しまくりは序の口、リーダーに呼ばれてもほとんど応じない。なのに、何故かクビにならない。

ワピチはあちこち、つつかえながら読んだ。そしてようやく、紙を一枚読み終えた。すると選手交代し、今度はえんじえらんが紙をもつてそれを読み始めた。

「で、結果を聞いてもらってきたのはあたしなので、此処からはあたしが報告させてもらいます。血の持ち主は、ダーク・レイ、十六歳、男性。二年前にシンナーおよび第一級禁止呪術世品の所持違反で捕まっています。しかし彼が持っていた呪術用品は偽物で、本人も、ただのインテリアだと主張したそうです。加えて、彼が一般人で、また未成年であったことから、厳重注意で釈放されました」

「変わった名前だねっ、ダーク？」

えんじえらんが一息つくくと、早速、ピロロが首をかしげた。

「それ本名っ？」

「それは、何とも言えません。記録によりますと、彼には戸籍が見当たらずに」

「戸籍が無いだと？」

ふいに、闇蝙蝠が素っ頓狂な声をあげた。

「そりゃ初耳だ。えんじえらん、それ本当か？」

「う？ うん」

「この国の戸籍がないってことは、外国人か」

一人うーんと首を傾げる。

「あるいは出生時に市役所に届け出をされなかったのかな。だが、そうなる書類上その人物は存在しないってことになるし、ってことは車やテレポの免許もとれないし学校や医者にも……いてっ！」

だがピロロに足をぐつと踏まれ、闇蝙蝠は途中でしゃべるのをやめた。ピロロは「全く、いつも勝手にしゃべるんだから」と小言を一ついい、えんじえらんに話の続きを促した。

「で、補足ですが、血で身元が割れたのは、当時警察が彼が中毒者かどうか調べるため血液を採取していたからです。その個人データと一致したので、彼と分かりました」

「当時の彼の住居はっ？」

「取り調べに対し、彼は小さいころから、友達や仲間の家を転々と生活していたと言いつ張っていたそうです。といつてもこの国で孤児の少年がそのようなように生きていくには不自然ですし、警察も調査したそうですが、掴めなかつたそうです。また彼は、両親は自分が十歳の時に死んだと言つたそうです。そして、原因が」

えんじえらんは少し言葉を切つた。

「……瀏華隊に殺されたと」

「ふん、俺らに恨みをもつたガキが、成長して俺らにはむかうようになつたつてか。上等じゃねえか」

足をささつとピロロの傍からひっこめながら、闇蝙蝠は懲りずにまた口を挟んだ。

「親子二代そろつて葬つてほしいなら、殺つてやんぜ」

「闇蝙蝠、こらっ！」

「それに、そんな境遇のガキがいたなら組織にとつちや都合だ」
ピロロの叱責をさらつと流し、疑問にたちかえる。

「瀏華隊に親を殺されたガキがいたなら、組織が捕まえんわけない。ガキを捕まえて、浚つて、自分たちに忠実なる奴隷となるよう教育していく。時間もコストもかかるけど、その分精鋭がそろつ。昔ながら、わざわざそのために親を殺していたらしいからな。……あくまで昔の話だけだね」

「でも、へんじゃないかなあ」

長々とした話の途中で、えんまがのんびりと遮つた。

「何が？」

「だつて、親のいないこどもは、まずさきに孤児院にいれられるんじゃないかな。親がいなくていうだけで、さらつたりしたらたいへんだよ」

「その通り。確かに、一度は孤児院に入れられるだろう」

闇蝙蝠は素直に頷いた。

「だがうちの国の孤児院は、養子として子供を貰いたいという人

がいれば、軽く調査はするものの、多くの場合すぐ引き渡す。追跡調査は多少はするが、それだけだ。……さつき、ダークには戸籍がないって言ったな？ 聞いたはなはビビったが、冷静に考えれば納得がいく。おそらく、死者のデータを洗ってみれば出てくるだろう。死んだことにされたんだ。そうすれば煩わしい追跡はなくなるから」とここまですべて一息で言い、だけどと話を交える。

「だが、この国で探しても見つけないのは無理かもしれない。だって『ダーク』なんてセルタンティーヌの人間の名前らしくない」

「それなら、ヒメールスゲヴィルです！」

シャオがぱつと明るい声を出した。

「きつとそうです！」

「ふふん、確かにアッチの国の人の名前っぽいな。だがダーク・レイは彼が元々持っていた名前じゃない。あくまで俺の推測だが、暗黒軍に入った後そう名付けられたのだろう」

「えー？ そんなことってありますですか？」

「……同感はします、私は、闇蝙蝠の考えに」

シャオの文句をよそに今度は春翹音が声を出した。

「シンナー、と呪術用品のまがい物を持っていただけでしたね。ダークがセルタンティーヌで捕まった時は。しかし『ダーク』という外国風な通称からして、ヒメールスゲヴィルで何かやらされる予定があったのかも。ヒメールスゲヴィルはセルタンティーヌより進んでいます。魔法も、文化も。違法なものではなくても、例えば一般的な機械でも、脱税して密輸すれば……さぞかしあがるでしょうね、利益が」

隣席の闇蝙蝠が乗り移ったかのように、これまたツラツラと喋る。

「一方、アンダーグラウンドの世界については、こちらの国の方が発達している。もしかしたら、まずセルタンティーヌで慣れさせて、それからあちらに飛ばすつもりだったのかも」

「でも、やらされるって、誰にですか？」

「組織の連中だろう」

シャオが挟んだ疑問の声に、春翹諳より先に闇蝙蝠が答える。だが少年はさらにつっこんだ。

「どこの組織ですか？」

「ええと、それについては……おい。リーダー！」

「はい」

「リーダー、そっぴや聞いてなかつたんですが、警察はヤクの販賣者を誰と予想したんですかね？ 殺人組織の俺らを呼ぶくらいだ、小さな組織とは思っちゃいないでしょう。デカイ所と仮定すると、代表的なのは……あんれいくん 暗怜軍、りよつきじゅつかい 獵奇呪会、あるいはあんさつけん 暗殺剣。この三つくらいか」

「今名前のあがった、暗怜軍が暗殺剣と判断していたわ。うち。暗怜軍である可能性がもつとも高いとしている」

凜はそのまま答えた。

「手紙の最後に『暗』と赤い字で書いてあったから」

「それが理由か？」

「警察の見解ではね。字だけなら暗殺剣の可能性もあるけれど、書き方が暗怜軍がするというサインに酷似していたらしい」

「なるほど。だが、それだけか？ ちょっと安直な気がするなあ」

「しかし、まんざらではありませんよ」

出てきた名前を聞いて、フェイアントが若干緊張した声を出した。

「闇蝙蝠。今名前をあげた三つの組織の『特徴』を知っていますか」

「うん？」

「獵奇呪会は呪術用品の販売、生産に特化。薬はやっていません。」

また戦闘力もほとんど有していません」

疑問符をつけた闇蝙蝠の答えに、彼は指をおって数えながら説明を شدした。

「ただ、巧妙に逃げるので警察が捕まえ損ねているだけ。一方、暗殺剣は薬や偽薬を製造・販売しており、また警察との衝突で何人が殺しているため危険度は高い。ですが、最近では逮捕者が続出したこと、また組織そのものが労働力の安い他外国にどんどん移ってい

るため、我が国においてはあまり被害がありません」

「他の国で被害が出るだろうけどな。そのうち国際問題に発展しそ
う」

「しかし暗怜軍はそれ以上。まずを違法な植物　芥子けしとかが代表
ですが　を、大規模に育てて薬を作っている」と

闇蝙蝠がいたチャチャを、彼はつとめて気にせず続けた。

「そしてそれを販売し、利益をあげている。他には武器ですね。本
来なら銃刀法取締り違反なのでアウトなのですが、マニア向けとし
て、本当に武器として使えるものを販売。戦闘力も高く、一か月前
に警察から発表されたデータを見ても、警察官を殺傷した数は暗怜
軍がダントツです」

「ワースト1と言った方がよさそうだな」

「しかも彼らは一年ほどまえに壊滅した『謳歌軍』おっかぐんという、ヒメー
ルスゲヴィルからセルタンティーヌにまたがって活動していた組織
の残党の集まりと言われています。これはあくまで噂ですが、これ
が本当なら、暗怜軍が彼らと同じようにヒメールスゲヴィルに手を
伸ばそうとしてもおかしくはありません」

「歴史は繰り返すって事が」

「おまけに、これもまだハッキリとはしていません。暗怜軍
の特徴としてはもう一つ。彼らは『戦うために』もしくは『その補
助として』子供を育てているらしい」

「ほお」

「えっ、ほんとう?」

「何てこと?」

その時、ちよくちよく口をつっこんでいた闇蝙蝠だけでなく数人
がビクリと反応を示した。

「そんなこと、警察が言ってたの?」

ピロロが慌てたような声を出す。

「闇蝙蝠の想像じゃなかったの?」

「おい、俺は事実在即して予想をしたんだ。推測と言いたまえ」

「確たる証拠はまだありません。ただ、こういう事実があります」
フェイアントはあくまで、落ち着いて答えた。

「自分たちの身を守るため、彼らが武装しているのはまぎれもない事実です。また警察官との衝突により出た死者を分析したところ、警察官側は別として、死体はみな十八歳以下の子供でして」

「ドサクサ中とはいえ、そんな子供を殺してよく警察が倫理団体につるし上げられなかったな。事実を隠したか」

「ですが適当にその辺の子供を使ったわけではないようです。明らかに訓練を受けた動きをしていました。それに、かつて謳歌軍が子供を教育して自分たちのために使うことをしていたのです。もし暗怜軍がその末裔まっえいなら、同じく子供を引き取り私利私欲のために育成していた可能性も大いにあります」

「でも、謳歌軍が壊滅したとき、関係者は洗いざらい捉えられた」
彼の言葉に、珍しく凜が反論した。もう自分が主体で喋るのを諦め、他の皆と同じように、議論しながら喋ることにしたらしい。

「末裔とか残党とかはあくまで噂に過ぎないはずです」

「だが、警察の手を逃れた奴も多いんだろうが？」

闇蝙蝠もまた、いつもの口調で言う。

「ダークもその一人かもしんねえぞ。ここで今までのまとめ代わりに、奴の経歴を予想してみようか？」

更にニヤツと笑い、リーダーの凜を差し置いて流暢じゅうちやうに喋りだした。「今から六年前。ダークは十歳の時に瀏華隊に親を殺されて死に別れた。孤児院にひきとられたが、その彼を謳歌軍が引き取った。で、悪い教育をたつぷり叩き込まれつつ、謳歌軍に奴は育てられた。そして十四歳の時、バカして警察に捕まって取り調べを受けた。」

が、釈放された。奴は謳歌軍に帰っていつものように生活を続けた。そのままいけばずーっと謳歌軍の一員だったんだろうけれど、十五歳の時に謳歌軍が崩壊した。しかし十五歳といえば、俺らのように帝国軍の一員でない限り、子供扱いされる年ごろだ。警察はあまり注意をはらわず、福祉優先で孤児院に奴を入れ……それを、今度は

暗
怜
軍
が
拾
っ
た
」

12・呪い

「こんな感じかねえ？」

「そうね」

フェイアント、そして闇蝙蝠の話が一息ついて、凜が素早く声を出した。

闇蝙蝠は決して嘘や虚言を言っているわけではなく、真面目に会議に参加している。リーダーとしては仲間の意見も尊重したいが、ただ、うかうかしていると内容が全部『闇蝙蝠の予想』で終わってしまう。

言うべきことは自分が言わねばと、彼女は口を開いた。

「ですが数日内に結果は出るでしょう。そして相手が暗怜軍であるとハッキリ判明したのなら、急きよ特攻命令が下る可能性があります。こちらとしては心しておかねばなりません。いいですか」

ただ今回は、フェイアントが口を挟んだ。

「とはいえ、今現在、彼らの居場所は分かりませんよね」

「ええ」

凜は頷く。それを受け、また続ける。

「であれば特攻はまだ先になるのではありませんか？」

「それは」

「えー、どうしてですか、フェイ」

凜が答える前に、今度はシャオが口を挟む。

「戦いはまだしらないですか？ ボク、飽きちゃいますです」

「飽きる？ ええと、まあ そうですね」

子供ながらの純粋な意見に、フェイアントは思わず苦笑した。

「しかし『下をつぶしても仕方ない、本拠をみつけて一気に攻め入れ』というのが警察の方針ですから」

「ホンキヨ？」

「平たく言つと、悪のアジトのようなものですよ」

「ああ、地下とかにありますですよね」

「シャオの頭の中には、国に逆らうレジスタンスの隠れ家的なものが浮かんだようだった。勝手に、地下と決めつけている。」

「だけどそれ、滅多な事じゃ見つからないんじゃないですか？」

「その通り！」

突然、フェイアントを押しつけ、しばし黙っていた闇蝙蝠がまだ喋り出す。

「その通り。だから俺らはこうして今部屋の中で会議をしているんだ。本来なら戦場で戦っているはずなんだけどね」

「んう？」

「俺的には、下っぱでもいいから潰していかなきゃと思うよ。だって出た端から潰されるとわかったら、奴らだって躊躇する。現状の縮小は難しくても拡大は防げるだろう」

「しかし闇蝙蝠。下手なことをしますと、掴む尻尾もつかむことが」
「今だって十分つかめてねえじゃん」

フェイアントの言葉に、わざとらしいオーバーアクションで肩をすくめる。

「じゃあせめて、今のうちに国民に教育を施そうよ。薬つてのは怖いものだから、呪術用品はおつかないよとか。教えりゃいいんだ。そうすれば手を出す人が少なくなる。つまり需要者が減る。そうなりゃ供給も必然的に止めざるをえない。それに『国と国民を守る』っていう目的が達成できる」

「なるほど。しかし時間がかかりますね」

「いやあ、一か月もありや十分じゃないのか。まずは若い世代から、学校とかを通してだな」

「ですが下手に教えると妙な好奇心を呼ぶ恐れがありますよ」

「脅せばいいんだよ。廃人になった野郎の本物の映像を見せるとか。それがマズければマウスを使って錯乱の様子を流すとか」

「そして……見比べますか？ 正常なマウスと薬品を使用したマウスとを解剖して、その各臓器を」

「おつとしーちゃん、残酷な話になると食いつきがいいね。そうそう。って、怖いわ！」

「大丈夫です、解剖中の様子を流さなければ」

「いや、でも確かに喫煙による肺がんとかではそういうビデオ、ありますしね」

話がズれているにも関わらず、フェイアントは当たり前のように話に混じる。そして、これまたとうとうと私的意見を述べはじめた。「また呪術用品はそれを使用した側のリスクを事細かく教えて。いつそ学校の試験に出せば、皆も勉強するでしょう」

「なるほど、必須科目に組み込んでやるのね。……でも、その場合テストの採点は筆記が適かなあ？ マルバツだと理解度がビミョーだよ。でも筆記は採点者側の負担が大きいからなあ」

「しかしある程度はつきますよ、力は……マルバツでも。まずそこからへんは、任せましょう？ 各教育者の裁量に」

「ああ、でも待つてください、二人とも。私から言いだしておいて何ですが、教育を施すとなれば必然的に教育者つまり先生が必要となりますよ。ですからまず、その人員の確保を」

「おつと、そうだ。それも考えなきゃなあ。でもビデオにとって流して勉強ならイケんじゃない？ コストも抑えられるし」

三人の会話は、もう完全に脇道に逸れていた。シャオはポカんとし、ワピチとえんまはやや困った表情を浮かべる。デザイナートは自分の世界に入って見向きせず、凜はやれやれと疲れた顔だ。だがその中で、一人、ピロロはマジグレ寸前だった。

イラつく彼女をみたえんじえらんが「ちよつと、ヤバイよ！」という視線を三人に送る。だが三人は気が付かない。

このまま黙っていれば、小一時間は延々続きそうな勢いだった。ピロロが立ちあがるうとした刹那、凜がパンツと手を叩いた。

「ちよつと、三人！」

「は、はいッ?!」

「私がしゃべってもいいかしら？」

「……ああ」

「失礼しました、どうぞ」

闇蝙蝠、春翅諳、フェイアントの順で静かになる。こうして三人を黙らせて、彼女はようやく言葉を出した。

「あなた方の言いたいことも分かります。ですが、警察も手一杯なのでしよう。ただ付け加えれば、今あなた方が言ったようなことを実際『やろう』とした動きが一部であることも事実です」

「本当ですか？」

「はい。ただ残念ながら、そのような教育は私達が行うべきことではありません。我々の任務はあくまで指令に従い戦うことです。ただし警察か国からの要請がなければ戦闘を行えません。加えて、警察にまじり調査をすることも出来ません。歯がゆい事ですが、命令を待つしかないので。ですが、悲観することばかりではありませんん」

最後の言葉を、フォローするように付け加える。

「小さいとはいえ手がかりがつかめた今、いつ戦闘命令がきてもおかしくありません。ですのでそれまで、各自、コンディションを整えて戦闘に備えて下さい。では、今日はこれにて、解散します」

こうして会議は終了したが、皆が帰る一方で、闇蝙蝠はその場に残っていた。

「リーダーが言う事ももっともだ。しかし、早く場所をつきとめてくれねえかなあ」

「どうして？」

隣には春翅諳がいて、こちらも帰ろうとはせず彼に付き合っていた。どうも二人は、まだ喋り足りないようだった。

少し離れた所にディザートもいたが、全く何もしていない。話を

聞いているのか、いないのかすら分からない。全く彫刻のように、彼はイスの上で動きをピタリと止めている。

「だって、イヤじゃないか。警備にかり出されるなんてさあ」

「そう?」

「そうだよ!」

闇蝙蝠は妙に強く頷いた。

「俺らは国を守るため人を殺すという、おぞましくも立派な大義名分をもった殺人集団。そのためにワザを磨き試験にたえ、テストをくぐってこの業界に来た。それをお前、警備なんてやってられんぜ。ブチトマト一つ切るのにペティナイフじゃなくってチェーンソーを使うようなもんだぞ」

と言うものの、しかし彼が警備を嫌がる本当の理由は他にあった。えんじえらんの事である。事実の報告はあの後したが、警察からの処分はまだきていない。そのせいで妙に不安がつのつていたので。「それに、しーちゃんだって他人事じゃないんだぞ。俺と同じ階級なんだから」

「階級?」

「つまり、命令をもらったら何が何でも従わなきゃならないって事さ。警察に『嫌です』とは言えないってこと」

「なるほど」

「ま、それでも俺はいいけどさ。そういうトコだって腹くくって就職したんだもん」

「そう……です、か?」

「しょうがないさ。まあ、そこそこの給料が貰えてそこそこの生活が出来るなら十分、それで構わない。しかし」

闇蝙蝠はなぜか、年寄り臭いため息をついた。

「まだ十六歳なのに、何でこんなオッサンめいたことを俺は言うてるんだろ?」

「既に社会人だからでしょう」

「学生でもあるんだけど?」

「今日、学校に行きましたか？」

「いいや。だって今日は午前から会議だ。時計を見る。もうおやつ
の時間だよ」

時計を見ると、あと十分で三時だった。闇蝙蝠は脳内にお菓子を
色々と思い浮かべつつ、ふと、じーっと黙ってただ座っているだけ
の人に目を向けた。

「食後のデザートだったら冷たいアイスかムースがいいんだけどな
あ」

「あのね。彼の名前はD e s e r tであってD e s s e r tじゃあ
りません」

春翅諳が口を挟む。

「もつとマシな連想をして下さいな」

「うーん、じゃあ、そうだねえ。お前に練乳をぶっかけて治安の悪
い路上に放置してみるとか、ハチミツをかけてアリの巣近くに放置
してみるとか。いや、むしろ俺とお前で練乳とハチミツをあわせて
『頂きます』するとか、生きたウナギやイカやタコを身体の上に乗
せちゃうとか。もしくはフルーツとかイロイロ盛っちゃうとかあ。

あつ、でもそうなるデザートっていうかオカズだね。ひゃあ
っははは！」

わざとらしく下賤な笑いをする。春翅諳は相変わらずうつろで虚
無的なその表情を全く変えなかったが、二の句がつけずに絶句して
いた。

「おっと、冗談だよ冗談。本気にするなよ」

「本気だったら困ります」

「とか言って、まんざらでもないんじゃない。お前、激しいの好き
だろう」

闇蝙蝠は軽く笑った。そして話を変えようと、デザートに声を
かけた。

「ところで、師匠さん。ちょっと聞いていいかい？」

「……あ？ あ、何だ」

ワンテンポ遅れて、デザイナーは不拔けた返事をした。

「昨日、シャオやしーちゃんと一緒に場所、行ってないって聞いたけど、どうして？ 見たいテレビ番組があったからすっぱかしたの？」

「なわけあるか。私の家にもビデオくらいあるわ」

「ツツコミ所、そこかい」

軽く肩をすくめたものの、闇蝙蝠はすぐニヤリと笑って下世話な冗談を続けた。

「ビデオって、AV再生専用の？ モザイク自動判別、かつ解除機能搭載。角とかちよつと湿ってそうな」

「ふん。ゴミ箱の中がバキバキになったティッシュで埋まっている貴様と一緒にするな」

「ご、ゴミ箱！？ ていつしゅ！？ な、なんていう修飾語。下品だなあ、もう」

「人の事を言えた口か。わけを知りたいなら春翹語に聞け」

「しーちゃん、何で？」

「私が止めたからです。警備なんて、彼がすることじゃありませんから」

春翹語はそのままの表情で答えた。光のない死んだような目はもう前々からだが、今はそのせいでどこか病んでいるようにも見えた。「寒気しますもの。あんな場所にいる輩に、師匠に触れられたらと思つと」

「まあね、確かにあまり衛生的じゃなさそうだけど。大袈裟だよ。

彼はガラス細工か何かかい。丁寧に扱わなきゃブツ壊れるの？ で、それを真に受けて来なかったのかい、師匠さん」

「彼は悪くありません。悪いのは私でしょう……だって、閉じ込めましたもの。手足に鎖をつけて、私の部屋に」

「束縛してたの？！ うわツSMチックだなあ。でも師匠なら鎖を抜け出すことくらい可能なはずじゃ」

「しっかりやっています。決して抜け出せないように」

「ひいッ！」

さりげなく言われたその言葉に、闇蝙蝠は半分ふざけて、しかもう半分は本気で驚いた。

「怖いなあ。ディザートさん、大丈夫だったの？」

「私は死にはしない」

「やれやれ。養いつ子にそんな事されるほど愛されているなんて、楽しいねエ。しーちゃん？ ヤンデレるのもほどほどにしようね」

「別に病んでません、私……」

「自覚なしか。ああ、だからタチが悪い」

チツチツと舌打ちをし、心持ち相手と距離をとる。そんな事をしつつ『そういえば』とまた話を変えた。

「そういえばさ、今日話にあがった暗怜軍とか獵奇呪会。奴らって呪術世品を扱ってるんだよな」

「そっだが？」

「じゃあさ、どうして奴らは俺らを呪いで殺さないのかな」

「あん？」

「そりや實際人を呪いだけで殺すとすると、相当な力が必要だ。すでに高い魔力を封じ込められた用品を使う場合は別としてね。……でも、何にしても、あいつらなら出来ると思うが？」

「呪い返しが怖いのか、きつと」

ディザートはすぐに答えた。

「そもそも呪いとは何だか分かるか。諸説あるが、この国においては『かけられる人に不利益をもたらすもの』かつ『ウイルスや細菌、毒ではないもの』となっている。更に持続時間や、術者と被術者との距離が制定されている。発動終了後、三十二分以上たってからその効果が表れはじめるか、術者と被術者の間に物理的な障害がある、ないしは互いの直線距離が八百メートルを超えているが効果を示し、更に、発動の際、被術者の顔、本名など、何か特定できるものが必要とする魔法となっている」

「ふむ」

「そこが普通の魔法とは違つところだ。そして定義状、呪いはすぐに効くものじゃない。すぐに効果が出るものは『呪い』とは言わないからな。ゆえに必ず兆候がある。一般人なら気が付かず、体調不良や幻覚・幻聴で済ますことも、我々なら分かる。そうすれば呪い返しを施せる。それをされたら、呪いはやった本人に跳ね返る。それが怖いのだろう」

「でも、脅すことくらいは出来そうだけど」

「それと、もう一つ。警察はどうか知らんが少なくとも私たちに呪いは効かん。もしくは、非常に効きにくい」

「効きにくい？」

闇蝙蝠はオウム返しに言った。ディザートはそれに、少し疑問めいた声を出した。

「というか、何故知らんのだ。お前は戦^{せんきょう}教学校出身じゃなかったか」「うん。でも、忘れた！」

「対象者の許可なく呪いをかけるの場合、その人が使える魔力を封じ込める必要がある」

あまりに明快な『忘れた』に呆れたのか、ディザートはツツコミをいれる事すらしなかった。ただ、そのまま説明を続ける。

「そうして初めて、呪いは効果を発揮するのだ。一般人の場合、たとえ潜在的な能力が高かったにしても、使える魔力はさほど大きくない。だが我々のように訓練をうけた者は、使える魔力が大きい。小さい穴に砂をいれて埋めるより、大きい穴に砂をいれて埋める方が大変だろう？ そのため抑えるのに多大なエネルギーがかかる。」

闇蝙蝠、貴様なら分かるだろう。たとえば、人に強制瞬間移動魔法フォーステレポーションをかけたでしょう。しかし、相手がその場にとどまりたい、移動したいと強く思っていたら？」

「移動させることは難しいだろう」

闇蝙蝠は即答した。テレポーションの話となると、途端に受け答えのスピードが良くなる。

「テレポは魔法と意志の力が重要だ。ここに行くという意思を持ち、

その上で魔法をかける。移動したくないと強く念じている者を動かすのは、相当の労力が必要だな」

「だろう？ であるから、奴らもいちいちやっつけられないのさ。それに我々は捨て駒だ」

ディザートは立ち上がった。軽く伸びをして、昼下がりの明るい光が差し込む窓の外を見る。

「先日、此処から二人の人間がいなくなった。死んでいなくなったわけではないが……すぐに、代わりがきただろう」

「代わり？ ああ、フェイアントとワピチのことか」

「そうだ。何にしてもいなくなったらすぐに補充がされる。暗^{あんれいぐん}怜軍

も、それを知っているのだろう。いちいちやっつけられないのかもな」

「ふーん。ま、何にせよ呪殺されないのは良いこった」

不安要素が一つなくなると、闇蝙蝠はディザートのまねをして、わざとらしく伸びをした。

「さて、話をしたらあと二分で三時になるな。さあて、じゃ俺はそろそろ家に帰るね」

「帰るのかね」

「うん。実家の妹が来ることになってるんだ。それじゃ！」

13 - 家族、妹、国（前書き）

画像：<http://street34.mond.jp/>

13 - 家族、妹、国

> i14405—528 <

闇蝙蝠は外に出るとそのままテレポーターションをした。行く先は実家。そこで妹を迎え、今度は自宅のアパートにぱっぱと飛ぶ。

わざわざアパートに移動するのは、彼が親と一緒に暮らしてないためだった。離れた理由は、表向きこれだった。実家が此処、東部オステンではなく国内の西部にあつて職場から遠いこと。いくらテレポーターとはいえ、場合によってその技が使えないこともある。そう言つて彼は此処に一人引越した。

一応まだ未成年だが、瀏華隊の隊員ということと特別扱いしてもらえ、更に父が保証人を取りなしてくれたので何も問題はおきてない。

だが単身、引越した実際の理由は『兄』と『母』だった。彼の家族には妹のほか父母、そして兄がいるが、その兄と闇蝙蝠は非常に折り合いが悪かった。

兄は現在二十歳。彼と同じく帝国軍の戦闘隊員だが、西部担当の樓闕隊に就職しており、家から職場が近いため直接通っている。それとどうしても顔を突き合わせたくなかつたのだ。

重ねてもう一つ、母。実家にいる母は、いわゆる『育ての親』で実母ではない。実は、実父が離婚した後別の女性と再婚し、しかしまた離婚して再度結婚、三度目の相手が元の妻だった。という面倒くさい事情があり、兄と妹は彼女の子だが、闇蝙蝠一人だけ母が違つたという結果になつていた。

闇蝙蝠は継母ままははのことを、決して嫌がつてはいなかつた。ただ、日ごろ偉そうなことを言つても彼もまた発育途中。思春期特有の親を厭う感と遠慮があり、妹との面会も自分のアパートに呼んで行つて

いた。

「さあ、くつろぎたまえ」

「お邪魔します」

そして今、彼に連れて来られた異母の妹。名前は己巳きい、十一歳のんびりしていて大人しく、とにかく理詰めで乱暴な闇蝙蝠とも相性が良かった。

青い髪を頭の上で小さなリボンで一つにしぼり、着ているのはややコスプレチックな、白い前エプロン付きの水色のワンピース。緑色の目は女の子にしてはシャープだが、顔立ちは幼い。闇蝙蝠とはあまり似ていないが、兄妹としての絆きずなは確かにあった。

「椅子でもいいし、あるいは部屋のどこかに座布団あるから、それに座ってな」

風呂場とトイレそして台所をサイドに据えた廊下を通った、突き当たりに部屋は位置していた。途中の台所に立ちながら、彼は少し親しい友人が家に来たかのごとく妹をもてなした。

「何か飲み物をやろう。何がいい？ と言ってもコーヒー系しかないけれど」

「じゃあ、えっと、ミルクコーヒー」

「少々ホットになるけどいいかい」

「うん」

「了解」

早速コーヒー豆を戸棚から取り出し、コーヒーメーカーに豆をいれてポットからお湯を注ぎ、その間に砂糖と、冷蔵庫から牛乳を出して出来上がったコーヒーにぶち込む。

「おまたせえ」

時間はさほどかからない。出来たそれを小さなカップに入れ、己巳の待っている自室まで持っていく。

部屋は八畳程度の広さだった。床に届く細長い窓には無地の黒いカーテンがあっただが、今は開けられ、かわって覗き見防止用のレー

スを通した太陽光が差し込んでいる。壁際には長細い木の机があり、上には本が数冊あった。がそれだけでなく、大量のトランプやサイコロが積んである。

また反対側には青いカバーがかけられたベッドがあった。ラバー製の一本鞭が何本も転がっているせいでSMチックな怪しい雰囲気になってる。

妹にミルクコーヒーを渡すと、彼はベッドの上に仰向けに寝転がった。

「ああ〜しかし、お前に会うのは久しぶりだね。二週間ぶり？」

「うん。あんまり会えないよね。私ね、兄さんに会いたかった」

己己はにこつと笑った。それに闇蝙蝠は少しだけ戸惑った顔をして彼女の方を向いた。

「え？　そ、そう？」

「うん。なんか顔見ないと寂しいもの。家族だし」

「それは……嬉しい事を言ってくれるね」
ぽつりと言う。

「俺に会って嬉しいと言う奴はそうそういない」

「ん、どうして？」

「殺人者だからね。死神とまでは言わないけれど、むしろ会わない方が幸いなんだろうよ。あ、いや違う。違うよ、別にお前と会いたくないって言ってるんじゃない。そんな顔するなって」

少々悲しげな顔になった妹の髪を、手を伸ばしてそつと撫でた。

「俺あ黒影くろかげの事は大ッ嫌いだがお前の事は嫌いじゃない」

「ほんと？」

「本当。でなきゃ会うわけないだろう。この俺がわざわざ嫌いな奴を家に呼ぶと思うかい？　下手に家を知られて泥棒にでも入られたら困るだろう」

「え、泥棒？」

「俺の知り合いは手癖が悪くてね。……とはいえ、実際泥棒してる奴はいねえよ、多分」

「ならいいけど」

彼女は思案気に頷いた。

「そうだよ。だって兄さん、たたかうお仕事してるんですよ。兄さんの知り合いもそうでしょ？」

「うん」

「軍人さんが泥棒なんてしないよね」

「……軍人？」

「たたかうひと。格好よくいえば軍人でしょ？」

「ああ。……格好よく言えばね。だけど現実には全然格好良くない」
闇蝙蝠はガーツと喋り出した。

「血にまみれた男って、絵画的には映えるって思う？ けどねえ、アレ現実じゃ大変なんだよ。そもそも、血って暫くすると凝固してくるじゃん。色もくすんで茶色になるし。結局あとで洋服の洗濯が大変になるだけなんだ。下洗いしなきゃクリーニングにも出せないからなあ」

「魔法でなんとかなるんじゃない？ 兄さん、魔法はいろいろ知ってるんだし。」

「ある程度はね。でも俺は洗濯は素人だ。戦教学園のこと、親父やおふくろから聞いてたか？」

「うーんと、少しだけ」

「そうか。じゃあ詳しく説明しよう。お前の言うように、俺は確かにそこで色々な魔法を教わった。でもクリーニングの仕方は習っちゃいない。習ったのは世にもおぞましい魔法ばかりさ。ついでに俺の学校の歴史も教えてやろう」

ふふつと皮肉っぽく笑い、今度はとうとうと語り始める。

「戦教学園は、およそ百年前。帝国軍を設立するために国が指示して造った学校だ。用するに、ハナっから軍人を育成する専門学校だったのさ。」

そこで生徒に教えることは、戦う技術。それも防衛だけではなく、積極的に人を襲って殺すための技術だよ。

生徒たちは全員、寮住まいで朝から晩まで戦う術を叩き込まれる。もちろんそれだけでなく、一般教養や緊急時役に立つ知識もね。

かけ算九九はもちろんのこと、野外炊飯や薬草の見分け方、殺人学に微生物学、医療、科学、コンピューターテクノロジーなども教わる」

「びせいぶつ？ それ、どうして？」

「ケガによる細菌感染を未然に防ぐためかな。医療と関わるね。あと、生物兵器などの危険も教わる。……あれは危険だぞ、敵も味方もない。だが知らないと警戒できないし、頭の良いヤツは作っちまうかもしれないからな。でも一旦できたが最後、軍人のみならず一般人にも被害が出る可能性がある」

「え?! 怖い」

「ああ、とても怖い」

頷きつつ、傍にあつた黒いサイコロを適当にいじる。

机の上のみならず、この部屋にはサイコロやランプがすつ転がっていた。色や形のバリエーションもさることながら、状態もそれぞれ。新品の綺麗なものから、ひどくキズついてボロボロになっているものまで、実に様々だ。

彼が召喚で呼び出すランプは、実はすべて此処から来ていた。

召喚魔法は、既にあるものを呼び出す魔法。この世にないものは呼び出せない。呼び出せたとしても、実態のあるものにはならない。

……一部の特殊例を除いて。

サイコロも然りで、大量に呼び出し武器として使ったりするから、多いしすぐに傷がつく。その傷を指でスツとなぞった。己己はそれをじつと見た。

「……あの、話と関係ないけど」

「ん？」

「お兄ちゃん是指がきれいだね。長いし」

「そうかい？ ありがとう」

微かに照れくさそうに彼は笑った。

「褒められるのは初めてだよ」

「でもそうじゃない。……爪、マニキュアしてるんだっけ？ 黒いけど」

「いや、そんな洒落たことは俺はしない。どうせしたってすぐ取れちゃうし。爪が黒いのは、ある技を会得えとくした副作用さ。そうそう、この世にある技の中にはね、会得すると体に影響がでるものもあるんだぜ」

「あ、それは知ってる」

ピンツと指ではじかれ、サイコロが床に落ちた。己巳はそれをそつと受け止めた。

「黒影兄ちゃんがそうじゃない？ 身体、魔法で強化したから皮膚が全身真っ黒になった。髪の毛も、黒くなったよね。元々私や兄さんみたいに青だったのに」

「そうだな」

しかし兄の名前を出されて闇蝙蝠は少し顔をしかめた。

「だが、思い出したくないね。野郎のことは」

「もう。そんなに嫌わないですよ」

言いつつ己巳がサイコロを闇蝙蝠に返すと、彼はそれをぞんざいに机の上に放り投げた。まるでそのサイコロが、今名前の出た兄本人であるかのような扱いだった。

「仲良くすればいいじゃない。おにいちゃんは兄さんのこと、好きだつて言つてたよ？」

「それが嫌なんだよ！ あいつのせいで、俺が今までどれだけ不利益を蒙むかってきたか。おまけに頭悪くていつもバカな事言ってるじゃん？ 恥ずかしいったらありゃしない。ああ、どうせお兄ちゃんがいるのなら、人に自慢できる兄が欲しかった」

「私、兄さんのこともお兄ちゃんのこと、どっちも好きだよ？」

「それはどうも。でも、俺は黒影が嫌いだ。多分この世で一番嫌いな相手だ」

「……だから、こっちに行ったの？」

徹底的に嫌う発言に、己巳は少しさみしげな声を出した。

「わざわざ、オステンに」

「此処が嫌いか？」

「ううん、いところだと思っよ、のんびりしてて。私、大きくなったら此処に住みたい」

「そう？ 俺は都会が好きだけどな。まあ、どこに住んでもテレポが使えるからひとつとびなんだけど」

言いつつ、妹の飲んでいるミルクティーがなくなりそうになっているのを見、起き上がってカップをとりあえて新しくつぎ足す。己巳はありがとうといってそれを受け取った。

「でもね、私この前、社会科で習ったんだけど」

「何？」

「此処、オステンってヒメールスゲヴィル国のすぐ隣なんだよね。

それで、ヒメールスゲヴィルはすごく文化とか、魔法とか、進んでいる国なんだよね」

「ああ」

「それじゃあさ、どうしてオステンって田舎なの？ すぐ隣にすごい国があるのなら、もっと発達しそうなのに。このアパートとか…
…なんか、普通だよな」

「あのな、己巳。いくら文明が発達してるからって、金張りの床とかダイヤモンドでできた壁があるわけじゃないぞ」

ぐるっと部屋を見回す彼女に、何か勘違いしていないかいとクギを刺す。

「お前の言うとおり、確かにオステンとヒメールスゲヴィルは隣合わせだ。それにセルタンティー又は、昔はヒメールスゲヴィルの一部だったんだぜ。だから地名が『オステン』っていうんだ。アッチの国風にね。それが何で独立したかは俺は知らんが、オステンが田舎である理由は分かる」

「何？」

「確かにヒメールスゲヴィルと隣り合わせだが、間に砂漠があるだ

ろう。家に帰ったら地図で見える。広い砂漠で、それに遮られていて昔からヒメールスゲヴィルとオステンは交流があまりなかった。……もちろんそれは昔の話で、今ならレポで一発で飛べる。だけどそのせいで、ヒメールスゲヴィルのものはみんなセルタンテイー又の首都に行ってしまった。というわけで、今も昔もオステンにはモノがなかなか入ってこないんだ」

「でも、どうして首都に行っちゃうの？」

「人が多いからさ。人が多ければ物が集まる。物があれば人が寄る。そのサイクルだね」

14 - 暗怜軍(前書き)

画像：<http://www.ashinari.com/>

> i15152 — 528 <

セルタンティーヌの市街地から、ずっと離れた森の中。妙な磁場でもあるのだろうか、方位磁石がきかず、携帯電話も通じない。機械類がことごとくダメになるせいで、今日に至るまで公式な調査がほとんどされていない。故に地図で見ればただ森と書かれているだけで、中に何かがあるのか、どんな生物が住んでいるのか、まるでわかっていない。

その茂った木々に隠れ、中に奇妙で巨大な建築物がひとつ建っていた。

壁から屋根まで全てが黒い。至る所にあるアーチや突起はゴシック調の秀囲気を漂わせ、窓から中を除けば廊下や部屋がキツチリと見える。

その建物の、最上部にあるひとつの部屋。窓には銀色のカーテンがかかっており、天井は建物の外壁と同じ黒色、一面に白い蔓つるのような模様が細かに彫られている。床も同じで、もし蛍光灯さえなかったら、天井と床がひっくり返っても気が付かないかもしれない。

部屋には装飾品は一切ない。ただ無数の配線を伸ばす大きなコンピュータが置いてあり、それを前に、一人の男が椅子に座っていた。

年はおよそ二十代の後半ほど。紫色のフワフワとした毛は肩よりも少し長く、着ているのは黒の燕尾服えんひやくと、同色のシルクハット。白い手袋をした手でキーボードに触れる。彼の名前はレミラ。レミラレミクロウライトベル。

「今更、此処を移動などできませんよ」

コンピューターの画面に向かって彼は言葉を発した。パソコンを通じて誰かと喋っている。

「研究施設に戦闘の訓練室、さらに宿舎や温室、牢屋まである。おまけに城の設計者がかけた魔法と、深い森に守られ外部からの発見・侵入を許さない。これほど良い場所は他にはありません。なのに『移動しろ』ですって?」

『はい。さもなければ、我々は壊滅しかねません』
すぐに、画面から答える声が出た。

『レミラ様。貴方のおっしゃる通り、確かにこの城は守られています。しかし完璧ではありません。魔法も、森も、城そのものを物理的な障害から守ることは出来ません』

声の主ははっきりと、聞き取りやすいトーンで喋る。だが若干心配そうな響きを含んでいた。

『考えてみてください……三年前に開発されたファイヤーウォールで、最新の技術を用いたハッキングが防げますか? もしこの場所を国が掴んだのなら、彼らは、瀏華隊に命じて特攻をさせることでしょう』

「瀏華隊」

レミラは静かに繰り返した。

「帝国のイヌですね。御主人様に命じられるがまま、人に噛みつき食い殺す」

軽く皮肉を言う。

「ですが犬つころに尾を巻いたとなれば我々、暗^{あんれいぐん}怜軍の名折れです。逃げることなどしませんよ。第一 ああ、そうだ。バルティーン、彼らの現在の戦闘力は?」

『残念ながら、不明です。と言いますのも、先日隊員が数名入れ替わったらしく、それゆえ今こちらにあるデータと整合が……』

「それでは彼らの人数は?」

『十人です』

「はっ」

答えを聞き、彼は少々バカにした声を出した。

「我々の六分の一もないじゃありませんか」

『ですが、侮つてはいけません。お気をつけ下さい』

相手は強い警告口調になった。

『彼らは戦闘のプロです。もし衝突すれば、我々にも甚大な被害が出ると思われませう』

「しかし今更、犠牲なんて」

レミラは冷たく言う。

「それなら、警察と衝突したときも出たじゃありませんか」

『相手が瀏華隊では、多少では済まされませぬよ！』

かなり強く相手は叫んだ。

『多くの仲間を失います。またこの城に踏み込まれ、城内で戦闘になつたらどうしますか？ 物理的・金銭的な被害が多に出ます。特に温室や研究棟けんきゅうどうを壊されたら取り返しがつきませぬ』

「そう簡単にはいきません。そのような部屋は深部に配置し、簡単に外部からの侵入は出来ません。また繰り返しますけれど、この城は森と魔法により守られています。我々、暗伶軍の者でない限り、外部からこの城の近くへテレポーションは出来ませぬ」

『ですが、その制限は城より半径百メートルのみで』

「それに、城の近くでなくとも、深多の森で誰かがテレポーションすれば我々の知る所となります。分かりますか？」

『え？』

「つまり此処の場所を知られ、警察や瀏華隊が派遣されてきたとしても、我々は先に手が打てるんです。彼らが城にたどり着く前に、こちらから戦闘部隊を派遣し、森の中で戦えば良いでしょう。そうすれば城は壊されませぬ」

『そうでしょうか……でも……』

相手はあくまで懐疑的だった。それに、レミラはばしつと言った。

「不安ですか？ しかし戦うことはやめませぬよ。戦闘こそ我々の生きがいなのですから。今は亡きウォルクス様が聞いても同じこと

を言ったでしょう」

「ウォルクス？ ああ ああ」

相手は一瞬考え込んだ。

「しかしそのせいで謳歌軍は壊滅しました。第一、瀏華隊と戦い相手を全員殺しても、帝国軍中央部からまた人がきますよ」

「そうでしょうね。ですが一度でも殲滅させられたとすれば、そう簡単には来れないはずですよ。いくら軍人と呼ばれていても、彼らだつて人間ですよ。みすみす死にたくはないでしょう？」

「まあ、そうだとは思いますが……」

「とはいえ、城を壊されるのは確かに気に入りません」

レミラは手を伸ばし、またキーボードを少々叩いた。

「事前に対策を練らなければなりませんね。バルティーン、命令します。早急に、瀏華隊の正確なデータを入手して下さい。名前や顔写真、使う技。それらが分かれば殺しやすい」

「……結局、戦うのですか？」

「バルティーン。言ったでしょう。我々、暗怜軍は」

「は、はい。分かりました」

正直、声はまだまだ言い足りない感じだった。だがこれ以上は思つたのか、レミラの言葉をさえぎって返事をした。

「それでは、仰せの通りに致します」

15 - 戦いの喚起

「やっぱり彼、戦うってさ」

明るい部屋。壁は淡い青と黄色のストライプ模様。横をみれば黒枠の鏡が、絵のように部屋の中をうつしている。整理整頓がされ綺麗だが、室内に生活感はなく、まるでホテルの一室のよう。

電源がオフになったパソコンを前にして人が一人、妙な光を発する椅子に座っていた。白く、呼吸するようにゆっくりと点滅している。

それとは逆に座っている人間は黒いスーツを着ていた。若干光沢があるズボンタイプで、どこかスマートな印象がある。髪も服と同じで黒く、短いが若干ウエーブがかかっていおり、まるで就活中の学生のように。ブラウンの瞳は知性的で、一見端正な顔立ちの男性に見える。が、まぎれもなく女性だった。よく見れば胸元がふっくらしている。彼女は今、三十センチはあるうかという長いアンテナを出した携帯電話を持って喋っていた。

「君に言われた通り、レミラに警告はちゃんとしたさ。だけど、これまた君の言っていた通りだ。彼は戦うという考えを変えない」

「好戦的な人ですね、彼は」

電話口の相手はそう言った。甘さを含んでいるが「可愛い」というより物憂げで、魂が抜けたような声だった。

「でも……それで良いのです。瀏華隊と暗怜軍を、まずは戦わせて下さい。バルティアーヌ、貴方の力で」

「分かっている。ただねえ、両者が戦うにはひとつ問題があるんだよ。国も警察も、暗怜軍の城の位置をつかんでいない」

彼女　バルティアーヌは少し肩をすくめた。

「そしてどっちかから命令を受けなきゃ、瀏華隊は動けない。動けなければ戦えない。城の場所を瀏華隊側にバラせば早いけど、勝手にそんな事したら僕の身があぶない」

『ですね。とんでもない騒ぎになりますよ。ですから、行いましょうよ……間接的に』

「うん。　　だけど遠まわしにやってたんじゃ時間がかかりすぎる。強引でもいい、とにかく両者を鉢合わせさせなきゃ。で、考えたんだ。もし暗怜軍が、瀏華隊の隊員を『誘拐』し、牢屋に監禁とかしたらどうなるかなって」

とんでもない言葉を、彼女はしごく軽い調子で発した。

「レミラは『瀏華隊の情報を集めてこい』と僕に命令した。普通ならネットワークを通じて相手のコンピューターに侵入するだろうけど、それはかなり難しい」

『何故？』

「だって僕、コンピューターにそこまで詳しくないんだもの」
全く悪びれなく言う。

「勿論、探して人を雇う事は出来るよ。ただそれじゃ、暗怜軍と瀏華隊は戦うことがない。君の望みは叶わない」

『……確かに。ですがちょっと大胆すぎませんか』

少し間をおいて相手は言った。バルティー又はその際にパソコンの電源を入れた。

『そもそも、何をどうして思いついたのですか？』

「簡単なことだよ。昨日の夜、寝る前に推理小説を読んだんだ」

『しかし、小説でしょう？　いきませんよ、現実ではそんな事。もちろんそうすれば戦いは誘えると思えます。ただその後が問題でしょう。バれますよ……レミラに、貴方が糸を引いたこと。問い詰められた時、言い訳をどう彼にしますか？　殺されますよ、下手をしたら……彼に、ぐさつと』

「それは『下手したら』の話だろ。だったら、上手くやればいいんだ」

『そんな』

かたや強引、かたや心配。

二人のやり取りは、まるでさっきのレミラとバルティー又のやり

取りにソックリだ。ただ今は彼女が強引に話を進めている。しかし繰り返される疑問と制止の声に、彼女は若干謝った。

「説明が下手でごめん。だけど考えはちゃんとあるんだよ。一応僕は頭脳派だからね」

『でも』

「今のレミラの指針からして、瀏華隊と暗怜軍はいずれ戦つ運命にある。僕はそれにちよつと手を貸して、戦いの時期を早めるだけさ」パソコンを操作し、出てきたページを彼女はじつと見た。そこにはリスト化されたデータがズラリと並んでいた。

相手は『反対はしない』と言った。しかしこうも付け足した。

『でも……困るのです。私が時間を戻す前に、貴方が死んでしまつたら』

「気を付けるさ。ひと段落ついたら、また後で連絡する」

『はい。それでは……』

「うん。じゃあね」

挨拶を交わし、彼女はピツと電話を切った。続いてイスを降りてしやがみ、その場をウロウロし始める。

「えーっと、盗聴防止魔法はどうやって切るんだっけな。あ、これだこれだ」

イスの裏側に手を伸ばし、ついていたボタンをぶちつと押す。すると今まで発せられていた光が消えた。

「今は魔法でも、ボタンで操作できるから楽だな」

そんな独り言を言い、また席につく。しばらくはカタカタという、微かな音だけが部屋に響いた。

やがて、彼女はコンピュターをさわる手を止めた。

「この三人でいいかな」

画面に映し出されていたのは、三人の人間の顔写真とデータだった。オレンジのツンツンした髪に、緑の釣り目をした男。黒髪・赤目で青白い肌をした、病人のような男性。そして水色のロングストレートに、右目は藍色、左目が水色のオッドアイの少女。

彼女は漫然としてそれを見るとまた携帯電話を手に取り、今度は横をスツと撫でた。すると電話は長いアンテナをすうっとひっこめ、今度は黒い光を全体から発した。音は何もない。ただぼうっと光る。

数分後。コンコンというノックの音がした。ドアが開き、少女が一人と男性が二人が姿を現した。パソコンに、顔写真が乗せられていた人物である。

三人の服装はバラバラだった。少女は裾すそに青い蝶の模様が一つある水色のワンピースに、同色のケープを重ねたさわやかな格好。病人のような男性は、闇夜に溶け込みそうな黒い着物で、紅い帯で腹をしめている。またオレンジの髪髪の男は足首までスツポリ隠れる紺色のコートだった。

「リオン、スレイヴ、ダーク」

入ってきた三人に、バルティアー又は軽く挨拶をした。

「突然呼び出してごめん。……あ、どうぞ。椅子が　　っと、召喚」
彼女が指揮でもするように手を動かすと、床に光る魔法陣が現れてパイプ椅子を出現させた。

「どうぞ、座って」

現れた椅子に、三人は特に躊躇なく座った。中でも紺色のコートを着た男は足を組み、かなり横柄な態度を見せた。

「で、何の用だ？」

カリカリと頭をかく。

「手短かにしてくれ」

「分かった。……君たち、誘拐って出来る？」

「ああ？」

「え？」

手短にと言われ、本当にその通り。しかし彼女の単刀直入すぎる質問に、他の二人も首をかしげた。

「……誘拐だア？」

少し間をおいて、病人めいた男性が言う。

「そりゃ、出来ねエことはないが。誰を？」

「瀏華隊の人。二丁三人。気絶させて、城につれてきて、牢屋に閉じ込める」

「瀏華隊！？」

「ど、どうして」

「先ほどレミラ様に報告をしたのさ。……ほら、ダーク」
バルティーヌはオレンジの髪の男に目をとめた。

「君、この前取り引き現場に行っただろう？ でも相手はいなくって、かわりに警察や瀏華隊がウロウロしてたと言っていたね」

「ああ」

「何故あの夜、彼らがあを通りをウロウロしていたのか？ それについて僕は 正確には僕たちだけ 情報を調べ、レミラ様に提出した。」

そうしたら、彼はこうおっしゃった。『瀏華隊の隊員の、正確なデータを取ってきてくれませんか』と。続けてこうも言った。『戦闘部隊を派遣し、城はさけて、森の中で戦えば良いでしょう』と。嘘だと思っただら確認しても構わない」

パソコンをぱたんと閉じる。

「要するに、レミラ様は瀏華隊との戦いを辞さない考えでいる。ただし瀏華隊は警察よりも戦闘力が高い。行き当たりばったり戦っては無駄な犠牲が出る。効率良い戦いのためにはデータが必要だ。そういうことだね。」

……で、命令を受けて、僕は思ったんだ。『だったら彼らを直接連れてきて調べればいいじゃないか』とね。それで唐突ながら、君たちにこう依頼したわけ」

「しかし、誘拐だなんて」

その時少女が口を開いた。鈴を振るようなきれいな声だった。

「データなら、コンピューターに侵入すれば早いではありませんか？ 捕獲するとなると、それ相応に危険が伴います。まして城の中にいれるなど レミラ様は、森で戦えとおっしゃったのでしょ

う？ でも暴れられれば、城の中で戦うことになりますよ」

「そう。だから二人か三人って決めたんだ。ま、いくらあいつらが強くて、そこまで少数じゃ手も足もでないだろう。こっちは百人近くいるんだ。うち何割かは研究者としても、大半は戦闘隊員。軍事力は引けをとらない。」

それにね、リオン。『コンピュータに侵入』と一口に言っても、これはかなり難しいんだ。瀏華隊や警察のコンピュータはロックが何重にもされているし、下手なことをしたら逆に相手から侵入をかけられかねない」

「ですが、誘拐して城に連れてくるなんて。あんまりじゃないでしょうか」

「そうだなア」

ダークがうんうんと頷く横で、黒髪の男 スレイヴも頷く。

「思い切りすぎてる」

「まあね。でもどうせ戦うんなら、こちらから仕掛けた方が多少有利だろう？」

「しかし……」

先程の電話の相手と同じく、三人は苦渋の声をあげた。だがバルテイー又は強引に進めた。

「責任や後処理は僕がする。だからやってくれ。いいかい、今君たちに頼んだ相手は僕だけど、これはレミラ様の意志なんだ。瀏華隊が根城としている建物の地図を、後で渡す。それと隊員の顔写真も、生憎少し古いものだけど、使えないことはない。早いうちに、頼むよ」

> i 1 6 6 5 3 — 5 2 8 <

窓からは日の光がぱつと差し込む、円柱状の、明るい室内。天井からは蝋燭ろうそくが並んだ、変わったシャンデリアが下がっている。

壁際には背の高い本棚があり、部屋の中には生乾きのインクと古い本の匂いが漂う。また床を見れば、一面にちらばっているのは大量の羊皮紙。紙と紙との間からは、チョークで描かれた幾何学的なきかがくてき魔方陣が見え隠れする。

部屋の中央には机が一つとイスが三つ。机上には折れた羽ペンと分厚い本が無造作に、丸まった羊皮紙の上に置かれている。

まるで古い図書館のような、時が止まったような部屋。そこに二人の人間がいた。イスに座って、互いに机をはさんで対峙たいじしている。「それではお前は、こういうのかね？」

低い声で、片方の人が 男が 言った。

「『過去に戻る』のではなく『時間をまきもどし』した場合。普通なら、誰もそれに気が付かない。記憶は消えるし、書きつけようにも、メモもビデオもテープも何もかも、全てデータは消える。だがもし」

静かな口調で、淡々と。囁くささやように彼は喋った。

「もし、巻き戻されたことに誰かが気づき、前とは違う行動を、起こしたとするなら。我々の未来は『徹底的に、全てが変わる』と」「私はそう思います」

彼の正面にいた人は丁寧に答えた。どこか物憂げな声だった。

「巻き戻されたことに誰も気づかないのなら、何度やっても結果は同じ。変わることがないでしょう。」

しかし『誰かが』気が付いて、来るべき未来を変えようとしたなら、変わるでしょう、未来は……大きく。

何故なら、未来というものはなりたつていきます。我々のたゆまぬ行動によつて。なので変化が、たとえ少しでも起こつたのなら。

ゆくゆくは、与えるでしょう。未来に、大きな影響を」

「変わるということに関して、私は何ら異存はないがね」

男は相手に言った。

「だが、いくら時間を巻き戻したとしても、そんなに大きくは変わらない。たった一人や二人では、なにも変えることが出来ぬと私は思う」

「しかし私は、思います。大きく変わると。……ですから」

突然、話の途中でその人はぱつと飛び上がった。机を踏み台にし、勢いよく男に抱き付く。

「うわっ！」

ガタンツと、音がした。イスにのつていた男は押され、倒れた。

「何をする！」

「私、貴方に証明します。未来は大きく変えられること」

羊皮紙の上に転がる彼を愛おしそうに見、その人は喋り、そして甘えた。

「そして、たった一人でもそれが出来ること。私は貴方に証明します」

「お前、離れろ」

「認めません……私、貴方が幽霊だなんて」

「いいから、離れろ。離れろ！ ……くそっ」

バシツと、雷のような音がした。途端、彼の上のついていた相手は飛ばされ、床に叩きつけられた。

「アホな事を言うものじゃない」

男は身をおこした。そして、今まで自分に抱き付いていた相手の腕を掴んで引つ張り起こした。

「止めなさい。私のことは……もう、いいから。危険なことはいでくれ。いいかね、時間逆戻しの魔法は、研究するだけでもご法度だ。さらにそれを使うとなると」

「嫌です」

だが相手はあくまで首を振った。自分を掴む彼の手を愛おしそうに見、ハッキリとこう言った。

「私は貴方が幽霊だなんて、あんな死に方したなんて！ 許しません。例え寿命が縮んでも、絶対に私、変えてみせます」

「だが」

「それに、もう遅いですよ」
かすかに笑う。

「バルテイーヌに頼んで、暗怜軍と瀏華隊が戦うように仕向けてもらいましたから。見ててください……しばらくは。ただ黙って、私のすること」

17 - 呼び出し

翌、21日の朝、十時。

教指揮学園の廊下で、闇蝙蝠は時間割片手に歩いていた。

「ええと、今日の時間割は」
黒い長袖の立て襟えりのシャツに、裏がブルーで表が黒いロングジレ。胸元には青いブローチで、下は銀色のハトメが縁に大量についた黒いブーツカットのズボン。

どこことなくゴシックテイストな格好は、ライブ会場ならいざ知らず学校では微妙に周りから浮いていた。とはいえコーデがぎっちり出来ているためさほど不自然な印象はない。

あえて難癖をつけるなら頭につけたキャノティエで、大きさとリアルさのあまり、黒いコウモリの死体を紺色の薔薇にひつつけて頭に接着しているかのようである。

また、本来なら飾りの両脇についている紐ひもを顎のしたで結び、頭に固定するはずのものが結ばれておらず、歩きたびにヒラヒラなび靡いている。

ただし色が暗いのでさほど目立たず、すれ違った人にふりかえって見られることもなく、おかげで、彼は何も思わずスタスタ廊下を歩いていった。

「二時間目からは浮遊呪文。あとは社会科、数学、国語に召喚呪文、倫理か。……む？」

と突然、ポケットに入れていた携帯電話が振動しはじめた。ぱつと開いて確認すると、凜からのメールだった。

「緊急事態。各自、大至急集合。場所は会議室」

「お、おいおい」

闇蝙蝠は電話をパタンと閉じた。

「緊急で、大至急？ ……困ったな。こう言われてしまうと、学校より優先して瀏華隊に行かにならん」

迷いはなかった。即座にテレポーションをかけて魔法陣の光に包まると、次に彼が現れたのは小さなビルのすぐ目の前。

看板も何もなく、白い外壁はくすんでおり、低くてあまり目立たないビルである。だがそこに入っただけでいこうとした瞬間、誰かが来るのを目にとめた。

大柄な体にどこかのほほんとした雰囲気。隊員の仲間、えんまだった。闇蝙蝠は手をふった。

「おーい、えんま。おーい！」

「あれ、闇蝙蝠。 ……相変わらずホストみたいじゃなかつたか？」

「待て、よく見る。夜王はこんな格好しねえよ。どっちかというとなんかゴシックね。因みに頭につけているコウモリは緊急時には …… てそんなのはどうでもいい。一体何があつたんだ？ 大至急だなんて」

「わかんないや」

えんまは首をかしげた。

「ぼくさあ、じつはね、昼ご飯をかいにいこうとおもって家をでたんだ。そうしたら、メールがきてさ。だからそのまま、こっちにきたんだ。きみは？」

「学校から飛んだ。もしかして特攻命令でも下つたのか？ ま、とりあえず行こうぜ」

「うん」

二人は一緒に建物の中に入った。廊下を抜け、階段をのぼり、扉をあける。散らかった書類、大きな窓にブラインド、そして長机。

見慣れた会議室にはただ一人、リーダーの凜がいた。どうにも不安げな顔をしていたが、二人を見ると少しだけほっとした表情を浮かべた。

「来たのね、無事でよかった」

「うん？ ……どうしたんですか、リーダー。とっさの命令でも、

でたんですか？」

えんまが、さつき闇蝙蝠が言ったことをそのまま聞く。だが彼女は首をふった。

「そうじゃないの。ただ　そう、ね。話は……皆がそろってからするわ。とりあえず、座って」

いつもと様子が違う。そんな凜の姿に二人は顔を見合わせ、それぞれ着席した。

「皆、どれくらいで来るかね？　リーダー、何分くらい待ちます？」
「十分くらいは」

「そうですね。んじゃ、俺は今のうちにちょっと魔法の練習をしようかな」

闇蝙蝠はぱつとランプを一式召喚し、シャツシャツと慣れた手つきで切りだした。

「れんしゅう？　ねえ、なんの魔法のれんしゅうをしているの？」
「占いだよ」

「占い？　あ、タロットの？」
「いや。俺はランプのカードで占いをする」

適当なカードを一枚、出して見せる。

「あるんだぜ。こういうのも。此処セルタンティーンではあまり見かけないが、ヒメールスゲヴィルじゃ結構されてるらしい」

「へえ」

えんまは驚いた声をあげた。

「そういえば、よくきみ、カードきってるけど。それじゃ、あれいっつも、占いしてたの？」

「いつもではないが、大体はそうだ。……とはいえ、俺は未来のことを占う事はあまり出来ない。何分難しくって。」

でも今現在、別の場所で起こっていることならかなり正確に読める。だから　そうだなあ。離れた友達の行方を探ったり、生存確認したりするには重宝する」

だがそれに、凜がピクリと動いた。

「……占えるの？」

「へ？」

「この場にいない人の事」

「まあ、一応は」

「それなら」

と彼女が言いかけたとき、扉が開いてえんじえらんがやってきた。

「こんにちは！ あの、リーダー、大至急って、あったから」

はあはあ息を切らしている。よっぽど慌ててやってきたらしい。

「学校すっぽかして来ちゃいました」

「よう、えんじえらん。案ずるな、俺もすっぽかして来た。まあ座れや」

どこか偉そうに言う。えんじえらんは頷いて着席した。

「あんた、頭についてるの、それ何？」

「見りゃ分かるだろ。蝙蝠と造花の薔薇で出来たヘッドレ。ちなみに素材は合皮と別珍」

「何でそんなのつけてんの？ ファッション？」

「も、あるけど。このコウモリ、イザっていう時使えるんだ。」

どう使うかはその時次第」

「ふーん。……って、あ、そうだ。あの……リーダー」

彼女はふと浮かない顔を見せた。

「至急って、まさか警察からの通達ですか？ この前 あたし、

ほら

「え？」

「この前、関街道に行った時ですけど。変な人に襲われて、怖くてびっくりして。うっかり魔法使っちゃって……相手の人、ケガとかもして……」

「あ、ああ」

「おお、そういえばそんな事もあったな。やべっ」

闇蝙蝠は慌てて腕を動かした。拍子に、カードが数枚床に落ちた。

「おっと。しまったなあ……その事すっかり忘れてた。まさかリ-

ダー、そのことで何か？」

「ううん」

凜は首を振った。

「何も言われてないよ」

「あ、そう？」

「……よ、良かったあ」

えんじえらんはほっとした顔になった。力が抜けたのか、ぐたつとイスにもたれかかる。そんな彼女に、しかし闇蝙蝠は言った。

「えんじえらん、悪いがほっとするのは早いぜ。後から言われるかもしれない」

「う」

「まあまあ。とりあえず、いまはだいじょうぶなんだから。ね？」
えんまが宥^{なだ}める。

「えーと、でも、それでないとしたら、なに??」

「知らん。リーダー、あと何分待つ？」

「六分」

「そう。どうだろうなあ、来るかなあ。ちょっと予想してみようか」
ランプはうつちゃり、闇蝙蝠は軽く顔をあげた。

「ディザートさんは来なさそう。しーちゃんは来るかな。シャオはちゃんと来るだろうけど、レポ使えないし歩幅も小さいからやっぱり遅れるかな。ワピチ、フェイアントは来るだろうな。ピロロは」

「とここまで名前をあげて、あれっと言う。」

「あ、そういえばピロロ、今日学校休んでたな。同じクラスなのにいなかった。どうしたんだろ？」

「えっ」

えんまが驚いた顔をした。

「いなかったの？ たいへんだな、かぜかな。おなががいたいのかな」

「女の子の日だったかな」

「ちょ、闇蝙蝠つたら。下品なこと言わないでよ!」
えんじえらんが苦言を呈した。

「あんた見かけの割に品がないよね。もう、サイトター」

「そんなに嫌うなよ。ちよっとしたジヨークじゃねえか。しかしマジでどうしたかな。あ、ひよっとし」

ボタンと、音がした。また扉がひらき、今度はワピチとフェイアントがやってきた。

「あれ、どうやらちよっと遅かったようですね。もうみなさんこんなに揃そろって」

フェイアントが言う。闇蝙蝠はまた手をあげて軽く挨拶しつつ、彼の後ろにいたワピチに声をかけた。

「よおワピチ。お前、テレポーターのくせにかかったなあ。学校っていう同じ場所から移動してたのに、テレポ使わないえんじえらんの方が早かったぞ。どうした?」

「き、気がつかなくて。ごめんなさい!」

ワピチはぱっと謝った。

「ふ、フェイアントに言われて初めて気が付いて」

「およよ、ケータイは? 持ってなかった?」

「持ってましたけど……電源、完全に切っちゃってて」

「あら」

「でもまあ、ちゃんと我々二人、来ましたから」

フェイアントは席に着いた。手に持っていた鞆をおろし、軽く周りを整える。

「後はピロクとシャオ、春翹諳とデイザートさんですね」

「師匠さんは、待ってもムダだぜ。来ない時はマジ来ないから」

「師匠さん……?」

「デイザートさんのこと。しーちゃんは来るだろうけど、家が少し遠いしテレポ使えないから時間かかる」

「六分たったわ」

言葉をさえぎって、凜が声をあげた。

「そろそろ……いいでしょう。ディザートさんをのぞいて一人、まだ揃っていませんが」

「一人？ え、でもピロロとシャオが」

「非常に重大な話です」

また言葉をさえぎる。

「しかし、まだ警察に正式には知らせていません。落ち着いて……聞いて下さい。実は、大変なことが起きてしまいました」

ゆっくりと息をはきながら言う。だがその声は若干震えていた。皆に落ち着けと言うが、彼女こそ落ち着いた方がいいのではと思える感じだった。

「リーダー？」

見るに見かね、ワピチが声をかけた。

「そんなに、何か大変なことでも？」

「実は……突然な話なのだけれど、シャオとピロロが、誘拐されました」

18 - 親愛なる瀏華隊の皆様へ。

しばし、沈黙が部屋に漂った。

誰も声をあげない。それもそのはず、あまりに唐突で、かつ突拍子もない話である。「まさかあ、冗談でしょ」と言いたくも、凜があまりに深刻な表情を浮かべているのでそれも出来ない。

「は、わうっ」

変な声をあげつつも、一番最初に復活したのは闇蝙蝠だった。

「ええと……ゆ、誘拐ですか？ 犯人は誰ですか。その要求は？」言葉に、凜が無言で机の上に通の手紙を出して闇蝙蝠にすいと投げた。彼は皆の顔を伺いながら。恐る恐るそれを手にとった。

黒い封筒。中に入っているのは少しくシャツとした白い紙。広げると、そこに黒いインクで何か字が書いてある。闇蝙蝠は声に出して内容を読み上げた。

「瀏華隊の皆様へ。唐突ながら、少し話をしたいことがあります。そのために貴方たちの仲間、シャオとピロ口を預りました。応じる気があるのなら、22日の午後九時に深多みたの森・鷹翼岩ようよくがんまで来て下さい。鷹翼岩の場所は、絶対配置で。x：60078m y：40889m z：39mです。ただし来るのは一人だけ。それ以上の人数で来た場合、あるいは誰も来なかった場合、警察に応援を頼んだ場合はこちら話に応じないものとし、預かった二人を処分します。以上、暗怜軍幹部・レミラ」

読み終わり、闇蝙蝠は紙をひっくり返してみた。裏には赤い認印があった。それは以前、三滝街道で警察が押収した、にじ滲んだ紙の切れ端にあったのと同じものだった。

「……暗怜軍」

半信半疑でそのサインを指でなぞり、手紙を凜に返す。

「えーっと、奴らがシャオとピロ口を誘拐したの？ いやあ、冗談

だろ。何だよ、この馬鹿みたいな手紙は。どうせどっかの悪党どものイタズラだろ」

皆に問いかけるも、誰も答えない。

「おい。皆、なんで黙っているのさ。何か言えよ、もう。馬鹿馬鹿しい。今すぐ警察に持って行って『脅迫罪だ!』と訴えて調査を願おうよ」

「そ、そうです」

ワピチが頷き、勇気をふりしぼって 本当にそのように見えた

言っ。

「こんなこと、前代未聞です。本当に暗怜軍かどうかなんて……だ、誰かが名を語っているのかも」

「そうですね」

続いてフエイアントも声を出した。

「ただその手紙、裏にサインが入っていましたよね。警察に送って鑑識してもらえば真贋が分かるでしょう。で」

「本物よ」

凜が言った。

「私も同じことを思って、先に調べてもらったの。そうしたらまぎれもない、本物だった」

「あちゃー」

闇蝙蝠は頭を抱えた。

「マジなの？ まあ……ウン、そうだ、なあ。えーっと、だとしたら、警察に行つて捜査は無理だな。相手が暗怜軍じゃ、警察は手が出せない。俺らが自力で何とかしなきゃねえ、ウン」

「闇蝙蝠?」

「そういえばピロロとシャオ、ええと、い」

「いないね、ふたりとも、いないよ」

「うん、いない。エー……だけどそれなら本当に、何を目的として?」

沈黙からは一早く復活したものの、闇蝙蝠は少々混乱気味だった。

頭を抱えて一人ブツブツ言っている。

「誘拐、拉致、監禁。エーっと」

「あの」

「いまいち整理がついてない頭を悩ましていると、えんまが手をあげ、凜に尋ねた。」

「リーダー、このてがみ、どこにあつたんですか？」

「朝此処に着たら、私の机の上に置いてあつたの。おそらくマジックレターで送られたんだと思うわ」

「ああ、マジックレターですか。それじゃあなあ」

「え？ えんま。おい、マジックレターって何だっけ？」

「闇蝙蝠、だいじょうぶかい？ なんか、かなり混乱しているね」

「ア、はい。そうです。ええ」

「ほんとうに、だいじょうぶ？」

「仕方ありませんね。闇蝙蝠、ちよつと落ち着きなさい。マジックレターって、郵便物の配達方法の一つでしょう」

「見かねたのか、フエイアントが説明しました。」

「うちの国じゃ、郵便といったたらこれじゃないですか。ほら、郵便局に荷物を持って行って、重さと大きさに応じた金額を払う。すると係員がテレポーターシヨンの技術を使って、荷物を宛先に一瞬で飛ばしてくれる」

「あ、ああ。でも、それがなんで机の上に？ ポストは？」

「確かに、多くはポストに転送されますね。しかし、部屋の中にも送られる場合があるでしょう。事前に申請し、テレポーターシヨンの限定解除を行っていれば」

「そうだったっけ」

「はい。で、もし荷物がポストに入らない大きさだったり、何らかの事情で部屋の中に飛ばせなければ荷物は自動的に突っ返されます。その場合は郵便局が荷物を預かり、送り先にその旨を通達、後で送りなおすことになります。……分かります？」

「ウン。大体……分かって、きた。でも あれっ。ってことは、

奴ら郵便局からコレ送ってきたのか？」

「でしようね。別に、おかしいことではないでしょう？ 住所なんて調べれば分かる話ですし、発送する際にはお金と荷物さえ持てばいい。身分証明書は不要ですからね」

「とにかく、これは完全に、誘拐事件だよな」

えんじえらんが呟く。

「リーダー、シャオとピロロは？ 二人に、連絡は？」

「何度も連絡してみた。家にも行ってみた。学校にも問い合わせた。でも、だめ。いないの」

「全く音信不通になってしまったんですか？」

「ええ」

凜はがっくりと頷いた。

「こんな事態は初めてよ。だってあの二人、そうそうやられるような人じゃないのに」

「戦闘隊員だもんね」

「そう。それなのに誘拐だなんて、不意をつかれたのかしら。でも不意をつくにしても、素人では無理でしょうね」

「じゃあ、本当に暗怜軍なの？」

「おい、えんじえらん。だからリーダーが、警察に調査させたと言っただろう」

闇蝙蝠が、ようやく混乱が解けたのか、またいつもの調子で喋り出した。

「暗怜軍ったら暗怜軍だ。それ以上でも以下でもない。 ところで手紙にあっただけど、深多の森って何？ 誰か知ってる？」

「ええと、確か、うちの国の北東にある森だよな？」

えんじえらんが答えた。それにワピチがそうですと頷いた。

「はい。方位磁石も携帯電話も通じない魔の森。今日こんにちに至るまで公式的な調査がほとんどされておらず、野放しです」

「うえっ」

闇蝙蝠はどこか潰されたような声を出した。

「そんな所に呼び出しなんて、何をする気だ、奴ら」

「分からない。けど、私は二人を見殺しには出来ない」

「リーダー、行く気ですか？」

フエイアントが鋭く尋ねた。

「応じる気なのですか？」

「仕方ないわ。見殺しには出来ないもの。行かなければ二人は殺されてしまう」

「ですが行った人は危険に晒さらされます。下手をしたら二人だけでなく、三人が殺されてしまうかもしれませんよ」

「そ……そう、です。それが相手の狙いなのかもしれません」

ワピチもおどおどと言う。それに闇蝙蝠は深く頷き、空元気にも似た、妙に明るい声で同調した。

「みすみすワナにはまることはないですよ。しっかりして下さい、まだ死んだわけでもないのに」

「そうだけど、でも」

凜は相当悩ましがだった。このままいけば、行くか行かないかで相当もめたに違いない。だがその時、また、扉が開く音がした。

「すみません、遅れて」

春翹諳だった。この前と同じで、ハアハアしながら立っている。

「おや、しーちゃん。ようやくご到着か」

なんとも言えないタイミングでやってきた同僚に、闇蝙蝠はやや引きつった笑みを浮かべた。

「まったく、呑気だな。まあいい、座れ。今おきている事は俺が教えてやるう」

「はい」

「……よし。で、かくかくしかじか」

闇蝙蝠が手早く状況を説明すると、春翹諳は目をぱちぱちさせた。「変な事件ですね」

「全くだ！ でも、ピロロとシャオはいなくなっちゃったんだぞ」

「誰が行くんですか？」

「その前にまず、行くかどうかを今決めてる。一応、警察にも言うべきかな。応援くらいは頼んでもバチはあたらないうな」

「何言っているんですか。書いてあるでしょう……手紙に、『警察からの要請はやめる』と。仮にそうでなくても、止めた方がいいでしょう。増やすだけですからね、死人を」

「まあ、言われれば確かに」

「それと、行くか行かないかについてですが。これは行った方がいいでしょう」

春翅語はアツサリと言った。それに闇蝙蝠は勿論、悩んでいた凜も、口をそろえ、なぜそう断定できるのかと聞いた。

「だって、これは機会ですよ……絶好の」

「機会？ おいしーちゃん、何を考えて」

「これを利用すれば、突き止める事が出来るかもしれません。我々の手で、暗怜軍の居場所を。そうすれば 夢じゃありません、警察が望む『本部をつぶして一網打尽』も」

「ああ」

その言葉に、反対気味だった闇蝙蝠は、ようやく頷いた。

「なるほど、確かにそういう見方も出来る。だが、奴らは『来い』」

と言ってるだけで、ピロロとシャオに合わせてくれるとは言っていない。そもそもこの岩が暗怜軍のアジトに近いのかどうか分からない。仮に近かったとしても、相手もそこまでバカじゃない。対策は何かしているだろう」

「その裏をかくのが貴方の仕事です」

「……え？ あっ、ちよ。何で俺なんだよ」

「吝かではないでしょう？ 二人を取り戻すのは。副リーダーとして、リーダーの代わりに」

だが直後、ワピチ、えんじえらん、フェイアント、えんまの音が響いた。

「副リーダー？」

「何それ、どういふこと」

「何を?!」

「……えーっ」

その場は一気に騒然とした。

「瀏華隊に副リーダーなんて、いたんですか？」

「ぼくも初耳だなあ」

「といたしますか、閻蝙蝠が副リーダーだったのですか？」

「嘘、あたし知らないよ。ちょっと、閻蝙蝠」

「違う違う違うっ！ 俺は別に副リーダーじゃねえよ。ていうかそんなのいねえよ」

どういふことだと詰問きつもんされかけ、閻蝙蝠は慌てて否定した。

「じゃあ、どういう意味？」

えんじえらんがチラリと春翅諳に視線を向けた。

「なんで副リーダーって言ったの？」

「瀏華隊のリーダーは現在、凜ですね」

闇蝙蝠が、口を酸欠の金魚のようにパクパクさせているのをよそに、春翅諳は淡々と説明する。

「リーダーの仕事は、警察からの命令を聞き、それに従い部下に指示を出すことです。他には重要書類のサインや確認、各種証明書の発行、データファイルの開示の許可など」

「うん」

「しかし、考えたことありますか。リーダーというのはどうやって選抜されるのか」

「ない。そういえば、どうやって？」

「資格制です。レポートや車と同じです。試験があつて合格すれば資格がもらえて、なることが出来ます。闇蝙蝠はその試験を受けており、しかも合格しています。難しい試験なんですけどね」

「じゃあ、どうしてならないの？」

「二人もいらんだろ」

春翅諳が答えるより先に、闇蝙蝠は素早く言った。

「しーちゃんが言うように、確かにリーダーは資格制だ。だがそれだけじゃない。各隊のリーダーを決めるのは、帝国軍の中央にいるお偉いさんでね。年齢や功績、あと本人の希望などを考慮して彼らが決める。希望というのは希望届けのことだ。で、俺は免許は持っているけどそれを出していないんだ。だからよほどの事じゃなきゃリーダーにならない」

「でも今の瀏華隊の隊員の中では唯一ですよ、この免許を持ってい

るのは。だからもし、凜が死んでしまったのなら
「妙な言い方はよせ！」

闇蝙蝠は慌てて首を振った。

「俺あ下剋上を狙うつつもりは無い。資格をとったのは、あれだ。一時期、そういうのにハマった事があってだな」

「そうなんですか」

「ああ。だから俺の免許は、目の目を見ることなく未だダンスの中でオヤスミ中」

「まるでペーパードライバーみたいですね」

「そうだ。全くその通り、ペーパーだよ。いいか、よく考えてみる、凜と俺じゃキャリアが違う。俺が凜と同じこととして、同じだけ結果出せると思うか！」

妙に偉そうに、ばしっと言い切る。

「第一、それとこれとは何の関係もないだろう。おい春翹譜、どうしてイキナリこんな事を言い出すんだ」

「手紙の内容からして、暗怜軍は、したいようですね……話し合いを。であれば、リーダーの凜が行くのが適切なのでしょう。しかし彼女が行って、不幸にして生きて帰ってこなかったら……どうしますか？」

「どうって」

「正式に新しいリーダーが決まるまでは、かかりますよね……時間が。でも此処、現場はそういうわけにはいきません。となると……なりますよね。貴方がその間、実質此処を取り仕切ることに。で、慣れない貴方がトップにたったら、さぞかし混乱するでしょうね、此処」

「お前が俺のいう事を聞いてくれたら、誰も混乱なんぞしない」

闇蝙蝠は顔をしかめた。

「人の使い方はそれなりに知っている」

「でも貴方、自分でさっき言ったでしょう。凜と自分ではキャリアが違うと」

「まあな」

「また、仮に闇蝙蝠がリーダーにならなかったとしても、同じでしょう……結果はね」

「同じって？」

「誰がやってても、交代はじめは混乱が出るということです。やはり、大きいでしょう、慣れの問題は」

春翅諳はわずかに凜に会釈した。

「であれば彼女は此処に残して、他の人が行くのが筋でしょう。ですが、いいですか。繰り返しますけど、例え建前だとしても、相手は『話し合いをしよう』と言っているのです。なのにヒラ社員がきたら、彼ら多分キレるでしょう」

「何気に怖い事を言うね。ヒラ社員って……あのねえ。此処は会社じゃないんだぞ」

「しかし『副リーダー』といえば、まあまず納得するでしょう」

「ちよつと、俺の話、聞いてる？」

「それにもう一つ、大きな理由があります。テレポーターでしょう？ ……貴方、闇蝙蝠は」

春翅諳は彼をじーっと見た。

「逃げるならお手の物じゃないですか。いいんですよ、別に、二人を助けなくても」

その言葉に、闇蝙蝠はきよとんとした。即座に、どうということだと問い尋ねる。春翅諳は頷いて言った。

「貴方が助けなくても、出来ますよ……我々が、二人の救出。ただそれは、貴方が暗黒軍の居場所を見た場合に限ります。逆に言えば、一目でも見れば良いのです」

「どうして」

「どうしてって、貴方はテレポーターでしょう。一度場所を知れば、次からは、行けるでしょう。テレポーターションで、一瞬で」

「なるほど。皆をそこに案内して総攻撃といくわけか」

闇蝙蝠は一瞬、納得したような声を出した。だがすぐに、またあ

れこれ文句をつけはじめた。

「そんなに上手くいくと思うか。暗怜軍だって馬鹿じゃない。二人を人質にするくらいは思いつくだろう」

「元々、隊員は捨て駒ですよ」

「見殺しか！ だが、おい。もう一度言うぞ。仮に俺が捕まった二人を見つけたとしても、二人がいる場所が、暗怜軍の根城とは限らないんだ」

「しかし捕まった二人がいる場所が、暗怜軍の根城『かも』分かりません。賭けてみませんか」

「俺はギャンブルなんて好きじゃない。それにいくら相手が暗怜軍とはいえ、勝手に攻撃はマズいだろ。警察の許可がいるはずじゃ」

「今回の場合、それはたぶん大丈夫よ」

凜が口を挟んだ。

「前に警察は、暗怜軍の居場所を突き止めたならすぐに特攻命令を出すって言っていたから」

「多分じゃマズくないですかね？」

「『居場所を突き止めたなら許可を得ずとも攻撃していいですか』と前もって聞けば」

「許可の返事が、手紙の日付に間に合わなかったら？」

「ああ、もう」

グダグダと言う闇蝙蝠に、春翅諳は少々しびれを切らした様子を見せた。

「いいですか、今まで暗怜軍は尻尾をまず出しませんでした。それが今回、相手から急激に接近してきたのです。だったら食いつきましようよ、思いきり。貴方が言うとおり、二人には会えないかもしれない。行っても暗怜軍の根城は分からないかもしれない。ですがひよつとしたら、分かる『かも』しれないでしょう？」

「ひよつとしたらね」

「ですが場所が分かっても、道が分からなければ行けませんよね…
…二度とは、そこに。しかし貴方なら出来るでしょう？ 風景さえ

覚えていれば」

「だがそれなら、ワピチは」

言いながら、闇蝙蝠はワピチを見た。見られてワピチはおどおどとした様子を見せた。

「ぼ、僕ですか？」

「そうだ。お前だつていいよな」

「でも僕、まだ初心者ですし」

「そうですね」

春翅諳は頷いた。

「それに彼女は治癒が専門です。いざとなつても、出来ないでしょ

う……攻防が」

「うっ」

返事に困り、闇蝙蝠は今度は凜を見た。

「り、リーダー」

「警察には許可をとっておくわ。攻撃の許可をね。この手紙を既に見せてあるから、反応は早いわ」

「それじゃあ、手紙に応じて誰かが行くことはもう決定事項なんですかね？」

「私も、春翅諳の言う通りだと思うから」

彼女はチラッと春翅諳の方を見た。それに一瞬、闇蝙蝠は「この二人は共謀してるんじゃないか」とあらぬことすら考えた。

「賭けてみる価値はあると思うの。それにあなたなら、行った時一番助かる確率が高い。でしょう？　だつて優秀なテレポーターですもの。いざとなつたら逃げれるんじゃないかしら」

彼女の言葉に、闇蝙蝠は痛そうな声をあげた。とんだ白羽の矢をたてられたものだど、春翅諳を恨めしげに見る。だが、もう襲い。

「闇蝙蝠」

凜は恨みがましくジト目をする彼の名を呼び、じつと視線を向けた。真摯な眼差しをうけ、あれこれ言い訳を重ねていた闇蝙蝠は、少し気まり悪そうな顔をして返事をした。

「はい」

「無理に二人を助け出す必要はないわ。もちろん、助けられるなら助けてほしい。仲間だから当然よね。ただそれより、これを機会に暗黒軍の居場所を突き止めてほしいの。そして、私たちに知らせる」「つまり、偵察ってことですか」

「そう。もちろん、あなたが口を酸っぱくして言うように、二人の居場所が彼らの本部とは限らないわ。でも深多の森の中は国が一度も調査したことがない場所。別な言い方をすれば、何かを隠すのはうってつけよ。奴らがそこに本部を構えていてもおかしくはない」「まあ、そうかもしれないですねえ」

「お願いできる？」

彼女はじいっと目をむけた。そのあまりの熱心さに、これが『あなたを愛しているの』という愛の眼差しなら良かったのにと考えた。

「どう？」

「……はい」

少し間をおいたが、もとより断る術すべはなく、闇蝙蝠はこくと頷いた。

誰も行かなければ、ピロロとシャオは殺されるだろう。たかが二人、いなくなってもすぐに補員されるので隊としては支障がない。しかしこれを糸口にして、新しい可能性を引っ張ることが出来るかもしれない。そうなれば大きな前進となることは間違いない。

また仮にそれが出来なかつたとしても、闇蝙蝠を含めた三人が死亡するだけだ。これも隊としてはさほど大きな支障ではない。

もともと隊員数が少ないので、全く問題ないと言えば嘘になる。ただ補員されることを思えば、長期的な影響は少ない。

それに上から命令を受けたら、相手が何であろうと突撃する。それが瀏華隊。もとい、帝国軍の仕事である。嫌とは言えない。

憂鬱そうな表情を一瞬浮かべたが、闇蝙蝠ははっきり言った。「分かりました。命令とあらば、俺は行きます」

20・占いと封印した能力（前書き）

画像：<http://cabin.jp/psychedelia>
n/top3.html

20・占いと封印した能力

> i 1 6 1 3 9 — 5 2 8 <

その日、夜。

「もう、不吉なカードしか出ないよ。嫌だなあ」

瀏華隊の会議室の中。閻蝙蝠はイスにすわり、大量のトランプを机の上にぶちまけてぼやいていた。

「争い、束縛、死、そしてまた争い、束縛……その繰り返し。不吉だ。まるで死の予告のよう。って、格好つけてる場合じゃねえな」
椅子を後ろ二本足だけで立たせるといふ、行儀の悪い座り方をしながら溜息をつく。

オフィスの中には、今三人しかいない。えんじえらん、閻蝙蝠、フェイアントだ。閻蝙蝠以外の二人は、そろって今事務の仕事をしている。警察に特攻その他、許可を取るための書類を作っているのだ。

凜も先程まではいたが、今は警察署の方へ出かけている。ここ数日、往復しっぱなしだ。

「占いでいるの？」

ふと、後ろから声がかかった。振り向くと、えんじえらんが立っている。

途端、閻蝙蝠はぱつと手を机と平行して払った。散らばっていたカードが一瞬にして揃った。

「ね。二人が今どうなってるのか、占えない？」

「もうやったよ。そうしたら『監禁』だって」

「……生きてるの？」

「多分ね。だって死体を『監禁』するとは言わんだらう」

「もっとハッキリ生きてるって証拠は？」

「……いやあ、死んでるなら死んでるとちゃんと出るぞ」

いつもよりは、少々婉曲した言い方をする。えんじえらんは首を傾げたが「ところで」と話を変えた。

「ところで、今やってるのは何？」

「未来を占つてた。まだ苦手なんだけどね」

「結果は出た？ ね、それも教えてよ」

開いているピロロの席に、えんじえらんは座った。

「気になるもの」

「……」

閻魔蝙蝠はゆつくりと椅子を元に戻した。だが視線はカードに向けたままで、彼女を見ようとしなかった。何かやましい事でもあるかのように目を逸らす。

「俺は未来を占つても、結果を人に言うことはない」

「どうして？」

「情けないんだけど、自信がないからさ。俺に未来予知の能力はまった無い。いや……一つだけある。だがそれはもう封印した」

「え？ ……封印？」

「見たくない。未来を変えられるなら話は別だ。だが変えられないのなら。知つても、辛いだけだから」

「辛い？ 一体、どういう」

「ですが、閻魔蝙蝠」

ふと反対側から声がした。フェイアントが机ごしにじーっと二人の方を見ていた。

「知っておけば心の準備が出来るでしょう？ それにもし良い結果が出れば安心出来るじゃないですか」

「良い結果ならね」

閻魔蝙蝠はボソリと吐き、立ち上がって備え付けの簡易流し台に行った。袋に入ったコーヒー豆を、棚にある小さなミルに入れ、やかんでお湯を沸かす。

「能力って、何なんですか？」

後ろ姿にフェイアントが声をかける。

「一体？」

「忌むべき能力。……知ってもどうしようもない事。何の役に立つわけじゃない。ただ悲しいだけ。だがその封印のために、俺は一生を捧げる事になった」

二人に表情を見せないまま、闇蝙蝠は言った。

「俺は瀏華隊に入る前、戦教学園にいた。だがなぜ戦教学園に入ろうかと思ったかというと、その力を封印したかったから。

俺が持っていたのは魔法の力だ。嬉しくない能力だったけど。もしれそれを封じるために、俺は自分の魔力を高める必要があった。

当時 いや今も、この国で最も発達している部門の魔法は、人を傷つけ、殺すための『戦いの魔法』だ。

炎を出して敵を殺す、水を発射して溺れさせる。そういったものを学び、会得する事で最も高い能力を得られる。だから俺は戦教学園に入り、今ここにこうしている」

「……なんとも、悲しい話のようですが」

豆の削られるガリガリという音に負けじと、フェイアントは声を出す。

「つまり貴方は、未来を見たくないんですね。それは……知っても将来を変えられないから？」

「ああ、そうだ」

「しかし『過去』を変えれば『未来』も変わる。嫌な事が起きると分かっていたら、その対策を事前にたてればいいじゃないですか」

「まあね。でもこの世には、あるんだよ。変えようのない運命つても」

「でもそれなら、どうして占いを知っているの？」

えんじえらんが言った。

「本当に知りたくないなら、占いなんて学ばうとしないはずでしょ。そもそもどこで習ったの？」

「えんじえらん、占いと言っても色々な種類がある。方法は戦教学

校で習った。選択授業だったけど。そしてそこで習ったのは、自分がいる場所とは別の場所で、今起きていることを習う方法だ。

未来予知は習ってない。ただ知ってるやり方を応用して今試しただけさ。もう一度言うけど、別に知りたくない。株やギャンブルをそれで当てれば話は別だが」

皮肉たつぷりに闇蝙蝠は答えた。えんじえらんもフェイアントも黙り、その場にはしばし、豆を削る音とお湯が沸く音だけが響いた。

そのうちに、柔らかなコーヒーの匂いが部屋に漂った。コポコポとお湯をカップに注ぎながら、闇蝙蝠はボソリと言った。

「お前らもコーヒー飲むかい？」

「え？ い、いや別に……」

「お構いなく」

「あ、そう」

出した道具を棚に戻し、一人、じーっとこげ茶色の液体を見る。

「不完全な方法だったけれど、やったらカードはこう俺に教えた。

争い、束縛、死、そしてまた争い、束縛……延々と、繰り返し」

「死？ 繰り返し？」

「穏やかじゃありませんね」

「ああ」

短く返事をする。

「全くもって暗黒の未来だ。だが細かい事は分からない。死とは誰が死ぬのか。あるいは何かの抽象なのか？ よく分からないんだ」

席に戻り、闇蝙蝠は淹れたばかりのコーヒーを机の上に静かに置いて、きちんと並べられたカードを一枚めくった。淹れたてのコーヒーを口にし、後は何も言わずに黙る。

いつもは口数がやたら多く、余計なことまで混ぜっ返して喋るのに、今はあまりそれが無い。彼のどんよりした雰囲気二人もつられ、場の空気が自然と重たくなっていく。

「まあ、でも不完全なんですよ？」

それを破ろうとしたか、えんじえらんが努めて明るい声で言った。

「あんたの占い」

「まあね」

「……そうだよ。そうだ。それにあたし、聞いたことがあるよ。たとえプロの占い師でも、未来を完全に予知することなんて出来ないうつて。だから、ね？」

「うん」

少しだけ雰囲気明るくなった。と、その時だ。

「ただいま」

扉が開き、凜が帰ってきた。途端、闇蝙蝠は残っていた珈琲を全て喉の奥に流し入れ、そそくさと簡易流し台に向かった。

水をざーざーと出してカップを洗い、手を備え付けのペーパータオルで拭く。その間にフェイアントとえんじえらんは帰ったばかりの彼女に話をしていた。

「お疲れ様です。遅かったですね」

「ごめん。ちょっと向こうのポストと話し込んで」

「そうですか。そうそう、頼まれていた書類が出来ました」

「あ、出来た？ ありがとう、助かるわ」

「確認をお願いします。あと、ハンコも」

「リーダー、それとこっちも」

「はい。あ、そうそう。……闇蝙蝠」

「ん？」

「ちよつと」

手招きをした。闇蝙蝠はちよつと首をかしげたが、すぐにササツと立ち上がって彼女のそばによる。

「何でしょう」

「これ、つけていってほしい。実はこれを貰いに行ってたんだ」

と言って、彼女が手渡したのは何の変哲へんてつもない、小さな黒い丸い缶バッチだった。

表にはなにも絵は描かれていない。一見するとボタンのようだ。闇

蝙蝠はそれを手にとってしげしげと見た。

「これは？」

「鷹翼岩に行くときは、これを付けてほしい。GPSが埋め込んであるんだ」

彼女は説明した。

「深多の森では使用例がなくて、使えるかは正直不安なんだけど、うまくすれば、私たちがこれであなたの位置が特定できる。もしも
の事があった場合……ね」

「ない事を祈るよ。しかし、プライバシーを思いっきり侵害しそうなアイテムですな」

憎まれ口を叩いたものの、その場でトランプを一枚召喚し、それにバッチをつけてまた消した。

「了解。なら、行く時は身につけておこう。……それじゃ
すーっと凜の傍を離れる。」

「コーヒーも飲んだし、俺はそろそろ帰りますね」

「あ、はい」

「それじゃ」

闇蝙蝠は軽い挨拶だけしてそのまま部屋を後にした。だが建物の外には出ず、廊下に座りこんだ。冷たい壁を背中にし、ずるずるとしやがんでがくつと頂垂れる。

「どうすれば……」

思うのは今日、そして明日のことだ。

春翹諳は『これを利用して、暗怜軍の根城を見つければ良い』と言った。だが前に危惧した通り、とらえられた二人に会える保証も、また、指定された場所が根城の近くかどうかも分からない。

なのに暗怜軍の根城を見つけれ だなんて、無茶な話だ。もちろん命令を直で出した凜をふくめ、仲間全員『可能性』にかけただけの話で、絶対に見つけて帰ってこいとは誰も言っていない。

しかし自分が間違えた事をすれば大変なことになる。たとえば根城を見つけたと思い、仲間を呼んだらそれが適の罠のド真ん中、相手を殲滅するつもりがこっちが……という可能性も、大いにある。

また、たった一人で暗怜軍の誰かと対峙しなければならぬのだ。どんな相手か分からないし、相手の人数も不明。おまけに瀏華隊の一人を呼び出すという暗怜軍の目的も、意図も分からないまま。

「ああ……」

口を開けばため息しか出ない。だがそれも仕方がなかった。

暗怜軍と接触すれば、おおかれ少なかれ揉める事は予想が出来た。しかし目的が分かかって戦う、あるいは何かを得られる保証があつて戦うならいい。元よりそれが仕事だからだ。

ただ、漠然と戦いの場に引きずり込まれるのは不安で仕方なかった。おまけに今回に限っては、行けば何か非常に大きなゴタゴタに巻き込まれる予感がした。

また、戦闘隊員らしからぬが、闇蝙蝠は別に好戦狂ではない。戦闘は仕事、つまりはビジネス。終焉と報酬 金銭でも、あるいはデータのようないかなる非金銭物でも があるからやるつもりだ。

要は合理主義なわけだが、命をかけているのだ。そうそう安請け合いはできない。だが命令されたら行くしかない。

闇蝙蝠は恨めしげに、自分の右目に手をやった。頬から目にかけてついている、黒い の模様をなぞる。

一人、暫くそうしていた。だがやがて立ちあがり、服の裾をはらった。そしてそのまま足元に魔法陣を出して消えた。

21・岩上の戦い

> i 1 6 1 3 8 — 5 2 8 <

翌日、22日。木々を揺らす風は不気味な音をたて、名も知らぬ獣の聲がそれに調和する。

そんな深多みたの森の生い茂った木々の中に、抜き出るよう聳そびえ立つ岩が一つあった。

鷹翼岩たしよくがん。名前の通り、遠目からみるとタカが翼を広げているように見える岩。

とそこに、青白く光るものが現れた。ぼうつとした光は一瞬で、直後、その場に人を一人出現させた。

「ここか、指定の場所は。フーン……なるほど、こりゃあ確かに岩の上だ」

頭にはコウモリと薔薇のついたキャノティエ。着ているのは、上が青で下が黒の、グラデーションがかかったロングコート。しかし左右対称で、フロントに階段のようなガタガタとした切り込みが入っており、むかって右が長く、左は腰まで。生地はレーヨンのようにやや光沢が入っていたが、それよりもずっと丈夫そうだった。胸元には白いリボンを、青いブローチでとめている。

穿くいているのは黒い長ズボンで、足は白い が前に三つついた同色のブーツだった。

森の中とは思えぬ恰好をしつつ、闇蝙蝠は胸元から時計を出して時間を確認した。

「よし、時間は丁度いい。しかし何だか妙な感覚が走ったなあ。見られているような、何とも……言葉ではうまく言えないけれど……」
月は出ているが、暗い。普通の人ではほとんど認識できないはずだが、それでも問題なくちゃんと針をよんでいる。

逆の手で胴体をカリカリ搔きつつ、彼はふと首を伸ばして巖下を見た。

「うえっ、怖い」

上から見た崖の下は、まるで奈落の底に通ずる穴のようだった。思わず首をすくませ、そして右手をぱつと伸ばした。

呪文を唱えることは、しない。だが腕は瞬時に、三つの鉤爪のついたコウモリ型の翼となった。空を飛ぶことは出来ないが、翼の先にあるツメは戦闘において強力な武器。

そのツメが出たまさにその時、突然、少し離れた岩の上に赤い魔方陣が表れた。

「来たか？」

三メートル程離れた位置に、魔方陣が二つ現れる。だがそれはすぐ消え、かわって二人の人をその場に出した。

片方は、年は十二か三くらい、サラサラの栗色のショートヘアをし、大きい澄んだ黄緑色の瞳に華奢な体。着ているのは何の変哲もない黒いジャージで、まるで体育の授業中の小学生のように思える。一方隣に立っているのは、まるでSP。黒い服に黒いズボン、若干ウェーブがかかった黒い髪をしていた。端正な顔立ちの男性に見えるが、体をよく見れば女性と分かる。まだそれほど年はいつていない。

親子にしては年の差がないし、姉弟にしては顔が似ていない。闇蝙蝠は警戒しつつ、若干後ろに下がって間合いを取った。

「遅刻しないのはいいい心構えだね」

女性が言う。異形の形をした闇蝙蝠の腕を見ても、驚いた顔は全くしない。

「僕はバルティーン。暗怜軍の者だ。隣はアサルト」

軽く自己紹介をする。

「君は？」

「……瀏華隊、闇蝙蝠」

闇蝙蝠は短く答えた。だが、次の瞬間まるで弾丸のようにしゃべり

だした。

「そうか、お前らが暗怜軍か。全く、素晴らしい度胸してるよ。一体どうやってピロロとシャオを浚った？ どういうマジックを使った。」

そしてこんな所に呼び出す目的はなんだ。金か？ なら具体的な金額をあらかじめ手紙に書き示しておけ。言っておくけど俺、今日は金を全く持つてきてなからな。

何にしても用件があるならさっさと言ってくれ。……そうそう二人は無事なのか？ まだ生きてるんだろうな。えー、おい？」
自分が知りたいことを、一気にまとめて話す。

「そもそも此処は何なんだ。俺あこんな場所初めてきたぞ。鷹翼岩っていう名前も、正直、あの手紙で初めて聞いた。この岩は地図にものつてないものな。」

ていうかお前ら、今テレポをしたよなあ？ しかし妙な色の魔法陣を出すね。光の色に個人差があることは聞いているけど、赤色というのは初めて見たぜ。普通は青とか白とかその辺だ。一体何をどうしてそうなった？ まさかもぐりか。免許取らずに自主学习でやったのか？」

「……よく喋るね」

少年が言う。声変わりのすんでいない、まだ高い声だった。

「ちょっと黙ってる、犬みたいにキャンキャン吠えるな」

「うっせえよ」

闇蝙蝠ははき捨てた。

「すっこんでろ。タメきくんじゃねえや。俺あテメエみたいな乳臭いガキには用はないんだ」

「なっ」

「暗怜軍のボスはどこにいる？ ……女、お前か？ バルティーンとか言ったな。苗字は？」

「バルティーン」カラス」

「なに？ ってことは、お前はレミラじゃないのか」

「そつだよ」

アサルトがかわりに返事をした。

「彼女は違う。それにレミラ様は強い人の前にしか姿を現さない」

「何だと。じゃあ俺が弱いとでも言うのか」

「強いようには見えない」

「失礼な！　じゃあお前はどつだ。え？　力を込めればすぐにボキ

ツといきそつな体しやがつて」

「う……うるさい！」

「おさえろ、アサルト」

負けじと声をはりあげる少年を、バルティー又は制した。

「闇蝙蝠つて言ったかい。……質問に、じゃあ答えよう。二人は無

事だよ、ちゃんと生きてる」

「そつか」

「そして目的は　　そつだね、端的に答えよう。君と戦つ事だ」

「えツ？」

「アサルト、やつてくれ」

「了解」

ビクツとする闇蝙蝠をよそに、言葉に従つてアサルトは前に出た。

一方バルティー又は後ろに下がり、地面に鉛筆のようなものを二本、

自分を真ん中にしてその右と左においた。するとそれは光を発し、

彼女を四角い透明な箱で困つた。

「それは……結界か？　機械で作つたのか」

「正解。でも『結界』よりむしろ『バリア』とか『シールド』と言

つてくれた方がいいかな」

「ふん、言葉はどうだつていい。それより、どついうわけだ」

目の前の少年を見て、闇蝙蝠は声をはりあげた。

「おい女！　こんな子供を俺の相手に据えるたあ、いい度胸じゃね

えか。戦つつていうならお前が来い！」

「生憎、僕は戦いの方は不得手なんだ」

その時、バルティー又は手に何かもつていた。闇蝙蝠の目には、携

帯用のパソコンのように見えた。どうやら召喚で呼び出したらしい。「それと、アサルトを甘く見ない方がいい」

ついでに机つきのイスも召喚し、それを置いて彼女は事務的に言った。

「年は若いけど、うちのエースだからね」

「へっ」

その言葉を、闇蝙蝠は一蹴した。

「こんなガキが花形とは驚いた。暗怜軍てのは小学校かい？　へっ、さぞかしお前らのボスは強いんだろうな」

「レミラ様を侮辱するな。……ゴチャゴチャ言っでないで」

アサルトが低い声を出した。

「かかってきなよ」

その手には、いつの間呼び出したのやら。柄に黒い卍のついたコンバットナイフが握られていた。

華奢な少年の手にはおよそ似合わないそれを、闇蝙蝠は訝しげに見る。

「武器を持ったからって、人間、そうそう強くなるもんじゃないぜ。貴様にそのでかいナイフが使いこなせるか？」

シャツシャツと、鋭い音をたてて右翼の先のツメをこする。

「悪いが、俺は女や子供でも一切容赦しないタイプだぜ」

「上等だよ」

「なら、おとなしく念仏を唱えるんだな！」

闇蝙蝠は勢いよく地面を蹴った。そのまま大きく振りかぶり、三本の鋭い鉤爪を振り下ろす。

「死ね！」

一気に、カタをつけるつもりだった。少年の柔らかい首の皮を切り裂くのは、一秒もあればそれで十分。

だがその刹那、少年はナイフをあげた。

ガキインツと、金属同士がぶつかる音が響いた。アサルトはナイフ一本で、三つのツメの攻撃を防いだ。

見事なディフェンスだった。だが、それもそこまでだった。

22 - 結界とテレポーション

攻撃は防いだ。だが年の小柄な体では、闇蝙蝠の力を完全に抑え込むことが出来なかった。そのままの格好で、押されてじりじりと下がる。

「さあ、ここからどうするよ」

歯を食いしばる少年とは逆に、闇蝙蝠は軽く舌なめずりをした。

「その体勢じゃどうにも動けまい。小僧、訓練だけで実戦を知らんな」

「ば、かに……するなっ」

「んっ？」

「絶命光！」
ぜつめいこう

「ひッ
ッ！」

途端、ナイフを持った少年の手に黒い光が宿った。闇蝙蝠は大慌てでツメをはなし、低い姿勢で横っ飛びに逃げた。

直後、光が爆発して黒い稲妻が四方八方に飛び散った。そのうちいくつかはバルティーヌの方に向かっていったが、バリアもとい透明な箱が攻撃を吸収し、危害を防いでいた。

だが飛んだ光の多くは足下の岩に命中し、バチバチと物騒な音を立てて黒いクレーターを作る。まるで強力なレーザー光をあてたようだった。

「な 何だッ？」

「かわせたとは、結構な反射神経だね」

アサルトは悠々と言った。

「僕を見て、力で捻じ伏せれると思っただろう？ お前みたいなやつは大体そうだ。自分の方が力があると思ってる。でも最後は焼き殺されるんだ。僕の魔法で」

「俺をハメたか」

「お前が勝手にはまったただけだろ」

「野郎、上等じゃねえか」

後一步のところで焼かれそうになった闇蝙蝠。呆気にとられたのもつかの間で、すぐに立ち上がって相手と向かい合う。

ぱつと、右腕を大きくあげた。そのまま、さっきと同じようにアサルトにつっかかる。

「またか」

全く同じ攻撃に、アサルトは小馬鹿にしたように呟いてナイフを両手で構えた。闇蝙蝠のツメは音を立ててそれに当たった。

しかしその途端、ドスツと鈍い音と共にアサルトはすっ飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「う、うーっ」

右手にはまだしっかりとナイフを持ったまま、腕で腹を抑えてはあはあと荒く息をはいた。

「お、前……っ」

闇蝙蝠は左手をあげた。手に、渦をまくほど大量のカードを呼び出し。しかし、それをぱつと消す。

「どうだい、俺の蹴りは。ふふ……」

「くそっ、こんな……のっ」

「強がっても無駄だ。てめえの柔らかい体じゃ、腹部の皮下出血程度じゃおさまらんだろっ」

「ちくしょ、うっ!!」

よろめきながらも、アサルトは立ち上がった。苦しそうに息をはきつつ、片手を前につきだす。

「絶命光！」

黒い光が宿り、炸裂する。今度は四方八方に飛び散らず、太い一本がジグザグとカーブを描いて闇蝙蝠に向かった。

「ふっ」

だが闇蝙蝠は、面倒くさそうに息をはいただけだった。見ると地面からは透明な半球状の膜が出来ていて、その中に彼は突っ立っていた。少年が放った光線は半球にあたり、そのままバチツと音

をたてて消えた。

「バリ……ア……？」

「それはお前らの言い方だろう。結界と言ってほしいね」

「何を言ってる」

だがその直後、無数の鳥が羽ばたくような、ザーツという音がした。耳障りな音に、腹をおさえながらアサル트는振り返った。

そして。

「あ……っ?!」

見えた光景に彼は絶句した。

音の主はランプだった。それは崖の下からやってきて空中に舞い上がり、少年めがけてとんでゆく。

ギラツと光るその白い面は、すでに紙のそれではなかった。まるで刃物のような光沢を有している。驚くアサル트에闇蝙蝠は笑った。

「はっはあ！ 今頃気がついてても遅いぜ。さあ、たっぷり味わいな。俺の操るランプは包丁の切れ味、お前の柔らかい肉を縦横無尽に切り刻むだろう」

「絶命光！」

アサル트는また黒い光を発した。今度の光は最初の時と同じ、四方八方に飛び散るものだった。

カードは次々とそれにあたり、焼き消され燃えかすとなってその場から消えていく。だが数が多すぎ、到底防ぎきれない。

「絶命光、ぜつめ」

アサル트는呪文を繰り返して連射した。ジグザグした光は多くのカードを焼き切ったが、かいくぐった数枚が少年の懐に飛び込んだ。それは闇蝙蝠の言うとおり刃物の切れ味を有しており、彼の身体を傷つけた。

「痛ッ……こ、このっ！」

手で払いのけるも、それは包丁を手で抑えるのと同じだった。

このままいけば、アサル트는血だらけの肉塊になっていたかもしれない。だが刹那のところでは消えた。赤い魔法陣を足元に出し、

テレポーテーションをする。少年は殺される前にこの場を去った。

「へっ、逃げたか」

アサルトが消えた、岩の上。闇蝙蝠はボソリと呟き、そして後ろを振り向いた。

「お前は無事か」

そこには四角い結界。彼女に言わせれば『バリア』。で身を守ったバルティー又がいた。アサルト同じくトランプに襲われており、バチバチと耳障りな音をたてている。

未だ攻撃をし続けるトランプを全て引っ込め、闇蝙蝠は彼女に一歩近づいた。

「その中はたいそう安全なようだな。だが結界は外からの攻撃を防ぐと同時に、中からの攻撃も外へは出さない。破らなきゃ、お前は俺を攻撃できんぞ」

「構わないよ」

パソコン画面を悠々と閉じ、彼女はよっころしよと立ち上がった。

バリアをはさみ、二人は向かい合った。闇蝙蝠は首を傾げた。

「余裕だな。……まさか、逃げたガキが仲間をつれて戻ってくるのを狙っているのか？」

「あの子はアサルトだ。ちゃんと名前を呼んであげてよ」

「俺にとつちやその辺にいる子供の一人だ」

脅すように、シャツシャツと爪を鳴らす。

「お前も敵の一人だろう。誰か厄介なのが来る前に、倒れてもらうぜ」

「僕を人質にする気かい」

「さあな！」

答えながら、飛び上がって勢いよくツメをバリアに振り下ろす。だが跳ね返され、闇蝙蝠はザザーッと音をたてて崖の上を後ろにさがつた。

「カードスラッシュもダメ、爪もダメ」

己の爪を見て呟く。

「となれば、直接的な魔法技で」

だが、再び腕をあげて技を出そうとした時だった。

「フォース・テレポーテーション」

バリアの中のバルティーンが、立ち上がりながら呟いた。途端、闇蝙蝠の下には赤い魔法陣が現れた。

「あっ?!」

何ぞと問う間は無かった。不気味な赤い光に強制的に包み込まれ、闇蝙蝠はなす術もなく、岩の上から姿を消した。

23・檻と脱出(前書き)

画像：<http://neo-hiimeism.net/>

23 - 檻と脱出

> i16291 - 528 <

飛ばされた先は、檻の中だった。広さはおよそ三畳ほどで、狭い。天井、壁、床、全てが石造りだが、前だけは鉄の格子だった。扉になっっているが、鍵付きの鎖がついていて、ぱつと見、容易には出られそうにない。中に明かりはなく、牢の外にはランプがあっただが、あまり明るくない。空気は湿っていて、あまり居心地は良くなかった。

「うえつ、なんて場所だ。除湿機が必要だな」

闇蝙蝠は早々に辟易へきえきし、脱出しようとした。だがふと思いとどまった。

「待てよ。此処、どこだ？」

空気が湿っているのです、地下だろうという予想はついた。だが確証はないし、そもそも地下の、どのあたりかも分からない。

ただ此処は、バルティエバルティエに強制移動をくらって飛ばされた場所である。彼女が暗伶軍の一員なら、そのアジトの一角である可能性が高い。もしそうなら、此処は探し求めていた所だ。

また、誘拐されたシャオとピロロが、まだ生きているとするならば、近くにいるかもしれない。居心地は悪いが、監禁という点において、此処よりいい場所はない。

「脱出しなきゃあ」

用心しつつ、闇蝙蝠は大きめのトランプを一枚召喚した。格好をつけて投げ、鎖を統括している鍵にあて、断ち切らせる。トランプはキーキーという音をたてて上下に動き、鍵穴に切り込みを入れはじめた。

だが音を聞いて、闇蝙蝠は低く唸り、耳を抑えた。

「一発で断ち切るつもりだったのに。ああ、嫌な音だ」

そして、およそ三十秒後。ジャラツと音をたて、鎖は切れて外れた。邪魔な鍵を傍にどけ、闇蝙蝠は扉をそーっと指でつついた。触ったとたん電撃が走るのではと思って用心したが、何もこない。

安全を確認し、両手をあて、押す。するとあっけないほどすぐに、廊下への道がぱつと開けた。

「え？」

扉は開いた。だが闇蝙蝠はすぐ出ようとはせず、しばしきよとんとして目の前の光景を見ていた。あまりにアツサリ開いてしまったことに違和感を感じ、しばらく考える。

「いいのか？」

勿論、外に出る意思があったから、鎖を切って扉をあけた。だがあまりに簡単に出ることが出来て、逆に警戒をしてしまう。

「ずいぶん簡単だな。こんなんじゃ素人だって、時間をかければ開けられるんじゃないか？」

魔法が広く使われるこの国では、召喚魔法は皆使える。トランプで鍵を切ることは無理でも、道具を召喚して使えば、脱出が出来る。これでは、閉じ込める意味が全くない。

「俺、何のために此処に入れられたんだろっ」

全くわけが分からない。だが、自由が手に入ったのは好都合で、闇蝙蝠は頭の中で、当面自分がすべき行動を考えた。

まずこの場を少し調べ、暗怜軍のアジトの一角かどうかを調べる。その可能性が強いと出たら、後は仲間を呼んで総攻撃。

ただし、ここが本当に求めていたアジトの場所だとしても、一つ問題があった。

それは建物の内部へ直接、テレポーションは出来ないこと。またそれでも飛ばうとした場合は、二種類の現象がおきる。

移動そのものがされないか、目的とした建物のすぐ外に移動するかだ。どちらになるかは、その建物による。

後者であれば、とりあえず移動は出来るので、そこから歩いて行けばいい。しかし前者の場合、移動が出来ないので訪ねることがで

きない。

「ああもう、面倒だな」

闇蝙蝠はぼやき、懐に手を突っ込むと、トランプを一枚ひっぱりだした。そこには先日凜からもらった、GPS機能付きのボタンがくっついていた。

この機械さえあれば、仲間に現在地を教えることが出来る。ただし、機械が作動していない可能性もある。此処が深多の森の中なら、その可能性も否めない。

確実に此処にまた来るためには、どうしても、外に出て建物の外観を憶えなければならぬ。

「どこが出口だろう」

扉から顔を出し、廊下を見渡す。闇蝙蝠はまず適当に、湿っぽい廊下を歩きはじめた。

24 - 報告と制限

「もしもし、ああ十夜^{じゅうや}? うん、僕。バルティー又だ」
一方、闇蝙蝠を魔法で飛ばしたバルティー又は一人、明るい部屋にいた。

淡い青のストライプ模様の壁。横をみれば黒枠の鏡が、絵のように部屋の中をうつしている。

傍にアサルトはいない。彼女は単独で、例の奇妙な光を発するイスに着席し、アンテナの長い電話を持って通話している。前にはパソコンがあり、微かな音をたてて起動していた。

「報告する。今から僕がいう事を全て死謳^{しおう}に伝えてくれ。

予想通り、闇蝙蝠が来たよ。アサルトと一対一で戦わせた。その様子を見て、僕はレミラに提出するため、闇蝙蝠の戦闘データをとった。今は手筈^{てはづ}通り、鷹翼岩の上から牢屋に闇蝙蝠をいれた所だ」
『闇蝙蝠くんが来たんですね?』

電話口の相手　十夜は大人の男性だった。声の調子は優しげで、やわらかいしゃべり方をする。

『了解です。アサルトくんはどうしましたか?』

「彼にやられて、少し怪我をした。でも大したことはない、自力で城までテレポで帰ったよ。リオンの治癒を受けてるはずだ」
彼女は軽く肩をすくめた。

「正直、アサルトを選んで良かったと思っただね。もし下つ端を連れてたら瞬殺されて、データどころの騒ぎじゃなかった。かといってダークやスレイヴじゃ、闇蝙蝠と相打ちになったかもしれない。

アサルトは強いけど、それはあの年にしてはの話だ。相対的に見れば、まだ身体が発達してないから力が弱い。魔法も、攻撃に特化したものは絶命光しか知らない。だから闇蝙蝠に分があった」

『でも闇蝙蝠くんが殺されてしまっていたら』

「困る」

即座に言う。

「彼は瀏華隊と暗怜軍の戦いを惹起^{きんじ}する切り札だ。彼が消えたら両者は戦えなくなる。……いや、レミラが方針を変えない限り、いずれは衝突して戦うと思う。だけどそれには時間がかかる。

僕らには時間がないんだ。瀏華隊が暗怜軍の尾をつかんだのが18日だろ？ で、今僕らが時間を『逆戻し』出来るのは一か月以内だから来月の18日までに瀏華隊と暗怜軍を戦わせ、かつレミラを戦場に引つ張り出さなきゃならない。そして時間逆戻しの犯人はレミラであると、闇蝙蝠に思わせないと。さもないと死謳の目的が果たせない」

『急がなければなりませんね』

電話の向こうで、十夜は真面目な声を出した。

『で、いま闇蝙蝠くんはどこにいますか？ その……牢屋の中にまだいるんでしょうか』

「いや」

バルテイー又はカタカタとキーボードを叩いた。

「多分いないと思う。あそこの牢屋内では外部の人間はテレポーターションが使えない。けれど鍵は鎖でぐるぐるしてあるだけだし、彼はいたって健康な状態だからね。脱出は簡単だ」

言いつつ、パソコンの画面に表示されている時計を見る。

「その様子を確認できればいいんだけど 残念ながら、今僕が持っているパソコンじゃ、牢屋の中の様子が見えない」

『映像を見るなら監視部屋に行かないとダメですよ。ギスターチに言えば見せてくれるんじゃないですか？』

「じゃ、そうしてもらおう。ええと、連絡を」

彼女は再びキーボードを叩きだした。素早いブラインドタッチで文章を打っていく。

その間に、十夜はまた一つ聞いた。

『そういえば、先に捉えたシャオとピロ口は何処にいるんですか？』

『地下牢さ。闇蝙蝠と同じフロア。だから彼は二人をすぐ発見する』

と思う。ただ、問題はその後だ」

キーを打ちがてら、彼女はマウスをぐるぐると動かした。するとパソコンが文章を映し出した。

「瀏華隊側の計画は知ってる。闇蝙蝠を使ってこの城の場所を暴き、一気に殲滅をかけようというのだろう？」

僕らにとつて、それは願ってもいないことだ。でも僕は今暗怜軍の軍員の一人だ。データを取るために誘拐行為を行い、城の居場所がバレるという危険を承知で、彼ら三人を牢に入れた。

だから簡単に出ていってもらっちゃ困る。ここ暗怜軍が殲滅しなかつた場合、後で僕がレミラにこっぴどく咎められてしまうからね」
『それは大丈夫でしょう』

十夜は明るい声を出した。が、調子が軽すぎたと思つたのか、トーンを落として言い直す。

『だって、えーつと……確か、何か制限があつたじゃないですか』
「そうだ」

彼女はすぐに返事をした。

『城 住居地や牢屋、墓地や温室すべてを含めて城というけど、もつとも外側にある外壁から百メートル以内の場合。暗怜軍の軍員でない限り、一切のテレポーションが不可能だ。そいう制限がかかっている。ただし上空にあがってしまえば出来る。』

さらにもう一つ、もし城の中にいたなら、制限を解除する方法が一つある」

『何ですか？』

「破壊だよ。建物を壊せば飛べるようになったさ」
彼女は詳しく説明した。

「この国の建物にはほとんどすべて、テレポーション制限の魔法がかけられている。だけどその制限は、建物が壊されると消えるんだ。」

さすがにガラス一枚割れたくらいじゃダメだけど、壁が壊れて廊下を塞いだとか、火事が起きて部屋が一つボロボロになったとか。

そういう事があると、例外的にテレポーションが出来るようになるんだ。大抵は現場の付近のみだけどね。暗怜軍の城も、ご多分に漏れずそうなっている」

『そうですか。……ずいぶん詳しいですね』

「暗怜軍の僕の役目の一つは、この建物の保護だから」

『なるほど。あれ？ ……でもそれじゃ、建物が壊れたら外部からいくらでも侵入が出来ちゃいますね』

「いや。うちの城の場合、そのような非常時であっても、外部からの侵入は出来ないから無理だ。可能になるのは中から外へ出る時だけだ。要するに逃げるためだね」

『でも……なんでそんな機能をつけたんでしょうね？』

十夜は語尾を上げ調子で言った。

『だって普通、暗怜軍以外の人間、あの城にはいないでしょう』

「そうでもないよ。軍員として認められるには、幹部であるレミラの承認が必要だ。人数の如何いかんによっては時間がかかるケースがある。そのためじゃないかな」

『ああ……』

「と、それより」

話が脇道にそれたと、バルティー又はぶるつと首をふった。

「いくら制限があるとはいえ、闇蝙蝠が逃げるのを黙って見ていた事がバレたら大変だ。レミラに文句を言われないう、一人か二人、門番を派遣しよう」

彼女はまた忙しくパソコンを叩き始めた。そしてそれに連動するよ
うに、電話口の向こうでは十夜も何やら忙せわしない音をたて始めた。

『それじゃあ、牢屋のことは任せていいですか？』

「うん」

『分かりました。それじゃ、僕はさっき言った通り、死謳さんに報告を行います』

「了解。また連絡する。じゃあ」

バルティー又は電話を切り、横を撫でた。長いアンテナがひっこみ、

黒い光を全体から発するのを見て、彼女はまた作業に戻った。

パソコンには、リスト化されたデータが並んでいる。それをじっと見て、彼女はブツブツ言った。

「脱出を阻止する人……あまり強い人じゃダメだ。かといって弱くてもダメだ。ダークは戦闘で使うことになっているし、スレイヴは今いない。」

よし、リオンにしよう。それともう一人」

カチツとクリツクすると、およそ四十代ほどの男性の顔写真がアツプされた。

パサパサとした銀色がかった灰色の髪、茶色の瞳。不摂生をしているらしく、肌がボロボロとしている様子が写真からも見てとれた。見るからに不健康そうな男を選び、一旦画面を閉じて、彼女はま

た電話に手をかけた。

25 - 使い蝙蝠(前書き)

画像：<http://www3.toyojuju-cd/>

25 - 使い蝙蝠

> i 1 6 7 4 8 — 5 2 8 <

石造りの冷たい床と背後には壁、鉄製の格子で左右と前の三方が囲まれ、正面には頑丈な扉。隅にはクモが巣をはっており、空気はじとつとして湿っぽい。外には堅固な鍵がとりつけられ、バリアも張られていて魔法も通じない。

そんな場所に、二人の人間が一緒に閉じ込められていた。一人は大人になりかけの少女。もう一人はまだ子供。……ピロロとシャオだ。

二人とも、此処に閉じ込められて丸二日になる。劣悪な環境下であることもあり、体調はよくない。食事は出されたが二人ともそれを口にしておらず、飲まず食わずである。

おまけに薬を打たれ、今は意識こそあれど動けない。体に力を入れることが出来ず、やむなく、埃ほこりっぽい床に倒れてじっとしているだけだった。

そんな絶望的な状態において、二人にとって聞き覚えのある耳障りな声が放たれた。

「いた！ ピロロ、シャオ。お前ら大丈夫かあ?!」

低く、少ししゃがれている。声は二人を何度も呼んだ。

「おーい、おーい！ ピロロ、シャオ。生きてるよな、息してるもんな。どうした、動けないのかあっ」

闇蝙蝠だった。しきりと、声をはりあげている。

「こら、シカトしてんじゃねえぞ。ピロロお、シャオお！ 返事しろよ、起きろ、目を覚ませえ！」

一度建物の外観を見ようと、檻から出てウロウロしていた彼。しかし入口より先に二人を見つけ、早速ガンガンとけたたましい音を立

てて檻を叩き、今は声をはりあげていた。

「俺だよ、闇蝙蝠だよ！ 分かるか、シヤオ、ピロロー！」

「あ……闇、蝙蝠」

ピロロも、シヤオも、彼の声はちゃんと耳にしていた。だが体を動かせず、喋るのが精いっぱいである。何とか絞り出された声に、闇蝙蝠はほっと息をはいた。

「良かった。意識はあるのか。……でもどうした。何故倒れている？ ケガしてるのか？」

「違うのでも……動けない、のっ」

「何だと。おいシヤオ、お前は？」

「シヤオも……だめ。あたし達、同じ……だ、よっ。なんか 体が、フラフラするのっ」

「メシは？ 食ったのか」

「食べて ない。でも……それじゃ、ないの。薬を実は 打たれ、て。それで……」

「待ってる、今出してやる」

闇蝙蝠は強制的にテレポーターションで二人を檻の外に移動させようとした。が、出来なかった。

二人の下に魔法陣は出現したものの、そのままスッと消えてしまい、移動がされない。

「そうか、制限がかかっているのか、建物の中から中は。よし、こうなったら実力行使だ」

ぱつと両腕を化けさせる。シャツシャツと音を出してツメをこすりた後、彼は少し下がった。そして化けさせた右腕のツメを、思いっきり檻にむかって振り下ろす。ガキンツと音がして、硬い金属でできたそれがぐにゃつと曲げられた。そのまま両腕のツメでもって、力押しで檻を曲げ、少しずつ、人が通れる隙間を作る。

ある程度隙間が出来ると、闇蝙蝠は身をかがめて中に入った。

「大丈夫か？ 待て、今飲み物をやる」

声をかけ、召喚でペットボトルの水とお茶を取り出した。

「片方お茶だけど　まあ、いいか」

キヤップをあけ、口に含ませてやる。二日ぶりの液体を、二人ともむさぼるように飲んだ。

喉を潤し、少し落ち着いたところでようやく、シャオがまともに声を出した。

「あ、りがとうです。でも……ごめんなさい、なんか体が　ん、うっ。おかしい、です。水は飲めるのに……」

彼は必死で動こうともがいていた。だが全く成果はあがっていない。ピロロもまた同じだった。闇蝙蝠はペットボトルをその場から消去魔法で消しつつ首を傾げた。

「手足の自由が利かないみたいだな。いや、いい。無理に動くな。俺が運んでやる」

大量のトランプを呼び出し、二人の下に潜り込ませる。だが体の下に潜り込んでくるトランプを見て、ピロロは若干不安そうな目をした。

「これ、切れないっ？」

「大丈夫。こいつらの切れ味や動きは全て俺の意志に左右される。

切れるなと思えば切れない」

渦巻く大量のトランプが二人を載せ、まるで筋斗雲きんとんのように運び始めた。無理やりあけた檻の狭い隙間をこじ開けて、出る。まずはピロロ、続いてシャオ。闇蝙蝠は最後に出た。

「だが良かったよ、生きていて。だがお前ら、どうして此処に連れてこられたんだ？　どうやって？」

二人を横にふわふわ浮かべ、歩きながら闇蝙蝠は聞いた。

「家にいて襲われたのか？　それとも、外出中か」

「分かりません……です。ただボクは、家に帰る途中……でし、た。シャオがたどたどしく答える。闇蝙蝠はえつと声をあげた。

「何だと。……フォーテレでもかけられたか？　しかし歩いたり乗り物に乗っていたり、動いている人にフォーテレをかけることは殆ど出来ないはずだ」

「違う、です。いきなり。笛の音みたいなのを聞いた、です。けど……そうしたら眠くなって」

「笛の音で眠くなった？ 魔法による攻撃を受けたのか」

「多分そうです。で……気が付いたら此処にいました。ボクが来てしばらくしてから、ピロロが来ました、です。」

でも……その時はまだ、クスリ……打たれてませんでした。だからボクたち、逃げようと思いました、です。でもこの檻、ぜんぜん……破れませんです」

「仕方ない。お前の武器と手持ち技はパンダのぬいぐるみと雷だからな。確かに、それで檻を破るのは無理だろう。だがピロロ、お前は色々技を持っていただろう。魔法と、あと剣。持っていたよな？ 召喚で取り出ししなかったか？」

「したよつ。今……手元に、ある。だけど ダメだった。魔法は……跳ね返されちゃうし、剣でこの檻は……切れな、かった」

「え、嘘だろ。だって俺が今力を込めたら曲がったぜ」

「それが……出来なくて」

「おかしいなあ？ じゃどうして今出来たんだろう。刃物だけ跳ね返す仕組みになったのかな。まあ何にせよ、結果として出れたからいいか。で、お前はどうかやって此処へ？」

「シャオと……同じ。あたしは、買い物帰り……だった、の。笛の音を聞いて 眠く、なって。でもね、完全に眠る前に見たのつ。女の子が……いた。多分、あたしと年は変わらない……くらい」

「ああ 何にせよ、音をちよつと聞かせただけで人を眠らせるとは只者じゃないな」

彼は首を傾げた。一本道の廊下を角に曲がると、そこは同じような光景がただずつと続いている。人を閉じ込めるための牢に、石の壁で出来た廊下。

牢の中に人はいる様子がなく、外に出れるような通路もない。闇蝙蝠はピタリと歩きを止めた。

「ダメだ。意外に此処、広いな。歩き回って出口を探して、そこか

ら外に出てお前らだけ先に瀏華隊に届けて、俺は此処の調査を
と思ったんだが、こりゃちよつと無理だな」

闇蝙蝠は力り力りと頭をかいた。そして意を決したように、バサリ
と左腕の翼を広げた。

「本気で出口を探そう」

「本気で？ それ、どういう意味っ？」

「効率的だが、あまりしたくない方法を使う」

「え？」

「お前らを連れてウロウロは出来ない。かといって置き去りも出来
ないから っと」

バサバサと腕をふるると、今まで一枚の翼だったものが端から千切れ
るように落ち、およそ三十匹ほどの小さな黒いコウモリとなった。
かわって闇蝙蝠の左腕はなくなり、右腕しかなくなった。コウモリ
達はそれぞれ湿った廊下を飛び、散っていった。

その様子を、シャオがぼつと見ていた。まるで夢でも見ている
ような瞳で、うわ言のように尋ねる。

「闇蝙蝠」

「うん？」

「今の……何ですか？ それと、左腕……どこに、いきましたです
か？」

「見てただろ。コウモリに化けて飛んでいったよ。俺の手持ち技の
データ、覚えてないか？ 『使い蝙蝠』^{（こウモリ）} っていう技だよ。ほら」

「……」

しかしシャオはうんと言わなかった。闇蝙蝠は二人を宙に浮かせて
目の前の通路を歩きつつ、説明しだした。

「この技は、化けさせた翼をさらに変化させ、無数の小さなコウモ
リにする技だ。ネズミに化けさせることも出来るが、一度に二種類
は出来ない。どちらにせよ便利だが、一つ問題がある」

「問題？」

「見ての通り、腕が片方なくなることさ。こうなると攻撃力も防衛

力も落ちる。隻腕での戦いは俺、慣れてない。だからイヤなんだ」

「腕は もどり、ますですか？」

「勿論。で……うーん」

闇蝙蝠は宙をにらんだ。

「あつ、扉がある！ だけど うわっ。まずい。誰か出てきた。

男だな。暗怜軍か？」

「え、何言ってるです……か？」

「偵察コウモリがみた映像は全て、リアルタイムで俺に伝わる。今俺は、三十匹が目に移す映像を全て同時に見てるんだ。……それはともかく、俺らが脱走したことがバレたかな」

「その人、動いて……るっ？」

闇蝙蝠の慌てた声を聞き、ピロロも声を出した。

「あやし達の方に、来て、るっ？」

「いや、その場を動いてない。まるで扉を番しているようだ。いや……そうだ。してるんだ。

偵察コウモリ達が見まわっているけど、他に扉らしきものはない。まさかあそこが唯一の出口？ テレポーションが使えない今

「

しかし思案する彼の目の前に、突如、赤い魔法陣が現れた。

26 - 追っ手と破壊(前書き)

素材：<http://www.first-moon.com/>

26 - 追っ手と破壊

> i 1 6 6 5 4 — 5 2 8 <

中からは一人の女性が現れた。まるで絵本でよく見る魔女のような黒いローブに、波打つ長い水色の髪が映えている。右目は藍色で左目が水色のオッドアイ。

その瞳にじつと見られ、闇蝙蝠は多分に警戒して後ろに下がった。「誰だ？」

「リオン」アールグレイです」
女性は落ち着いて答えた。

「私かなぜ此処に来たか、分かりますか？」

「俺らを逃がさないためだろう。……なるほど、追っ手は一人じゃないってことか」

刹那、闇蝙蝠は一言も発さずに攻撃をした。トランプを召還し、投げつける。トランプは刃物の鋭さを持って彼女に襲いかかった。

彼女はさつと避けた。狙いを外したそれは床にグサツと突き刺さり、音もなく消える。

「いきなり攻撃をしてくるなんて」

リオンは一言つぶやくと、手に古風な横笛を召喚した。しかし彼女がそれを口にした瞬間、闇蝙蝠は叫んだ。

「鈍鋭鎌！」

笛から音が流れると同時に、ビュツと大きく右手をふる。途端、どんよりとした空気が裂けて唸りをあげ、凄い勢いで彼女に向かった。だがそれはリオンの笛が出した音に弾かれた。半月状に裂けた空気が狙いを逸れ、天井に勢いよくぶつかった。

衝撃でドーンと大きな音がし、床も壁もぐらぐら揺れる。風は壁を天井を造っていた石を大きくえぐって消えた。えぐられた石はリオンと闇蝙蝠たち三人間に落ち、四人を隔てた。

しかし笛の音はまだ止まず、その場全体になにかビリビリするよ
うな感覚が走った。闇蝙蝠は慌てて、自分をふくむ仲間三人を守る
結界をはった。足元から即座に、透明な半ドーム状の膜が現れて中
の人間を保護する。

安全を確保し、闇蝙蝠はふうと息を吐いた。

「あの女、笛の音で俺の攻撃を逸らしやがった。何だ？ 音で結界
でも作ったのか？」

「結界じゃない。あれは音波の攻撃だよっ」

「うん？」

「魔法で攻撃されたんだっ。あんたの技はそれに弾かれた」

「なるほど。だが厄介だな」

体の前に結界を作ってリオンの攻撃を退けつつ、闇蝙蝠は渋い顔を
した。

「鈍鋭鎌は俺の手持ち技の中で一番威力が強い攻撃技なのに。それ
が弾かれるとなると、うっ手が無いな」

「他に何か、ないのっ？ そうだ。確か超音波使えたよねっ。」

音波には音波で対抗とか……出来ないっ？」

「うん？ ああ……確かに俺も音波は出せる。だが俺のはイルカや
コウモリが使うものと同じで、エコーロケーション反響定位するためのものだ。周囲の
物の位置関係を知ることが出来ても、攻撃には使えない」

「じゃあ、どうしようっ。あたしが せめてあたしが、うごけ、
たら……っ」

「そうだ。一つ方法がある。何も戦わなくていい。逃げりゃいいん
だ。テレポーターションで」

「え？ でも出来なかつたでしょっ。どうやって」

「建物を壊そう」

闇蝙蝠はもう一度技を繰り出した。切り裂かれた空気はえぐられた
天井に向かい、さらに多くの落石を引き起こす。

土煙がたち、視界が遮られる。だが突然、リオンの笛の音と不快
な振動が止まった。

「……おや、生き埋めになったか？」

闇蝙蝠は結界を解除すると、足元に青い魔法陣を出し、空中を、まるで階段でも上るかのようにはたんとあがった。

崩れた石の隙間から、少し高い所でリオンがいるはずの場所を見る。しかしそこにはただ瓦礫があるだけだった。

「いない。まさか本当に死んだのか？ いや、安心できない。念のため超音波で探してトドメを――」
と、彼が言いかけた時だった。

グラリと天井が揺れ、残っていた石が落下し始めた。遅れて転がってきた石が闇蝙蝠を、そして動けない二人を狙う。

「うわっ！」

闇蝙蝠は慌てて、もう一度結界を作って石を防いだ。

「あつぶね！ ひい、危うく直撃するところだった。背筋が凍った」

「何ですか？ 闇蝙蝠、さつき結界はったじゃありませんか？」

「今そこを離れるとき解除したよ。でなきゃ動けないだろ」

「え？」

「結界をはったら、そこから動けないの！ 結界っていうのは、雑に言えば箱みたいなものだ。その中では自由に動けるけど、外に出るためには解除しなきゃならんのだ。」

それに、さつき作ったのは魔法の攻撃を防ぐための結界。今作ったのは物理的な攻撃を防ぐやつ」

「えっと……」

「結界には二種類あるの！ で、それぞれ防げる攻撃が違うの！

……まあ詳しい事は後で教えてやる。生きていたらな。」

兎に角、あの女の音波のせいで、壁が脆もろくなっただな。だがこれは都合がいい。ただし、出る前に左腕を回収しなきゃ」

心持ち、彼は顔をあげて口をぱくぱくさせた。すると空中に小さな青白い魔法陣がどつと現れ、中から先程の偵察コウモリ達が姿を見せた。戻ってきたコウモリはバサバサと羽音をたてながら闇蝙蝠の

腕の付け根に集まり、あつという間に元の一枚の翼に戻った。

「これでよし。あとは崩れるのを待つだけだ」

「待って。どうして……建物が崩すのっ？」

「テレポーターションが使えるようになるからだ」

戻った腕をチラッと見、コキコキと爪を動かして彼はまた技を繰り返した。

「大抵の建物では、緊急時の配慮として、破壊がされると普段は出来ないテレポが出来るようになるんだ」

「そう、なのっ？」

「ああ。火事や災害などがおきた場合を想定し、中にいる人が逃げれるようにしているんだが、もちろん人が壊しても同じこと。」

法律でそういう仕様にしろと、定められているんだよ。もっとも、この牢屋を設計し、作ったのが暗怜軍ならそれを守ってないかもしれない。

だがやってみる価値はあると思う。奴らだって、緊急時に逃げられないのは困るはずだ。全員が全員、テレポを会得しているわけじゃないだろうし」

しゃべりながら闇蝙蝠は何度も技を繰り返した。湿った空気を切り裂いて、無数のカマイタチが出現し、石に亀裂をいれてゆく。同時に彼はメチャクチャな数のトランプとサイコロが呼び出して、縦横無尽にあたりを舞わせた。空中を所構わず暴れるそれらはガンガンと酷い音をたて、石の壁にぶつかり、牢屋の硬い鉄を切り、歪め、破壊を促進する。

三人の頭上にはひっきりなしに石が舞い落ちた。ただし闇蝙蝠が作っていた半ドーム状の結界に弾かれ、三人が傷つくことはなかった。しかし石は傍に落ち、どんどん積み上げられていく。

闇蝙蝠は一旦攻撃をやめてテレポーターションを試した。だが魔法陣の光は誰一人として運ぶことなく消失してしまった。

「くそう。まだ出来ないか。まさか本当に、仕様をしてないのか？」

ああ、えんまがいてくれたらなあ。あいつのハンマーなら、此処

を壊すのも容易かったらうに「

「闇蝙蝠。結界の中にいたままで、テレポって出来ますか？」

「出るのはいけるさ。人がはった結界の中に入るのはいけないけど
ね」

27 - 蠅鬼(かつき) (前書き)

画像：<http://137.eagosis.jp/>

27 - 蠍鬼（かつき）

> i 17118 — 528 <

話しながら、闇蝙蝠は思案していた。瓦礫の積み上がり方によっては、結界をといた時一気に石がなだれ込み、生き埋めになる可能性がある。またグズグズしていると、新しい敵がやって来かねない。考えた挙句、彼は胸につけている青いブローチをこすりながら叫んだ。

「……蠍鬼！ えー、出てこい。蠍鬼！」

およそ呪文とは程遠い声。しかしこすられたブローチは彼の声に相應るように微かに光り、一匹の巨大な蠍マソウを出した。蠍はドサツと音をたて、崩れた石の上に着陸する。

胴体はおよそ三メートル、黒い甲羅は鈍い光沢を放ち、巨大な二つのハサミはまるでギロチンのよう。尻尾はくるりとまるめられ、先には毒のしずくが光っていた。

重々しく、戦車のように巨大は姿はまさしく『化け物』。だが蠍は暴れることなく、静かにその場にじつと居座っていた。

「蠍鬼、建物を壊せ」

闇蝙蝠は命令した。

「出来るだけ派手に。お前の持てるすべての力を込めて建物を壊すんだ」

サソリは何も答えなかった。だがふいに、ビュンツと大きく尻尾を振り、石の壁に打ち付けた。

「ただし、俺らの傍に石が来ないように！」

砕かれた石が素晴らしいスピードでやって来たのを見、彼は慌てて追加命令を出した。サソリは尻尾をおろし、バランスをとりながら立ち上がった。

闇蝙蝠を己の腹の下にかばい、巨大なハサミを天井に打ち付け始

める。グラグラと廊下全体が揺れ、次々と落石が起きた。結界の中でピロロとシャオは慌てた声を出した。

「や、闇蝙蝠っ」

「これ何ですか？」

「ああ、初めて見るか？……そうだよなあ、こいつの事は開示データにも乗せてないからなあ。これはね、蠍鬼かつきっていうんだ。性別はメス」

「どこで手に入れたのっ？」

「『限定一個！早い者勝ち、次回入荷未定』とかいう札をつけられて闇市場で売っていたんだ。ごく普通のサソリの卵に、誰かが違法な魔法をかけてな。見ての通り、巨大に成長するようにしあげた」サソりに作業をまかせつつ、闇蝙蝠は悠々と言った。

「三万円以上したかな。卵を買って、孵化直後から『服従の呪い』を何度もかけ、俺のいう事には絶対服従するようにした。毎日毎日ひたすら俺の声を聞かせて、三十センチくらいになるまで水槽で育てたんだよ」

「待ってよ」

悪びれせず、スラスラとサソリの経歴を言う彼。だがそれにピロロは待ったをかけた。

「それって違法じゃないのっ？所持するのもダメだけど、育てたらもっとダメでしょっ？」

「どうしてですか？」

闇蝙蝠が答える前に、すかさずシャオが聞いた。

「何で違法なのですか？」

「危ないからだよっ。考えてみて、こんな大きな虫が町中を暴れたらどうなると思っ？」

「えーっと……建物が壊れたり、人がケガしちゃいますです」

「そうだよっ。闇蝙蝠、何で育てたのっ。そんなのすぐに捨てなきゃダメじゃない！」

「殺生なことをいうなあ。生き物をついたら最後まで面倒見なさい

つておかあさんに教わらなかつたかい？」

「そりゃそうだけど、こればかりはダメでしょっ！ それに服従の呪いだなんて」

「それ何ですか？ のろ……？」

「相手を自分に従わせる呪いだよっ」

相変わらずシャオはきよとんとしていた。ピロロはぶるつと少し身震いをして言った。

「人はもちろん、意志をもった生物なら何にでも使える。かけられた人は自分の意思に反していても、術者の命令には従わざるをえない。といつても意志の力が重要で、意に反さないことはなかなかやるうとしならしいけどねっ。

でも小さいうちから何度も何度もかけられると、自我が完全になくなつて、言きる屍になつちゃうつて聞いた。……人でも、動物でも」

「おや、ずいぶん詳しいな」

話のネタになつている蠍鬼を見上げつつ、闇蝙蝠は感心したような声を出した。

「なぜそんなに詳しい？」

「……別に、関係ないでしょっ。それより、どこで習つたの、そんな呪文っ！」

「まあ細かい事は気にするな」
軽く言葉をにごす。

「でもねえ、この呪いつて案外使えないんだぜ。蠍鬼は俺のいう事しか聞かないけど、忠誠を誓っているわけじゃない。

声に反応してるから、風邪ひいて声が変わるといふ事まったく聞かなくなる。逆に録音の声でも俺の声なら反応しちまう」

「そういう問題じゃなくてっ」

「あはっ、もしかして『あたし……闇蝙蝠に呪いをかけられて従わせられちゃうかも』とかいう心配してる？」

ピロロの声色を少ししまね、闇蝙蝠はニヒルに笑った。

「安心しろ。繰り返すけど、この魔法けっこう使えないんだ。バレたら逮捕されちまうし、それに、これはあくまで『呪い』だ。呪い返しされたら逆にこっちが支配されちまう。それに、一度や二度かけたくらいじゃ、お前も言ったように被術者の記憶や自我は消せない」

「……………」

ピロロは黙ったが、少し暗い顔だった。闇蝙蝠はそれを見ぬフリをして話を少し変え、続けた。

「で、蠍鬼の話に戻ろう。三十センチを超えると、もう室内で飼う事は難しくてね。だけど魔法をかけられてからほとんどん成長してしまう。どうしようかと考えて、結局、ドレイズ砂漠まで持って行って放置した。そうして野生下で大きくさせている間に俺は封印の方法を探し、マスターし、半年後に迎えに行つて、今はこの通り。忠実なる強くてかわいいペットというわけさ。でもお前ら、この事人に言うんじゃないぞ！ 特に凜には内緒にしてくれ。でない俺、こっぴどく怒られちまう」

「怒られるじゃ済まないよっ」

相変わらず暗い顔で、ピロロはぽつりと言った。

「瀏華隊の隊員がそんなの所持しているなんて。外にバレたらヤバいじゃない……………」

「だから黙っててくれと言うんだ。まあでも蠍鬼を入手したときはまた入隊してなかったからな」

「だけどっ」

「分かっている。だがこいつ、戦場で使えばすつげえ役に立つんだぜ。……………まだ堂々と使ったことは一度も無いけど。だが使わず死ぬくらいなら、使つて捕まった方がまだマシだ」

ボコンボコンと、落ちた石が蠍の甲羅に当たる音がする。だが蠍は痛みを感じないようで、全く意に介さず作業を続ける。

やがて、ガゴンツと音がした。天井に穴があき、上が見える。蠍は出来た穴にハサミをつっこみ、メリメリと音をあててさらにその

穴を大きくした。

「おつ、上の階が見えたね。……そろそろいいかな。で、ピロロ。シャオ。お前らは病院に送るからな。そのつもりで」

闇蝙蝠はもう一度テレポーテーションをした。今度の魔法陣は消えることなくしつかりと現れ、光を発してシャオとピロロを転送した。二人は彼の傍からいなくなった。

「よしつ。蠍鬼、戻れ。俺のブローチの中に戻れ」

再度命令すると、蠍はそのままの体勢を保ったまま、尻尾からスーッとブローチの中に吸収された。後には何事も無かったかのように、石の残骸だけが残った。

28 - 外、宿舎。

「テレポが使えるようになってよかった。……よし、それじゃ俺は外を見よう」

テレポーションさえ使えるなら、同じ建物内にある、例の扉に行くのは容易いことだった。足元に魔法陣の光を浮かべ、闇蝙蝠は瞬時にその場に立った。

だが、そこには先程見た男がいた。年は四十に近いだろうか、瀏華隊のディザートと大差ないように思えた。ただ銀色がかった灰色のパスパサした髪に茶色の瞳。頬にはあばたが多くあり、あまり良い栄養状態を持っていないように見える。また着ているのは淡いベージュのロングコートで、およそ戦闘に向いているとは思えない。

「誰だ」

突如現れた人を見て、男は声をあげた。しかし闇蝙蝠は答えずいきなり攻撃をしかけた。無言のままランプを二十枚近く召喚し、ビュツと男に投げつける。

「うわっ！」

男は慌てた様子で避けた。彼がさつきまで立っていた、まさにその場所にランプはグサグサッと刺さり、そしてフツと消えた。

「何だ、お前は」

「お前こそ何だ。暗怜軍の者か？」

「オレはカルシフェル。お前は、闇蝙蝠か？」

「わかってりゃ話は早い。そこを退け」

闇蝙蝠は威嚇するようにツメをシャツシャツと鳴らした。

「さもないや殺すぞ」

「そうはいかん。此処から先は外への出口だ。出させるわけにはいかない」

「ほお、やはり出口だったか」

「あっ」

「バカめ！」

もう一度攻撃をする。男はすつとんで避けたが、扉からは完全に離れてしまった。

その隙に、闇蝙蝠は扉を破ろうと攻撃をしかけた。思いつきり翼をふって鈍鋭鎌をくりだす。一撃で扉は大きく凹んだ。もう一度やれば壊れる。そう、思われた時だった。

カルシフェルが何か唱えた。とその直後、その体に異変がおきた。右腕から皮膚を突き破り、真っ白い骨が姿を現す。しかし普通の骨ではなく、切っ先が刀のようにとがっている。

彼はその腕を剣のように振りかざし、闇蝙蝠に向かってきた。それを彼がツメで弾き返すと、キンツツという金属がかちあう音がした。

「何だ、これは」

「お前の翼と同じだ」

サツと体勢を整えつつ、カルシフェルはぶつきらばうに答えた。

「お前のその腕は魔手ましゆだろう？ 何かに化けさせる技を持つ手。オレのこれもその応用だ。オレの場合、腕の骨を変化させる。見ての通り、剣みたいにな」

カルシフェルはまっすぐとびかかった。闇蝙蝠はそれをサツと避けたが、その途端頬に何かシャツとこすった。

直線的に伸びていた骨が、いきなり直角に曲がったのだ。腕からL字型に伸びて、男はまるでトンファーを構えているようにも見えた。

「甘いな。骨つてのは伸びるもんだ」

「そんなの知らんツ」

頬をぬぐって闇蝙蝠は唸った。

「じゃあどこまで伸びるんだい？ こういう攻撃にも、対処できるかよツ」

距離をおかんと後退しつつ、闇蝙蝠は腕をあげて翼を構えた。先の鈍鋭鎌と同じ動きに、カルシフェルは防御の姿勢をとった。

体の前で両腕をクロスさせ、その両方から骨を伸ばしてxを作る。だがしかし、カルシフェルを襲ったのは別のものだった。いきなり後ろに無数のトランプとサイコロが現れ、ザーッと音をたてて彼の元に流れ込んだのだ。

「うっ ?！」

「かかったな。バカめ。骨でトランプやダイスは防げまい」

サイコロに叩かれ、カードで切られる。立ち往生するカルシフェルをよそに、闇蝙蝠はもう一度翼を大きく振った。

今度こそ本当の融鋭鎌が炸裂し、から空きだった扉に直撃する。

煙とバタンという音をたてて扉はすつとび、外への道が開けた。

「じゃあなッ」

「こらっ、待て！」

「誰が待つか」

傷だらけになるカルシフェルをよそに、闇蝙蝠は悠々と脇を通って外に出た。

外は石造りの階段になっていた。そしてその上に広がっていた風景は、森。

木々が葉を風にざわめかせ、ぼんやりとした月明かりがあたりを照らしている。夜である今は暗く、不気味だった。

「深多の森か？」

新鮮な外の空気の匂いを嗅ぎつつ、闇蝙蝠は呟いた。

「どうだろう。　と、その前に」

ぐるっと振り返って、今でたばかりの場所を見る。

明かりといえば、出てきた建物内のわずかな光と月明かりのみ。

しかしそれでも外形をとらえるには十分だった。

背の高い木々に囲まれた森の中に、そこだけぼっかりと入口が開いている。今出てきたばかりの場所だが、こうしてみると不気味である。

まだ中にはカルシフェルが残っているはずだが、争う音はなぜか聞こえなかった。死んだのか、それとも逃げたか。

闇蝙蝠は防げまいと捨て台詞を残したが、あの紙切れとサイコロの山から逃れる簡単な方法が実は一つある。

テレポーターションをすれば良いのだ。例えいくつか付属でくっついてくるにしても、そうすれば大きく数を減らせる。

とはいえあの男がその技術を会得しているかどうかは不明だし、またパニックになっていたから思いつくかどうか。何より、逃げて許される立場にいたのかどうかも謎だった。

しかし所詮敵である。闇蝙蝠はあの男のことはさっさと忘れ、現場の把握に忙しんだ。

確証はないが、此处は深多の森であるように見える。彼は少しその場を離れ、森の中に入った。

不気味な森の中をドキドキしながら少し歩く。しばらく進んだところで、闇蝙蝠は再び腕を三十匹のコウモリに化けさせて偵察に向かわせた。そして自分の身を守るために結界をはった。

一瞬で出来るものではなく、じわじわとゆっくり出来る。その分、強度は優れており、魔法による攻撃も物理的な攻撃も防いでくれる丈夫なもの。こうして己の身を守りがてら、彼はコウモリ達による映像の受信を続けた。

まず見えるのは、森。無数の木々が目に入る。あまりに木ばかりなので、彼は意識して数匹のコウモリの飛ぶ高度をぐっと上げさせた。

暗いので、コウモリ達は大半が超音波を使って飛んでいる。そのため見えるのは普段目で見ている映像とはまた違うものだったが、しかし地形は把握できる。そして、思いもよらぬものが見えた。

「建物！」

闇蝙蝠は思わずつぶやいた。

それは紛れもない、人の住んでいる建物だった。だが何かのアジ

トという感じではなく、寮か社宅かといった外見に見えた。

同じような形の窓が、一定間隔おきにある。夜である今は大半が暗かったが、いくつかはカーテンごしに電気がついているのが見えた。偵察コウモリが視覚と超音波の両方を使っている。

とにかく、国が調査を放棄し、何人たりともいないはずの場所に人が住んでいる。信じられず、闇蝙蝠は『此処はもしかして深多の森とは別の森か』と思った。

だが別のコウモリが、見覚えのある場所を映し出してきた。

鷹翼岩。少し遠かったが、月明かりに照らされて、翼を広げた夕カのような形をはつきりと見せている。

あの岩があると言うことは、此処はまぎれもなく深多の森である。そして　　宿舎。

「マジで、暗怜軍の根城……なのかつ?!」

分身のコウモリ達を全て、見つけた建物の方に向かわせる。すると、建物に扉を見つけた。

だが手のないコウモリが扉を開けることは出来ず、中には入れない。

ひとしきり建物をぐるっと見渡した後、闇蝙蝠は全てのコウモリを回収して腕を再生させ、境界をといた。

「暗怜軍の本部　では、なさそうだな。だが住居があるってことは、本部も近いか?　よし、皆に知らせよう」

29 - 報告して電話して。

だがテレポーターションで瀏華隊に戻ろうとした闇蝙蝠は、思わぬ障害にぶちあたった。

テレポーターションが出来ないのだ。先程檻の中でピロロとシヤオを転送するのに失敗した時と同じように、魔法陣は現れてもすぐ消えてしまった。

「あれっ?!」

おかしいと思い、再度挑戦する。しかし結果は変わらない。

「何なんだろう」

首を傾げつつ、場所が悪いのだろうかと思った。少し歩いて移動したが、それでも無理だ。

「変だな。さつきは出来たのに。何だ。まさか……制限? こんな所で?」

建物の中なら制限がかけられているのは理解できる。帝国内ほとんどすべての建物はそうだ。

だが外にこのような制限があるのは信じられなかった。それも、人を退けるのではなく、まるで『逃げるな』と言わんばかりに。

「困ったな。このままじゃ……このままじゃ俺、帰れないじゃないか!」

背中に嫌な汗をかきつつ、闇蝙蝠は空中魔踏で上空に 地上およそ五メートルほど あがってから、もう一度かけてみた。

すると、今度は出来た。森からぱっと消え、建物の 瀏華隊の会議室のある小さなビルだが 前に立つ。

「何だ。上空にあがれば出来るのか? しっかし、妙な……」

呟きながら入口をくぐり、闇蝙蝠はさっさと部屋に戻った。扉を開け、ただいまと声を出す。すると。

「おかえり っ?!」

「闇蝙蝠! 大丈夫ですか?」

「ケガはしてないかい？ ふたりはどうしたの？」

ぱっと仲間がかけよった。それを「さて」と押しとどめ、まず彼は部屋に入った。

部屋の中には武器が色々あった。巨大なハンマーに剣、槍。更に机の上にはタオルや『刀剣磨きスプレー』などがあるのを見るに、待ち時間に手入れをしていたらしい。

また、皆の服装も戦闘スタイルになっていた。シンプルな服装の者もいれば派手な者もいて、それは好き好きだが、各自それぞれ動きやすい恰好である。闇蝙蝠は自席の椅子に腰かけて言った。

「二人は見つけた。先に病院に搬送した。　　つと、ケガはしてない」

病院という単語を聞いて不安げな顔になった皆に、心配するなと言うように付け加えた。

「ただ、俺が見つけた時、二人はのびてました」

途中からは特にリーダーの凜に向かい、普段よりは丁寧に喋る。

「外傷はありませんでしたし、意識はありました。ただ二日間の絶食をしていましたし、薬を何か打たれたそうです。ですが病院で手当てを受ければ大丈夫だと思います」

「でも、いいんですか？　いきなり病院につれていったら、看護師さんたちがびつくりするんじゃない」

ワピチが指摘した。

「それに状況が分からなければ、手の施しようがないんじゃない」

「おっと、そうそう大事なことを忘れてた。電話しないと」

ぱっと闇蝙蝠は立ち上がった。何だろうという顔をする仲間を尻目に、携帯電話を取り出してかける。

「あっ、もしも国立セルタンティー又救急病棟ですか？　あの、先ほど男児一名と少女一名がそちらにテレポで搬送されたと思いませんが。」

「……はい、はいそうです。二人を転送した者です。名前は闇えーっと……よ、夜闇です。電話番号は××× - 8356 - 653

8です。

二人の状況？ ええと、よく分かりませんが……おそらく薬物です。……うーん、薬の心当たりはありませんねえ。いえ、薬瓶などは傍にありませんでした。

とりあえず、対処の方お願いします。あつもうやっていますか、失礼。それと、二人の身柄については、後ほどファックスで送信致します。では」

ピツと、電話を切った。今度はフェイアントの方を向く。

「おい、あんた事務担当って言ってたよな？」

「え、ええ。そうですよ」

「ピロ口とシャオの身分証を病院に送らにやららん。作成を頼めるか？ 書き方が分からないなら俺も協力するから調べて」

「いえ、大丈夫です。病院提出用のそれなら作ったことありますから。分かりました、作成します」

フェイアントはパソコンに手を向けた。提出書類の作成は彼に任せることにし、今度は凜の方を向いた。

「ところでリーダー、さっき俺、マジの名前言っちゃいましたけど、良かったですかね？」

「いいんじゃない、だって病院のスタッフでしょう？」

「まあそうですよ。でも俺らの慣習じゃ、相手に本名を教えるのは、ケンを売られても構わないと思う時、あるいは服従するときだけってなっていましたよね」

「病院の人はそんなの知らないわ。それに『闇蝙蝠です』なんて言ったらすぐに偽名とバレるじゃない。そんな名前の人はいないもの」「そう言われりゃそうですね。……じゃ、名前のことはさておいてと」

闇蝙蝠はゴソゴソと懐に手をつっこんだ。

「リーダー、俺、例のバッチがついたトランプ、一応懐中には入れてたんですが」

喋りながら。バッチのついたトランプを取り出して彼女に渡す。

「これ、GPSが何かついてるんですね？ 俺の位置、確認できました？」

「それが」

「全然なの」

凜と一緒に、えんじえらんが答える。

「フェイアントがずーっと見ててくれたんだけど、映らなくなってる」

「あゝ、じゃやっぱり深多の森じゃ使えないんだ。でも大丈夫。そんな事だろうと思って、俺、建物の外観を見た。でもその前に報告を」

闇蝙蝠は見たことを順番にすべて話した。

鷹翼岩の上で二人の人間に会い、そのうち一人と戦ったこと。もう一人に攻撃をしかけたが、強制転送されてしまったこと。

その後檻を破り、二人を助け、自分は残って調べを進めたこと。

そして建物を見つけたこと。

「宿舎のようでした。中は見ていませんが、感じからして暗怜軍の軍員が暮らしている場所かと。ただし残念ながら、本部というか、その。」

例えば暗怜軍が売買を行っている麻薬を育てる温室とか、研究所とか、あるいは物を作るための施設。そういった感じのものは見当たりませんでした」

「建物に目くらましの魔法をかけていたのではないかしら」

「いや、それは無いと思いますね。夜でしたから、俺の偵察コウモリはあまり目でも物を見ません。明かりの下では目で見ますが、大体は超音波で物体を把握します。」

目くらましは見た目を誤魔化すための呪文です。物体そのものは消せませんから、探知できるはずです。第一建物のような大きなものに呪文をかけるとなると

「ちよつと無理があるわね」

「はい。ですから多分、本部は別の離れた場所にあるんだと思います」

「暗怜軍の宿舎なんでしょう、貴方が発見したその建物は」
春翹諳が言った。

「ということは、暗怜軍がたくさんいるのですよね。しかも分かつたんでしょう……場所が。だったら、そこに攻め込めば。出来ますよね……殲滅が」

「ま、待つて下さい。春翹諳」

だがそれに、ワピチがおずおずとブレーキをかけた。

「いくら相手が暗怜軍とはいえ、宿舎に攻め込んでいいんですか？」
「駄目なのですか？ 今の時間相手は寝ているでしょう。簡単でしょう？ 火をつければ」

「そ、そんな。乱暴です」

「そうですね。燃えますからね……建物が。それを考えると、毒ガスとかいいですよね。」

人は死んでも建物は壊しません。だから、出来ますよ。後からじつくりと……内部の調査。でも毒ガスも細菌も放射能も、省令で使いが禁止されてましたよね。だから火で」

「春翹諳、そりゃ机上の理論ってもんだ。火なんてすぐに消されるだろ」

闇蝙蝠は苦渋の表情で言った。なんて乱暴な事を提案するんだという顔だった。

「あいつらだつて魔法が使えるんだぜ。火なんて水で簡単に消える。せいぜい角が焦げるくらいだろう」

「それじゃ、忍び込みますか。建物に皆で、『せーの』で入って、一つ一つ扉を蹴破つて殺しますか」

「それもダメ。というより、出来ない事はないが、法律的に難しい」
「どうして？」

「宿舎にいるのは暗怜軍の奴らだけとは限らんだろ。家族がいる可能性がある。」

また家族でなくつとも、単にメシ作ってるだけの人や掃除しているだけの人は殺せない。法律で認められてない。そいつらをどうや

って見分けるんだ？」

聞かれて、春翹諳はちよつと考えた。

「……本人に聞くわけにはいきませんか」

「ほお。じゃあ何だ。建物に侵入して、ドア蹴破って、寝ている野郎どもをドツキ起こして『あんた暗怜軍で、これこれこういう罪犯した事ある？』っていちいち聞けってか？」

「あ」

「あじゃない。んなアホな事やってられるか！ いいか、もう一回言おう。俺らは確かに殺人が出来る。だがどういう人ならいいかって、法律で指定されてるんだぞ。」

まあ確かに戦場じゃ、無関係な奴をウツカリやっちまうことがあるし、それが許されちゃうことがある。だがそれは場所が『戦場』だからしょうがないよねって見られるだけだ。住居じゃ多分許されない。

それにだ。ドア蹴破って侵入した先が、さっき言ったように無関係な人の住む場所だった場合は不法侵入罪その他もろもろに問われるぞ。殺傷しなければオーケーという問題じゃない」

「ああ」

「更に、もう一つ問題がある。俺らは本来、殺人をする前に相手に色々聞くことになってるんだ。」

俺らは殺そうとする人に対し、『警察に捕まることを承諾すれば殺しませんか、どうしますか』と尋ね、更に『承諾しなければ殺しますよ、いいですか』と警告する事になっている。

実際そんな面倒な事はあまりしないけど、寝てる間に襲ったら、誰が見たって『聞いてない』事になるだろ。そこを後で突かれるとヤバいだろうが」

「……それでは、どうしましょう。建物の外で騒ぎをおこしてこう言いますか。『瀏華隊だ、大人しくしろ』と。そして『刃向ったら殺すけれどどうしますか』と警告を発した上で、向かってきた人たちを殺りますか」

「まあ、それならセーフかな。言っても聞かずに向かってきた相手なら殺せるからな」

「じゃあそれで」

「ま、待ってください」

まったく勝手に話を進める二人に、ワピチが再度ブレーキをかけた。

30 - 行動力

「もしそれだと、僕たちは戦う事になりますよね」

「多分」

「だとしたら、人数がいりますよ」

ワピチは言う。

「瀏華隊は、もともと十人足らずしかいない隊です。なのに今、戦闘隊員が二人も欠けています。こんなんじゃ、ろくに戦うことが出来ないんじゃありませんか」

「ああ、そういえば」

闇蝙蝠はくるつと周囲を見渡した。そして凜に目を向けた。

「リーダー。本部へ人数増員の要請は？」

「……残念ながら通らなかつたわ」

彼女はため息をついた。

「事情を説明の上、要望を出したのだけれどね」

「この前、ワピチとフェイアントが来たばかりだもんね」

凜の隣で、えんじえらんが仕方なさそうに頷いた。更に、パソコンを叩いているフェイアントも肩をすくめた。

「今はどこも人手不足ですからね……」

「だけど、戦う事が予見されていたのに！」

闇蝙蝠はトントンと机を叩いた。そして、じーっとしている右隣の人間の方を向いた。

「ていうか、ディザートさんは？ しーちゃん。彼はどこへ行ったの」

「知らない」

「知らない？！ 嘘つけ、同居して『知らない』はないだろ。

……あつ、まさかお前、この前街道に行った時みたいに、彼を家に監禁してきたんじゃないだろうな」

「……」

「なんで黙るんだよ。あの人がって瀏華隊の一人だろうが？ この大事に、戦闘に不参加なんて許さんぞ。今すぐ此処に連れてこい。首に縄つけてでも引きずってこい！」

「……」

「闇蝙蝠、ダメよ」

がなりたてる彼とは対称的に、春翹諳は黙っている。それに、凜が口を挟んだ。

「デザイナーさんに無理強いは出来ない」

「無理強い?! 何言ってるんですか、リーダー。あの人は戦闘隊員でしょう?! なおかつ、俺らは戦うための部隊ですぜ。」

なのに戦いに来ないなんて……じゃあ、何のために彼はいるんだ。凜、あんたリーダーなら一言いってやってくださいよ。

相手があんたの倍近い年齢だって、遠慮することはありません。隊員である以上、年齢の差なんて関係なく、リーダーの命令に従う義務がある」

息つく暇もろくにない程早口だったが、闇蝙蝠は、しごくまともな意見を言っただつもりだった。だが、凜はまた首を振った。

「いいの。あの人は戦いはしないから」

「何で!? え、まさか師匠さんって事務担当」

だが言葉を言いかけた時、突然、春翹諳が闇蝙蝠の首を掴んだ。両手で首を正面からがしつとつかみ、文字通り絞め殺さんとしている。絞められて、彼はぐつと声を出した。

「闇蝙蝠、貴方そんなにあの人が欲しいのですか？」

「ぐえっ」

「欲しいですか？」

「むぐ……おい、何しやがる。苦しい! 手を離せ!」

「師匠さんが欲しいですか？」

「た 戦いにおいては、な」

首にかけられる手に、指をかける。呼吸を止めようとしているそれを、引き離そうと必死になった。

「ゲホツ……り、リーダーが言った……だ、る。人手が足りないんだ。一人でも多く人が欲しい、さ。……それとも、怖いか？」

しかしどうにも耐えられず、闇蝙蝠は右腕を、先端に三つの鉤爪がついたコウモリの翼に化けさせた。鋭いツメをがちり構えると、少し動かしただけで春翅諳の手には血がにじむ。春翅諳は若干力を緩めたが、なお手を離そうとはしなかった。

「戦場に出したりしたら、彼が死ぬと危惧しているか？」

「私の師匠さんは死にません、そんなことで」

「なら、いいじゃねえか」

「……」

「何だ。その反応は。……まさかと思うけど、妬いてるのかい？」

あのね、俺はあくまで『戦いにおいて』彼が必要であると言ってるだけだぜ」

「……」

春翅諳は何も言わなかった。だがやっぱり手は離さない。尋常ならざる様子に、闇蝙蝠はもちろん、その場にいる全員が訝しさを隠せなかった。

「し、春翅諳……やめてください」

見かねたのか、ワピチが小声でとめる。

「闇蝙蝠が窒息してしまいます」

「そうだよ。こんなときにケンカなんて、だめだよ」

「春翅諳、手を離して。闇蝙蝠、あんたもツメを離してあげて。血が出てるじゃない」

しかし春翅諳はいう事を聞かなかった。闇蝙蝠も、ツメをどけたら絞殺されそうで動けない。

どうにかしてくれという思いをこめて「リーダー」と、凜を呼ぶ。だが彼女は顔を伏せているだけだった。

いつもなら強い口調で「止めなさい」というのに、なぜか言わない。

「何なのさ。師匠さんに何か」

だがその時、派手になったケータイの着メロに皆飛び上がった。

「もしもし?!」

音の出元は闇蝙蝠の卓上に置きっぱなしにされていた携帯電話だった。

驚いたのか、ちょうど春翅諳が手をはなしたのを幸いに、彼はぱつと手を人型に戻すと電話に出た。

「もしもし、はい闇　　じゃない夜闇です。はい、あつどもお世話になりました。えっ　　治った?!　　もう?!　　はい、はい。分かりました。んじゃ迎えに行きますんで。で……そうそう、ちょうど二人の身分証明書が、その、もうちょっとで……」

チラッとフェイアントを見る。彼はパソコンを打ちながら指を一本たてた。

「あと少しで出来上がります。はい、一分くらい。なので、それ出来たらすぐに行きます。えゝ先程ファックスするって言いましたが、折角なので持っていきます。緊急病棟の外来口に伺えば宜しいですね?　　はい、ありがとうございますッ」

電話口の相手に、見えない事が分かっていながら律儀に『礼』をし、彼はピツと電話を切った。

「なにがあつたんだい?　　だれからでんわ?」

えんまが尋ねた。えんじえらんとワピチも、興味津々に見てくる。

春翅諳は気が逸れたのか、うってかわって大人しくなり、ただ自席でじつとしていた。

静かになつた隣人をチラッと見つつ、闇蝙蝠は言った。

「シャオとピロ口が入った病院からだ。治療が終わつたって」

「もう?　　やけに早いね。大丈夫なの?」

えんじえらんは心配そうな顔をしていた。

「あの二人、薬を盛られてたんでしょ。薬とか毒って、普通の治療じゃ治せないって聞いたことがあるんだけど」

「うむ……まあ、そうだ。だが詳しい事は俺にも分からない。医者じゃないからさ」

闇蝙蝠は軽く肩をすくめた。

「代謝を促進する魔法を使って、解毒作用を早めたのか。あるいは血液の透析でもしたのか？ うーむ……」

「代謝？ 促進？ 何それ」

「肝臓にナントカカントカって魔法をかけて、薬毒物の分解を早める方法。場合によっては逆効果になるみたいけど」

「逆……?!」

「だろ、ワピチ！」

「え？ え……ええと、あ、はい。そうです」

とその時、フェイアントが席をたった。手には一枚の紙をもっている。

「証明書、出来ました。これは……リーダーですか。それとも彼ですか？」

「ああ、彼だ。じゃない、俺によこしてくれ」

一瞬つられて自分を彼と言いつつ、闇蝙蝠はぱつと手をあげた。

「二人を病院に送ったのは俺だからね。よし、じゃ俺、二人を迎えに行ってくる。リーダー、いいですよな？」

「ええ、頼むわ」

「了解。それじゃ！」

待ったもなにもなかった。フェイアントから出来たばかりの紙を受け取ると、闇蝙蝠はその場で一気に、テレポーションで姿を消した。

「闇蝙蝠って案外、行動力あるよね」

彼がいなくなってから数秒後、えんじえらんが少々ぼかんとしたように言った。

「テレポーションが使えるからかな」

「いやあ、それをいつたら、ワピチだっつつかえるじゃないか」

「あ、そっか。じゃあ、どうして」

「えーっと……」

「彼は訓練されているんですよ」

フェイアントが答える。すると春翹諳が少しだけ皮肉っぽい口調で言った。

「上司の命令には素直に　犬のように　従い、かつ、法律という枷かせの中で最大限動き回るように……と？」

「そうですね」

彼は事務的に返事をした。

「闇蝙蝠はうちの国の法律をよく知っています。行動はどこまで許可されているか、されてないか。されているにしても、そのためにはどういう下準備が必要か。さすが、リーダーの資格を持っているだけあります。ただ難癖をつけるとすれば　」

「慎重すぎるってことでしょうか」

先とつて、春翹諳が言う。

「あの年の子にしては、彼、無鉄砲さがありません。鷹翼岩に行く時も、あれこれ危険を考えていましたし」

「あの年って　闇蝙蝠は貴方より年上でしょう？　無鉄砲さに関しては、十分無茶やっていますよ。戦闘隊員として、瀏華隊にいること自体が無茶です」

「……そうでした」

「でも、テレポーターションが使えらると言うのは強いよね」

性格に焦点をあてる二人に対し、えんじえらんは完全にテレポーターションの事に頭がいつているようだった。少しだけ難しい顔をして宙をにらんでいる。

「たとえ建物の中には飛べなくても、中から外には自由……なんだっけ？　詳しいルールはよく分からないけど、便利だよな。あたしも身につけたいな……でも、試験って難しいんだよね？」

言葉の最後に疑問符をつけ、ワピチの方を見る。彼女は首をちよつと傾げて答えた。

「難しい　というよりは、時間がないと出来ない、というべきで

しょうか」

「ワピチはどこでその技術を習ったの？」

「えっと、学校で。僕は治癒師を育成する専門学校の卒業なんです
が、二年の夏休みに一斉講習でとりました」

「ああ、そうなんだ。じゃ闇蝙蝠もそういう感じかな？ あの人は
戦教学園出身だよな」

「でも、あのがっこうの卒業生でも、テレポーターションをもって
ないひとつっているよ。しりあいに、いる」

「そうなの？ じゃ、選択授業とかそんなだったのかな」

「そうかも」

「ていうかそもそも、戦教学園の授業ってどういうカリキュラムな
んだろ」

「さあ？ ぼく、そこのがっこう出身じゃないからわからないや。

だれかいる？ フェイアントは？」

「いえ、私は別の学校です。戦教学園出身者は、この中だと彼以
外いないんじゃないですかね。春翹諳、貴方は？」

「私はディザートさんから教わりました。昔ながらの方法 師弟
という形をとって」

「ああ、それでディザートさんのことを『師匠さん』ってよぶんで
すね」

「ええ」

いつの間にか、全員ですっかり話の花を咲かせることになった。

ピロロもシャオも、病院に行ったから大丈夫。そういう思いがあ
るがゆえの言動だった。だが凜だけは、心配そうに呟いた。

「あの二人、一体何を盛られたのかしら？」

31. プロテイン(前書)

素材：<http://eggovision.baby-milk.jp/toppage.html>

> i17745—528<

一秒とかからず、闇蝙蝠は病院の前に立っていた。目の前には透明な扉があった。

『面会・見舞い客の方はこちら』とあり、下には時間やその他諸注意と思われる事が書いてある。彼は扉に手をかけて中に入った。

入ると、右横に受け付けがあった。事務員と思われる人が顔を出してきたのを見、闇蝙蝠はサツと書類を突き出し、遊園地のチケット売り場で入場券を買うような調子で言った。

「子供一名、大人一名。 が、先ほどテレビポで搬送されたと思うんですが。そいつらの身分証を持ってきました」

事務員は初老の男性だった。いきなり突き出された書類に一瞬不思議そうな顔をしたものの、ざっと見た途端「ああ、はい」と言っ、今度は少し怯えた表情を浮かべた。

「り 瀏華隊の方……ですか」

「はいそうです。あの、もう回復したって聞いてやって来たんですけど、二人はどこにいるんでしょう」

「あ、あの。す……すみません。い、今。ただいまお待ちください」男はわたわたと、手に持った書類を一旦机の上におき、もう一度手に取り、落ち着かない手つきで目の前のパソコンに触れた。

どうにも慌てた様子である。少々怖がっているように見えた。何故こうまでビクつくのかと闇蝙蝠は首を傾げたが、すぐに思いあたった。

瀏華隊は殺人隊でもある。法に則^{おと}つてとはいえ、人を殺している集団だ。一般人にはあまりその存在は知られてないが、病院の事務員であれば知っている。

目の前に、幾人もの人間を闇に葬ってきた人物がいる。そう思っ、てこの老人は怯えているのだろう。そう思った闇蝙蝠は見るにみか

ねて、努めて優しい嘘をついた。

「あのねおじさん。何も怯えなくていいんですよ。俺は瀏華隊の者じゃありません。ただ書類を届けて、二人を迎えに来ただけですよ」
そう言った、老人は『えっ』という顔をした。なんとも分かりやすいリアクションだったが、闇蝙蝠は続けて言った。

「俺はただの使いです。すみませんね、ガラが悪くって」

「あ　ああ、そうでしたか。……ちよっとお待ちくださいね」
老人はほっと息をはき、そして落ち着いてマウスを操作する。そして今度は落ち着いて言った。

「三階の、個別面談室の四番です。テレポーターションは使えないので、すみませんがエレベーターであがってください。

エレベーターはそこ、右を曲がればすぐにあります。後は案内表示が出てますので」

「そうですか、どうも」

「あとこれを」

老人は皺だらけの手で、クリップのついたカードを渡した。面会札と書いてある。

「服につけてくださいね」

「分かりました」

うってかわって態度が軟化した彼に、ゲンキンなものだと思いつつ、闇蝙蝠は礼をしてエレベーターの方に向かった。

歩きがてらクリップを服につけ、を押す。エレベーターはすぐに来た。中に入って3を押し、三階に行く。

「さて、どこかな。個別面会室の四番ってえのは」

エレベーターを降りてすぐ、上を見て、天井からぶらさがっている案内板を見た。

むかって右向きの矢印にはリカバリー室とトイレとあり、左向きの矢印には『個別面会室1〜8番』と書いてある。

案内に従い、廊下を歩く。途中で看護師に出会ってかろく会釈し、

四番の面会室に向かった。

「ここか」

廊下を真ん中として、左右に部屋の扉がある。右が1から4、左が5から8だった。闇蝙蝠は四番を探すと、コンコンとノックをした。「どうぞ」

中からは男性の低い声がした。失礼しますと言ってあけると、そこには元気になったワピチとシャオ、そして白衣をきた五十代前半の男性が椅子に座っていた。

男は　医師だが　闇蝙蝠に少し意外そうな目を向けた。

「こんにちは。うちの隊の者が世話になったようです」

闇蝙蝠は丁寧な礼をした。すると医師は慌てたように椅子から立ち上り、礼を返した。

「どうも、こんにちは。ええと……瀏華隊の方ですか」

「はい。当方は隊長代理です。二人をこちらに搬送した者です。連絡頂いたのでお伺いしました。先程、受け付けで書類を提出しました」

代理というのは勝手な名乗りだったが、後半は嘘ではない。医師は頷き、左上の端をホチキスで止めてある書類とボールペンを彼に差し出した。

「二人に行った治療について、こちらに全て記しました。簡単でいいのでご確認の上、一番最後のページにサインをお願いします」
医師は一番最後のページを闇蝙蝠に見せた。

上からずらずらと文字が印字してある最後に、二行ほどあけて『以上の内容で、確かに確認致しました』と書いてあり、その下に名前を書く欄がある。

闇蝙蝠はざつと書類をめくった。そこには医師の診断とサイン、そして施用された治療法が書いてあった。

「ヒトロドトキシンによる急性薬物中毒」

診断を読み上げる。

「ヒトロドトキシンというのは、毒物の名前ですが？」

「そうです」

「ええと　　どういふ毒物でしょうか」

「テトロドトキシンをご存知ですか？」

医師は質問に質問で返し、闇蝙蝠は分からないと言う前にまず考えた。この名前を、聞いたことがある気がしたのだ。

軍人育成学校に通っていた頃、彼は自然界にある薬毒物を彼は学習させられていた。サバイバルな環境下で、何が食べれて何が食べられないのか、また万が一口にしてしまったら　　敵に盛られたりなど　　どうすれば良いか。それを授業として習っていた。

とはいえ、このセルタンティー又国内ではそこまで過酷な条件には普段おかない。おかげですっかり忘れてしまっていた。

暫し間をおいた後、ようやく一つだけ思い出した。

「フグの毒で、主に卵巣に含まれるものでしたかね。ええと……すみません。あまりよく分かりません。どういふ毒ですか？　名前が似ていますけど、関係あるんですか？」

「ヒトロドトキシンはテトロドトキシンから、人為的に合成されたものです。どちらも筋弛緩薬の一種ですが、特徴がやや違います」

闇蝙蝠の掘り下げた質問に、医師は説明しだした。

「テトロドトキシンの場合、摂食すれば二十分から数時間で症状が現れます。意識が明瞭なまま麻痺は急速に進行し、指先や舌の先端が軽く痺ることから始まります。」

放置すれば運動麻痺が進行し、知覚麻痺、言語障害などがおき、更に進むと呼吸困難及び血圧降下が進行、第四段階では意識の消失、呼吸停止で死亡となります。

しかしヒトロドトキシンは呼吸筋に作用しにくいいため、呼吸困難をひきおこす可能性が低いのです。また、症状の進行も穏やかです。これという解毒薬はありませんが、神経を破す作用はないので、時間がたてば体内で代謝により分解され、無毒化されて排出されます。書面に記載してありますが、治療は魔法でそれを促進させることにより行いました」

「な……る、ほど」

闇蝙蝠の頭の中は、言われた言葉が中途半端にフワフワしていた。少々時間をかけてそれを消化すると、彼はゆっくりと言った。

「運動麻痺があるのなら、動きを封じるにはうってつけの毒物ですね」

「はい」

とりもなおさず書類をめくり、内容を読む。だが書いてる事は専門的な要素を含んでおり、ぱっと見ただけでは理解が難しかった。

仕方がないので、闇蝙蝠は端的に質問した。

「ところで、この二人はもう飛んだりはねたりしても大丈夫なんでしょうか？」

「毒は既に代謝されているので大丈夫です。ただ大事をとるなら安静すべきです。搬送された当初、軽い脱水症状がありましたし、食事もとっていないとのことでした。胃にも内容物はありませんでした。」

特にシャオ君の方は、まだ発育途中です。無理はしない方がいいでしょう」

「そうですね……」

だがそれに、シャオは『子ども扱にするな』という表情をした。闇蝙蝠が書類にサインをすると医師はそのページを切り取り、残りは彼に渡した。

「こちらは持って帰って下さい。お大事にどうぞ」

「分かりました、ありがとうございます」

書類を即座に消去魔法でその場から消すと、闇蝙蝠は丁寧に礼をした。

「さあ、行くぞ」

シャオとピロコを呼ぶと、二人もそれぞれ医師に一礼して傍に来た。三人は部屋を出た。

31・ビドロトキシン（後書き）

*テトロドトキシンは実在する毒物ですが、この小説はあくまでフィクションです。正しい所見をお求めの方は信頼のおける文献などでご検討下さい。

32・出立決定

「ところで、アンタあの後どうしたのっ？」

部屋から離れると開口一番、ピロロが聞いた。闇蝙蝠は非常に簡単に説明をした。

「外に出て、使い蝙蝠の術あたりを探った。宿舎を発見して、帰った」

「宿舎!？」

「まあ、詳しい話はおいおい。……それよか、シヤオ。大丈夫か? すっかり元気になった様子を見せるピロロとは別に、シヤオは黙りこくっていた。闇蝙蝠はその小さな肩をつんつんと突いた。

「やけに静かじゃねえか」

「……あの、闇蝙蝠」

「うん?」

「お会計っていつするですか? 今お金持ってないですけど、しなかつたら利息とかつきますですか?」

「ずべっ」

少年の発言に、闇蝙蝠は思わず本当にこけそうになった。ふらつきかけた体勢をぱっと整え、あのねえと言う。

「瀏華隊に入るときの隊員特典の内容、覚えてない?」

「え?」

「俺らは医療費がタダなの。病気やケガしてもお金がかからないの! ……だよねえ?」

エレベーターを呼びつつ、隣のピロロに聞く。彼女はそうだよと言った。

「瀏華隊 もとい、帝国軍に入っていれば全額国が負担してくれるんだよっ」

「でも、どうして病院の人、ボクが瀏華隊って分かりますですか?」

「俺がさっき医者に言ったこと、聞き逃したかい? 身分証を受け

付けに出したんだってば」

やってきたエレベーターに三人で乗り込み 中には誰もいなかった 更に詳しく言う。

「通称、本名、本籍地や現住所、顔写真、生年月日その他もろもろが書かれた用紙だ。入隊するとき、提出しただろ。その複製を出したの」

「うーん……」

しかし、シャオは首を傾げていた。

いくら頭がよく戦闘ができて、所詮は七歳の子供である。頭で理解するのは難しいようだった。闇蝙蝠は『本人ではなく代理人がやったのかもしれない』と思った。

一方、ピロロは流石にのみこみが早かった。

「それ、どうやったのっ?!」

「フエイアントがやってくれたよ。もちろん、リーダーの許可の上でだが。……いや、心配するな。中身は見えないから。圧着ハガキじゃない、圧着プリントされていたし」

「それ何っ?」

「中身が見えないよう二つ折りになって、ベリっとはがすと二度とくっつかない特殊なプリント。ダイレクトメールとかでたまにあるだろ。盗み見しようとしてもバレるから出来ないのさ」

喋っているうちに、下についてエレベーターが開いた。並んでそこから出、闇蝙蝠は受け付けで面会札を返した。そして、シャオとピロロの肩をがっしり掴んだ。

「さ、帰るぞ」

テレポーションで、三人は一気に移動した。そろそろ夜が明ける頃だったが、外はまだ暗かった。瀏華隊の建物のすぐ前から、すたすたと歩いて中に入る。

会議室に戻ると、そこはあわただしい空気に包まれていた。

「良かった、二人とも無事なのね」

真っ先に凜が出迎えてくれた。シャオとピロロ、ついでに闇蝙蝠の

体をばたばた叩き、確認する。

「動けるかしら？」

「はいです！ ボクもうすっかり回復したです」

「あたしも。完全に元気。今すぐにでも戦えるよっ」

「それを聞いて安心したわ。……で、闇蝙蝠」

突っ立っている闇蝙蝠に顔を向ける。

「やっぱり殲滅せんめつに行くことになったわ」

「へ？ な、何ですか。いきなり」

「デイズトさんこそいないけど、九人そろったから瀏華隊としての頭数はおおよそ確保できたわ。宿舎の外で騒ぎを起こして彼らを起こし、警告を発して向かってきた者を殺し、降伏するとした者は捕まえる。あなたがさっき言った方法だけど、それでいこうと思うの」

「マジっすか」

春翹諳に言われて思わず出した答えを本当に採用されてしまい、彼は間抜けにもぽかんと口を開けた。同じように後からきたピロロとシャオもぽかんとしていたが、これは病院に行っていて話を聞いていなかったせいである。

二人に、凜は手短に事情を説明した。

「と、いうことよ。大丈夫かしら？」

「分かったっ。いいよ、やろうっ」

「そうです！ 今日こそ奴らをとっつかまえるです！」

「お、おい。そんなにアツサリ『やろう』なんて言うなよ。医者に大人しくしてろって言われたじゃないか」

せめてもう一日待って、体が回復するのを待ってから と、彼は思った。だが二人とも『何を言ってるんだ』という顔をした。

「ボクは別に大丈夫ですよ」

「あたしも。……ドクターも、毒は消えたって言ってたしねっ。それに、グズグズしてたら奴らを逃がしちゃうかもよ。もしテレポ避けをはられちゃたらどうするのっ？」

「そうよ」

凜も頷く。

「闇蝙蝠、あなた、あの森でテレポーターシヨンが出来なかったんでしよう。ってことは、彼らはこちらを逃がすつもりはなかったんじゃないかしら？」

「は……はあ」

「それが今、逃げられた。おまけに地下牢の場所を知られて、その情報を持って帰られた。彼らとしてはゆゆしき事態でしょうね。」

貴方が宿舎を見た事を知らないにしても、何か対策をうたれる可能性があるわ。グズグズしていたら、まだ逃げられるかもしれない。二人は……もう、大丈夫なのね？」

再度、彼女はピロロとシャオに確認した。二人はしつかりと頷いた。「だからもう一度、テレポーターシヨンで送ってもらえないかしら」
「あ　え、えーと……」

その時間蝙蝠の脳裏には、さつき森から此処に戻ろうとした時失敗したことが思い浮かんでいた。

なぜ失敗したのか、原因が分からず不安で仕方がない。ただあの時は、上空にあがったら無事に飛べた。また失敗したのは森からこちらへ『帰る』時である。こつちから森へ『行く』時は失敗していない。実際、鷹翼岩には難なく飛べた。

しかし、心の準備というものがある。第一、シャオとピロロの体が彼は心配だった。病み上がりでいきなり戦闘は、流石にキツいだろうと思った。

だが上司の命令には逆らえない。仕方なく、闇蝙蝠は頷いた。

「……分かりました」

「時間は　そうですね。十分くらいで支度したくできるかしら？」

「はい！」

「分かりましたっ！」

何とも不本意な闇蝙蝠をよそに、ピロロとシャオは勢いよく頷いて、ぱっぱと支度にとりかかった。

まずは召喚で動きやすい服を呼び出し、着替える。シャオは茶色の子供用ロングコートを出し、それを着る代わりに今まで着ていた上着を脱ぎ、その場でサツサと着替えた。

ピロロは水色のビスチエに白い長袖のシャツ、はきこなされた紺色のジーンズという、ラフで動きやすそうな服を出したが、流石にこの場で着替えるわけにはいかず、それを持って別の場所へ移動を図っていた。

そんな彼女を一瞬ぼうつと見送りつたものの、すぐに闇蝙蝠も動き出した。元より戦闘のための準備はしてこの場に臨んでいたが、軽く手直しをしようとする。

「そーだ、俺も化粧直ししようつと」
だが何気なく呟いてトイレに行こうとした瞬間、えんじえらんが変な顔をした。

「闇蝙蝠……あんた、まさかアツチ系だったの？」
彼女は苦笑いをしながら、オカマのようなポーズをとった。

「化粧直してことは、今化粧してるの？ 気が付かなかったけど……ていうか、なんでそれを今暴露するわけ？」

「何だそのポーズは。失敬だな！ 俺はオカマじゃねえっつもの。化粧って、あのねえ。女装するわけじゃないんだから。ていうか、お前もすればいいのに」

「あたし？ 何よ、しなきゃダメなくらい不細工だっていうの？」

「そういうわけじゃない。ただ ああもう、いい。喋ってる時間なくなると」

闇蝙蝠は言葉を途中で切り、さっさと部屋を飛び出した。いったい何だと首を傾げる彼女に、えんまが少し苦笑した。

「彼、してたんだね。ぼくはする気ないけどなあ……」

「ねえ、どういう意味？」

「昔のなごりだよ」

えんまはゆっくりと答えた。

「敵に首をとられた時、姿がみにくくないようにって、するんだ。戦教学園をでたひとは、する人がおおいよ。授業でもやり方をならうって、きいたことがある。あと卒業式に口紅とか何か、配られたりするみたいだよ」

「卒業式で口紅?! そんなのアリ? どこで聞いた情報？」

「ぼくの知りあいの卒業生。彼がいったんだ。でも今時、くびをとられることはあまり無いとおもっただけど……どうしてかなあ。だれか、しってる？」

「見栄ですよ」

えんまの疑問にフェイアントが答えた。

「女性はまあさておいて、男で化粧をしているのは大半が学園出身者です。学園を出ているんだぞっていう誇示ですよ。まあ、中には先輩や友人に釣られてっていう人もいますけどね。」

そして、学園出身者は専門的に、かつ集中して戦闘スキルを習っているため、若年者でも強いというのが下馬評ですから」

「そうなんだ？」

「はい。そしてそのメイクですが、普通の女性がする化粧とは結構違います。女の人の場合、肌に乗った明るい色を多く使いますよね。でも彼らの場合はダークカラー、つまり黒や紺といったものを主として使っらしいです。しかも特定のものを、特定のやり方で用いるとか」

「うん。だから外部のひとがマネしても、見るひとが見れば、ちが

「いが分かつちやうんだって」

「じゃ口紅とかも黒なのかな？ 役者さんみたい」

「たぶん。ぼくの知ってるひとは、紺色をもっていたよ」

「へえー……」

えんじえらんは生返事をした。

「あたしは面倒だからさういうの、やろうと思わないけどな。大人になつたらするかもしれないけど」

「貴方は若いですから。スツピンでも十分かわいいですよ。僕はノーマイクの子が好きです」

「ありがと」

にこつと笑う。とその時、首元に白いリボンを、蠍鬼かつきの入った青いブローチで止めつつ、闇蝙蝠が帰ってきた。しかし服装が変わっていた。

元々、黒の長ズボンに、上が青で下が黒というグラデーション色をした、アシンメトリーなロングコートを着ていた。だが今、服を少々変えている。黒いズボンはそのままだったが、左側にコウモリの翼のような段々がついた服になっている。

形はベビードールに似ているが、透け感は無で生地がとてもシツカリとしており、撥水性があるように思われた。

コウモリの翼を模したと思われる部分は黒で、その他は青い。裾には大雑把なフリルがついている。動きを制限するようには見えな
いが、ぱつと見、戦闘向きの服とは思えない。

「やれやれ、忙しい」

彼ははあとため息をついた。すると今まで無言でじーっとしていた春翹詣が立ちあがり、すすつと後ろについた。

だが闇蝙蝠はそれを特に気にせず、自席に戻って足を組んだ。えんじえらんはお帰りといった。

「あれ、唇が黒くなつたね」

「黒いリップを塗つたのさ。……またカマと間違えられると嫌だから言っておくけど、このリップは卒業式にもらつた贈答品だ。」

とても優秀で、保湿効果抜群で粉塵や雨にとても強い。俺は人に噛みつくことがあるから、保護しておかないと後で口を痛めることになる。必須なんだ」

「噛みつく？ あんた、そんな技 持ってたっけ？」

「あまり気にしなさんな。ほとんど使わないから」

「だろうね。犬じゃあるまいし。ていうか、あんた着替えたんだね？」

「ああ。前のは軽さを重視していて、布地が少なかった。二人を探すには身軽な方がいいと思ってたからね。この服は重いけど丈夫だし、血をかぶっても汚れにくく、また、汚れてもすぐ落ちる」

「へえ？」

えんじえらんは戯れに服の裾を持ち上げてみた。するとなかなかの重さがあった。

「重っ！ 何これ、鎧みたい」

「その通り。今『鎧みたい』って言ったね。まさしくそうだ。

戦いに行くなら、やっぱりこれくらいは着ておかなきゃね。お前もそんな恰好で大丈夫？ 随分かわいらしい赤のシフォンワンピースを着ていますな」

「大丈夫。ていうか、これじゃなきゃダメなの。この服、すごく火に強いんだ。あたしは魔法で火を使うから、この服じゃないとダメなの」

「そうか。普通の服だと燃えてイヤーンな事になっちゃ あイタ たたたっ！」

突然、闇蝙蝠は悲鳴をあげた。

「いてえよ！ お前、何しやがる」

声をあげた相手は、先ほど背後にへばりついた春翹語だった。手に輪ゴムとブラシを持って、勝手に闇蝙蝠の髪を結んでいた。

そして苦言を呈する彼に対し、全く悪びれもせず作業を続ける。

「何って、結んであげました。服に合うように」

「いいよそんなの。どうせ戦っているうちに解けちゃうんだから」

「でも髪の毛、盛ってた方がスアンドを付けやすいでしょう？　ほら、あの死んだコウモリみたいな髪飾り」

「死んだコウモリって言うな！　だけど　うん」

闇蝙蝠は少し考え込むような声を出した。

「そういえば、そうだね。盛っていた方がつけやすいし、外しやすい。……とかいって、ちょっと待て。鏡をよこせ。なんか感覚からして、ツインテールになってる気がする」

「なるわけないでしょう。貴方、そこまで髪の毛長くありませんもの」

言いながら、春翹語は召喚で手鏡を出して彼に渡した。映った己の髪をみて、闇蝙蝠はあれっと言った。

「何か、コウモリの翼みたいだね」

「闇蝙蝠っていうくらいです。ピッタリじゃありませんか？」

「ふむ……」

「どれ？　闇蝙蝠、こっちを向いて　あ、本当だ。翼みたい。似合うじゃない！」

「うん。にあってるね。コアラみたい」

「といますか、カタツムリみたいですね。頭の両脇に二つ」

えんじえらんはパチパチと手を叩いたが、えんまとフェイアントは

特に後者の彼は　何となくコキおろした。

春翹語はその間に、赤くて幅が広い紐ひもを取り出して彼の左足に巻いた。くるくると巻きつけ、端はリボン結びをする。

「おい、何をしているんだ」

「包帯です。薬品が染み込ませてあるので、ケガの際の応急処置に仕えます。念のため……ワピチがすぐに見つからない時、これでのぐと良いでしょう。」

ちなみに私はこれ、いつも靴下の上から巻いていますよ。……黒ですけど」

「ありがとう。気持ちは嬉しいんだけど……でも、そんなの走り回ってるうちにとれちゃうよ。でもって、足にひっかけそうで怖い」

「安心して下さい。とれないよう、ちゃんとピンでとめてあげます。えんじえらん、えんま、貴方たちもどうぞ」

「ありがとう」

「ありがとう」

春翅諳は同じものを、戦闘に行く二人に渡した。えんじえらんは闇蝙蝠と同じで赤、えんまはシックな茶色だった。

ついでに他のメンバーにも配布に行く。闇蝙蝠はそれを見て、みんなには先に配っておけばいいのにとコッソリ呟いた。

「忘れてたのかな？ まあいいや。よし、これで準備は終わった。

えーっと……ワピチ、ワピチ！」

彼は声をはりあげ、メンバーの中で自分以外に唯一、テレポーターシオンを出来る人間を呼んだ。

「は、はい」

「お前、準備は出来ているかい？」

「はい。僕はもうずっと前に」

「そうか、それは良かった。……待たして悪いね。よし、それじゃあまず一緒に行こう。で、場所を憶えるんだ。そして二人で皆を手分けして運ぼう」

34 - 戦闘開始!

ゆっくり休む間もなく、闇蝙蝠はワピチを連れてテレポーションをし、陰鬱な森へと戻った。得体のしれぬケモノの叫びと、不気味な木々のざわめきをBGMに、ふかつとした腐葉土をふみしめて立つ。

「此処だ。此処が ううッ」

「どうしたんですか？」

「いやあ、此処でテレポーションすると変な感触が体を走るなあと思つて」

「そ、そうですか？ 大丈夫ですか？」

「いや平気だ。それより、あれ。此処……だつたっけ？ いや、俺の記憶に間違いはない。此処なんだろうな。暗いからサツパリだ」

「あの、本当に大丈夫ですか？」

妙な事を口走る闇蝙蝠を、ワピチは気遣い気味に見た。彼はぶると首をふるると、頭をかかえた。

「体に異常は全くない。だが、嫌だな。テレポーションする度にこの感触。だんだん気味がわるくなつてきた」

一人、体を震わせる。

「この森のせいかな。磁場が変だつていうし。それよか、ワピチ。いいか、テレポするときはこの場所を意識するんだぞ」

「はい」

「じゃ、戻るぞ。皆を運ばなきゃ」

こうして二人はそれぞれ戻った。だが戻るときが厄介で、建物の中には直接入ることが出来ないから、一度その外に出る。

そこから走って部屋に戻り、人をつれてテレポーション。その繰り返しを二人で行い、手分けをして全員を深多の森へ移動させた。

だが仲間を全て運び、さあ行くぞというまさにその時になって、
闇蝙蝠は辺りの景色を見て首をかしげた。そして急に、とんでもな
い事を言い放った。

「此処、どこだろう」

「……え？」

「ちよつと」

その瞬間、指示に従い森と建物を行ったり来たりしていたワピチ
はもとい、全員がええつと声をあげた。

「ええつ」

「ちよつと、いきなり何を言ってるの?!」

「わかつて連れてきたんじゃないありませんか？」

「どういう事ですか？」

「いやあ、あのね」

腕組みをし、きよろきよろと周辺を見渡し、サクサクと草を踏ん
で足元を見る。不可思議な行動をしつつ、闇蝙蝠は仲間を残して一
人だけ数歩先に出た。

「俺らは戦いに来たんだ。だから宿舎の扉の真ん前に飛ぶわけには
いかないだろ。だから少し離れた場所を意識したんだ。景色は見て
たから分かった。なのに、おかしいんだ。『少し』離れた場所な
はずなのに、建物がぜんぜん見当たらない。此処にあるの、木ばか
りだ」

「木にさえぎられて、みえないだけじゃないの？ だってここ、ま
つくらだもん」

えんまがオロオロとしつつ言う。だが闇蝙蝠は否と言った。

「お前、俺の手持ち技覚えてる？ 俺は超音波が使えるんだ。イル
カやコウモリみたいにね。だから暗闇でも建物の位置くらい把握で
きる」

「でも、ちようおんぱつて木をすかして見ることで、できないよね？」
「そりゃそうだが、しかし相手はデカイ建物だぞ。森の中の小さな
一軒家じゃないんだ。なのに、はねかえった音にそれらしいモノは

ない」

「テレポを間違えたんじゃないの？」

えんじえらんが困ったような声をして言う。普段は目立つ彼女の赤い服も、今は暗い森の中にすっかり溶け込み、目立たない。

「此処、似たような景色ばかりだし」

「確かにそうだが、テレポーターが景気の見間違いで飛び違いをすることは無い。だからこれはおそらく、テレポ避けだ。それが多分建物にかかっている」

「でもそれって、テレポーターを部屋に入れなくするためのやつでしょ。普通、建物のすぐ外には飛べるじゃない。あんたいつも瀏華隊の玄関の直前に姿を現すし」

「そう、普通はね。だが調節の如何によつてはずっと広い範囲を遠ざけることが出来る。……テレポーターションっていうのはこういうものですよ、リーダー」

すぐ近くで、文句を言いたげな顔をする凜に勘付いてか、闇蝙蝠はつけたした。

「テレポ避けがかかってちゃ太刀打ち出来ません。しかし、奴らの場所に攻め込む方法はいくつもあります。いくら避ける範囲を調節できるとはいえ、一キロも二キロは出来ないはず。建物は近くにあるでしょう。俺、ちよつと上空に言つて偵察を散らします。上からなら障害物が少ないし、超音波の本領が発揮できる。多分すぐ見つかるはずだ」

「本当？」

「必ずとは言えませんが、おそらくは。でも、そんな事する必要はないかもしれない。此処でテレポーターションすると、そのたびに妙な感覚が走る。最初は気が付かなかつたけど、分かった。まるで誰かに見られているような感じだ。鷹翼岩ようよくがんの上でもそうだったし、今ここでもそうだった。見られている　つまり、もしかして」

「見つけたぞ！！」

突然、大量の赤い光が目の前に現れた。と同時に暗かった森の中に無数の赤い人魂が浮かび、まるでライトアップされたように明るくなった。目の前には黒装束の背の低い人々　おそろくは子供がズラリと並んでいた。

総勢三丁四十人はいるだろうか。皆それぞれ、手に武器と思わしきものを持っている。先頭はオレンジの髪をした青年で、手には黒と赤に塗られた鎖鎌を持っている。

「瀏華隊か。思ったより小粒だな。この人数なら、十分とかならなそうだな」

「暗怜軍ね」

眩しさに目を細めながら、凜が短く言って刀を構えた。右手には白い日本刀、左手には刃が黒い日本刀を持っている。どちらも、うつすらと光を放っている。彼女の愛用の武器で、それぞれ白夜と漆黒という名である。

他の皆も武器を手にし、いつでも飛び出せる体勢をとる。警戒を怠らないまま彼女は短く聞いた。

「闇蝙蝠。もしかしての続きは？」

「　もしかして、この一帯は暗怜軍に見張られてるんじゃないかな。この森の中でテレポを使うと逆探知されるのかも。だから俺らが来たことが分かったら、逃げる可能性もあるけれど、戦うためにあいつらからコツチに来るかもしれない」

「予感は見事的中ってわけね、なるほど」

彼女は短く頷いた。ついで、現れた一群に向かって声をはりあげる。

「一応、確認するわ。あなた達は暗怜軍？」

「そうだ」

先頭の、オレンジ頭の青年が答える。黒いコートに身を包みながら、彼は中に野球選手を思わせる赤のユニフォームを着ていた。

「教えておこう、俺はダークだ。このグループのリーダーだ。そっ

「ちのリーダーは誰だ？」

「それは」

「おにイさん、冗談はよせよ。瀏華隊の幹部も知らないのかい？」
凜を押しつけ、闇蝙蝠が声をはりあげた。

「知らないきゃ教えてやる、俺だよ。闇蝙蝠だ！」

「お前か？」

「ダークは訝いぶかしげに闇蝙蝠を見た。そして隣にいた凜や、ずっと大柄なえんまにチラリと目を向ける。

「そうは見えないが」

「そうかい？」

突然、闇蝙蝠はその場で大きく翼をふった。周りの空気が、まるで刃物を含んだように鎌状となってダークに襲いかかる。

「ッ！」

いきなりの攻撃にダークは息を詰まらせた。とつたに飛び退って避けたものの、間一髪。

「やりやがったな」

ダークはすぐに体勢を整えて鎖鎌をひいた。しかし闇蝙蝠はそのまま飛び出し、今度は直接ツメを相手に振り下ろした。ガキインツと鋭い音がし、ツメと刃がかちあった。

「このエスカルゴ頭め。話もろくにせず襲いかかるとは。瀏華隊てえのは狂犬か、ええ？」

「うっせえよ、誰がエスカルゴだ！ それに、俺はイヌじゃなくてコウモリだよッ。そもそも、こちとらお前らをブツ殺す気で来てるんだよ」

「殺す？ 殺されるの間違いじゃないのか」

「ほざいてる。……しかし、待てよ。ダークって聞いたことがある名だな」

ツメを突きつけながら、闇蝙蝠は記憶を探った。

「そうか、お前、前に関街道にいた野郎だな？」

「だったら何だっというんだ」

「どうしてそんな使いつパシリの下っ端が此処にいるんだ？ レミラはどうした、あんたらの幹部はそういう名前の男だろう？」

耳障りな音をたて、闇蝙蝠は強い力で鎌を押した。押された鎌は宙を飛んだが、ダークは鎖をつかんで上手にそれを引き戻した。

「馬鹿が。レミラ様が来るわけないだろう」

「何で」

「答える義理はない」

「ふん、いけすかない野郎だ」

威嚇するように、闇蝙蝠はシャツシャツと爪を鳴らした。

「だが法にのつつて、警告は念のためしてやろう。今ならまだ間に合うぞ。大人しく捕まるんなら傷つけないし殺さない。だが逆らうなら殺す。……どうする？」

「ほざけ！」

鎖鎌でツメをおさえつつ、ダークは足を蹴りだした。それに闇蝙蝠はひっかかってバランスを崩した。

「おっと」

「オマエら、何ボサツと突っ立ってる？ やれ、攻撃だ。瀏華隊の

奴らを皆殺しにしろ！！」

ダークの一言が、引き金となった。今まで黙って見ていた暗伶軍の下っ端がせきを切ったように一斉に襲いかかってきた。

「絶命光！」

誰かが叫んだ。途端、ジグザグとした黒い光線が発射される。

「/thunder！」

それに対し、シャオが手を前に伸ばして叫んで雷を出した。二つの光は空中でぶつかって派手な光の粉末を散らした。電気コードがショートするような、バチバチという嫌な音が響いた。

「お人形さん、出てくるです」

そのまま、シャオは胸の前で両手を合わせた。オレンジ色の魔法陣がすぐ前の地面に現れ、中からパンダのぬいぐるみが姿を現した。「敵を切り裂いてくるです」

召喚魔法。しかし出てくるや否や、シャオはそれを敵がウジャウジャいる中に放り投げた。

投げられたぬいぐるみは、普通ならばと地面に落ちるはずだった。それが空中で華麗に一回転し、まるで人間のように後ろ足二本で立ち上がった。

「ツメを出して奴らを切り裂くです！」

少年の指示に従い、ぬいぐるみは手から、一体どこに内蔵されていたのかと思うほど長いツメを出した。後はそのまま、ただ事務的に腕を振り回す。

「ギャッ」

狙いも何も、あったものではない。適当な攻撃だったが、人が密集していたのが功を成した。一人、ぱつと血しぶきをあげ、うめき声をあげて倒れ込んだ。

可愛らしいパンダのぬいぐるみが、まずは血に染まった。だがこれは、ほんの偶然が成した技だった。

「紅蓮くれん！」

雷とぬいぐるみで攻撃をしかけるシャオの横で、ピロロは右手にレイピアを、左手に小太刀をもっていた。叫んだ瞬間、レイピアの刀身に炎がまとわりつき、そのまま空中に躍り出る。

細く、ヘビのようにつねる炎は重力を無視してつき進んだ。そのままいけば、それは確実に敵にぶちあたりはずだった。何しろ相手は数が多い。狙いが何であろうと外れることはまず無い。……しかし。

「Barrier Shield」

炎の先にいた敵は素早くとなえて己の身体を透明なボックスで覆った。炎はそれに阻まれ、誰を傷つける事もなくぶわっと消えた。

「結界っ?!」

ピロロは驚いて声をあげた。だがその隣では、えんじえらんが剣を持って同じように炎の技を唱えていた。

「炎華！」

無数の火が、花弁のように空中から舞いおろる。が、ピロロの技と同じく、結界に阻まれて到達しない。

魔法で技を出すのをやめ、ピロロはレイピアを思いっきり前に突き出した。すると刃は結界を通過し、中にいた敵の胸にグサリと刺さった。

「よし、物理攻撃は大丈夫だねっ」

しかしえんじえらんはそれに気が付かず、魔法による攻撃を繰り返した。結界に阻まれた火の粉が、ぱつと飛び散る。

ピロロは彼女の肩を叩いて言った。

「えんじえらん、結界には二種類ある。魔法が効かなきゃ物理攻撃

だよっ！」

「分かった」

言葉に、えんじえらんは短く頷いた。剣をよいしょと構える。

彼女が持っていた剣は非常に大きく、身長とほぼ同じ大きさだ。

柄が赤く、幅が広い刃がついた大剣。ピロロや凜のように一本を片手でというわけにはいかず、両手で持つ。これで何とか動かせるものの、しかし小回りが利かない。

「よいしょっ！」

遠心力を利用してぐるっと振り回す。だが敵もバカではない。用意が出来た時にはもう、さっさと結界を解除して逃げてしまった。

彼女の周りは半径一メートルほど誰もいなくなった。ピロロも、既に移動して傍から消えている。

えんじえらんは仕方なく、重い剣を引きずって移動を試みた。

…だが。

「ギャツ」

悲鳴と同時に暗伶軍が三、四人ほど、まとめてぶつとばされてきた。いずれもドサドサと音をたて、えんじえらんの前に倒れる。

「あれっ?!」

あまりに特異的な光景にきよとんとするえんじえらん。そんな彼女に上から声が降ってきた。

「させておきましたよ……気絶」

「え?」

「任せますよ、トドメは」

声のした方　上空を見ると、そこには春翹諳がいた。空中に浮かぶ、およそA5版ほどの大きさの本の上に乗って立っている。春翹諳は召喚でバラバラと本を呼び出し、猛スピードで蛇行させ、その衝撃で敵を撃っていた。バシッ、ドシッという痛そうな音が鳴り響く。

自らの技の成果を確認しつつ、春翹諳は戦場に似合わぬ物憂げな瞳で、えんじえらんの大きな剣に目を向けた。

「その剣、とても大きいですね。失礼ながら、見えません。今の貴方の手に負えるとは」

「だって、おじいちゃんの形見なんだもん」

「そう。……なら、使いこなせず死なないように」

何気に皮肉なことを言い、すーっとそのままいなくなる。咄嗟にえんじえらんは言い返そうとしたが、それよりも今転がってきた敵の始末をつけることに気を向けた。

「陣炎舞^{じえんぶ}」

片方の手のひらを地面に当てて唱えると、倒れた相手のすぐ下から火柱が立った。相手は体勢を整える間もなく絶命した。

一方、真つ先に戦いだした闇蝙蝠とダークは、激しく戦う周囲をよそに睨みあっていた。一つの獲物を奪おうとするハイエナのように、互いにスキを狙ってうなる。

「オマエ……戦教学園の出身者か？」

「そうだ。よく分かったな」

「黒いメイクをしてるから。だが、学園出身者はお前だけか？ 後

は誰もしてないな」

「さあ。ただメイクやってないだけかもよ」

「ふん」

喋りつつ、間合いをはかる。二人はひたすらぐるぐるしていた。

「だがオマエ、リーダーっていうのは嘘だろう。瀏華隊のリーダーは諸刃使いの女だって聞いた事がある」

「凜のことが。ふふん、どこで情報を得たのやら」

闇蝙蝠はせわしなく爪を鳴らしつつ、向こうにいる凜の方を顎でさした。

彼女は二刀を舞うように回して人をなぎ倒していた。人魂の明かりに照らされて、遠目にも彼女の着ている白い服に、赤い血がついているのが見えた。

そして彼女背中には、前には無かった翼が生えていた。白く輝く

翼　大きく広く、まるで天使のそのようだ。森の中で彼女は地上を走り、また空を飛びながら戦っている。

格段に機動力をアップさせ、彼女は暗黒軍を蹴散らしていた。赤い人魂の明かりに照らされる白い姿は、天が裁きを下したようにも見えた。

見慣れた人のどこか神々しい姿を見つつ、闇蝙蝠は低い声で言った。

「だがあいつが死ねば俺がリーダーになる」

「おや」

意外な言葉に、ダークはニヤリと笑った。

「座を狙っているのか？」

「いいや、全然」

闇蝙蝠は全く何気なさそうに答えた。

「ただ幹部ならとにかく、お前みたいなザコに、凜の手を汚させるのは気の毒だと思ったのさ！」

言葉と同時に、飛びかかってツメをふるう。しかし避けられ、狙いを外したツメは地面を大きくえぐった。その間に、ダークは鎌を振りかざして闇蝙蝠の背後に迫った。

「！」

はっと気が付き、彼は逃げようとした。だが一瞬遅かった。避けたものの十分ではなく、右の翼をバツサリを切りさかれた。

「ギヤ！」

思わず絶叫した。想像していたよりずっと激しい痛みが襲い、闇蝙蝠は転がりながら喚いた。

「いてえ、いてえよッ。何　何だ、これは！」

「ふん、格好つけやがって」

じたばたする闇蝙蝠を、嘲るようにダークは見下ろした。のしかかっつてトドメをさそうと、闇蝙蝠に飛び乗って仰向けにする。右手に鎖鎌を握ったまま、左手で闇蝙蝠の右翼を抑える。

その時、至近距離で刃を見た闇蝙蝠は翼の尋常ならざる痛みのお

けを知った。ダークの鎌にはみぞが彫られていた。そこに無色無臭の粘稠な液体が埋め込まれている。

「硫酸だ」

闇蝙蝠が刃物を見ているのに気が付き、ダークは言った。

「痛いだろう？ そのためにわざわざ埋め込んでいるのさ」

「くそッ……刃が錆びても知らねえぞ」

もう二度とはやられまいと、闇蝙蝠は無傷な左手でダークの鎌を持つ手を抑えた。

「おい、手を離せ」

「じゃあ俺の上からどけ。俺あな、男にまたがられる趣味はねえんだよッ！」

「俺だつてねえよ。オマエの汚い体の上にいる趣味なんて」

「人の事言えるかッ。汚いのはお互い様だろうが、このヴおけえ！」

「誰がボケだ、オマエ立場分かつてるのかあ？」

ダークは翼をおさえる左手をまるめ、傷口にギツと爪をたてた。

「ぎいあああッ」

えぐられ、闇蝙蝠は痛みに呻いた。だが頑としてダークの手を放そうとはしなかった。離れたら、鎌を刺されてオワリだと思ったからだ。

「煩いんだよ。さっさと死ね！」

「ぐう」

しかしダークの左手は闇蝙蝠の首をギリギリと絞めた。このままでは絞め殺されてしまうが、刹那、闇蝙蝠は抑えられた右腕を翼型から人型に戻した。

腕の形が変わり、おさえられていた位置がずれて関節が動かせるようになる。彼は腕を曲げてダークの腕を掴み、ツメをギリッと立てた。

「いでっ」

平爪とはいえ、思いつきりやられればそれなりに痛みを伴う。ダークは顔をしかめ、彼を抑えていた力を弱めた。

「手首、もらっぜえ！」

そのスキに、闇蝙蝠は左手を翼に化けさせた。先についた三つのツメで、ダークの右手首を切り落とそうとする。だがダークも素早かった。ぱつと上からどき、難を逃れる。

闇蝙蝠はすばやく懐に手をつつこんで一本鞭を取り出してビュツと鳴らした。空を鋭く切つて撓しなるそれで、ダークの鎌を持つ手を打つ。衝撃でダークは鎌を取り落したが、鎖を掴んですぐに引き戻した。

「よくも」

だが突然、バキバキツという木が倒れる音と多数の人間の悲鳴が聞こえて、二人とも音の方向に顔を向けた。

「何だ？」

「いったい」

「うおりゃあああああつ！」

ものすごい雄叫びが聞こえた。

「どりゃああ　っ！」

人魂の明かりにくつきり照らされ、立っていたのはえんまだった。巨大なハンマーを持ち、それでめつたやたらに木を倒している。単なる物理攻撃とはいえハンマーは縦横無尽に振り下ろされるし木は倒れて襲いかかるので、暗怜軍の誰も太刀打ちできず、ただ逃げるのが背いつぱいの様子だった。

しかしそんな中、小柄な影が一人残って叫んでいた。

「皆、逃げちゃダメだ。バリアをばれば大丈夫だから。皆、僕の横に並んで！」

「この声は」

まだ高さのある少年の声。闇蝙蝠はその声に聞き覚えがあった。

「アサルトか？　あのガキ、此処に来ていたのか」

「余所見よそみするな！」

左手に鎖を持ち、ダークは鋭く鎌をふるった。だが彼の鎌は、闇蝙蝠の身体をすっぽり囲む、地面から突き出た透明な半球状のものに阻まれた。

「くそつ、バリアか」

「上等だ、アサルトは俺がブチ殺してやる。……だが、その前に」
結界で身を守りつつ、闇蝙蝠はトランプを一枚召喚した。それに何をか呟くと、そのまま地面に投げ捨てる。続いて、その場でテレポーションをかけた。魔法陣の光に包まれ、スツといなくなる。

後にはダークだけが残された。消えた闇蝙蝠を見、慌ててその場に足を踏み出すが影も形もない。

先ほど捨てられたトランプがふわりと舞い上がってピタリと彼の背中に張り付いた。が、ダークは気が付かない。ただ鎖鎌をひいて悔しそうに言った。

「しまった……此処は城の外壁から百メートルの外か。だからテレポーションが出来るのか」

36 - 練習(前書き)

画像：<http://www.first-moon.com/>

> i18836 — 528 <

こうして、ダークの前から闇蝙蝠は姿を消した。しかし彼は、わずかに十メートルほど移動しただけだった。

えんまが倒した木のうち、一番大きなものの影。そこに姿を現して、その場にいた数人をツメでなぎ倒した。居場所を確保し、地面に落ちた血だまりをよそに辺りの様子を影から伺^{つか}う。

少し離れた所に、アサルトがいた。ときばきと仲間^{仲間}に指示を出しながら動き、複数でえんまを追いつめている。

「一対一で戦おうとするな。複数で攻撃するんだ。休まず絶命光を撃つて！」

少年の言葉に従い、黒いジグザグの光が次々放たれる。えんまはハンマーで応戦したが、いかんせん相手の数が多い。多勢に無勢の様子に、闇蝙蝠は思わずばやいた。

「まずい。あのままじゃあいつ、殺される」

「……なら、助けてあげなさい」

「ぎょッ！」

突然かけられた声に、闇蝙蝠は古典的な驚きの声をあげた。声がした方向 頭上だったが、を見ると、およそ四メートルほど上に本に乗った春翅諳がいた。彼はほっと息を吐いた。

「何だお前か。驚かせるなよ」

「腕、ケガしてますね。大丈夫ですか？」

「まあね」

「仲間が殺されると思うなら、出せばいいでしょう……カードスラッシュ」

そんな事を言いながら、春翅諳は指先から無数の赤い糸を出していた。

糸は一本の指につき一本で、合計でキッチリ五本ある。何にも繋がっていないかったが、たった今ちぎれたばかりのようにふわふわ風になびいていた。

また隣には一匹の黒いヤギがいた。大きさは本物のヤギと同じほど。半透明の体は黒煙のようで、穴で開けられたような目をしている。

はかな 儂げなヤギに、闇蝙蝠は首を傾げた。

「隣にいるのは何だ？」

「あててみて下さい」

「ええと、確か……結界の一種だよな」

闇蝙蝠は少し首を傾げ、開示の時に覚えた記憶を呼び起こした。

「自発的な攻撃はしないが、物理攻撃も魔法攻撃も身代わりとなつて全て防ぐ。普通の結果では効力を維持している間、ずっとその場から動けないけれど、これは自由に動けるのが特徴。……で、名前は」

「黒贄羊くろくじやうといます」

「ああ、そうそう。そうだった」

刹那、闇蝙蝠は喋りながら足を空に踏み出した。一步足を出すごとに下に魔法陣が現れ、まるで階段を上るように空中にあがる。

彼は春翹詣と同じ高さに立ち、手をぱつぱつと横に払う仕草をした。すると彼が今いる位置からややズレた場所　アサルトその他がいる場所　に、無数のトランプとサイコロが現れた。それらは縦横無尽に飛び回り、黒い光線からえんまを守る盾となった。

「これでよし」

闇蝙蝠は上空でそれらの成果を確認して頷いた。次いで、ふわふわ浮いている春翹詣に話を続けた。

「お前、どうして俺の居場所が分かった？」

「偶然です。フワフワしていたら見つけました」

「なるほど」

短く返事をし、彼はもう一度、体の前で何かを払う仕草をした。す

るとまた同じ場所にカードとサイコロが大量に現れ、それぞれ攻撃や守備を行った。様子を見ながら次々と武器を送り込む。

「ところでしーちゃん、今日は一体何人殺した」

「何ですか、いきなり。……そういう貴方は？」

「知らない。俺も数えてない。ただダークの相手をしていなかったから、かなり少ない」

「そうですか。……一番に飛び出して行ったのにね。でもまあ、いいでしょう。一昔前ならいざ知らず、倒せばいいという問題でもありませんからね」

「まったくだ。そもそも倫理人道が叫ばれる時代に、この戦いは何だ？」

繰り返し、手を体の前で払う仕草をする。作業を道具に任せつつ、彼はブツクサと言った。

「大体、こちらの人数の少なさったら！ 俺あ学校では『攻めるときは、相手の数の三倍で』って教わったぞ。その大原則をブチ破って、よくもまあ……」

「ところで、刺しましたか。ダークに、トドメを」

放っておくとどんどん文句を言いそうな闇蝙蝠の話を、春翹諳はうまく逸らした。

「確か彼、言っていましたよね。自分がこのグループのリーダーだって。降伏しないのなら、取らなければなりませんからね……大将の首で、殺りましたか？」

「いいや。だが、奴の命はもう無いと思う」

「思う？ それはどういう意味ですか？」

「ダークは刃物の切れ味を持つ大量のトランプに刻まれて肉の塊となったと思う」

「どうにも」

春翹諳はゆつくりと答えた。

「曖昧あいまいですね、言っていること」

「実は、時間差攻撃をしたんだ」

闇蝙蝠は説明した。

「まずはトランプを一枚、特殊な呪文をかけて奴の背中に張り付けておく。すると三分後、トランプは分裂して小さなナイフになってグサグサツ！ 奴は絶命し、この世から去る。こういう理屈さ」

「……そんな技、持っていたんですか」

「開示データには乗ってない。まだ練習中の技だから」

「ってことは貴方、したんですか？ 彼を……練習台に」

「うん」

闇蝙蝠は何の悪びれもなく頷いた。それに、春翅諳はため息をついた。

「もう、何と思っているのですか、戦場を。此処は神聖なる場所ですよ。戦っているんです、人が、命をかけて。良いか悪いかはまずさておき、皆己の信念のもとに戦っているんです。それなのに練習って 家でしなさい、そういう事は」

口うるさく文句を言う。だが闇蝙蝠はサバサバと言った。

「そんなに怒るなよ。大体『神聖なる場所』って何だ。奴らは命を無駄に削ってるだけさ。下手な神格化は趣味じゃないね」

「無駄はないでしょう、無駄は」

「そうかい。まあいいや、どうせ俺らは上司の言う事に従って、飛んだりねたりするだけさ」

なぜか闇蝙蝠は、疲れた中年サラリーマンのような事を言った。そんな彼に、春翅諳は少し同情するような視線を向けた。そして少し声を小さくした。

「嫌ですか？ であれば別の」

だがその時、少し離れた位置から無数の鳥が羽ばたくような音と、耳をつんざく悲鳴が聞こえた。

それはダークの声だった。春翅諳は言いかけた言葉を切り、あーあため息をついた。

「……貴方の魔法、効いたようですよ」

「そうか。そりゃ良かった。でも時間が少し遅れたな。で、野郎は

ちゃんと死んでたか？」

「私に聞かれましたも……見ればいいじゃないですか、自分で」

「見たくないから言っているんだ。多分酷い状態だから」

「貴方、戦闘のプロでしょう。血や死体を怖がってたらこの職業、務まりませんよ。そして重要です、確認も。相手にちゃんとトドメをさせたかどうか」

だがその時、ジグザグと光る黒い光線が一本、闇蝙蝠に向けて発射された。

「！」

危険なそれを、闇蝙蝠は即座に結界で防いだ。一瞬で現れた薄い膜は球状となり、危険な光線から術者を守る。光線は結界にあたってぱつと弾けて消えた。

間一髪の回避を経て、ぶるぶると彼は首をふった。

「ああ危ない。これだから気を抜けないよ。目があと八つくらいほしい」

「ところで、試したいものがあります……私、一つ」

「うん？ どうした、いきなり」

闇蝙蝠はくまなく辺りを見渡しながら、作ったばかりの結界をサツと解除した。そしてトランプを大量に呼び出し、地上の敵に投げつける。

「この野郎！ 誰だ、俺に光線を投げたの。こん畜生、出てこい。タダじゃ済まさん」

いささか乱暴なその様子を眺めつつ、春翅諳は本を数冊召喚した。直後ぱつと飛び散らせ、闇蝙蝠のトランプと同じく地上の敵に投げつける。下からバンバンと、痛そうな音が無数響いた。

こうして攻防を行いつつ、春翅諳は続きを言った。

「貴方が練習をしたように、私も一つ練習をしたい。物体を利用したフォーステレポーテーションを。……知ってます？ 媒介強制移動魔法いどうまほうつて。物に魔法をかけておき、それに触れた者を指定の場所へ移動させる魔法ですけれど」

「聞いたことはある。だがイマイチ使えない方法だと思つてた。だつてそれ、触れた人を指定の場所に飛ばしちまうだろ。誰でも移動させてしまつから、悪戯くらいしか使い道が思いつかない」

「そうですね。でも、それを私……してみたくて。普通のテレポーターションは出来ないけど、これだけは」

春翹諳は言いながら、また本を召喚で呼び出す。B5ほどの大きさで、茶色い背表紙のごく普通のもの。

また投げるのか　と思いきや、彼女はそれを大事そうに手に持った。いつにない動きに闇蝙蝠は首を傾げた。

「何故本を？」

「私、出来るんです……本を媒介に使えば、大概の魔法は」

「それ本当か？」

「少し誇張しました」

「だろうね。何でも出来るわけじゃないよね。まあ　ウン、そうだなあ。やってみればいいじゃないか」

闇蝙蝠は促した。

「するなと言える身分じゃないし。ただし、仲間を飛ばしたら承知しないぞ。うちはただでさえ人数が少ないんだから」

「分かつています」

早速、春翹諳は本を片手に持って呪文と思わしき言葉をブツブツ唱えだした。

このままいけば、闇蝙蝠はじーっと春翹諳のやることを観察できたかもしれない。だがその時にはもう、二人がいる位置は敵数名にバシっていた。

無理もない。これだけ派手に上空で暴れて、見つからないわけはない。特に闇蝙蝠の空中魔踏は目立ち、彼は格好の標的になってしまった。

あちこちに散らばっていた暗伶軍が、じりじりと集まってくる。

呪文を唱える声と共に、ジグザグの黒い光線がしつこく放たれた。動く結界ことヤギがいるので春翹諳は無傷だが、闇蝙蝠は堪らない。

結果を出して片っぱしから防いだが、ついに耐えかねて彼は一人、下に降りた。

37 - 戦場の光景(前書き)

画像：<http://sozaien.com/>

37 - 戦場の光景

> i18849—528 <

だが地上に完全に降りる前に、闇蝙蝠は攻撃をしかけた。ダークに切られた右の腕を大きく振って、びゅんツと風を切り裂く。

裂かれた風はカマイタチとなり、黒い雷を片っぱしからうち消した。彼は技を連続で出し、雷ごと敵を中距離から切り捨てた。その場にいた全員を殺し、自分の安全を確保する。

地上に降りると、死体が無数出迎えた。どれも体にはザツクリと切られた傷があり、未だドクドクと血を流しているものもある。またいくつかは目を見開いたまま死んでいた。空虚は瞳は驚きの表情をとったまま固まっている。

闇蝙蝠は気分悪そうに、そのうち一つを足の先で避けた。

「……大人しく逃げるか降伏を示せば、きっと死なずに済んだのに」足を一步踏み出すと、靴の下でグチャリと嫌な音がした。死体の油と血が混じった泥が、歩くたびに悲鳴をあげる。靴底から伝わってくる感触が気味悪く、闇蝙蝠はよっぱど空中魔踏を使おうとしたが、副産物として出てくる魔法陣の光が気になって止めた。

折角敵を退けたのに、目立つとまた狙われる。何しろ相手は数が多い。そして今は、血や泥より気にする事が一つあった。

「傷、なんとかしなきゃ」

先ほどダークに裂かれた腕の傷。刃物の溝に埋め込まれていたという硫酸は、流れる血によって既に洗い流されたかもしれない。しかし傷そのものが治ったわけではない。黙っていてもズキズキするが、動かせば特に痛む。しかし攻防をするためには嫌でも動かさなければならぬ。

彼はワピチを探そうとした。瀏華隊の中で唯一、きちんとした治療が使える人。……しかし彼女の居場所が分からない。

普段なら無線か何かで連絡を取る所だが、此処は方位磁石も、電話も通じない深多の森。一応闇蝙蝠は携帯電話を持っていたが案の定、画面をあけても表示は出ない。連絡手段は何もなかった。

彼は今一度辺りを見渡した。辺りに自分を狙う敵がいないことを確認し、簡易的な結界を作る。透明な盾の中で、左足につけていた紐ひもをほどいた。

春翹諳にもらった『薬品がしみこませてある』という赤い包帯。闇蝙蝠はそれで、腕をぐるぐると巻いた。あまりうまくは無かったが、これである程度傷が保護される。次いで結界を解除し、目立つ事を承知でもう一度、空中魔法で上にあがった。

闇蝙蝠は頭の中で計画をたてた。視界を広くとれる上空から、まずは戦況を把握する。そして敵を倒し、ワピチを探してしっかりと傷を治してもらおう。

「しかし通信手段がないと不便だな。此処が深多の森でなければ、無線か何かを召喚するのに。……でもどうせ、この森じゃケータイと同じく使う事は出来ないだろうな」

タツタツと上がっているうちに、彼の高度は先の二倍近くになった。そこから改めて見下ろすと、一帯に奇妙で不気味な光景が広がっていた。

暗い森に、明かり取りの赤い人魂がフワフワ浮かんでいる。薄気味悪い光景の中、怒声に罵声、呪文を唱える声がひっきりなしに続く。木の多くはなぎ倒され、無残な骸と化している。一部でまだ立っている木もあるが、合間に飛び交うのは黒い光線に炎、水、雷。

お世辞にも気分いい光景ではない。闇蝙蝠は一瞬無心になった。人の命の儚さを悟った気分になったのだ。だがそれも一瞬で、興味は浮かぶ人魂に向けられた。

「何だろうね、これは……」

暗怜軍が、出てくるときに出したもの。一体何という魔法なんだろうと、闇蝙蝠は考えた。そして深多の森という特殊な環境の元、暗

怜軍が開発した特殊なものであると結論づけた。

元々、敵が自分たちのためにつけた明かり。彼は頭を切り替えて、今度は目視で辺りを見た。鷲や鷹のように視力が良くなくと、動きを見れば人が誰かの見当はつく。服が赤く、大きな剣を持っているればえんじえらん。白くて二刀を持っていれば凜。ハンマーがあればフェイアントである。

こうして確認しているうちに、闇蝙蝠はワピチを発見した。えんまが倒しただろう木の影、シャオの隣にちょこんと座っている。少年の腕にわずかにピンク色の光をあてていて、どうやら治癒をしているらしかった。

「シャオの奴、怪我をしたのか？ …… 可愛いそうだよ。あんなに小さいんじゃ、まだ物の善悪すらよく分からないだろうに」
チツと舌打ちをして、少しだけ同情の念をかける。闇蝙蝠は即座に、その場にテレポーターションをかけた。

今度の移動も無事成功し、あっという間に、彼は目的とした場所についた。地面の上にスタッと降り立って、闇蝙蝠は二人に軽く挨拶をした。

「よう」

「きゃっ！」

「や、闇蝙蝠ですか?!」

魔法陣の光という前触れこそあれど、ほとんど『いきなり』に姿を現す。あまりの唐突さにワピチはきゃっ悲鳴をあげ、シャオは驚いてビクツと体を震わせた。

「驚かさないで下さいです。て、敵かと」

「ふふん、まあ案ずるな」

そう言っただけで彼はワピチに近寄ろうとした。だがその瞬間、何も無いのに行く手を阻まれた。

「ん？」

闇蝙蝠はコンコンと、ノックするような仕草をした。すると確かに、

すぐ前に硬いものがあつた。よく目を凝らすと、ガラスかプラスチックに似たものがある。

「結界か。……ワピチ、解除してくれ。でないと俺がお前に近づけない。代わりはちゃんと作るから」

「はい」

彼女の返事を聞きがてら、闇蝙蝠はひよいひよいと手を動かした。すると地面からもやもやしたものが出て少しずつ成長し、三人を囲んで半ドーム状になってゆく。

「んう、今……結界を作っていますですか？」

結界は透明だが、出てきた端は多少色がついている。若干青みがかつたそれを見て、シャオが興味深げに首を伸ばした。

「できるの、遅いですね」

「闇蝙蝠。これは魔法も、物理攻撃も、両方はじくためのものですか？」

「そうだ。治癒の間に襲われたら大変だ、ちゃんとしたのを作らなきゃ。……本当は外からコッチが見えないのを作ればいいんだけど、そうすると仲間が治癒師　ワピチ、お前のことだぞ　の居場所を突き止められなくなるからなあ」

「分かりました。えっと……それが出来たら、僕が作ったのは解除します」

「へい」

こうしてたつぷり十秒ほどかけ、新たな結界が作られた。それと入れ替わりに、ワピチは先ほどまで自分とシャオを守っていた結界を消した。闇蝙蝠はふうつと息をはき、傷ついた翼をワピチの前に出した。

「治癒を頼めるかい？　硫酸をつけた鎌でえぐられた傷だ。春翹諳にもらった包帯を巻いてある」

「応急処置はしたんですね。　って、えっ。硫酸!？」

「まあ、ひよつとしたら塩酸か硝酸かもしれないが」

「そ……それは大変です。すぐに」

ワピチはそつと包帯を剥がし、両手を彼の傷にかざした。暖かなピンク色の光が宿り、傷が癒されていく。闇蝙蝠は少しくすぐったそうな顔をした。

「かゆいね」

「ごめんなさい。も……もうちょっとです。毒をすいとりますから、時間がかかります」

「まあいいさ。ここは安全だ、焦らず頼む」

傷はじわじわと治っていった。闇蝙蝠はとられた包帯をもう一度手に取り、片手で器用に足に巻きつけた。だがその途中で、シャオがきりつと立ち上がった。

「ワピチ、闇蝙蝠。ボクもう行きますです。まだ敵が残っています。倒さなきゃ」

「へ？ お　おい待て。何だよいきなり。ちょっと待て」

「えっ？」

「今お前が移動したら、この結界壊すことになるじゃないか。いいか、結界っていうのは外からの攻撃には耐性があるけど、中からの攻撃には弱いんだ。」

出ていくのは構わないし、可能なことだ。だが折角作ったものを、みすみす壊さないでくれるかい？」

「じゃあ、ボクどうしたらいいですか」

「テレポで送ってやる。ほれ！」

あっという間もなく、すぐにシャオは結界の外に追い出された。きよるきよるとする少年に、闇蝙蝠は中からヒラヒラと手をふった。

「オタオタしてるな。そこはもう危険区域だぞ。さあ行け、戦ってこい」

「はい！」

シャオは四の五の言わなかった。そのまま、ぱつと駆け出して姿をくらます。すると木の影から、彼の持ち物であるパンダのぬいぐるみが猛スピードで後を追った。

さつさと消えた彼に、闇蝙蝠はふうと息を吐いた。

「やれやれ、元気がいいね」

「そうですね。閉じ込められて、あの、ひどい状態になってたって……聞きました、けど。大丈夫なんでしょうか？」

「あの様子を見る限り、大丈夫じゃないのかねえ。しかしハードス ケジュールだよ」

その時、すつとピンク色の光が消えた。闇蝙蝠の傷の手当てが終わった。

ぱっくりとあいた傷口は、今や完全にふさがっている。露わになっていた肉も流れていた血も全てなくなり、痛みも無い。彼はバサバサと腕を振った。

「おお、ありがとう。そいじゃ俺も戻る。結界はそのままにしておくから、また誰か来たら治癒を頼むね」

「はい」

「それじゃあ！」

端的に彼女に言葉をかけると、闇蝙蝠は再び、テレポーターションでさっさと姿をくらませた。

38 - 無情(前書き)

画像：<http://neo-hi.meism.net/>

> i19110 — 528 <

「しかし深多の森っていうのは不思議な場所だ」

移動した先はおよそ五十メートルほど前だった。人魂の明かりにくつきり照らされ、人だったものが至る所に転がっているのが見える。流れる血で地面はベツタリ濡れており、合間に破壊された木々。相も変らぬ光景である。闇蝙蝠は一人ばやいた。

「どうしてレポが使える場所とそうでない場所があるんだ？ 暗
怜軍と何か関係があるのか？ …… ああ、しかし疲れた。もう俺、
動きづめだからなあ」

そんな事を言いながら、サクサクと草を踏みしめて歩く。だがふいに、重苦しいビュツという音を間近で聞いた。

「ひっ?!」

「危ないじゃありませんか」

続いて、フェイアントの声。

音の主は槍だった。戦場での攻防に使われるそれは、持ち主の身の丈ほどもある大きなものである。全体、特に刃がベツタリと血に濡れて、実におどろおどろしいモノになっていた。闇蝙蝠は『血肉と脂で切れ味が悪くなりそうだ』と心の中で呟いた。

「ぼつつとしてちゃいけません。狙われますよ」

そんな彼をよそに、スマートに台詞を吐きながら、フェイアントはくるつと槍を回した。

「それと、少し離れて下さい。さもないと、とばっちりを喰らいますよ。私の槍は重さがあります。柄であっても、下手したら頭蓋骨が割れますよ」

「分かった」

忠告に従って闇蝙蝠はササツと後退した。が、途中でチラリと槍が

来た方向を見た。

その地面には、ついさつき出来たらしい肉塊があった。胸のむかつく臭いを発し、無残に倒れている。しかも一つではなく三つもあった。いずれも大身槍おおみやりの直撃を受け、肉から砕けた骨を飛び出させ、地面に折り重なって倒れている。

「……」

闇蝙蝠はぶるつと頭を振った。疲労のせいか若干飛びかけた意識をハッキリとさせ、ついでに凜の居場所を聞く。

「なあフェイアント、リーダーがどこにいるか知らないか？ 指示を仰ぎたいんだけど」

「さあ。さつき見かけましたが、今は……つと、失礼！」

刹那、黒い光線が飛んできた。フェイアントは槍でそれを弾き、光線が来た方向に走って行った。闇蝙蝠も参戦しようとしたが、その時、背後に嫌な気配を感じた。

「何だ！」

サツと横つ飛びをし、体勢を整える。

「ちっ、見つかったか」

また新しい暗怜軍の人間が一人、さつきまで闇蝙蝠が立っていた場所のすぐ後ろにいた。おそらく闇蝙蝠と同じくらいの少女で、手には大ぶりのナイフを手にしている。彼女はその刃の先を彼にキツと向けていた が、体は震え、刃の軸も安定していなかった。

「素人か」

思わず闇蝙蝠が呆れた声を出すと、相手は大声で違うと言った。だがその声は上ずっており、お世辞にも玄人こころの声とは言えなかった。

すぐにツメにかけるのが忍びなく、闇蝙蝠はどうせムダだろうと思いつつ、一応聞いた。

「命を粗末にするもんじゃないぜ。大人しくすれば殺さないが、しかしその言葉の途中で、相手はナイフを手に闇蝙蝠に襲いかかってきた。彼の三本のツメに対したった一つの刃で、無謀にも飛びかかる。」

襲われて、闇蝙蝠はやむなしと判断した。無言でサツと身をかわして右腕を高くあげ、相手がよろめいた所でビュツと振り下ろした。「ふギャツ！」

勢いをつけたツメで、相手の胴体をばつさり切り裂く。さすがに両断とはいかなかったが、背中から腹にかけて大きく抉れた。次いでツメを表に返して喉を狙う。ばつと赤い液体が飛び散り、ツメと翼が濡れた。

殺してしまうと、闇蝙蝠はそのまま歩き出した。

「さてと、どうするか……」

たつた今殺つたばかりの相手のことは、もう頭には無かった。しかしふと、妙な動きをしている人物を見つけた。

暗怜軍の一人である。だが攻撃は全くしていない。戦う仲間を尻目にコソコソと、辺りを見ながら歩いている。

不審な動きに、闇蝙蝠は眉をしかめた。そして即座に、何かの偵察兵ではないかと疑った。彼は腕をぱつぱと振り、使い蝙蝠を一匹だけ出してその人物の周囲に飛ばした。

コウモリに先走りさせて映像を受信すると、相手はまだほんの少年だった。おそらくアサルトと大差ない年齢で、ふわふわとした緑色の髪の毛をしている。視線の先にはハンマーをふるうえんまと飛び出して戦いを挑む暗怜軍があったが、それを見る表情は血の気がなく、怯えと恐怖を含んでいた。

「逃げてるのかな？ それとも……」

使い蝙蝠を呼び戻して元の腕にし、その少年の元に行く。

テレポーションは使わない。ただ飛び出して走り寄る。何の捻りもない近づき方ではあったが、ただ彼は少年の死角を選んで走った。そして相手が気づいた時には、闇蝙蝠は左手で、相手の襟首をがしつと捕まえていた。

「おい」

右のツメをぐいっと首にあてると、相手はヒツと悲鳴をあげた。

「な……何、ですか」

「何処へいく？」

逃げようとするのを抑え、聞く。だが少年はぶるぶると震え、言葉もままならない様子を見せた。「あ」だの「う」だの、意味をなさぬ声を少しあげた後、ようやく分かる言葉を喋る。

「だ、誰　です、か？　ダーク兄さんじゃ、ないですよね」

「ダーク？　おいおい、馬鹿言うな。俺あいつよりイイ男だろうが。……といっても、この体勢じゃ分からんか」

闇蝙蝠はにこりとませず冗談を言った。

「お前、何処へいく？」

「どこって」

「逃げるのか。それともレミラを呼ぶ気か？　もし呼ぶのなら、俺もそこに連れていけ」

「ち、違います。僕は　ほ、僕は……もう戦いません。助けて下さい」

少年は震える声で行った。

「ダーク兄さんが死んだって、さっき仲間から連絡が入りました。隊長がいなきゃ、もう……た、戦ってたでしょうがない。今だって皆、指示もなしに適当に飛び出して、それで殺されているんです。こんなの……ないでしょう?!」

お兄さん、り　瀏華隊隊の人でしょう？　僕はやらない。逮捕するなら、していいです。でも……お、お願いです。命は助けて下さい」

「……」

闇蝙蝠は何も言わなかった。その無言を否定ととったのか、少年はますます必死に懇願した。

「助けて下さい！　僕はもう戦いません。僕……知ってます。瀏華隊は、警察では太刀打ちできない凶悪な犯罪者達を、殺人をもつて征伐する国営組織だって。でも、降伏する相手を殺すことは出来ない」

「ほお」

その時、闇蝙蝠は辺りを見渡し警戒をしている最中だったが、若干感心した声をあげた。

「法律をよく知ってるねえ。机上でしか実践じっせんできなさそうな条文を」「お……お願いです。僕は戦いません。貴方が瀏華隊りゅうかたいっていうなら、従います。だから」

「闇蝙蝠」

ふと、右横から物憂げな声が出た。闇蝙蝠が声の方向を見ると、そこにはまたも春翹詣がいた。地面に降りているようだったが、よく見ると本を浮かせてその上に乗り、地面スレスレに浮いている。隣には相変わらず、黒いヤギを連れていた。

「またお前か。何でそんなに俺にくつついて来るんだ。悪いけど、今こっちは取り込み中で……」

「くつつかないと貴方、すぐテレポで消えてしまっじゃありませんか。見つけたらとにかく傍に寄らないと。……そんな嫌な顔しないで下さい」

春翹詣は若干懇願した。

「仕方ないでしょう、私達……暗怜軍と違って無いんですから、互いに連絡する手段。それより、早く殺しなさい……その子を。面倒になりますよ、生かしておいたら」

「え？」

「無いでしょう、案ずることは……何も。どうせ、いませんよ。その子の言葉を聞いている人なんて、此処には誰も」

残酷な言葉を吐く。それに、少年は心底怯えた声をあげて暴れた。

「そんな！ い イヤだ。僕は死にたくない！！ 助けて、お願い。なんでもするから殺さないで……」

暴れた拍子に、闇蝙蝠のツメが少年の柔らかな皮膚を切り裂き、血を流した。彼は両手で闇蝙蝠のツメを持ち、喉はからそれを剥はがそうと力を込めた。

しかし、闇蝙蝠はピクリともせず黙っていた。少年を殺そうとはしなかったが、離そうともしない。じっと思案している様子に、春

翹諦は虚ろな瞳で首を傾げた。

「殺らないのですか」

動かぬ彼をよそに、手に新しく本を呼び出す。出した本の背表紙を開くと、ページ中央からよきつとペティナイフが現れた。

黒い柄に、銀色の刃。本来なら平和に果物や野菜を切るためのソレを、春翹諦は人に向かって、慣れた手つきでサツと構えた。

39 - 枷の中の殺人(前書き)

画像：<http://ciel.ohaya.to/>

39 - 枷の中の殺人

> i19922 - 528 <

「なら私が殺ります」

春翹諳は短く言って、少年に狙いを定めた。光がなく虚ろな瞳が、やけに人間味なく見えた。

嬉しそうな様子も、悲しそうな様子もない。いたって素のままです。起伏ない様子は『新聞をもってきて』と言われて取ってくるのと大差なかった。

「イヤだ。やだよう！ 僕、死にたくない」
身の危険を感じ、少年は渾身の力で喚いた。だが、最後まで言葉を言えなかった。

勢いつけて振られたナイフが、ドスツという鈍い音をたてて胸につき刺さる。少年はぐつと息を詰まらせ、言葉を切った。

刹那、闇蝙蝠はぱつと手を離れた。少年は少しフラツとしたかと思つと、すぐに地面に倒れ伏した。数回ピクピクと痙攣し、何かにするがうように手をもがかせたが、すぐあつけない程すぐに息絶える。

「心臓を直撃」

ついさつきまで生きていた『死体』を見おろし、闇蝙蝠は冷静に言った。

「上手に殺すな」

「そうですか？」

「ああ、そう思う」

彼はそのまま踵を返した。死体を一瞥しただけで、後は何も手を出さない。

春翹諳もその後についてきた。本をスケボーがわりにし、すーつと宙を漂ってくる。

歩いていると、敵が黒い光線を放ってきた。闇蝙蝠を狙った一本に対し、春翅諳は本を投げて応戦した。本はバシツと音をたてて黒い光と焦げ臭いにおいを放ち、無残に散った。闇蝙蝠はほっと一息つきながら、焦げた紙片を見た。

「勿体ないことをするね」

「なら対処して下さい、ちゃんと、自分で。結界もなしにウロウロしていたら危険です。憂慮しますよ、貴方の命。さつきも助けられたいでしょう……フェイアントに」

「仕方ないだろ。俺はお前と違って、歩きながらも使える結界を作れないんだ。だけど俺だってプロだ。心配されなくても自衛はする」

「本当ですか」

春翅諳は本を何冊も空中に舞わせつつ、いささか心配そうな顔を向けた。

「しかし……どうして殺さなかったのですか、あの少年を」

「考えてた」

本が奏でるバンバンという痛そうな打撃音と、時折走る黒い光線を音響効果に、闇蝙蝠は短く答えた。

「俺らは国に雇ってもらっているイヌだからな。法律は人一倍、遵守する必要があると思つて。それに則り助けるべきか、あるいはお前が言うように殺すべきか」

「……まるで役人のようですね」

「もつとも、あのガキが生きようと死のうと知ったことじゃない」
サツと身をかがめ、飛んできた黒い光線を避ける。狙いを外した光線は横の木に当たり、バチバチツと音をたて焦げた臭いを発した。
黒髻羊に守られている春翅諳も、一瞬肝を冷やした顔をした。

「しかし、黒髻羊って便利だね。動いていても守られるんだもん。俺にも頂戴」

「無理です。これは自分にしか出来ないんです」

「そうかい」

闇蝙蝠はトランプを無数呼び出し、空中をばつと羽ばたかせた。光線が放たれ方向に飛ばすと悲鳴が上がり、無数の白い紙の合間に一瞬赤いものが飛び散った。

いともたやすく残虐行為をしでかしながら、彼はため息を一つはいた。

「あいつを殺さなかったのには理由がある。命乞いをしている相手を殺すのは法律違反だ。違法行為をして、後に厄介に巻き込まれるのは御免だ。行動には何でも代償が付きものだろう」

「そう？」

「そうだ。だから俺も、いつ殺されても文句は言えない。殺しているから」

その時、二人の目の前に敵が一人躍り出てきた。右手には小型のナイフを持ち、瀏華隊は死ね、滅びろとわめいている。

しかし相手は先程の少年と同じ程度の子供だった。しかも構えは素人同然だった。

戦闘力などろくになさそうな相手に対し、闇蝙蝠は勢いよく相手の腹を蹴った。体勢を崩したところで、右手のツメで喉を抉る。ぱつと血が飛び散って顔にかかり、彼は嫌そうにそれを袖で拭いた。

「こういう風に向かって来るなら殺せるけどね」

「……でも今、貴方聞きませんでしたよね。『服従するなら助けるけれど、どうするか』って」

「それはそれ、これはこれ。しょうがないだろ、いきなり飛び出してきたんだから。こういう時はしなくていいの、緊急だから。……」

それよか、報いってお前、気にしないか？」

「気にはしますよ」

春翹はひどく物憂げに言った。操っている無数の本が一瞬、全て動きを空中で止めた。

はつとして、またせつせと動かせ続ける。二人は戦場を歩き回りながら敵を薙いでいった。

「ただ……私の場合には大きすぎます、過去の罪が。今更ひとつふたつ増えたところで、どうにも」

「うん？」

意味深な言葉に、闇蝙蝠は何だと言った。

「何か重大な違法行為でもしたのか」

「別に 空中を移動する。」

「別に、私は何も」

「そう。……だが、面倒だよなあ」

コキツと首をまわし、闇蝙蝠はぶんぶん翼を振った。

何度か人を切ったツメ、そして返り血を浴びた彼の体はどす黒い色に染まっている。装飾の多い服装でいながら、血みどろの凄惨な姿で突っ立ち、辺りを見回す姿は死神の使いのようにも見えた。彼はいささかヤケになったような声を出した。

「俺さあ、法律とか結構守る派だけど、時々思うよ。自由気ままに殺れればどんなにいいか！ 何のしがらみも制約もなく、考えずにはばつぱと殺れればこんなに楽なことはない。殺すのはもう慣れていくけど、その度に頭の中に条文が浮かぶ。ほとんどビョーキだね！」

「……そうですか」

「全く。っていつか、真面目な話。俺達は一体何人殺した？」

見渡せば、暗黒軍と思われる動いている人間はまだ多数いた。姿は見えなくても、声と光線の乱舞が見える。

そして地面には死体がある、その数は相当数にのぼると思われた。しかし彼らがやってきた時の人数は三十人強だった。どこからか、人が補充されているのは確かだった。

「もうやってきた人数分は倒したよなあ？ なのにまだいる……キリがない。なあしーちゃん、凜がどこにいるか知らないか？」

「さあ……どうでしょうね。ピロロなら、さつき見かけましたけど。リーダーは知りません」

「弱ったなあ。通信手段が無いと指示も仰げない。だが大将のダークは死んだよなあ。もしかして誰かが代役を務めているのか。アサル

トか？」

と言いつつ、闇蝙蝠はある事を思い出した。

「そういえば、さつき逃げようとして殺されたガキ。テレポーターシヨンすれば俺を振り払って逃げれたろうに、何故しなかったんだらう。」

暗怜軍って全員テレポが使えると思っただけだな。だって此処に来たとき、皆それで登場したし。……一部フォーテレだったのかなあ？」

「かもしれませんが、暗怜軍は逃げられません。大変でしょう……幹部に逃げたことがバレてしまつたら」

「え？」

興味深いセリフに、彼は思わず耳を止めた。

「何だい。ってことは俺のような部外者に限らず、この森の中で誰かがテレポーターシヨンをするって暗怜軍のボスにバレるってこと？」

「え？ あ……ええ」

春翅諳は歯切れ悪そうに答えた。まるでうっかり言ってしまったことを後悔している風だった。

それに、闇蝙蝠は少し奇妙に思った。だがそれより話の内容が気になった。

「で、逃げたらボスに殺されるの？」

「かもしれませんが、でも私は知りません。とりあえず」

ふつと、春翅諳は高度をあげた。闇蝙蝠の頭より高い位置を飛び、さつきまでくつついていたのが嘘のようにすーっと離れる。

「今から、仕掛けてきます。本の魔法」

「ん、あれ……まだしてなかったのかい」

闇蝙蝠は軽く手をふった。辺りにいる敵にカードをばら撒いて攻撃しつつ、遠のいていく相手を見送る。人魂の明かりに、その赤い髪が妙に映えて見えた。

40・豹俊刹架(ひょうしゅんせつか)(前書き)

画像：<http://catinthedeath.web.fc2.com/>

40・豹俊剎架（ひょうしゅんせつか）

> i19336 — 528 <

しかし話し相手がいなくなった途端、闇蝙蝠は我に返った。

「おつといけない。こんな事をしている場合じゃなかった」

すこし離れた所でフェイアントが槍を振り回しているのを見、妙な具合にはつとずる。

「何で俺は悠長におしゃべりなんぞしていたんだ？ もつと真摯しんしに取り組まないと」

軽く己を叱咤しったする一方、何故この程度の戦闘力に、警察が破れたのかを考えた。

セルタンティーンにおいて、警察官として働くには試験を受け合格する必要がある。年齢制限もあり、第二次成人の十八歳以上でなければ受験が出来ない。

つまり、警察官は皆『大人』だ。また暗怜軍の根城のような危険な場所に行く際は、警察官の中でも研修を受けた者が、防具や武器をガツチリ身に付けて行く。

だが話に聞く限りでは、そこまで安全性を留意しても、多数の死者が警察側に出ているのだという。それは暗怜軍の手ごたえのなさから考えると、聊ちやうかありえない話だと思った。

数は多いが、どれもこれも一撃で倒れる。あからさまにレベルが違う相手ばかりで、叩きのめすのも少々気の毒になつてくるほどだ。しかしそんな分析も束の間。突如、すぐ横の地面から死体をよけて水柱が噴き出した。周囲の赤い光を映し、まるで血が噴出したかのような光景になった。

それは確かに水だったが、かなりの勢いがあった。まるでウォータージェットで、うかうかしていると切られかねない。

「闇蝙蝠っ、危ないよ。ボーツとしてんじゃないよっ！」

水を出した主はピロロだった。簡潔に注意を促し、さつと別の敵に向かっている。とそのすぐ後ろから今度はシャオが飛び出した。

「thunder」

小さな手から雷が躍り出て、暗怜軍の黒い雷とかちあった。黒と白の光の粉がぱつと飛び、まるで花火のようだった。

パンダのぬいぐるみも彼のすぐそばにあり、長いツメをふるって動いていた。左足が欠けていたが、ぬいぐるみなので痛くも痒くもないようだった。ただし動きは多少フラついていた。

「闇蝙蝠、戦いますです！ 倒しても倒しても次々人が来まるですよ」

「ああ、そういえばこれも何故な おっと！」

突然、日本刀を持った暗怜軍の一人が襲いかかってきた。闇蝙蝠はそれを右手のツメでがっしりと受け止め、ぐっと力を入れてから離れた。

妙な返し方に、怪訝な顔をした相手。あどけなさの残る顔は、闇蝙蝠より年下の少女だった。彼女は己の刀を見た瞬間あぜんとした。

「えっ　?!」

硬いはずの刀が、まるで飴細工のようにぐにやりとまがっている。武器を使い物にならなくされて、なす術もなくうろたえた。が、刀をじっくりと見る間を与えず、闇蝙蝠は召喚でトランプを十数枚呼び出した。呼び出されたそれらに襲われ、多少手をバタつかせたものの、あえなく切り刻まれて絶命する。ぶちまかった内蔵が生臭く漂い、血と骨肉、そして曲げられた刀が地面に落ちた。

「うひゃあ」

近くでシャオが声をあげ、驚いたように闇蝙蝠のツメを見た。

「凄い力を持っていますですね」

「そうさ」

闇蝙蝠は返事をしながら、地面にぶちまかった赤いモノからぱつと身を離れた。

「俺の腕は見かけよりずっと力が強いんだ。翼に変化へんけさせていない

と、この力は出せないけれどね。 あっ

「あっ？」

突然、声をあげる。つられて声を出すシャオをよそに、一人険しい顔をした。

バサツと翼をふると、彼はシャオに背を向けた。

「因縁ある野郎を見つけた。俺、ちよつとあつちに行ってくる」

闇蝙蝠が見つけたのはアサルトだった。少年は仲間を二人つれ、大きな槍を振り回すフェイアントに対し、中距離から黒い光線を投げた。

前に見つけたときは何だかんだで邪魔が入り、うまく手が出せなかったのだが、今なら出来る。鷹翼岩の上での決着を今つけてやるうと、闇蝙蝠はそのままアサルトに向かった。……だが突然、ドンツと誰かにぶつかった。

「いてっ。誰だ、シャオか　　じゃない、ピロロか！　お前、何しやがる」

相手はピロロだった。血だらけの凄惨な姿でまっすぐアサルトに向かっている。

闇蝙蝠に対して少し済まなさそうに頭を下げつつ、彼女はブツブツ呟いていた。闇蝙蝠はきよんとした。

「何をする気だ？　呪文を唱えているみたいだが　　あっ、もしかして豹俊刹架か？」

間抜けた顔をしつつ、彼は前にコンピューターで見た記憶を呼び覚ました。

闇蝙蝠の記憶では、ピロロが出来る技において、長い詠唱をとなくて発動する技は『豹俊刹架』だけだった。風と雷、および水で豹を形作り、それを向かわせる。風で切り裂きダメージを与えた上、水で濡らして雷で通電させる。複合して、相手に多大なダメージを与える技だ。

彼女が三人のうち、誰を狙っているのかは分からない。ただ彼らに対し、そんな大技を使う理由は分からなかった。他にも使える小

技があるので、それを用いればいい。

しかし闇蝙蝠は、岩の上であったバルティー又が『アサルトは年は若いけどうちのエースだ』と言っていたことを思い出した。もしかして彼女は、アサルトが人に指示を出しているところを見て、警戒をしたのかもしれない。

「おい、そついえば皆、ケガはしてないだろうな」
闇蝙蝠はぶるつと首を振った。

「してもワピチにちゃんと治癒してもらっているよね？」

連絡手段が互いにならないため、ろくに確認も出来ない。姿が近くにな
いえんじえらん、えんま、そして凜などを探す。

「そついえばリーダー、どこに行っただろう？ まさか……無事
だろうな」

と突然、ザーツと川が流れるような音が聞こえた。闇蝙蝠は音のす
る方 前だったが見て、あつと声をあげた。

ここにきてようやく詠唱が終わったらしく、ピロロが技を発動し
た。手を体の前に出し、風と雷をまとった水の豹を出す。その様
子は、後ろから見ると激流に飲まれているように見えた。思わず大
丈夫かと言いたくなる。

彼女は自らがだした技をまとめ上げ、放出した。水が放たれると
同時に突風が吹き、その煽りあおをうけて周囲の木々がざわめきを揺ら
す。闇蝙蝠は目を細め、状況を見守った。

やがて、シャアアアツ と、何か獣が叫ぶような声が聞こえ
た。風の中目を凝らして見ると、巨大で動物めいた形をした水が、
バチバチと音をたててアサルトに向かって直進していた。

風の唸りを雄叫びとしてあげるケモノがぶつかつた刹那せつな、ドーン
と音がして地震が起きた。ぐらぐらとあたり一帯が揺れ、明かりの
かわりをしてしている無数の人魂の火も全て揺らぐ。近くにあつたいく
つかは消え、辺りがやや暗くなった。

低く砂塵さじんが舞い上がり、闇蝙蝠は慌てて空中魔踏くうちゅうまどうを使って避難し

た。そのままタンタンと宙をあがり、およそビル三階ほどの高さまであがって改めて下を見てみる。その場には当然、アサルトが倒れているはずだった。

「……あれっ？」

しかし、少年はいなかった。傍にいた二人は倒れていたが、肝心の彼はいない。闇蝙蝠は高度を下げてよく確認したが、影も形もない。「テレポーターションしたのか？」

だがテレポーターションをしたのなら、光がアサルト場合は赤い魔法陣の光が生じる。それが無かったので、移動はしていないはずだった。第一、仲間であるはずの二名は死んで倒れている。

「見落としたのかな。また逃げたか？まさか根城にもどって、仲間を引きつれて戻ってくる気じゃないだろうな」

だが改めて見ると、暗怜軍はかなり数を減らしていた。死んではすぐに補充され、次々と来たように見えたが……流石に、そろそろ底をつきたらしい。

何人かまだ生き残っていたが、負傷して動けない様子だったり、あるいは先ほどの衝撃に呆然としていたりした。抵抗する者も数名いたが、じたばたしているうちに殺されている。闇蝙蝠はピロ口のそばに降りた。

「よう、凄かったなあ。アサルトはどこ行った？」

「アサルト？」

「お前が狙っていたガキだよ。サラサラの栗色の髪をした奴。本当は俺が殺ろうと思っていただけだなあ……でもお前が召喚だか詠唱だかしてたから譲ったんだぜ。で、どうした」

「それが、いないの」

ピロ口は困った顔をしていた。

「命中していたら多分死んでるし、結界で防いだのならまだ生きてこの場にいるはずよねっ？なのに、いない。テレポーターションで逃げたかなっ」

「赤い光は見えただか？テレポーターションの光」

「見えなかった。でも豹俊刹架の陰になっていたのかもっ」

「だな。生きていても死んでいても、此処に体がないってことはやっぱり」

「移動させました、私が」

その時、人が近づく気配がした。

41 - 強制 媒介 移動 魔法

二人がはつと横を向くと、本の上ののった春翅諳がいた。黒いやぎを伴ともにつけている。

「闇蝙蝠にはさつき言いましたけれど、したのですよ……媒介強制移動魔法」

「えっ、どういう事っ?」

「えーっ!」

きよんとするピロロをよそに、闇蝙蝠は声をあげた。

「そいじゃ、アサルトは別の場所に移動しちまったの? ひでえな、ピロロの技の意味ないじゃん」

「いえ、違います。説明しますから移動しましょう、空中へ。比較的、安全ですから。ピロロ……いらっしやい」

春翅諳がひよいと手をピロロの方に向けると、緑の大きな本が一冊、彼女の足の下に出現した。そのまま、彼女をのせて宙に浮く。版は彼女の足より大きかったが、感覚は何とも心もとない。慣れない心地に、ピロロは不安げな顔をした。

「これ、不安定じゃないっ?」

「大丈夫ですよ。でもうまく取ってくださいね……バランス」

「そんな。まって、立ってるの怖い」

「待て春翅諳、俺がやる」

見かねて、闇蝙蝠が声をあげた。本日何度目になるか分からない空中魔踏ちまうまとうを行い、まずは自分の足元に魔法陣を出し、先立って階段をあがるようにタンタンと宙を歩く。

「ピロロ、そのまま空中に足を踏み出せ。空中魔踏で、俺と同じように動けるようにしてやる。その方が多少安定性は良いだろう。さあ」

ピロロはそれでも不安げな顔はしたが、頷いて階段をのぼるように足を踏み出した。すると彼女の足の下にすぐ、闇蝙蝠のものと同じ

青い魔法陣が現れた。

「あつ、これいい。普通に階段を上ってるみたい」

「だろ？ その感覚で上がるんだ。そう、そうそう」

意気投合な二人に対し、春翹諳は少し残念そうな顔をして本を消した。三人はそろって上にあがり、およそ建物の四階程度の高さまで行った。下から攻撃されるのを防ぐため、まだ立っていた太い木の陰に身をよせる。魔法陣の光と、木のしげった枝葉で隠した。

「さて、それでは説明しますが」

場所を落ち着けたところで、春翹諳は語り始めた。それは次のような内容だった。

「媒介強制移動魔法というのは、かくかくしかじか……という技です。そのために私、あちこちに仕掛けをしていました。呪文をかけた本をね。でも、どれもうまく発動しませんでした」

話を聞いたピロ口は何ともいえない顔をした。少し実感を得てないようにも見えたが、とりもなおさず質問をした。

「えーっと……うまく行かなかつたんだ？ その魔法」

「はい。原因は魔力の不足でした。触れた瞬間人を飛ばすには、それ相応の力が必要です。この魔法では、充填じゅうてんする必要があります……媒介として本に、必要な魔力を。

でも私、それが苦手なのです。だって普段、使わない方法ですから」

「使わない方法っていうか、そんな魔法初めて聞いたよつ。ていうか、危なくない？ もし仲間が触っちゃったらどうする気だったのつ？」

彼女は前に闇蝙蝠が言ったのと同じ指摘をした。

「仲間が減っちゃうじゃないつ。闇蝙蝠とワピチ以外、あたし達誰もテレポーテーションが使えないんだよつ。此処に戻れなかつたら、戦えない」

「ですから、払いましたよ……最細の注意を。上空で彼らの位置を

確認、その足元に本をそつとおいておく。後は待つだけです……タ
ーゲットが、それを踏むのを。で、不発なら本を回収します」

「そ、そう……」

「で、関係は？」

口を挟みつつ、これみよがしに闇蝙蝠はバサツと翼をふった。

「ピロロの技との関係は？」

「彼女が魔法を唱えた直度、ぶつけました……アサルトに、呪文を
かけた本を、バシツと。で、ピロロの技が不足していた魔力を補い
つて、発動しました、無事に」

「ということは」

「彼は消えたでしょう、おそらく どこか、暗い通りに。ただそれ
は生きていればの話です。彼はピロロの呪文を直撃でくらいました
し、実際、傍にいた二人は死にました」

「タイミングによるって事か？」

春翹諳は頷いた。闇蝙蝠はそれじゃあと続けた。

「じゃあ死んでいたとして、どこにいったんだ。市街地に死体を転
がしちやマズいと思うが」

「闇の市です。麻薬密売人や呪術用品の販売がたくさん行われてい
る場所。ただしこの近辺ではありません」

「ってことは遠くってことっ？」

「ええ、とつても」

「そうかい。……で、しーちゃん。あいつが死体になっている可能
性は？」

「三十パーセントくらいでしょうか」

「……あれ、案外低いね。でもまあ、この際だ。そうなっしてくれる
ことを願おうか」

「闇蝙蝠、結構物騒なこと言うねっ」

「物騒？ 失礼だな。お前、自分の姿をよく見てみる」

闇蝙蝠はピロロをずばっと指差した。

「血まみれのドロッドロじゃねえか。ホラー映画に出てくるゾンビ

の方がまだマシな姿だぜ」

「し、失礼ねっ。アンタだって人の事言えないでしょっ！ まあゾンビにしては血色や体格が良すぎるけど」

「そりゃ健康体だからさ。最近のゾンビは栄養状態が良くて体つきがいいんだ」

「全くもっつ。……あれ、そういえば春翹諳はあまり血を浴びてないねっ」

ピロロがふと春翹諳を見た。

彼女は文字通りドロドロだし、闇蝙蝠もそれ相応に血をかぶっている。鼻が麻痺したのか臭いはさほど感じないが、やはりいい気分ではない。

しかし春翹諳は血を浴びていなかった。肌も、服も、驚くほど汚れてない。

「どうしてっ？ ……あ、もしかして、隔操作で本をぶつけて殺していたから？」

「それもありますが、落としました」

「どうやってっ？」

「ああ！」

とその時、会話を遮って闇蝙蝠はニヤツと笑った。

「お洗濯する炎上ね。そうだろ？」

「洗濯じゃありません。『選択』炎上です」

「どっちだっかっていいじゃん。お前が勝手につけた名前なわけだし」

「えっ？ え……どういう事？」

「自分を焼いて綺麗にしたんです」

春翹諳は言った。

「選択炎上。自分が選択したのだけ焼く高温の炎をだす技です。名前は私がつけたんですけどね、適当に。」

で、綺麗にしました。服と自分自身を燃やさず、ゴミと血だけ燃やして」

「煤は出ないの？」

「出ませんよ。炎が高温ですから、完全に焼きつくします」

「ふん、丸焼きめ」

闇蝙蝠は軽く息をはいた。

「血も汚れも炎の力でスツキリ綺麗に！ 衣類を傷めず一瞬でキレイ。特許でも出願したらどうだ？」

「出来るんですか、そんな事」

「あはっ、冗談だよ。……じゃあアサルトを行方不明にした機序が分かったところで、下の様子にちよつと目をむけようか」

闇蝙蝠は下を指差した。

人魂の明かりに照らされて見えるのは、折れた刀にちぎれた肉片、潰れた頭蓋骨に血と油で汚れた地面、阿鼻叫喚あびきょうわんの光景である。血も死体も見慣れて今更驚くことは何もないが、ただそこには文字通り屍ばかりが転がっていた。生きて、動いている者はもうほとんどいない。

すこし離れた地上にはシャオ、そしてフェイアントがいた。だが二人も、立っているだけで戦っていない。闇蝙蝠は言った。

「ほとんど戦いは終わった感があるね」

「えっ?!」

「……そうですね」

「ちよ、どういうことっ？」

同調する春翹諳を尻目に、ピロロはあせったように言った。

「終わりって？ でもあたし達、まだ奴らの根城をつきとめてないよっ。殺しただけじゃないっ」

「生き残った暗伶軍の奴らがいるだろう。ほら、あそこにリーダーがいる。ほら、右の 倒れた木の陰」

闇蝙蝠は指差した。そこはシャオやフェイアントからやや離れた倒れた木の陰で、確かに凜がいた。更にえんじえらん、ワピチもいる。すぐ脇に黒い塊があるが、捕まえられ、一か所にまとめられた暗伶軍の者らしかった。

いずれも抵抗はしておらず、ぐったり倒れている。しかし死んで

はいないようだった。遠くなのでハッキリとは見えないが、膝をかかえて座っている。

地上のフェイアントとシャオも気が付いたのか、あるいは呼ばれたのか、彼らの方向に動き出した。闇蝙蝠は今一度目を細めた。

42 - 戦闘終了、そして帰宅。

「降伏した人間がいたんだな。ふふん、悪くない心がけだ。命は大
事にした方がいい」

「あいつら、どうなるのっ?」

「さあな。リーダーが決める事だ。……だがおそらく、連れて帰る
だろう。警察に引き渡して尋問し、本部の場所を吐かせる。だって
ほら、暗怜軍の幹部が出てきてないだろ。ダークは幹部じゃないし」
「後は 皆、死体ですか」
闇蝙蝠の言葉を遮り、下界を見つつ春翅諳が物憂げに言った。いつ
もより数段は虚無的だった。

「ここから見ると、けっこう多いですね……屍の数」

「そうだなあ。やはり人数が途中で増えたんだ。 とはいえ、も
う新しい奴は来ないみたいだな。

諦めたか、それともこれ以上戦える人がいないのか。……ああし
かし、どこから補充されているのか突き止めれなかったのは残念だ。
兎に角、リーダーの傍に行って指示を仰ごう。今のうちに聞いて
おかないと、また見失っちゃう」

「そうですね。じゃあ、降りましょう」

春翅諳がぐつと高度を下げた。闇蝙蝠も後を追ひ、階段をおりるよ
うにタンタンとさがる。だがピロロはその場にとどまっていた。

「降りないのか? 空中魔踏、消しちゃうぞ」

「あのさ、今ちよつと考えたんだけど……この場はどうなるのかな
っ」

「場? ああ、そこいらに転がってる死体のことか」

言われた疑問に、闇蝙蝠はその場で立ち止まって少し考えた。

「普通なら警察が検証して、保健所が片付けをするだろう。だが此
処は暗怜軍の根城に近いと思われる場所だ。危険だから、しばらく
放置の可能性が高い」

「放置?!」

「あくまで『しばらく』だぞ。永久に放置はしない。ただもしかして、暗怜軍が片付け、ないしは様子見に来るかもしれない。その可能性も含め、見張りをすることになるな」

「それ、あたしたちが?」

「いや、戦教学園の生徒たちがやると思うよ」

闇蝙蝠は平然として言った。

「俺も昔、やらされた事がある。戦闘がおきると現場まで引率されて、皆で連れ立ってその場に行くんだ。死体の片づけと見張りが主でね、戦場や死体に『慣れる』っていう意味がある。」

俺も初めは吐いたなあ……中には泣き出す子もいたっけ。もちろん、事前に何度も映像を見て慣らされてはいるんだけど、ナマは違うよ。臭いもあるしね。五感の中で嗅覚ってのは一番アレだ。ほら、アレ」

「でも此処、危険なんだよねっ。ノコノコ出かけて行って大丈夫なの? だって生徒って学生でしょ」

「勿論。だが大丈夫じゃないかもしれないから、多少なりとも戦闘力のある人が呼ばれるんだ。大丈夫さ、引率の先生がたくさんつくから。で、もし何かあればコツチに連絡が入る。何もなければ、生徒が死体処理して身元を確認し、引き取り手を探す。無ければ無縁仏にまわす。それだけさ」

闇蝙蝠はまた歩き出した。ピロロも、少し遅れてついていく。先の下におりていた春翹詣と合流し、三人はリーダーの元に急いだ。

「リーダー」

凜はシャオとえんま、えんじえらん、フェイアントそしてワピチと一緒に、ケガをしている暗怜軍を取り囲んでいた。

白だった服がどす黒くなるほど、血肉にまみれた凄惨な姿。しかし大半は返り血で怪我はしていない様子である。

シャオとえんまも同じくだったが、えんじえらんは別だった。ワピチに肩を貸してもらいつつ立っている。ピロロがあれっとなをあ

げた。

「えんじえらんっ、どうしたのっ？」

「うん……ちよっと足をケガしちゃって」

えんじえらんは少しだけきまり悪そうな顔をした。ピロ口はおたおたと彼女に近寄った。

「ケガって？ 治癒は？ あ、左足っ！」

左足の後ろ、ちょうどアキレス腱の部分だけ靴が切られていた。汚れていて血が出ているのかどうかは分からないが、かなりザツクリいつている。

「うん。腱を切られちゃった」

「えっ、じゃあ歩けないよね。大変じゃないっ！」

「そうなんです」

肩を貸しているワピチが頷いた。

「出来るだけの治癒はしたのですが、傷が深いので病院に連れていかないとダメです。テレポーターションで送ろうと思ったのですが、僕ちよっとまだ自信がなくて……そ、それに」

「じゃあ、俺が送ってやろうか」

言葉をさえぎって闇蝙蝠がずいっと前に出た。しかしワピチも、えんじえらんも首をふった。

「凜から聞いたけど、この森でテレポを使うと暗怜軍に感知されるんでしょ？ もし奴らがえんじえらんを追いかけて、病院に行ったら大変じゃない」

「そんな事しねえよ。それなら今、此処で殺せばいいじゃねえか」

「だって、この場には皆がいるもん。出来ないでしょ？ でも病院に行ったら、あたしは一人になる。襲いやすい状態になるじゃない」

「ああ」

確かに、その危険は否めない。ただ闇蝙蝠は首を傾げた。

「だけど病院で殺人をしたら警察がくる。彼らも、弱いとはいえ戦闘力は皆無じゃない。ナワバリ内じゃなければどこに何があるかも分からんだろうし、暗怜軍側に不利だ。」

そもそも、森の外に出た場合も奴らは探知するのか？ 移動した
事実は分かっても行き先までは知りえないような気がする」

「そうなの？」

「いや、あくまで俺の予想。だけどさあ、俺らだっぴいずれば凱旋がいせん
するんだぜ。つまりこの森から離れていつもの場所に戻るんだ。結
局、同じことじゃねえのか」

「だけど瀏華隊の建物の中で戦うのと、病院で戦闘になるのでは一
般人に対する被害がぜんぜん違うでしょ」

「まあ そう……そう、か。分かった、それなら移動はさせない。
けれど無理はするなよ」

「ありがとう」

「ワピチ、お前も背負ったままじゃ疲れるだろう。えんじえらんを
下におろせよ。その地面はあまり汚れてないぜ」

「は、はい」

「さてリーダー」

ワピチがえんじえらんを下すのをチラリと見、凜に声をかける。

「どうしますか？ 撤収しますか？」

「そうね……」

捉えられている暗伶軍を警戒しつつ、思案げな声を出す。

捕まっている残党は四人で、男子三人に女子が一人だった。いず
れもティーンで、見かけ闇蝙蝠とさほど年の差はない。薄汚れ、疲
勞でグッタリしていて暴れそうには見えなかった。が、油断は禁物
である。

少し考えて、凜は言った。

「私たちの役目は、アジトを見つけて一斉に奴らを殺すこと。でも
アジトの場所が分からない。宿舎は見つけたけど、行くことが出来
なかった」

「そうですねえ。何故なんだか分かりませんが……」

「それでも奴らが来て、戦闘をしかけてくるならコッチは倒す。け
れど、もう新しく暗伶軍は来ないみたいね。皆疲れているし、けが

人も出たし、生け捕った人も何とかしないと」

「ウカウカしてたら、逃げられますからね、こいつらに」

「ええ。だから一旦、撤収しましょう」

「それじゃ、帰りますか。……行き先は瀏華隊の建物ですよね？」

あそこなら、追ってこられて戦闘になっても多少マシだ」

「そうね。ワピチ、あなたも手伝ってくれる？」

「勿論です」

「よし。じゃ闇蝙蝠、まずえんじえらんと　あと、フェイアントを」

凜はフェイアントに軽く目くばせをした。彼は「はい」と返事をして一歩前に出た。

「疲れている所悪いけれど、捉えたこの子たちを安全に捕まえるための用意をお願い出来るかしら。警察に、まずは連絡を。そしてそのままあちらに合流して用意に協力して下さい」

「分かりました」

「というわけで、闇蝙蝠。先にこの二人をつれて行ってくれる？」

そこでえんじえらんを病院に飛ばして、フェイアントの準備を手伝って頂戴。それが終わってから、此処に戻ってきてほしいの。で、次に捕虜を運ぶわ」

「了解です」

「で、私達はその間、こちらの警戒と捕虜の見張りを行う。何か聞きたいことは？」

「特にありません。指示に従います」

闇蝙蝠はあれこれ言わなかった。良いも悪いもなく、ただはいと頷く。

「それじゃ、そうします。……そうだ、しーちゃん」

ずっと黙って隣にいた、赤い髪の友人を見る。

「お前も媒介でテレポ出来るんだろ。皆を運ぶときは手伝ってくれ」

「いいですよ」

「うむ。……じゃあ二人、行こう」

えんじえらんをかついで立ち、闇蝙蝠はフェイアントの腕を掴んだ。
「よいしょ！ さて、じゃ飛ぶけれど……テレポーションがきちん
と出来る事を祈るぜ。何かこの森はおかしくってな、時々テレ
ポが失敗するんだよ」

「すると、どうなるんですか」

「どうもしない。ただ飛べないだけさ。心配しなくてもバラけたり
はねえよ、多分」

フェイアントは若干不安そうな顔をした。しかし闇蝙蝠がテレポー
ーションをかけると無事に魔法陣は現れ、三人はその場から一気
に消え去った。

43 - 飛ばされた少年

>i19779<rubby><rb>528<

埃</rb><rp>(</rp><rt>ほこり</rt><rp></rp></ruby>をかぶった古い電灯がチカチカとした灯りを照らし、歩道の横の溝からは悪臭が漂う。辺りには残飯やゴミが散らばり、喧嘩や罵倒はとうの声があちこちで聞こえる。お世辞にも綺麗とは言えぬ場所に、少年は一人、立っていた。

黒いコートを着ているが、全身はびしょ濡れで、血と泥にまみれた酷い姿。しかしよく見れば栗色の髪に、すんだ黄緑色の瞳をしている。

暗怜軍の一員、アサルト。だが今は塀へいのそば、薄暗い灯りをつけた電信柱にもたれて何とか立っていた。

「此处、どこだろう」

彼は微かな声をあげて上を見た。頭上を照らす灯りには虫が数匹、灯りに惹かれ、翅はねをはためかせて飛び回っていた。アサルトはそれをしばし見ていたものの、力尽きたようにその場に倒れた。ぐったりとコンクリートの上に横になる。

「なんで。どうし、て」

口を開けば、出てくるのはただ疑問の声。まるで呪詛のように繰り返し繰り返し、それをつぶやく。

春翹はるせうの仕掛けた魔法で、飛ばされた彼。しかし本人は、自分の身におきたことが全く分かっていなかった。

此処がどこだか、全く分からない。テレポーションで帰ろうにも、その力すら残っていない。今も体がひどく痛み、立っているのがやつとの状態。痛みと疲れで頭は働かず、ただ疑問ばかりが浮かび続ける。

「皆、どうしたんだろう」

小さくつぶやき、アサルトは地面に伏した。

彼が脳裏に浮かべていたのは、仲間の顔だった。死んだ仲間、生死不明な仲間。しかしその中で、暗怜軍の仲間ではないのに、強く想った人がいた。

兄。完全に一般人であるが、アサルトが暗怜軍に入るより前、一緒に暮らしていた家族である。硬く、温かみのないコンクリートの上に横たわりながら、彼は過去の事を思い返していた。

潮の匂いに、並みの音。歩きたびに湿った砂が足の下でぎゅっと固まり、ざらっとした感覚を皮膚に伝える。砂浜を走りまわり、綺麗な貝殻を拾ってはしゃぐ。

彼が波を見て喜ぶ隣には、兄がいた。栗色の髪に緑の目をした双子の兄。また父と母は少し離れた所において、二人の子供が走り回る姿を見て笑っていた。

ふいに、兄は手に白い貝殻を持っていて、これを母にあげようと言った。細くて小さな巻貝で、茶色の線が一本だけ縦に入っていた。滑らかな曲線美にアサルトは一瞬見とれ、頷いて「父の分も探そう」と言った。二人は手分けして貝殻を探した。

アサルトは砂浜にじっと目を凝らしたが、良いと思う貝殻は見つからなかった。ただ暫くして、砂の中に赤いものがあるのを見つけた。引つ張ってみると、それは平たい真つ赤な貝殻だった。端が少し欠けていたが、それ以外は全く綺麗な状態で、とても美しかった。アサルトは大声で兄を呼んでそれを見せ、二人で父と母の元へ行った。

兄は白い貝殻を母に、アサルトは赤のそれを父に差し出した。二人は嬉しそうに微笑み、ありがとうと言って貝殻を受け取った。その笑顔が嬉しくて、アサルトは兄と一緒に、もっと綺麗なのを見つけてくると言い、再び砂浜に走り出した。目の前には海があり、

寄せては返す波がすぐ近くに見えた。だが波の姿は歪み、消えた。かわって全く別の光景が浮かんだ。

明かりがついていない、暗い部屋だった。窓ガラスはヒビ割れてガムテープではってあり、床には物が散乱している。空になったベットボトル、脱いだ服にタオル、弁当のカラ。

アサルトは部屋の中にいた。扉近くに父がいて、暗い顔をしてうつむき、手錠をかけられていた。両隣には制服を来た警察官が二人いて、父を連れて行くつもりでいた。アサルトはかけよって父にすがったが、警官はアサルトを退け、そのままいなくなった。全てが消えた。

「ううっ」

アサルトは低く唸り、そして目をあけた。見えるのは何の希望もない暗がり、アスファルトの地面は未だ冷たく彼を上に乗せている。

耳に聞こえるのは、道を歩く人の、耳触りな足音。だがそれも遠く、助けてくれる見込みは無かった。しかし過去の映像を断片的に再生したアサルトは、少しだけ気を取り戻した。起き上がる気力はまだ無かったが、なぜ自分が此処にいるのかを、順序立てて考え始めた。

そもそも、何故暗黒軍に入ったのか。家族で幸せな時を満喫したこともあったのに、どうしてこんな道を歩んだのか。

発端は七歳の時だった。両親が離婚してしまい、兄は母に、アサルトは父に引き取られた。

離婚の原因は分からない。アサルトが持っている家族そろっての記憶は、先に浮かんだ海の記憶だけで、それ以外は全く無かった。故に不明なのだが、ただそれから間もなくして、今まで大人しかった父が横暴になった。

マジメな人だったのに、日が経つにつれて荒れ始めた。幸いにしてアサルトに暴力をふるうことは無かったが、養育をろくにしてくれなくなった。酒におぼれ、通りすがりの人を殴ったりケンカしたり、傷害沙汰を何度もおこした。そしてその都度、警察の厄介になった。

当時父と住んでいたのはアパートだったが、制服をきた警察官が何度も出入りし、近所の人の悪い注目の的になってしまった。子供には罪はないのだからと、アサルトに対して同情をよせてくれる人もいたが、多くは数奇すつきな目をむけてきた。

ただ、大人で彼を苛める者は誰もいなかった。何人かは確かに優しくしてくれて、食料を分けてくれたりもした。

しかし、同年齢の子達は違った。当時アサルトは小学生だったが、クラスメイトをはじめ皆アサルトを悪い子扱いし、格好のいじめの対象にした。彼は罵られて酷く叩かれ、傷だらけになって泣くこともざらでは無かった。

だが、助けしてくれる人は誰もいなかった。アサルトの体についた傷を見て、周りの大人は、父にやられたのかと聞き、違うと言っても信じなかった。誰も彼が、子供に虐げられているとは考えなかったのだ。

誰にも理解を得られない。そのままいじめは繰り返された。仲間に入れてもらえないのは勿論、傍によるだけで嫌がられた。それは子供心にも、死にたいと思うほど辛いものだった。

だがアサルトは死ななかつた。彼を死から思いとどまらせてくれたのは、遠く離れた双子の兄の存在だった。

どうして母ではなく兄なのか。それは彼が、母は母で責任があると思っていたからだ。母のことは、決して嫌いではない。それに父との間に、何があったのかは知らない。が、もし離婚さえしなければ、普通の生活を送れたかもしれない。その思いゆえに、家族の中でもっとも兄を慕したった。

当時離れて暮らしていても、電話番号は知っていた。それで連絡

をとり、話をする事でアサルトは唯一の希望、心の平和を得ていた。ただ次第に心配になつてきた。

別々の場所で生活を営んでいたため、横暴な父が、母や兄と出くわす可能性は低かった。だがもし、何かの拍子で出食わしてしまつたら。もし父の横暴が、兄のところにもまで及んだら。

家族の中で、一番大好きな兄。その兄を、守れるのは自分しかない。そのためには自分が強くなる必要がある。それに強くなれば、苛められることはないかもしれない。

そう思ったアサルトは、幼いながらに魔法を勉強をして体を鍛^{きた}えはじめた。が、彼が勉強したのは戦闘いの技術。周りには、教えてくれる人は誰もいなかった。

だが、彼は独学でそれらを習った。父には放棄され、意地悪な子供たちから虐げられ、周囲の大人からの理解は無い。その状況を打破するため、とにかく必死だったのだ。

44 - 救い

孤独な状態は、ゆうに一年も続いた。だが彼が八歳になった時、ようやく行政が手を差し伸べた。

誰かが通報してくれたのか、あるいは行政が、通報をやつと真に受けてくれたのか。アサルトはその時、初めて孤児院に入れられた。そしてその後を追うように、父は本格的に捉えられた。今までは家と拘置所を行き来する半端な状態だったが、ようやくキツチリ牢に繋がれた。

父と離れ、住む場所も変わり、アサルトはこれで苛めから開放されたと思った。

だが、それでも仕打ちは同じだった。どこからか父のした事が漏れ、彼はやはり苛められた。

しかしその頃のアサルトは自主訓練により、それ相応の体力と魔力を持つようになっていた。未熟ながら、苛められると魔法弾をぶちかまして逆に相手をやっつけた。そんな事が数回も続くと、誰も彼を直接手にかけてやうという者はいなくなつた。だが何かというと、お前の親父はと囁かれ、また怖がって仲間外れにされる。友達どころか話し相手も出来なかつた。

そのうちにアサルトは、父母に対する侮蔑と 憤懣ふんまんを心に思うようになった。特に父に対しては、名前や存在を引き合いに出される度に怒りが沸いて、本当に殺したいと思うようになった。だが牢に繋がれている人を狙えるわけもなく、結局悶々としたまま時を過ごしていた。楽しみといえは一年前から続けている魔法の自主学習と訓練のみ。

強くなつても仲間が出来ない。兄にも会えない。だが身を守ることにくらいは出来る。孤独でも、ひどい苛めはされない。それだけを思つて鍛錬に励んでいた。そして二年後、奇妙なチャンスがやつて

きた。

それは十歳になつてからすぐの事。アサルトがストレス発散で孤児院の裏で魔法弾をぶちまけていると、一人の女性に会つた。彼女は自分を謳歌軍おうかぐんの一員と名乗り、アサルトの魔法を見て詳しい事を聞きたがつた。アサルトはわけが分からないまま、苛立つて全てをぶちまけた。すると彼女は微笑み、謳歌軍へ来いと誘こびなひ、テレポーションで彼をその場から別の場所へと連れ去つた。

連れて行かれた場所には、アサルトと同じように不幸な境遇の子供たちがたくさんいる所だつた。だがそこでは彼の父の事を知つても、誰ひとりとして仲間外れにはしなかつた。

その時アサルトはまだ謳歌軍も何も知らなかつた。が、自分が嫌がられない事を知つてすぐに、ここに住みたいと女性に言つた。彼女は微笑んで頷き、アサルトはすぐに帰つて荷物をまとめ、その翌日、テレポーションで連れて行かれた。

事務的な手続きがどのようにされたのかは、分からない。ただそこは確かに、アサルトにとって安住の地だつた。仲間外れにはもうされない。また女性はアサルトの悲願　父を殺すこと　を知り、訓練をつけてくれた。

兄と会う事は叶わなかつたが、友達をたくさん作つた。さらに様々な物騒な技術を身に着けた彼は、入軍して半年後に父を殺した。その時父は出所していて、狙うスキがあつた為だつた。

こうしてしがらみは無くなつた。父を消して、兄の安全も確保した。だがアサルトは謳歌軍こそ己の居場所と決めており、その後も居続けた。やがて謳歌軍は崩壊し、一時的にまた孤児院に入ったものの、今度は暗怜軍の一員と名乗る者が現れ、彼を入軍へと誘つた。謳歌軍から、暗怜軍へ。しかし何も変わりはしなかつた。友達だつた者はほとんどそのまま移行してきたし、やる事も同じで、前と変わらぬ生活だつた。ただし、受ける教育が変わつた。

今までも戦闘訓練はされていたが、よりハードで厳しいものとな

った。暗怜軍の幹部、レミラ。彼の名はことあるごとに語られ、いざとなつたら彼のために身をなげうつよう教育された。アサルトは最初の頃こそ反感したが、次第に順応してきた。

何といつても、仲間が誰もいない状態から救ってもらつたのだ。勿論それは謳歌軍だが、暗怜軍があとを引きついだ。

ただそのうち、段々と、アサルトは好きだった兄のことを忘れてしまった。元々は兄を守ろうと思つて力を求めたのに、それがいつしかレミラのため、暗怜軍のためとなっている。

「兄、さん」

倒れたまま、アサルトは一人涙を流した。外気にさらされて冷たい頬に、熱いそれが伝う。

もう、わけが分からなくなつていた。何のために戦うのか。自分を拾つてくれた、この軍のためか。だがこうして戦い続けたら、兄に嫌われるのではなからうか。自分が死んだら、兄に連絡は行くのだろうか。いやそれより自分がしてきた事を知つたら、兄はどう思うだろうか。いやそもそも、兄は今、どこにいるのか。

彼はぎゅっと手を握つた。痛む体をおこしてアスファルトに爪を立てると、爪が削れてガリガリと嫌な感触が伝わつた。

「僕、は」

やるせない感情でいっぱいになる。ただ頭は混乱し、何もまともに考えられない。そんな時、とつぜん目の前の地面に赤い魔法陣が現れた。

「いた！ 良かった、生きてるな」

魔法陣の中から、若い女性の声の一つ。あまりに唐突なそれに、アサルトは一瞬目を泳がせた。

「随分ひどい状態だな」

微かな足音をたて、黒いコートを来た人間が近づいてた。

「テメエ、大丈夫か？」

しかもいきなり、テメエ呼ばわり。だが声も、顔も、確かに少女

だった。着衣は黒のロングコートとシンプルながら頭にはエメラルドグリーンのキャスケットを被っている。その下は濃いピンクの髪で、帽子の中でまとめられていたようだが、毛先が少しはねている。見た目は十六か七で、俗にいう花も恥じらうお年頃。だが彼女は恥じらいの欠片もなくズカズカと近寄り、アサルトの顔を覗き込んだ。

「ケガ、してるのか」

アサルトは首を振った。だがそれはあまりに弱々しく、彼女にはうまく伝わらなかった。

「おい、答える。それとも声も出せねえほどやられたか？　おい、オレが分かるか」

「リトルサス？」

アサルトは小さな声で名を呼んだ。

「ハナルン＝リトルサス。違う？」

「そうだ」

彼女は頷いた。

「そう。若年の戦闘隊員の教官をしているリトルサスだよ。テメエにも二度か三度、技を教えた事があつただろう」

「う、ん」

「しかしグツタリしているな。治癒が必要だが、此処じゃできねえな」

ざっとアサルトの体を見た後、彼女はぐるっと辺りを見渡した。

「移動するぞ。リオンが待ってる」

リトルサスは倒れたアサルトの腕をとり、その場でテレポーターシオンをかけた。赤い魔法陣の光に包まれて、暗くて陰鬱なこの界限から、二人は即座に姿を消した。

45・暗怜軍の目的(前書き)

画像：<http://www.yunphoto.net/jp/>

45 - 暗怜軍の目的

> i19921 - 528 <

アサルトはリトルサスに腕を掴まれ、そのまテレポーションを受けた

ついた先は広い室内だった。およそ二十畳はあろうか、下は畳で壁は白い漆喰しっくいとふすま、右にはズラリと刀が並び、左にはピストルや銃が並ぶ。道場のような広間だった。

「リトルサス、アサルト！」

魔法陣から出てきた二人に、まず明るい声がかかった。

「無事ですか、アサルト。ああもう、ボロボロじゃありませんか！ 待ってて、今治癒をしますから」

声の主はリオンだった。彼女はぱつとかけよってきた。それと入れ違いにリトルサスはぱつと退き、かがんで倒れたアサルトの上を手をかざした。優しいな光がそこに灯りとも、アサルトは力が回復してくるのを感じた。

痛みも徐々に引き、体がスツと軽くなる。それはとても心地良かった。

彼女はたっぷり十秒ほど光を照射していただろうか、やがてそれが落ち着くと、アサルトはすっかり回復して立ちあがるようになった。先程までブツ倒れていたのが嘘のように、彼の足は己を支えてキチツと立った。

「ありがとう、リオン」

「どういたしまして」

「ところで、どうしたあんな所にいた？」

回復したアサルトをよそに、リトルサスはあぐらをかいてドンツと座った。全く少女らしからぬ恰好だったが、教官というだけあってか、若さの割に威厳があった。

「テレポ総監視役の人間が言つてたぞ。逃げたかと思つたつて。何だつて沖西街道おきにしかいどうなんかにいた？」

「え？」

「沖西街道だよ、あそこ」

彼女はじれつたそうに言つた。

「あそこは猟奇りようきじゅつかい術会の縄張りだ。オレらの管轄外じゃねえか。だが逃げるにしちゃアホな逃げ方をしたなあ。深多の森からテレポをしたら、その行き先は全て本部の知る所となる。分かつてるだろ？こつ言つちゃ何だが、行方をくらませるなら二度飛びしなきゃならない。それとも一度飛ぶのがやつとだつたのか？」

「違う。僕は逃げたわけじゃない」

勝手に喋るリトルサスに対し、アサルトは強い口調で言つた。

「僕は暗怜軍を裏切つたりしない。此処が僕の居場所なんだから。

僕は飛ばされたんだ。仲間と一緒に戦つていた、突然」

「はあ」

アサルトは必死に言つたが、状況を知らないリトルサスは腑抜けた返事をしただけだつた。彼は続けた。

「よく分からないけど、何か技を喰らつたんだと思う。そうだ、あの時仲間が二人傍にいたんだ。ねえ、彼らは？」

「彼らつて言われても……名前なまえは？」

「名貴なきと久谷くたに。知らない？ どちらも僕の友達なんだ。あいつらも、飛ばされたは」

「していません」

リトルサスが言うより早く、リオンが首をふつた。長い水色の毛がふわりと揺れた。

「飛ばされたのは貴方一人です。また今回、戦闘に赴いた中で生き残つたのは僅かに四人。いずれも瀏華隊側にとらえられ、こちらからはコンタクトをとれません。四人の中にその二人がいる可能性もあります。今すぐに確認は出来ません。指揮官を務めたダークも含め、皆殺されました。生きて帰つてきたのは貴方だけです」

「何にせよ、お前が生きていて、バルティアー又は喜ぶと思うぞ」
リトルサスはぼそりと言った。

「戦闘の様子を詳しく知った人が、生きて帰ってきてくれたからな。
あの女はデータの搾取に夢中だ」

「彼女のやり方は間違ってると思う」

アサルトはキツパリ言った。

「データを取る。ただそれだけの為に、こんな事をするなんて。おかしいよ！　そもそも戦闘を有利に進めるためのデータじゃないの？　なのにたくさん人が死んだ。ねえリトルサス、リオン。どうしてレミラ様はこの戦いを許可したの？　僕はただ駆り出されて……分らないんだ」

「バルティアー又の持つてくる情報に対し、それだけの価値があると踏んだからじゃねえのか」

リトルサスは考えつつ、ゆっくり返事をした。

「それに、うちの幹部は戦いも死体も好きだからな。暗黒軍の方針は、警察に抗い、オレらをつぶそうとする奴らには徹底的に対抗する、だぜ」

「分かってるけど」

「それと今、話に出てきたバルティアー又ですが、彼女は戦いの様子をモニターを通してずっと見ていました」

リオンが言った。

「人魂型の監視カメラ。適切な明かりを場に与えつつ、映像を飛ばして送る優れものです。この深多の森でも通じます。ヒメールスゲヴィルから持ってきた技術らしいです」

「そんなのは別にいい。僕たちは彼女のモルモットじゃない！」
アサルトは思わず叫んだ。

「データを取るために殺されるなんて！」

「だがレミラ様が許可したんだ。オレらはそれに従うのみだ」

「そもそも、一体どうしてこんな事になったの？」

「何だ。ホントに何も知らねえのか」

「話は聞いてたけど、頭がゴチャゴチャして」

「分かった。じゃ説明してやる。いいか、オレら暗怜軍の目的は、瀏華隊を壊滅させることだ。そして帝国軍にオレらの威力を知らしめて、商売の邪魔を防ぐこと。そして今回の戦いの目的は、その手初めとして、瀏華隊側の戦力データを得る事だ。ただしオレたちの根城や研究棟けんきゅうとうは壊さずに」

リトルサスはつらつらと言葉を続けた。

「たてられた作戦はこうだ。瀏華隊の奴らを誘拐し、それをエサに『一人だけ』という条件をつけて鷹翼岩の上に呼び出す。……と、ここで前提として、奴らは少しでも、オレら暗怜軍の情報を欲しいと思っている。だから必ず来るといふ確信がある」

アサルトの微妙な顔色を見て、言葉を付け足す。

「この時来る瀏華隊の隊員は、テレポの技術に長けている人間だ。絶対指定を使って飛ぶことが出来る、高度な技術をもった人間。でなければ、鷹翼岩まで来ることが出来ないからな。で、まず手始めに、そいつと一対一で戦ってデータを得る。その後、牢屋に飛ばす」
「でもそこで手違いがおきました。私にも……責任があるのですが」
リオンが若干すまなさそうに口を挟んだ。

「レミラ様に提出した計画書では、そこで、前に誘拐した二人とあわせて三人を殺し、後日、その死体をたきつけて瀏華隊を煽り、深多の森に呼び出して戦闘、殲滅せんめつとするはずでした。ですが三人に逃げられたため、急きよ作戦が変更されました」

ふつと息を吐く。

「彼らは牢屋の外を見たと思われました。なのでそれにより、仲間を引きつれて此处に戻ってくる可能性があります。テレポーターは自分が見た光景をイメージし、飛ぶことも出来ますからね。ですが牢屋にはテレポ避けがかかっているから戻れません。瀏華隊は、来ても深多の森に飛ばされる事になります」

「テレポ避けはこの城の、一番マシな防壁だからな」

リトルサスが少し口を挟んだ。リオンもこくと頷いた。

「そこで、もし瀏華隊が諦めて替えればそれはそれ、向かってきたなら戦おうという話になりました。深多の森でテレポを使えば、来るのも消えるのも、また人数も含め、全て探知が出来ますから分かります。来ても帰ればそれでよし、帰らず人数を増やせば戦闘意思を持つていると分かります。ただこれはあまりに急なことで、こちら側の体勢がイマイチ整っていませんでした。だって殲滅のための戦闘はまだ先の予定でしたから、強い人間が不在でした」

「リトルサスは？」

アサルトはすかさず言った。

「強いんじゃないの？」

「残念だが、オレはその時不在だった。別の用を言いつかっていたからな。オレが戻ってきたのはついさっきだ」

リトルサスは肩をすくめた。リオンは彼女が喋り終わるのを待ち、続きを話した。

「しかし森をウロつかれ、城の場所を発見されると困ります。前にも言ったように、城や研究棟は守るべき建物です。なので牽制けんせいのために人を送りました。データの搾取は、そのついでです」

「じゃあつまり、僕たちは単にデータのためではなく、この建物を守るために派遣されたってこと？」

「そういう事です」

「そっか」

アサルトは少しだけ、ほっと息を吐いた。

彼は鷹翼岩の上で闇蝙蝠と戦わせられたが、その目的は『データ』だった。ゆえにそれだけの為に自分は使われ、また仲間を失ったのだと思っていた。

何とも命を軽く見られたと思い、納得がいかなかった。が、根城を守るためとなれば話は別である。

この城がなければ、生活も何も出来ない。命を投げ出す価値はあったと思っただ。

「とりあえず」

すつと、リオンが立ち上がった。

「話はこの辺にしておきましょう。アサルト、貴方は疲れているでしょう？ 休んでください」

「でも、僕は」

「体を休めることも必要ですよ」

そう言つて、彼女はアサルトの手をとつて立ち上がらせた。

「宿舎の前まで送りましょう。そんなに暗い顔はしなくていいですよ。貴方は生き残つた優秀な人物なのですから」

「そんなの、偶然だ」

「運も実力のうちと言いますよ。とりあえず、今は安心して休むといいでしょう」

ぼんぼんと、彼女はアサルトの肩を叩いた。そしてリトルサスに声をかけた。

「私、アサルトを送っていきますね」

「ああ」

「それでは」

そうしてリオンに送られて、アサルトはまた移動した。

46 - ギスターチ (前書き)

画像：<http://www.ashinari.com/>

46 - ギスターチ

> i24205 — 528 <

どこかうす暗い部屋。液晶画面が、まるで障子の目のようにズラリと並んでいる。床にはボタンが大量についた黒い機械と、横に細長い机が一台あり、回転式の椅子が数脚並んでいる。いわゆるパニツクルームのようだが、画面に映っているのは室内ではなく森だった。

「そうそう、そうだよ」

暗怜軍の城内、監視部屋にバルティー又は一人いた。奇妙な光を放つイスに座り、アンテナの長い携帯電話を用いて誰かと通信をはかっている。

「瀏華隊は恐ろしい組織だね。あれが国公認の組織と思うとゾツとする。でも今一番の問題は死人ではなく、レミラが戦いに来なかったことだ。彼は戦闘狂だから、戦いになれば出てくると思ったのになあ！」

とその時、トントンとノックの音がした。バルティー又ははっとして扉の方を見た。

「待って、誰か来る。一旦切るね」

短くそう言っただけで電話を切ってコートのポケットにしまっ一方、椅子の裏側に手を伸ばす。電話も光も完全に消し、それからどうぞと声をはりあげた。

「失礼」

声かけをして入ってきたのは、真っ黒なコートを羽織った男性だった。割と年はいっており、おそらく四十代の半ばほど。バサバサした赤紫の髪をしており、大きな青い瞳をしている。だがよく見ると瞳の両脇に黒いラインが入っている。

目を細く見せようとしてか、模様のついたコンタクトを入れているらしい。しかしそれも焼け石に水で、やっぱり瞳は大きいまま。そのせいか、どことなく虚無的な感がある。

若い頃はもしかしたら、童顔で可愛いといえる顔つきだったのかもしれない。だが今やそれも予想に過ぎない。確かに童顔な節はあるが、右の頬に二本、左頬から目にかけての二本の黒い 模様の刺繍も相まって、どこか荒っぽい雰囲気があった。

「なんだ、夜闇よやみか。びっくりした」

「おい、此処では夜闇と呼ぶな。ギスターチと呼べ」

「失礼、ギスターチ」

「そうだよ。ところで、何でびっくりしたんだ」

「いや、今ちようど死し謳うに電話をかけていてさ」

バルティアー又はほっとしたように声をはいた。夜闇ことギスターチは少し首を傾げ、彼女が座っている椅子に目をむけてしゃがれ声で言った。

「盗聴防止機能は発動させていなかったのか？ その椅子の裏側にあるスイッチを入れれば、例えば俺が隣にいても声は聞こえんだろっ
が」

「そうだよ。でも詮索せんさくされると厄介じゃないか。死し謳うは暗あん怜れん軍ぐんじゃないんだから」

「ああ、確かに。しかし面倒くさいねえ。俺やお前みたいに掛け持ちすりゃいいのに。そうすりゃ簡単に連絡がとれる」

「そんな簡単にはいかないよ」

彼女は少しため息をついた。

「暗あん怜れん軍ぐんの新規軍員になるにはそれ相応の人物の紹介がなきゃダメだ。それに死し謳うは帝国軍の軍員として登録されてる。絶対無理だ」

「冗談だ。分かっているさ、そんな事」

ギスターチは軽く笑った。そしてぐるっと辺りを見渡し、所狭しとおいてあるモニターと並ぶ椅子に目を向けた。

「しかし此処はすげえ部屋だな。機械とばかりだ。うっかり転ん

だら大惨事だな。暗怜軍の戦闘時にゃ、此処に監視員がズラツと並ぶのか？」

「そうだよ」

「で、お前が『あつちを映せ』『こつちを監督しろ』と指示を出すわけだ。流石、監視官長、並びに参謀担当者だな」

「あまりおだてないでくれ」

バルティー又は彼にあいている椅子に腰かけるよう勧めつつ、またため息をついた。今度は先ほどより少し大きかった。

「長おさと言つても所詮、レミラの下。会社で言えば部長みたいなものさ。社長と社員、その狭間にたつてコキ使われる。中間管理職は楽じゃないね」

「贅沢言うなよ。そのおかげで、死謳のために働き、暗怜軍を利用出来るんだからな」

勧められるがままギスターチは座り、クツクツと笑い、その合間に少し咳をした。顔色は特に悪くなかったが、バルティー又はやや気遣い気味に彼を見た。

「……喘息ぜんそくは大丈夫かい？ 無理をすると悪化するよ」

「分かつてる。大丈夫さ、自分の体は自分が一番よく知つてる。伊達に四十と余年も付き合つちゃいねえよ」

やや胸を押さえつつ笑う。だがまた数回咳をした。彼は少しまずそうな顔をしてコートのポケットをあさり、手の平サイズの丸い何かを取り出した。

厚さは三センチほどで平べったく、プラスチック製で紫色をしている。彼はそれを横にむけ、軽く息をはいてから平らに持ち、ある一か所を軽くくわえ、口から早く、深く、息を吸い込む。その後すこし息を止め、ゆっくりと息をはいてまたカチリと音をたてた。バルティー又は少し目を細めた。

「それは喘息対策の吸入薬？ そんな使い方して大丈夫かい。うがいはい？」

「俺の時代の薬だ。こういう使い方でいい。装置が今の時代と同じ

なのは聊か難だかな」

ギスターチはそれをまたポケットにしまった。

「値段が安いのが幸いだ。ところで、バルティエヌ。さっき死謳に電話していたと言ったな。何の用事だったんだ？」

「今日の戦いについて、報告ついでに愚痴をして嘆いていたのさ。まあ一番嘆きたいのは死謳だと思うけど、僕はまだレミラに報告書を書かなきゃならない」

彼女は軽く肩をすくめた。

「もう忙しくってね。研究棟けんきゅうどうにいるカルシフェルや夜音達やねにも手伝ってはもらってるんだけど、おっつかない。あつそうそう、聞いてたかい。レミラを戦わせなきゃならないのに、彼ったら今回の戦いにはノータッチでさあ」

「ああ、聞いている」

ギスターチはこくと頷いた。

「そのためにわざわざ、レミラに献上した作戦書とは違う計画を作り、それを施行したんだろ」

「そうそう。僕が最初に書いた計画では、闇蝙蝠は死ぬことになっていた。だけど彼は死謳さんが選んだ生贄いけにえ、いわば要だから殺せない。闇蝙蝠を生かしたまま、戦いにもつていく。だけど、弱ったなこうなったらもう一度、近いうちにレミラを戦いに引っ張り出さなきゃ」

「ふむ。……しかし、未だよく分からん。なぜレミラが戦いに行くことが必要なのかだ。そして、何故そんなに急ぐんだ？」

「それは、時間逆戻しの犯人をレミラだと闇蝙蝠に思わせる必要があるからだよ」

手早く彼女は答えた。

「急ぐのは、一か月を過ぎると時間を戻せなくなっちゃうから。…それより君の方はどう？ その、個人的に」

バルティエヌはタンタンと、目の前のキーボードをリズムカルに叩く。すると目の前の画面がそれにあわせて切り替わり、森から城

内へと映す映像を変えた。

清潔感のある白い廊下。まるで病院のようだったが、行き来しているのは看護師や車椅子の人間ではなく、ギスターチや彼女と同じように黒いロングコートを来た暗怜軍の各々である。

行きかう人を密かに見つっ、彼女は聞いた。

「探している女の子は見つかった？」

「いいや、見つからない」

ギスターチは軽く肩をすくめた。

「あいつは闇蝙蝠を追っている。だから、いずれ闇蝙蝠の近くに来るはず……」と思っずつとあの男をはつてるんだが、一向にな。それに、思っようにつまく後を追えないんだ。闇蝙蝠はテレポーターだから神出鬼没だが、対して俺は機械を使わんとテレポが出来ん」「じゃあ、いまからでも習う？」

「無理だな。それに例えテレポーターになつたとしても、人がテレポした先を感知する能力なんて持てない。おかげで完全なるストーカーにはならず済んでいるというわけだ」

最後の方はかなり皮肉っぽく言った。

「いいじゃない？ 闇蝙蝠は君の未来の父親なんだから」

「父親じゃない、祖父だ。祖父と言ってくれ」

「冗談だよ、怒らないで」

軽く相手を手で制し、バルティー又はまた電話を取り出した。それを机の上におき、そのまま悩んだ様子で腕組みをした。

「ねえギスターチ、どうやってたらレミラを戦場に引っ張り出せると思っ？ それも闇蝙蝠がいる戦場に」

「んなもん、急がなくてもいいじゃねえか」

言葉と一緒に焦つた様子を見せる彼女に対し、ギスターチは悠々と答えた。

「レミラは戦闘好きだし、暗怜軍の今の指針からして、瀏華隊と激突することは火を見るより明らかだ。放つときゃいくらでも戦いになるし、そのうちレミラも来るだろう。なのに何故、そんなに急ぐ

んだ」

「ギスターチ。僕らが戦いを惹起じきさせてる理由と、当面の計画は知ってるかい？」

「勿論」

彼はしっかりと頷いた。

「理由は簡単、死謳が死人を、名誉を携えて生き返らせるためだ。

当面の計画は、まず戦闘を勃発させ、レミラのしわざと見せかけて時間を戻す。その後は逆に戦闘を勃発しないようにする」

「その通り」

彼女はぱちぱちと軽く手を叩いた。

46 - ギスターチ (後書き)

*喘息の吸入薬は実在しますが、この小説はあくまでフィクションです。

ご使用の際は医師または薬剤師に確認し、正しい使用方法で服用して下さい。

47 - バルティールと彼らの策謀

「闇蝙蝠やレミラは勿論、瀏華隊と暗怜軍との戦いはその布石ふせきに過ぎない。あのねギスターチ、仲間である君に、今一度教えておくよ。僕らは 正確には死謳さんは 時間を逆戻しする事が出来る」
ぼんぽんと、先程机に出した携帯電話を叩く。その表面には赤いデジタル数字で時間が表示されていた。一秒、また一秒と数字の間の：が点滅する。

「ただし、一か月以内だ。故に僕らは暗怜軍と瀏華隊の出会いからレミラとの対戦までの全てを、一か月以内に収めなきゃならない。いいかい。瀏華隊が暗怜軍と衝突する直接的なきっかけは21日に作られた。21日に暗怜軍は とうるか僕なんだけど 瀏華隊に手紙を送り、それがきっかけで戦闘が勃発したからね」

ギスターチの様子を見ながら、ややゆっくりと説明する。

「だから来月の22日までに事を全て終わらせないと、それ以上は手に負えなくなる。だって来月の30日とかになってごらんよ、戻せるのは良くて今月の30日だ。でも君がさつき言ったように、二回目は戦闘を不発にする必要がある。だから急いでいるんだよ」

急いでいると言いながら喋るうち、説明しているバルティールも人も早口になってきた。ギスターチはまあ落ち着けと彼女をなだめ、こう言った。

「成程。そういうわけね……だが大丈夫、方法はある。レミラは強い人間が好きだから、得たデータを誇張し、瀏華隊は強いですと書いておけ。そうすれば次こそ姿を現すはずだ」

「そうかなあ。だけど嘘はかけないよ。バレた時に面倒になる」
「嘘じゃねえだろ。現にさつき戦闘した奴らの大半は死んだ。いくら下っぱとはいえ、指揮官のダークがろくすっぽ命令を出す前に死んで大きく不利に追い込まれたとはいえ、人数の差がある。それにこっちには地形の利もあつたんだ。なのにメツチャクソ殺られた。」

それでも不足つていうのなら、いつそ誰か、レミラに可愛がられて
いる奴が瀏華隊に殺されればいい」

物騒な言葉を、彼は全く悪びれせず答えた。

「それも、戦場以外で。戦場で人が死ぬのは当たり前で、そんな事
でレミラはキレたりしないだろうから」

「……これはまた、ずいぶんと」

バルティー又はゆっくりと言った。何とも微妙な表情をしている。
「血に飢えた　　じゃない、独創的な発想だね。暗怜軍の重鎮を戦
場以外で瀏華隊が殺す？　でも彼らは法に則って殺人をする集団だ。
そんな事出来るわ　　いや、待てよ」

彼女はピタリと動きを止めた。

「そうだ。何も瀏華隊の隊員が殺す必要はないんだ。瀏華隊がやつ
たように見えればいいんだ！」

はつと、何か思いついたように明るい声をあげる。そんな彼女に、
意見を出したギスターチの方が首をかしげた。

「へ？」

「そうだ、そうすればいい。思いついたよギスターチ。相当ヤバイ
手だけど、ま、いいさ。どうせ今僕達がいる時間は戻ってリセット
されるのだから」

「……お前、何を？」

「うまい具合に、今回の戦いで一人、瀏華隊側で戦闘に出なかった
人がいる」

困惑する彼をよそに、バルティー又はどんどん続けた。

「デイザートさんだ」

「デイザート？　って、デイザート＝レグルスクローという名前で
今瀏華隊にいるあのジジイか。……いや、ジジイといったら俺もだ
が」

人の事は言えないと、彼は軽く頭をかいた。

「出てなかったのか」

「うん。デイザートさんはリーダーの凜よりもずっと強い。だけど

戦闘に出なくてデータがとれなかった。弱いのなら『一人くらい』で済ませれるけど、彼のようにクラスが高い人じゃそうはいかないだから、レミラにこう言うんだ」

バルティアー又は少し声色をあげた。

「瀏華隊の大半の人のデータはとれました。しかし、一番厄介な人のデータがまだとれていません。このままでは瀏華隊の真の戦闘力が分かりません。ですので、かくなる上は強引にそれをとろうと思います。瀏華隊がふだん使っている建物には、本部である帝国軍と接続されているパソコンがあるはず。なので建物に直接入り、そのパソコンを通じてデータを盗もうと思います。しかしドジって警察に捕まり暗偵軍のことを吐くようなマネをされては困るので、どなたかそれ相応の技術がある人間を」

「おいおい！」

まともな思いつきである彼女の言葉に、考えを出したギスターチの方が、かなり呆れた声をあげた。

「いくらなんでもムチャクチャだ。いくら時間が限られているとはいえ、今日はまだ23日だ。少し落ち着いて作戦を練ろうぜ」

「勿論、このままじゃあまりに粗削りだ。もつと細部を細かく計画し」

「そうじゃない！ あのな、いつまでもデータ採取を盾に隠れる事は出来ねえぞ。言いたくないけどお前、今回の事で結構叩かれてるんだぜ」

「そんな事分かってるよ。まあ、話は最後まで聞いてくれよ」

わつと文句を言おうとする彼を、バルティアー又は軽く押しとどめた。

「大丈夫。本当にうまく行かなかつたら時間を逆転させてリセットするから」

「だが許可がおりるわけがない。そんな事を言ったら『最初からそれをしろ』って一喝されて終しまいだ。大体、お前この前の誘拐事件について、なんてレミラに弁解した？ データを盗むのは大変だし、

実際に戦いを見た方が良質なものが取れる。だから瀏華隊を誘拐し、更に一人呼び出すことを許して下さいって言ったんだろ」

彼は肩をすくめた。

「だが実際は逃げられてこのザマだ。勿論これは俺らの計画だったわけだが、しかし暗怜軍はそんなことは知らない。もう一度言っぞ、データ搾取を囿おとりにして二度も同じ手を使えるとは思えん」

「でも万が一、来月の21日までには何とかならなかったら？」

彼女はひどく憂いた声をあげた。

「僕としてはそっちの方が心配なんだ。暗怜軍の方は当たって砕けるで構わない。いいよ。仮に僕が失態を責められてレミラに殺されてしまっても、この暗怜軍内にはまだ僕らの仲間がたくさんいる。僕が消えても、死謳の計画に手をかす人間はいるんだ」

「いいのか」

ギスターチは短く言った。

「殺されても」

「僕は死謳さんを信頼している。だって僕の師匠が彼女をとても信頼している。それに今、23日の時点で僕は生きている。だから計画通りに時間が巻き戻った場合、僕は絶対に生き返る。もし生き返らなかったとしたら、それは死謳の計画そのものが失敗したってこと。でもそうになったら僕らは皆おしまいだ。暗怜軍からも帝国軍からも追われ、一生の間逃げ続ける事になるだろう」

「……」

あまりに重々しい事実には、彼は口を閉ざした。何も言えなくなつたのだ。

他人を心配するどころではない。自分の身を案じなければならぬ。重圧ともいえる間を少しおき、彼女は今度は明るい声を出した。「大雑把な計画はこうだ。まずは暗怜軍の重鎮を一人、ないしは二人、瀏華隊の建物に送り込む。でも予め細工をかけておいて、その人が瀏華隊に捕まるようにするんだ。その後で、内密に殺す。瀏華

隊の仕業にみせかけてね。そうすればレミラは怒るだろうし、戦いが加速する」

「でもなあ」

ほとほと困った顔をして、ギスターチは彼女を見た。

「お前が死ぬ、死なないはこの際、棚の上にあげておこう。だがお前、その作戦には山ほど問題があるぞ」

「何？」

「まず第一に、どうしてわざわざ建物に侵入する必要がある？ データと取るならそれ専門の奴にハッキングを頼めばいいだろう。それと第二に、さっきも言ったが、一人分の情報が抜けてたからって理由でレミラがOKを出すと思うか？ いくら強いとはいえ、一人だぞ」

「順に答えよう。まず第一の問題については、危ないからって答える。これは嘘ではないよ」

彼女は真顔で言った。

「ハッキングをかけると逆にこちらが乗っ取られる可能性があるらしいから。……僕は詳しく知らないけれど。それと第二に、瀏華隊は絶対数が少ないから、一つ一つに重みがある。それに、ディザートさんであれば許可をもらえるところよ」

バルティー又は鋭く彼を見返した。

「知らないのかい。ディザートさんは暗怜軍にとって『裏切り者』なんだよ」

「あ？」

「あの男を責める気は全くない」

弁解の言葉をすぐに続ける。

「謳歌軍が壊滅後、僅かな生き残りは僕をふくめて多くは暗怜軍に下った。一部では一般人としての道を選んだり、外国に行ったりしたみたいだね。ただし彼は違った」

彼女は右横の、明かりのついてない暗い液晶画面に目を落とした。「彼は謳歌軍でありながら、自分たちを滅ぼした組織、瀏華隊に寝

返ったんだ。しかも、戦闘力がかなり高い。彼が本気を出せば暗伶軍の三分の二は殺されてしまうよ。それほど強力なんだから、レミラだって気にするはずさ。ただ彼のデータは抹消されていて、普通じゃもう手に入らない。かろうじて、帝国軍が保持している。そして瀏華隊からそれを見ることが出来る」

「ふ、む」

「それに、レミラにダメって言われたら、その時は別の方法を考えるさ。いいかい、時間は巻き戻るんだ。失態だって無に帰すんだ。恐れる事は何も無い」

「まあ、そこまで言うんなら」

ギスターチはかなりしぶしぶ頷いた。

「自由にしろ」

「ありがとう」

しぶる彼をよそに、彼女は早速行動を始めた。またせわしなくキ―ボードをたたく。

「そうと決まったら、まずは夜音とカルシフェルに連絡をとらなきゃ。で、提出用のデータを作ろう。デザイナートさん不在による欠陥というのを、うまく強調して書かないとね。それと死謳さんにもこの計画を伝えなきゃ。ギスターチ、君も引き続き暗伶軍の中に溶け込んで、色々と情報を集めてくれ」

48 - 闇蝙蝠の家にやってきた人

「うーん……」

闇蝙蝠は自室のベッドの中で、気持ちよさそうに伸びをしていた。一戦があけ、ひと段落ついた翌日、今日は24日。平日だったが、彼はサボりを決めこんでいた。もう昼の十一時になるが、部屋の黒いカーテンは未だ閉まったまま。サラサラとした青いベットカバーの手触りを楽しみつつ、のんびりとした時間を満喫する。昨日戦いをしたせいで、疲れてしょうがないのだ。

戦闘は全員で行ったものの、鷹翼岩の上から始まって、彼は真っ先に戦闘の場に飛び込んだ。更にテレポーションでの移動作業があった。緊張と肉体酷使で心身ともに散々で、もし素人であれば入院するハメになっていただろう。……そして。

「ああ、しかし血イ臭えなあ」
手を嗅ぐと、どことなく生臭い臭いがまだついている。

全てのゴタゴタが終わり解散となった後、すぐに風呂に入って汚れは落とした。しかしなかなか臭いは落ちない。

死体も内臓も飛び散る骨肉、人の悲鳴……ちぎれた手足。映像はもう見慣れているが、未だに慣れないが臭い。お世辞にもいい香りとは言えないし、気分が悪い。

闇蝙蝠はむくりと起き上がった。床までとどく長い窓にかかるカーテンを薄くあげ、まぶしい光に目を細める。

窓の外には、何の変哲もない光景が広がっている。ベランダ、その向こうにあるのは隣接したアパートの屋根、木の葉っぱ。

だがもし昨日の戦いで死んでいたなら、これは今拝めなかった。そう思うととても貴重に思えてならず、彼はしばし窓の外を見入った。

無数 正確な数はまだ分からないからにして いた暗怜軍の

うち、生き残ったのは四人。全てとっつかまえて警察に引き渡した。今頃彼らは手当を受けるかたわら、あれこれ尋問をされている事だろう。

ただ一人、春翹諳がピロロの魔法技を借りてすっ飛ばした少年。アサルトは生死不明で行方も知れないが、これは闇蝙蝠がスツ飛ばしたわけではない。

同じ隊員である以上「知りませんでした」というわけにはいれないが、しかし今更、何をどうするという案もない。行き先が分からないからだ。

しばし物思いにふける。だが突然、ベランダの柵を超えて赤い物が飛び込んできた。それは窓のすぐ外に来て、寝ぼけた顔の闇蝙蝠をじっと見つめた。

「ありや」

いきなり出現したソレに、闇蝙蝠は思わず目をこすった。だがコンコンと窓を叩くハッキリとした音に『夢ではない』と確信し、ガラリと窓をあけた。

「こんにちは」

やって来たのは人だった。赤い髪に大きな青い瞳。しーちゃんこと春翹諳である。白くふわっとしたワンピースを着、空中をふわふわ漂う本にのって、わざわざ二階の此処まで来ていた。

なぜか今日は顔色が悪く、貧血気味な表情をしていたが、それはそれ。開けられた窓から靴を脱いで中に入ると、相手は全く当たり前のように挨拶をした。

「お邪魔します」

「お邪魔されます」

真面目くさって闇蝙蝠は答えた。

「……おはよう。お前ねえ、泥棒じゃないなら玄関から来てくれる？ 大体その恰好でよく空中を漂うな。下からパンツが丸見えになるぞ」

「おはようって、貴方。もうお昼ですよ？」

「話をそらすな。で、何の用？」

「たまたま歩いていたら、公園で興味深い人を見つけたので……ついで」

「はあ」

よく事情がのみ込めず、闇蝙蝠は間抜けた返事を返した。

「何、芸能人？ 俺、そういうの興味ねえんだけど」

「いいえ、暗怜軍」

「ふーん。……え、暗怜軍？」

あんまりといえばあんまりな単語に、彼は目をこする手を思わず止めた。

「まさかアサルト?!」

「いいえ。でも暗怜軍の人です。ねえ、見に来ませんか」

「行ってもいいけど、俺、まだ着替えてないんだが」

「でもそれ、ジャージでしょう。問題ないですよ……別に」

「あと顔を洗ってないんだけど」

「洗っても洗わなくても、変わりませんよ……大して」

「何だと、失礼だな！」

「とにかく、ほら」

ゴチャゴチャ言うのにしびれを切らしたか、春翹諳は強引に闇蝙蝠の腕を掴んだ。

「行きましよう、お兄さん」

闇蝙蝠の足元にも本を出し、自分と同じように宙に浮かせる。二人は窓から飛び出し、外に出た。

「ちょ、ま、わっ　　おいおい、こんな飛び出し方をしたら目立つじゃねえか」

ぼやきつつも、闇蝙蝠はまるでスケボーのように本の上でうまくバランスを取った。春翹諳は自分の技なので慣れていて当然だが、闇蝙蝠はそうはいかない。だが鍛えてきたいるから感覚は良い方で、すぐに慣れて上手に本の上に立てた。

「これ、なんていうバランスボール？」

「姿勢、低くした方が安定しますよ。あ、でも足を下に出さないで下さい」

「そりゃ貴重なアドバイスをどうも。しーちゃんこそ、バランス崩して落下するなよ。なんかお前今日顔色悪い。大丈夫か？」

「大丈夫ですよ……これくらい」

「そう、ならいいんだけど。ていうかコレ、下から見えないの？俺ワンピースじゃないけど、ちょっとこれ気になるぜ」

自分のすぐ下を親子連れが歩いているのを見る。だが子供も、親も、彼らはこちらの事は全く見えてない様子だった。ぬいぐるみを持って楽しそうにはしゃぐ幼子を両親が微笑みながら見ている。

「見えませんよ。かけましたからね、透明化するための魔法。十分くらいしか持ちませんが」

「しーちゃん、お前そんな魔法マスターしてた？」

「いいえ。かけたんです、透明ラッカー。闇市場で出回っている市販のものを」

「どこが市販?! ていうか、ダメだろ瀏華隊が闇市場で出回ってるモノ使ったら！」

「あ、ご注意下さい。これ声までは消せませんから」

闇蝙蝠の素っ頓狂な声に、親子が上を向いて『どこから声が聞こえたのだろう』ときよろきよとしていた。

二人はさーっとその上を過ぎたが、闇蝙蝠は「それを早く言えば」とぼやいて声を小さくした。春翹諳は物憂げに言った。

「いいじゃありませんか。貴方だって、買ったでしょう……蠍鬼を、闇市場で」

「それは昔の話。瀏華隊に入る前の話だ」

「留守中の世話、私に頼んだりしてたくせに」

「水やりを頼んだだけじゃないか。それも三年も前の話だろ！」

「いや、二年だったかな」

「それと私、別になっているわけじゃありません……悪用を」

親子を過ぎてから、先程の言葉に春翹諳は返事をした。

「体にかけると皮膚炎を起こし、吸いこめば肺炎、目に入れば失明の恐れ。だから禁止されて一般には出回らない。けどどそんなの、本にかければ回避できます。体に直接触れませんから」

「だけどさあ、それじゃ横から見た場合は俺らの姿って」

「大丈夫。つけてますから……特殊蒸気を噴出する小さな機械を。分かります？ 蒸気でね、包むんです。」

この蒸気はかけられた魔法をまとう性質があります。ラッカーを本の下にたっぷりかけて、機械をつける。すると魔法だけがあがって私たちを包むんです。

何も感じませんが、今私たちはもわっと包まれているのです」

「む、蒸し焼き」

「焼きません。でもこれ、やりすぎると肺が少々。多少はラッカーの有毒成分が混じりまして」

「ゲッ!？」

途端、闇蝙蝠は喉をおさえた。

49 - 侵入せんと目論む者

「怖いよ！ どうしてそんなものを」

「心配しなくても大丈夫、死にませんよ……一度や二度じゃ。魚の焦げを食べるのと同じ事でしょう」

「だとしても嫌だよ。ちょ、止めてって、頼むから！ ねえ降りていい？」

「冗談ですよ。ダメです、今降りるなんて。それよりほら、ごらんなさい」

ゴチャゴチャ喋っているうちに、二人はいつの間にか小さな公園に来ていた。瀏華隊の本部の近くだが、真昼間の今は子供がわいわいと遊んでいた。

しかし何を隠そう、闇蝙蝠が閑街道に行つてゴロツキに襲われ、逃げた時、一旦逃げ帰ったのが此処である。

と、春翹諳は闇蝙蝠に近寄り、のっている本を彼のすぐ後ろにつけてべったり背中にはりついた。

「わっ、何？」

「この公園ね、夜はハッテン場になるんです」

クスクス笑いながら、闇蝙蝠の耳元で囁く。かすかだが乳臭さと血生臭さ、加えて、お菓子に似た妙に甘い匂いがした。闇蝙蝠はよっぽど相手を背負い投げしてやるうと思つたが、今は本に乗せてもらつている身。下手なことは出来ない、ぐつと堪えた。

「おいおい、野外プレイをご所望かい？ だったら俺の後ろじゃなくて前に来いよ。この体勢じゃつっこむの無理だぜ」

「言いますね……なかなか、下品な言葉」

「お前が先に話をふつたんだろ！ っていうか、ハッテン場だなんて嘘だろ。だってこの前、夜に此処を訪れたけど静かだった。人はおるか、草陰であんあん言う声も無かつたぜ」

「ああ、人間ではありません。獣です」

「そんなの季節限定じゃねえか」

「冗談を言っただけですよ……もう、そんなに怒らないで下さい」「ていうかお前、香水つけた？ 何か乳臭いんだけど。蒸気うんぬんで言いそびれてたが、とつても確かに随分おそろくミルキーな……」

「ミルキー？ リンスでしょうか？ 私、香水はつけていませんよ。貴方……いいんですね、嗅覚が」

「くわえて生臭さが」

「生魚でしょう。……あ、静かに」

突然、口を後ろからふさがれる。一瞬むごつと息が止まったが、目の前に現れた人影に彼は本当にギョツとした。

本に乗って移動するうち、二人は藪の中に入っていた。視界は悪くなり、人目もなくなる。だがそこに、また別の二人の人間が身をかがめていた。彼らはカバンを地面におき、下で作業をしている様子だった。

闇蝙蝠は一瞬、公園の整備係かと思った。だが二人の人間をよく見ると、片方は前に暗怜軍の牢屋で対峙した女性、リオンだった。

帽子を被っていて分かりにくい、右目は藍色で左目が水色のオッドアイ。水色の髪は後ろで一本に結び、動きやすく且つ、汚れても平気そうなツナギの服を着ている。

また隣には、同じような服を着た男がいた。髪の毛は長く、オレンジ色で一本の三つ編みにしている。体つきは割と立派だが、どことなくカマッぽいような気がした。

春翹は手を放した。解放され、闇蝙蝠はごくごく小さな声で言った。

「リオンじゃねえか。……なるほど、確かに暗怜軍の奴だな。此処にいるってことは、落盤じゃ死ななかつたって事か」

暗怜軍の牢屋から脱出した折に、された邪魔。それを思い出した

闇蝙蝠は、いささか苦々しげに息を吐いた。その傍らで、春翅諳は少しだけ笑った。

「ね？ 興味深いでしょう？」

「ああ。すごく興味深い。真ッ昼間からこんな場所で、一体何をしているんだ？ そして隣の男は誰だ。まさか彼氏か、デート中か？

しかし、カマッぽい野郎だな」

「彼はロンウエーです」

闇蝙蝠と同じく、春翅諳もきわめて小さな声で話した。あまりにピッタリくっつかれて耳元で喋られるので、耳が少々こそばゆかったが、闇蝙蝠はじつと我慢した。

「ロンウエー。聞いたことはありませんか？ 裏社会では有名な人コンピューターマニアでハッキングは勿論、優れています……組み立てや機械の作成など、ハード的な側面も、ね。

あと屢つね、自分を『死んだ姉に憑依されてる』『三歳の時に死んだ、双子の姉のセレネが憑いて時々出てくる』と言っています」

「聞いた事は『あるような無いような』だが、そいつはオカルトマニアのオカマなのか？ ちよつと頭がヤバイんじゃないのか。それとも女装癖か何かあって、それがバレてとっさに作った言い訳を無理やり通しているのか」

「その言葉、本人が聞いたら怒りますよ。また性癖はどうであれ、事実です……メカニックに優れていることは」

と、その時、ロンウエーがいきなり『出来たわ！』と声をあげた。「ようやく壊せたわ。これよ、これ！ ほらリオン、分かるかしら。このパイプ」

彼の喋り方はもろに女口調だった。闇蝙蝠は『ああ、口調まで徹底してるな』と思いつつ、気配を殺し、彼がりオンに指示したものを見た。

それは言葉とおり、太い灰色のパイプだった。もともとは地面の中にあつたようだが、引っ張り出されて一部が開けられ、内蔵して

いる赤や黒のコードが無数見えている。闇蝙蝠の目には、テレビの配線をチューブに腸詰めしたとしか思えなかった。

「これは何ですか？」

同じことを思ったらしく、リオンがロンウエーに尋ねた。

「配線の塊に見えますが」

「そう。とても簡単に言うと、これは瀏華隊の建物にある監視カメラの情報伝達コードよ。何かあった場合、警察や帝国軍本部に情報を送るの」

「へえ……」

その言葉に、闇蝙蝠も思わず彼女と同じ声をあげそうになった。

が、刹那に春翹諳に口を手で塞がれ、声は消える。もごもごしていると、リオンが首をかしげた。

「しかし何故、こんな所に」

「それは、設計者に聞かなきゃ分からないわねえ。でもま、昔の技術だからじゃないかしら。今なら地面の、もーっと奥深くに埋めたり、あるいは凄く頑丈なパイプに通すだろうから」

カバンから何か道具を探しつつ、ロンウエーは返事をした。リオンは続けて聞いた。

「というか、無線じゃないんですか？ どうしてコードがこんなに沢山あるんでしょう。電源コードなら分かりますけど……」

「もちろん、無線もあるわ。けど無線は天候や、強い魔法、磁力などで邪魔されることがあるの。有線は線がある限り、そういう事が少ないわね。だからこれは、無線がダメになった場合の予備ね」

しゃべりつつ、丈夫そうなナイフを取り出す。

「で、これをこうする」

次の瞬間、ロンウエーは躊躇いなく、刃を配線の束に滑らせた。ブツブツと、音を立てて各コードが切られていく。その光景にリオンはもとい、隠れている闇蝙蝠も啞然とした。

「!?!」

「リオン、そんなに口をあけないで。いいから、ちゃんと見張りを

してなさいよ」

「あ……は、はい」

「こんな所、誰かに見られたら激ヤバでしょ。アタシ達、透明ラッカーをつけてないんだから」

透明ラッカー。言葉自体は先ほど春翹諳からも聞いたが、それにふと闇蝙蝠は首を傾げた。どうしてスプレーが使われている自分に同じくスプレーを使用しているらしい春翹諳の姿が見えるのだろうか。

「なあ春翹諳……」

だがそう言いかけた途端、ロンウエーが『それじゃ、もう一度軽くおさらいね』と前置きし、リオンに喋り始めた。闇蝙蝠は言いかけた言葉をうつちやり、彼の話に聞き耳をたてた。

「アタシ達は夜に侵入して、瀏華隊の隊員の戦闘能力データを盗むの。その直前に、アンタは強力な魔法を発して無線を邪魔する。一時的に、深多の森と似た環境を作り出すのよ。」

で、こんな事をする、普通ならシステムが自動的に切り替えされる。無線から、有線へと。でもそれは今、アタシが切っちゃったから意味をなさない。

つまり瀏華隊は一時的に、外部と孤立した状態になるの。オーケー？

「はい」

「問題は警備員ね。でもそれはバルティーンが『一般人に毛が生えた』程度だと言ってた。抵抗もろくに出来ないでしょうね。こうして全ての邪魔を払って、データをコピーして逃げるって寸法。いい？」

「でも、本当に大丈夫なんでしょうか」

彼女はあくまで不安そうだった。それを、ロンウエーが明るい声で励ました。

「大丈夫よ。それじゃ、帰るわよ」

鞆から布を出し、彼は今切った部分をぐるぐると巻いた。また上に土をかぶせ、軽くならす。

「こんな所に長居は無用。さっさと城に戻りましょ」

彼はカバンを持つと、リオンとそろってテレポーションをかけた。魔法陣の赤い光に一瞬包まれ、二人は素早くこの場から去った。

「なんてこった」

後に残された闇蝙蝠は、放心したように言った。

「やべえよ！ 瀏華隊の危機だあ、あいつら仕掛けてやがった！！」

「ええ」

「まずいよ。侵入されるよ。盗まれるよ！ データ っていうた
つけ。それきつと開示データのことだ。あるいは何か、もつと極秘
なものか……とにかくヤバい！ どうしよう、絶対これ危険だつて
！」

「そうですね、危険ですね」

「 っ て、何でお前はそう落ち着いているんだ？！」

闇蝙蝠は思わず、キツとなって相手を見た。次いでひどく妙に思
った。

透明ラツカー。蒸気を噴出するための機械。姿をくらます闇市場
由来の二つの道具……だがどうして都合よく、それらを保持してい
たのだろうか。たとえ召喚で呼び出すにしても、あらかじめ、手に
入れておく必要があるはずである。

というのも、帝国内の店にある物は召喚魔法をはじく仕様になっ
ている為、勝手に呼び出そうと思っても出来ないからだ。自分の物
とするには、相応の代金を払い、事前に入手しなければならない。

「用意が良すぎる。それにお前、どうして二人が暗怜軍だと分かっ
た？」

「ロンウエーは有名な人ですから、見てすぐ分かります。リオンと
はこの前対戦しました。生憎、逃げられましたけどね……殺す前に」
「彼女、戦場にいたんだ？」

「いきましたよ。気が付きませんでしたか？」

春翹諳はいつものごとく、虚無的で大きな目をして彼を見た。その表情から胸中は、よく分からない。

「それと私、事前に知っていました。彼らが此処に来ることを」

「じゃあどうしてすぐ止めなかった？ 一対二だったから？」

「なぜ彼らがここにこんな配線があると知っていたのか、データ云々と言っていたが、それは何なのか」

「ずらずらと、言葉を続ける。」

「そもそも、どうして侵入しようとしていたのか？ しかも戦いを前提とせず、人知れずバレないようにコッソリとなんて、暗怜軍らしくありません」

「そういえば、そうだな。あんなに好戦的な奴らなのに」

「でしょう？ なので、まずは知らなければなりません、彼らが何を目的としているのかを。」

「それが分からなければ、たとえ今食い止めたところで、されるでしょう。ゆくゆくは……此処に、侵入を」

「う……ん、まあそうだ。でも」

「侵入した所を捕まえて、その後で警察に引き渡すなり、こちらで尋問するなりして吐かせましょう。そうすればきつと、明らかになるでしょう……彼らの動機が」

「だけど、俺らだけで勝手に動けないぞ」

「いつになく、闇蝙蝠は困った顔をした。」

「現場なら取り押さえ出来るけど、奴らはもう消えちまった。凜に言うしかないが、説明はどうつける？ ああ、いや待て。それよりも、だ」

少し混乱していたが、必死に平素を装って、彼は春翹諳をじっと見た。

「さつき『知っていました』って言ったけど、お前はどつやって事前にこの事を知ったんだ？ また、どうして俺を呼んだんだ？ ほかにも隊員は何人もいるのに」

原点の疑問。だが春翹諳は軽く肩をすくめた。

「つい一時間ほど前の事です。偶然ですよ……この公園を通りかかったら、見かけたのです。ベンチでリオンとロンウエーが座って密かに喋っている所。変装したって、顔形はそのままですから……分かります」

「そんな偶然があるものか？」

「あつたから、こういう事になったのです」

「本当に？」

「嘘を言っでどうするんです？」

猜疑的な闇蝙蝠の態度に、ややつつけんどんに言う。

「思いました、これは何かあるだろう……と。でも、バレたら逃げられてしまいます。ですからレポーターションで 本を媒介にした例のあれですが 荒海人街道の闇市場に行きました。そこでラッカーと蒸気噴出機を買い、戻って駆けつけたんです」

「悠長だなあ。その間に見失ったらどうするんだ」

「それは大丈夫。本を見張りにつけましたから。分かりますか、私……本なら自在に操れるんです。貴方がランプを操るように」

前にも聞いたセリフを、春翅諳は繰り返した。だが闇蝙蝠はまだ首をかしげていた。

「でもラッカーって、そんなに手に入るものなの？」

「売り場を知っていれば簡単ですよ」

「どうして売り場を知ってるのさ」

「売っているのを見たんです。ほら……この前、警察からの要請で行ったでしょう。三グループに分かれて、街道へ」

「とか言ってるけど、どうせなじみの店だったんだろ。しーちゃん、頻繁に出入りしてるのかい、ああいう所に」

闇蝙蝠はかなり皮肉った声を出した。それを聞いて、春翅諳は少しムツとした様子を見せた。

「貴方だって昔、買いましたよね？」

蠍鬼の卵。それに『服従の呪い』の方法を記した本も。更にあと犬牙狂けんがきやう」

「分かった。もう言わない。はい、話の続きをお願いします」

「で、用意はできたわけです。だけでも私、少し慌ててたんですけどね。こういう時、リーダーを呼ぶべきですね……普通なら。けど真っ先に思いついたのが貴方。だから貴方を呼んだんです」

「慌ててたの？　とてもそうは思えないんだけど」

「見えなくて悪かったですね。因みに、貴方の家に入った時、私が透明でなかったわけは、蒸気をまだ出してなかったから。ラッカーをつけても、蒸気を出さなければ体は包まれず、消えません」

あの時、貴方は冗談で『下からパンツが見えそう』なんて言っていましたけれど。あの時の私を真下から見たなら、私は消えて見えませんでしたでしょう」

「鉄壁だな。だが今は蒸気を出しているんだろう？」

「はい。続けています」

「それじゃあ、どうして俺とお前は互いに姿が見えるんだ？」

「このラッカー、確かに姿は消しますが……見えてしまいます。同じラッカーを使用した者同士は」

「なるほど。完璧に透明になるわけじゃないんだ」

「そう」

春翹諳はこくと頷いた。次いで、やや困ったような声を出した。「それと、もう一つ。話が前後しますけれど、貴方、私に『どうして凜を呼ばないのか』と聞きましたよね」

「だから、慌ててたんだろ？」

「そうです。……ですけど、慌てなくても、私、今凜には会えません」

「どうして？」

「ラッカーと蒸気」

答えつつ、春翹諳は手を体の前でサツと払う動きをした。地面から一メートルほどに浮いていた二人の乗っていた本が高度をさげ、地上三十センチ程度になる。

「どちらも闇市場のものですよ。瀏華隊としてはこんなの……使ったなんて言えません。悪いでしょう、体裁が」

「そんなの、隠れて見てましたって言えばいいじゃねえか」

「ですが私……心配で」

「おいおい」

闇蝙蝠は本の上で姿勢を変えた。本当はおりて地面に立ちたかったが、家の窓からいきなり飛び出したせいで裸足だった。このまま降りると、足が汚れかねない。特に必要もないので、ただパタパタと手を顔の前でふった。

「バレないって！ 誰も想像しないよ。隠れて見てましたって言えば済む話だろ」

「それが……分かってしまっんです。言わなくても、匂いで」

軽く手の甲を嗅ぐ恰好をし、春翅諳は言う。

「透明ラツカーは無臭ですが、蒸気は香りがあります。ねえ闇蝙蝠私から……匂いませんか。お菓子を焦がしたような甘い匂い」

「ああ、するね」

闇蝙蝠は素直に頷いた。

「乳臭くて生臭くて、ちょっと甘い。前者二つはさつき指摘したからまずおいて、この甘い匂いはそれだったんだ。……って、待てよ。それじゃ俺もじゃねえか。だって使ったんだから」

「貴方は大丈夫です。機械が違いますもの。ほら」

春翅諳は手を伸ばし、闇蝙蝠が乗っている本にぺたっとくっついていて機械を外して見せた。黒いそれは小さくて丸く、ひっくり返すと裏にはNPPと文字がほられている。

「で、私のはこれ」

今度は、己の本にくっついていて機械を外した。だがこちらは闇蝙蝠のそれとは違い、白くて形は六角形。ひっくり返しても、裏には何も書かれてない。全体的にザラつきがあり、少し粗野な印象があった。

「貴方のものはちゃんとしています。でも私のは粗悪なコピー品だから性質が悪くて、そのせいで匂いがついてしまったんです。

やってから気が付いたんですが、もう遅くて。そして困ったこと

に、とれないんです。この匂い、なかなか……お風呂に入っても、勿論、いずれは消えますよ。二日もたてば……自然にね。でもそれじゃ間に合いません。だって彼らは今日侵入するでしょう？ それまでに凜に会って話をしなければならぬのに。

もつとも、彼女がこの匂いを知っているかどうかは不明です。でも、知っていたら困ります。会うに会えません」

「電話かメールをすれば？」

「これは重大な事です。それだけで済ませれると思います？」

「ああ、そうか」

「だから、貴方から凜に言ってほしいんです。道具のことは、上手く言い訳を 私、考えますから。貴方は伝えるだけでいいです」

春翅諳は瞬きせず、じーっと大きな瞳で彼を見た。

「伝えて下さい……私が見聞いたこと、貴方が今見聞いたこと。そして、危険ということ。そして立ててください……彼らを捕まえる手立て、対策を 早急に」

闇蝙蝠は腕組みをした。

正直、あまり気は進まなかった。言い訳を考えるのが面倒だったし、春翅諳に使い走りされる気分になったのだ。更に、この事を言えば仕事が増える可能性がある。平素ならともかく、先日戦いに行つたばかりで、少しは休みたいと思つた。

しかし危険の事実を知つた以上、黙つてはいられない。結局、ため息を一つつき、分かつたと言つた。

「いいよ、分かつた。俺が伝えるよ」

「本当に？」

「ああ。まあ……俺もお前も同じ瀏華隊の隊員なんだし、身内のよしみだ」

51 - 見張り

日付が変わり、25日の深夜。

「本当にこれでいいのかしらん」

妙なセリフを吐きながら、闇蝙蝠は監視をしていた。右腕はなく、使い蝙蝠にして偵察に回している。隣には凜がいて、腰には愛用の刀を二振りさし、黙ってじっと座っていた。

二人がいる場所は、瀏華隊が普段使っている建物の、すぐ隣。一般の会社が入っているビルだが、その屋上に、結界を張ってこもっていた。ただし結界は二人で一つではなく、各々一つずつある。

結界は闇蝙蝠が作った。だが彼は、暇つぶしに自分がブツクサ独り言をいう事を鑑みて、あえて二つ作っていた。防音措置を付加しているため、声は張りあげないと相手に届かない。

凜に迷惑をかけないよう考慮しつつ、手持ち無沙汰に、闇蝙蝠はひたすら喋っていた。

「いや確かに、これが上手くいけば侵入の目的やら何やらかにやら、全部分かるからいいんだけどさ。でも失敗したらヤバイなあ。まあそれに、どうにも気に入らない事が一つ、だ。まるで春翹諳に使われたようで……いや別にいいんだけど、納得の上だけど！」

ただなあんとなく、気分が悪い。大体あの子ったら何を考えているのかまるで分からないんだもの。いつも虚無的な瞳で人形みたいにジーツと……ぶるぶる！

しーちゃんったら、小さいときから容姿が変わってないもんなあ……初めて会った時からそのままもんなあ。全く、一体あれと俺のどこに血の繋がりがあのか、一回DNAに問いただしてみたいよ。顔も性格も似てねえじゃんか。別に似たいとは思わないけど。

大体、俺の母親って一体何だ。父親違いのガキを何人産もうと勝手だが、手元において育てるよ。カツコウじゃあるまいし、全くも

う。

いやそもそも、親父が浮気性だから悪いんだ！ 大体相手をとつかえひつかえ。でも……待てよ。あの親父ですら二人の女性と結婚が出来たっつーことは、俺もそこそこ可能性があるんじゃないかなあ。でも俺、親父と顔があまり似てねえからな。ああやだやだ。家系の事は考えないようにしてたはずなのに　何でこう、ド畜生ッ

実にやかましく喋り続ける。小声だが耳障りで、結界がなければ隣の凜が、大口で文句を言っただろうと思われた。

そして、言葉はいつしか愚痴になっていた。だがそれも仕方が無いことだった。

闇蝙蝠の実父は結婚後、子供を一人　闇蝙蝠の兄　を授かったが、離婚。

その後、父は別の女性と再婚して、また子供を一人　これが闇蝙蝠　を作ったのに、また離婚。それから、元の妻と再度結婚。そうして妹が生まれ、ようやく落ち着いて生活している。

しかしそのせいで、三人の兄妹のうち、闇蝙蝠だけ違う母親を持つことになった。おまけに実母が離婚後に、別の男性とくっついて子供をこしらえたとくれば、いい加減嘆きたくもなる。

勿論、闇蝙蝠とて、好きでこんな面倒な家系に生れたわけではない。だが、どうしようも出来ない。

そして今『実母が離婚後に、別の男性とくっついて作った子供』こと春翹諳に指示されるがまま、言い訳をつくらって事態を凜に報告をし、そのせいで皆が休んでいるこの時間に、特別、一つ役目を仰せつかってしまった。気分が良いはずはない。

今の目的は、忍び込んでくるロンウエーとリオンの捕獲。しかしこちらが待機していることが分かり、逃げられては話にならない。常備している警備員には事情を説明して知らぬフリをしてくれるよう頼み、闇蝙蝠は最低限の人数　凜と二人　で、今、この場を

監視していた。

ブツクサ文句は言っても、彼は、やることはちゃんとやっていた。放った数十匹のコウモリが送る映像を全て脳内で『見』て、さらに建物の敷地内に、捕獲用の特殊な結界を数個はっていた。その中に足を踏み入れた人間を、結界に閉じ込めてしまう仕組みだ。

「ところで奴ら、一体どこから来るんだろう。テレポで直接、建物の中には入れない。光が目立つから、少し離れた所から、てくてく歩いてくるのかな。でも　うーん、分からんな。あ……あ、ああっ！」

ふいに、闇蝙蝠は声をあげた。

偵察コウモリの一匹が、建物に侵入を目論む人影を二つとらえた。影は間違いなくロンウエーとリオンで、彼らは一階の窓から建物内に侵入していた。

窓に小さく穴をあけ、そこから細い工具を差し込み、鍵をあける。俗に言うサムターン回しをしているようだった。

闇蝙蝠は結界を解除し、即座に、今みている事を凜に伝えようとした。

「来ました。ロンウエーとリオンです。今、建物の中に　　うわ、まずい！」

「どうしたの?!」

「窓から入ろうとしています。鍵が　くそっ、なんて素早い。リィダー、どうします?」

「ちよつと待つて。一体、何を見たの?」

二人の人間が、侵入をしている。そのことに慌てた闇蝙蝠は、じたばた騒ぎ、言葉もろくに選べない。

不都合なことに、彼がみた映像は凜には分からない。鍵が、窓が　　といったも何のことやらである。

「ですから、あの、窓!　小さく穴をあけられて、工具を差し込まれで鍵を回すっていう……ほら。もう、一昔前のクレセント鍵なん

て使ってるから！ って、あああ 開いちゃった。

リーダー、どうします。もう侵入されちゃいましたよ。警報機が鳴らないってことは、前に言った通り、魔法で小細工かけてるんですよ。くそつ、水際で止める作戦は失敗だ。ちよつと気が付くのが遅かったなあ」

興奮して喋るので、いささか支離滅裂である。しかし凜は根気強く聞き、彼が言わんとしている事を察した。

「つまり、既に一階の窓から侵入されてしまったのね？」

「そうです！ どうします、データ取られちゃいますよ」

「大丈夫。そういう事もあるうかと、昼間おとじのうちにおとじのデータを用意しておいたから。ただ、逃がさないに越したことはないわ」

「じゃ、今から建物の中に入って、捕まえるんですか」

「そうしたい所だけど……もしこんな所で暴れられたら大変だわ。

うちの建物が壊れるだけならまだしも、近隣に迷惑をかけてしまつては」

「だけど、どうしようもないですよ。この際ちよつとくらのキズは、後で保障するから我慢して……」

「それに、テレポーションで逃げられたらどうしようもないわ。建物の中から外なら、移動は誰でも出来るんでしょう？」

「あ、そうでした」

「でもそれは、利用できることよ。あなた、捕獲用の結界を、建物の敷地内にはつたわよね？ それじゃあ、フォーテレを使って、彼らをそこに入れてしまえばいいんじゃない？」

「おっと！ そうですね。確かに、フォーテレでも中から外なら移動が出来る……リーダー、冴えてるウ！ ただ奴らの正確な居場所が分からんから、っと」

闇蝙蝠は偵察コウモリを操って、ロンウエーとリオンが侵入をはたした窓に数匹を向かわせた。コウモリを使って中を覗くが、二人の姿は目視できない。やむなく、コウモリ達の力をあわせて窓をあけ、一匹を中に飛び込ませた。

滑り込んだコウモリが、映像を送る。暗い廊下を進んで、二階へ。するといつも自分たちが会議で使っている部屋に、不自然な明かりがついているのが見えた。

明かりは、コンピューターの液晶画面だった。その前には……人影。

「位置、特定出来ました！ そいじゃ、やっちまいますぜ」

凜が頷くと同時に、闇蝙蝠はそこにいた二人に技をかけた。強制的に、その場から外へ移動させる。

彼らはあるこれ言う間もなく、一瞬で外に放り投げられた。同時に、結界。

ロンウエーとリオンが地面に足をつけた瞬間、地面から透明なバリアが半ドーム状に突き出て、リオンを中に封じ込めた。

52 - 捕獲。

だが闇蝙蝠は、それを最後まで見なかった。ただ二人を移動させるや否や、凜と一緒に自分たちも移動し、向かう。

ビルの屋上から、土の上へ。しかし直近ではなくやや隠れ、傍の公園の藪の中に降り立った。すると、女性の悲鳴が聞こえた。

「た……助けて。助けてください！」

「待ちなさい、今何とかしてあげるから」

リオンの声だった。ロンウエーに助けを求めている、彼もそれに必死で応えていた。

二人にとって、移動と封入は青天の霹靂。あまりに唐突な事態に相当慌てているようだった。

闇蝙蝠と凜が近くまで来ているのに、移動の際に魔法陣の光が現れているのに、気が付いていない。闇蝙蝠はニヤツと笑った。

「上手くいったじゃないですか」

「半分ね。よく見て、ロンウエーは捕まっていなわ」

「ありゃ」

指摘され、闇蝙蝠は藪から顔を伸ばして様子をよく見た。すると確かに、リオンは閉じ込められているのに、ロンウエーは外に出ている。思わず、チツと舌打ちをした。

「しまった、結界から漏れましたね。どうしますか、殺していいですか？ 奴ら、建物に侵入したんですよ。罫のデータを持ってれば、証拠も十分だ。殺しても差支えないでしょう」

「……任せるわ」

「了解」

闇蝙蝠は即座に腕を回収した。使い蝙蝠たちを集め、元の右腕に戻す。その腕を変化させて異形の形とし、大きく腕を振ってカマイタチをぶりかました。切り裂かれた風は化け、無防備なロンウエー

に襲いかかる。

「ひいいつ？」

彼は相当、間の抜けた声をあげた。が、身のこなしは早かった。風の不穏な気配を感じ、慌ててリオンの後ろにひっこむ。

カマイタチはリオンを封じていた結界にぶちあたり、スツと消えた。ロンウエーは無傷だったが、ガクガクと震えていた。

「な、何よお。誰よ、攻撃してくんのは。あ……アタシ、戦闘は全然ダメなのよ、ちょ、助けてえ！」

「ロンウエーさん、逃げて！」

じたばたする彼に、リオンが結界の中から叫ぶ。と同時に凜は闇蝙蝠をつつき、行くわよと短く声をかけた。闇蝙蝠は頷き、凜とそろって藪から飛び出した。それと入れ違つように、またリオンの声が出た。

「誰か貴方を狙ってます。逃げて、貴方だけでも」

「で、でもっ」

「重要なのはデータです。早く！」

「わ、分かったわ。じゃあねっ」

闇蝙蝠と凜が攻撃の射程範囲内に飛び出したときには、もう遅かった。ロンウエーはテレポーションでさつと姿をくらまし、リオンだけがそこに残った。

「畜生！」

静かにたたずむ凜とは逆に、闇蝙蝠は、ロンウエーが消えた辺りを悔しそうに見た。

「くそ、一匹逃がしちゃった。リーダー、どうします？」

「テレポーションで逃げた人間は追えないわ。仕方ない、諦めるしか」

「そうですね。……すみません。俺の手落ちです。何分、しかけ罠を模した結界なんて、造るのは初めてで」

「しょうがないわね。でもまず、一人は捕まえることが出来たわ」「確かに」

闇蝙蝠はリオンの入った結界を軽く指先で叩いた。

コンコンと、まるでガラスのような硬い音がする。彼はそのまま中の彼女に話しかけた。

「俺が丹精込めて作った結界はどうだい」

「あ、貴方は　コウモリ？」

「闇蝙蝠だ。ちゃんと闇までつける」

「どうして此処に」

「そりゃこっちのセリフだ。リオン、暴れたきや暴れてもいいぞ。

お前が体力を消耗してくれる方が、結界から出したとき抑えるのが楽だ」

彼はニヤリと笑った。

「お前、どうして捕まったのか謎だろう。この際だから慈悲で教えてやる。……といつても、どうせ取り調べするとき、説明する事だけだな。俺らはお前達が此処に来ることを知っていた。だから見張りをたて、加えてあらかじめ、罾も仕掛けた。しーちゃんの媒介強制移動魔法がヒントになった　といつても、お前は知らないか。アサルトをぶつとばしたヤツだけどなあ」

「えっ、アサルトを?!」

「ただ少々タイミングが悪かった。本来はお前らがこの建物に入る前に捕まえる予定が、後になっちまった。お前の臨終の叫びからすると、あのカマ野郎がデータを盗んだんだな。失態だが……まあ、いい。こんな事もあるうかと、あらかじめこっちは偽のデータを用意し」

「闇蝙蝠、それ以上喋らないで」

「おっと、失礼」

あまりに事を明かすのに懸念して、凜が短く注意をした。闇蝙蝠はぱつと黙ったが、結界によりかかって横柄な態度を見せた。

「俺の結界はそこそ強力だ。お前一人の力じゃそこからは出られんだろう。出来るのは叫ぶくらいかな。その結界、防音装置はつけてないからね」

「あと、私もいる」

凜も短く言った。腰に差している刀に手をかけ、少し脅し気味になる。

「あなたは暗怜軍の者ね？ 大人しくしなさい。そうすれば私も闇蝙蝠も貴方を傷つける事はしないわ。瀏華隊は原則、抵抗しない者は殺傷できないの」

「……」

「でも暴れたなら、殺るわよ。あまり脅したくはないのだけれど」
「私は」

「リオン、大人しくした方が身の為だぜ。お前一匹で、俺ら二人を相手にかなうと思うかい？ こう見えて、リーダーと副リーダーだ」
凜の鋭いまなざしと、どこかニヤニヤしつつじっと見つめる闇蝙蝠の瞳。リオンは悔しそうな、迷っているような表情を見せた。

しばらく、彼女は自分で自分と葛藤していたようだった。だがやがて、観念したようにしゃがみ込んだ。

「わ 分かり、ました。私は暴れません」

「本当に？ 誓う？」

「はい。あ……貴方たちが、私を攻撃しないのなら」

「ふふつ。いい子だ。さてリーダー、このお嬢さんをどうしますかね」

「捕まえるわ」

凜はふつと手の平をあげた。召喚で、手錠を一つ呼び出す。

それはごく普通の黒い二連の輪で、いい具合に使い古されていた。やや擦れてはいたが、赤い文字が刻まれている。文字は「セルタン ティーヌ」「瀏華隊」「魔力封じ」と読めた。

凜はそれをガチャツとあけると、闇蝙蝠の方を向いて小声で言った。

「結界の中には、闇蝙蝠。あなたしか行けないのかしら？」

「俺が連れて行けば、誰でも入れます。しかし出入りは俺の操るが

ままなので、面倒がありませんね」

「じゃ、これを彼女にお願いできるかしら。やり方、知ってる？」

「ああ、手錠。……分かりました。それじゃ、ちよつと失礼」

闇蝙蝠は凜から手錠を受け取り、テレポーションで自らが作った結界の中に入った。

結界の中に、突然の侵入。それにリオンが驚いているうちに、手錠を彼女の手首にかける。まずは右手、次いで左手。

「魔封じの手錠だ。これでもうお前は魔法を使えん」

「あ、貴方。どうして結界の中に？」

「お前、知らないのか。術師は自分が作った結界であれば、テレポーションで入れるんだ。もちろん出るのもな。さあ、行くぞ！」

リオンの右腕を掴み、ついで結界を消す。すぐさま凜がかけよつて左脇を固めた。

「大人しくしなさいね」

言いつつ刀をつきつける。うつすらと白い光を放つ日本刀、白夜の鋭い切っ先にリオンはごくりと唾を飲んだ。

こうして捕虜を大人しくさせ、凜は事務的に告げた。

「取り調べ室に連れて行くわ。そこでゆっくりと、話を聞かせてもらうね」

53 - 不安なうわさ話

25日、朝。

瀏華隊の会議室は、噂話で持ちきりだった。といっても明るく楽しいお喋りではなく、若干不安げな色を帯びていた。

「暗怜軍の一人を捕まえたって話、聞いたっ？」

「うん。この建物に入ろうとしてたって……」

「データを、とろうとしたんだよねえ。大丈夫かなあ」

喋っているのは、ピロ口、えんじえらん、ワピチの三人。彼らは凜から知らせを受けて此処に来ていた。

通達はメールだった。ただし詳しい内容は書かれていなかった。

今日未明、二人の侵入者あり。うち一人を捕獲。詳細は会議室ですから午前九時までに集合。

内容はこれだけ。メールで全てを記さないのは仕方ないにしても、人を捕らえたというのはいつにない事件である。

三人はそれぞれ不安に陥ってしまい、状況を得ようと思って時間より早く此処に来た。しかし凜はまだおらず、結果、事情を知らない者同士、額をよせあって喋るに呈していた。

「捕まえた人は、どこにいるのかな」

「警察じゃないっ？ きつと引き渡しているよっ」

「まさか、ここだったりして。だって、ほら。たしかここ、監禁部屋があるじゃない」

「監禁部屋っ？！ そ、そんなのあったっけ。怖い冗談はやめてよっ」

「いや、じょうだんじゃなくて、ほんとうに」

「えーっ」

ピロ口が不安げに部屋を見渡した。まるで今にも天井か壁をぶち

やぶり、脱走者が出ると危惧しているようだ。

「そうかなあつ。でも警察だって、そりゃ一日二日じゃ何も情報は聞き出せないよ。あの時捉えたのは四人だっけっ？ 事情徴収して、まとめて、教えてもらえるのはもつと後だと思うよっ」

「そりゃあ、そうだけど」

とその時、扉があいて二人の人間がやってきた。

「おはようございます」

「お、おはよう………ごさい、ます」

フェイアントとワピチだった。片や営業サラリーマンさながらのビシツとした黒スーツ、片やゆつたりとした黄緑色のバルーンワンピースに、白いケープを重ねたラフで気軽な服装でいる。

「本当に、とんでもない事がおきましたね」

来て早速、フェイアントは座って話に混じった。服装も仕草も、まったく会社員さながらだった。

「この建物に侵入とは！ 大それたものです。しかし考えてみればこの建物、かなりセキュリティ面が手薄ですからね。警備員やカメラ、警報装置こそあれど物理的な障害はなにもない。やろうと思えば簡単に入れる。全く、弱点を突かれましたね」

「というより、この脆弱なセキュリティでよく今まで大丈夫だったなあって、そういう感じを………僕は受けました」

おずおずとだが、ワピチも話に混じる。フェイアント程ではないものの、そこそこに長く意見を述べた。

「だって、ちよつと技術がある人なら、簡単に入れてしまいますよ」「全くです。それに侵入者は二人なのに、捕らえたのは一人。一人逃がしたって事ですよね。大丈夫でしょうか」

頭が痛いというように額に手をあて、フェイアントが悩ましげに顔を曇らせる。それに、ワピチが続けて言った。

「あ、あの。僕さつき凜に電話したんですが、偽のデータを用意して備えていたって」

「電話したんですか？」

「は、はい」

「そうですね。別に……いや、あのね。決して遊びじゃないんですから怒るわけではありませんが、迷惑になる可能性があるから、緊急時以外は極力控え」

「まあまあ」

フエイアントの小言をおさえ、えんまが脇からゆっくりと言う。

「そなえていたなら、安心じゃない？」

「けれど、それを盗んだという保証はありません。物なら簡単に分かりますが、データはコピーペーストが出来ます。対象となるデータファイルがコピーされたか否かを探る方法が、あったかどうか。そもそも奴らが目的としていたデータは何だったのでしょうか。戦闘に関するデータだとすると、今後の彼らとのバトルが難しくなりま
すね」

「バトルって、ゲームじゃないんだからっ」

「少なくとも、人員を変える必要がありますっ」

ピロロの言葉をおさえ、続ける。

「全員といわず数人だけでも。でないとその前以上に苦戦を強いられるでしょう。炎を出したら相手が即座に、水を出して消してしま
った。そんな事にもなりかねません」

「えっ、それじゃあたし達の誰かがクビ？」

「そうは言っていないません。ただし少し入れ替えをした方が暗怜軍の思
うツボに入らず良いかと」

「でも、ふ……フエイアント。交換といっても、いれかえる人がい
ないよ。だってどこも、人手がたりてないんじゃない」

「交換なら可能でしょう。楼闕隊とか、あるいは他の帝国軍とです
かね」

「そんな」

「おつとワピチ、そんなに暗い顔をしないで下さい。まだ決定事項
じゃありませんよ。これは私が、勝手にそう思っているだけですか
ら。ね？」

「おはようございます！」

とその時、元気な声が飛び込んできた。まだ高い声を発して来たのは、シャオだ。

「メール見ましたです。なんか、誰か悪い人を捕まえたって聞きましました。良かったです！」

「……シャオ、おはよう。あのね、でも一人逃がしてしまったんですよ」

椅子に座るシャオにワピチがちよっと困った顔で言う。が、少年はきよとんとした顔をした。

「でも一人は捕まえましたですよ。すごいです」

「まあ、ポジティブなのはいい事ですが……」

「シャオは本当、いつも元気ですね」

フエイアントも苦笑する。

「しかし、状況もろくに分からぬまま話をしていても、らちがあきません。というより不安が募るばかりです。まずはリーダーを待ちましょう」

そう彼が言ったところで、また扉が開いた。

「ああ眠い。もう、何で俺、いつも人より役目が一つ多いんだろう」
入ると同時に眠いといい、ぼやきを吐く。

「下手に能力を持つてるとコキ使われるよ。そういえば、能あるコウモリは翼を隠すって言うしなあ」

闇蝙蝠だった。胸元に大きな白いリボンタイのついたブラウスに、下は銀糸でコウモリの模様が刺繍された、スカートのように長い黒の腰巻のついた長ズボンという、まるで街頭にいるキャッチのお兄さんのような恰好である。ただ寝不足のせいで少々機嫌が悪そうだった。

闇蝙蝠が席につくと、ピロロが軽く挨拶をした。

「おはよう。眠くても口数は変わらないね。あと相変わらず凄い

恰好」

「おーはよー……。あーあ、もう一時間寝させてくれればスッキリしたのになあ。あ、髪の毛とかすの忘れた。なんか変な寝癖ついてない？」

「別に、大丈夫だよ。気になるなら、この前みたいに結んで来れば良かったのにつ」

「カタツムリ型ツイントール？ あれ自分でやろうと思うと大変だよ。左右で髪の毛を均一に分けないと、変になるだろうし」

「でもアンタって本当、身なりに気い使ってるのか使っていないのか、分かんないよねっ」

「もう何でもいいや。だがちょっと寝させてくれ。おやすみ」

席に着くやいなや、闇蝙蝠は早々丸くなって机の上につつぶした。本当に寝る気でいたようだった。

54 - 香水と見張りと事情徴収

ピロロは軽く肩をすくめた。だが、起こそうとはしなかった。周囲も然りで、全く黙っている。

唯一シャオだけが、起こそうというそぶりを見せた。が、途中でやめた。大人しく、椅子の上に鎮座して、かわりに人数をカウントしはじめた。

「いち、にい、さん……んつと、あと来てないのはおじいちゃんと、春翹諳と、リーダーの三人だけですか？」

「おじいちゃんって、誰？」

「あの、ほら。あの人」

「ああ、ディザートさん？」

「そうです」

「あの人はまた来ないじゃないのかな。ただ春翹諳はまた遅刻で来だが、えんじえらんがそう言いかけた瞬間、扉をすーっと開けて本人が入ってきた。

「こんにちは」

春翹諳は静かに挨拶をした。ぐるつと席をまわり、自席につく。隣で丸くなっている闇蝙蝠の事は、特に気にしてない様子だ。

「やあ」

えんまが先だって挨拶をする。

「きょうは、ちこくしなかつたねえ」

「ええ、まあ」

時計を確認しつつ、春翹諳は答える。だがふと、ピロロが首をかしげた。

「ねえっ、アンタ香水つけたっ？」

「いいえ、零しました。実はさつき、家でね……。替えたんですよ、服は。でも、分かりますか」

「うん」

「とてもよく分かりますよ。随分かかったようですね」

春翅諳の向かいに座る、フェイアントも言う。だが素直に返事をする。ピロ口とは逆に、顔をしかめている所を見ると、良い香りとは思ってないようだ。春翅諳は弁解するように続けた。

「箏^{たんす}筒の上にあつたの、気が付かなくて。引き出しをあけた瞬間……ばしゃつと。気になりますか、この匂い」

「正直言つて、きついです。いや、でも事故なら……まあ、しょうがないですか。ただ香水というのは、手首の内側とか耳元、首筋などに一吹きするのが良いかと」

「ごめんなさい」

若干すまなさそうに頭を下げる。

「お風呂に入れば……良かつたんでしょうね。でも、そんな事をしたら遅刻すると思つて」

「でも、わるいにおいじゃないよ。おいしそう」

えんまが慰めるように言い、ワピチもうんと頷いた。だがフェイアントは本当に気に入らないらしく、まだ苦い顔をしている。それを見て、ピロ口が茶目つ気たっぷりに言つた。

「フェイアント、あまりズバツと『嫌だ』つていうと、女の子に嫌われるよっ？ 指摘するなら、もっとソフトに言わなきゃ」

「ああ失礼、そうですね。それじゃあ、こうしましょうか。」

香水をつけたんですか？ これはまた、とっても甘くてまるやかな香りですね。温めたばかりのミルクと、口だけの良い冷たいバニラアイス。それに少しスパイスと足した……そんなフレーバーです。でもそんなに魅惑的な香りをつけていたのでは、私は他の男に貴方をとられるんじゃないかと心配ですよ。どうかもう少し、控えめにしてくれないでしょうか。ねえ貴方、今度その香水の瓶を持ってきてください。そして私に渡して下さい。貴方のその細い首筋に――吹き、ささやかで深い甘い愛を捧げたいのです」

彼がわざとらしく言つた、芝居がかった口調と齒の浮くような言葉は、話をふつたピロ口はもとい、闇蝙蝠を除く傍で聞いていた者

全員を笑わせた。

特にえんまとえんじえらんの二人は、机を叩いてひどく爆笑していた。

「よく、そんなセリフが考えられるねえ」

「演劇みたい！」

あやうく涙まで出しそうになっている。言われた春翹諳も、クツクツと笑っていた。

そんな中、闇蝙蝠だけは丸くなって半分寝ていたため、フェイアントの言葉をよく頭の中に入れなかった。ただ頭の片隅では、春翹諳の言葉と匂いを分析していた。

香水を、間違ってこぼした。そうは言っているが、これはきつと例の『蒸気を噴出するボタンみたいなメカ』のせいで、自分についた匂いを消すため。確かに隣に座っていても、香水の匂いにごまかされ、あの微かな匂いは分からなかった。

闇蝙蝠を除く全員は、ひとしきり笑った後、ようやく平常に戻った。中でも一早く、えんじえらんは数回深呼吸をすると、ところどと切り出した。

「ところで春翹諳、ディザートさんはどうしたの？ 来ない？」

「さあ、分かりません」

「そんなあ。瀏華隊の一大事なのに」

えんじえらんはため息をつき、丸くなってる闇蝙蝠も、心の中で激しく同意した。来ないのなら、いつそ辞めるとも思った。

と、その時。扉をあけ、ようやく凜がやってきた。少々、憂かない顔をしている。

所定の位置につき、召喚でぱつと書類の束を取り出し、またコンピューターの電源を入れる。全員のモニター画面が一齐に明かりをつけた。

半分寝ていた闇蝙蝠も顔をあげ、目をこすってあくびを一つし、シヤキツと背筋を伸ばした。

「全員、いるわね？ それじゃあ、はじめましょう。本日みなさん呼び出したのは、事前連絡の通りです」

凜は早速、チャキチャキと話を進めた。

「昨晚未明にこの建物内に侵入者が二名現れました。目的はこちらの戦闘データの取得です。」

二人はコンピューターのハッキングに成功、データを盗みましたが盗まれたのは、こちらがあらかじめ作成していた、偽のファイルデータです。進入および、コピーした形跡がありましたので、間違いありません。

侵入者については、一人は逃がしましたが、もう一人は捕獲に成功しました。暗伶軍に属している、リオン＝アールグレイという名の、十八歳の少女です」

「リオンっ？」

ピロロが首を傾げた。

「それって」

「お前とシャオが檻の中にとっつかまって、俺が救出したとき邪魔してきたオツドアイの女さ」

闇蝙蝠はサツと答えた。

「俺が融鋭鎌ゆうえいれんで建物を壊し、生き埋めにした。だがピンピンしていな。

ロンウエーとかいうカマ男が、パソコンからデータを取る補佐をしていた。まったく、大胆だよな。わざわざ建物に入って盗もうなんて。

でもそんなもんかねえ？ ただ俺が今まで思い描いていたハッキングってのは、離れた場所からデータを

「ちよつと、闇蝙蝠」

「あつ失礼！ リーダー。続けて下さい」

ついいつもの調子が出てしまったと、闇蝙蝠は引き下がった。凜

はやれやれという顔で続きを話した。

「リオンの身柄は、いったん警察に引き渡しました。ですが彼女は高いレベルの戦闘力を持っていることが分かりました。彼女が暴れた場合、警察では抑えきれないだろうと、判断が下されました」

「誰が判断を下したんですか」

「警察です。重ねて、前の戦いで捕虜となった四人の警戒・取調べで、今手一杯ということもありまして、彼女はうちの建物で預かることに あ、待って」

預かるという言葉聞いた瞬間、口をあけて言葉を言おうとした三人 フェイアントと闇蝙蝠、ピロロ を、凜は即座に制した。それぞれが勝手に喋られては、報告が出来ない。

「もちろん、私達に丸投げされたわけではありません。警察官が二人、常時張りついて彼女を見張ります。ですが我々も交代で、二十四時間、彼女を見張る事となりました」

「げっ、二十四時間？」

「闇蝙蝠、黙って。 で、見張りもしますが、同時に取調べを行います。彼女たちが進入した方法は、既に分かっています。セキュリティ用にはられた無線を魔法で遮断し、予備の有線ケーブルは事前に切断した。

ですが問題は、どうしてそのような事が、手際よく出来たか……です。聞きだして元を絶たない事には、今後も引き続き、此処が危険にさらされます。取調べは警察からの提案に基づき、人道的な手段で行います」

55 - 警察からの指示に従って…

「ふふん、人道的だってよ」

凜の言葉に、闇蝙蝠は小さな声で、隣席の相手に囁いた。

「拷問は、とてもできそうにないねえ」

「そうですね」

「残念だったねえ。しーちゃん、好きだろ。そういうの」

「失礼な。私……しません、そんな事」

「ははっ、冗談だよ」

「で、どのような方法で自白を迫るかについてです。これは、警察から細かく命令がありました」

内緒話をする二人をよそに、凜はとうとうと話を続ける、

「指定された方法は、誘導尋問です。そして 闇蝙蝠」

「は、はいッ！」

いきなり名前を凜に呼ばれ、話をしている声が聞こえたかとビクついたのも一瞬。彼はドキドキする胸を押さえつつ、いたって平静を装って「何でしょう」と答えた。凜は真面目な顔で頷いた。

「警察から、指名がきています。貴方には脅す役をやってもらいます」

「脅す？」

一瞬、闇蝙蝠は困惑した。だが直前に凜が言った「誘導尋問」という言葉を思い出し、すぐに頷く。

「分かった。俗に『怖い刑事と優しい刑事』っていうアレか。二人一組で、一人は脅し、もう一人はそれをなだめながら相手に供述を促す。で、俺はその怖い役ってことか」

「そうです」

「なるほど。それなら、俺にだって出来そうだ。だが凜、その手段を知っている相手には無効だぞ。逆に馬鹿にしていると思われ、心

を閉ざされる危険がある。万引き犯のガキを説教するならいざ知らず、リオンに通用するのかねえ？」

「ですが、警察から、そう指示を受けていますので」

「まあ、そう……それじゃ、仕方ないな」

軽く頭をかく。いまいち府に落ちないと思ったが、上からの命令では仕方がない。

「で、なだめる役ですが、今回は二人が選抜されています。フェイアントと、ワピチです」

「えっ」

「私ですか？」

先の闇蝙蝠よろしく、突如名指しされて、二人はやや戸惑った表情を浮かべた。

「あ、あの。えっと、その……」

「宜しいのでしょうか」

「そう指名がされているの」

うるたえる二人に、凩はしっかりと頷いた。だがフェイアントは厳しい顔をし、素早く尋ねた。

「理由は？ 何でしょうか」

「さあ。でもおそらく、貴方の場合、一番の年長者だからでしょう。なだめる役は、脅す役より難しい。経験を積んだ者の方が良い

ということかしら」

「しかし年長者なら、デザイナートさんという方がいらっしやっただけでは」

「あーダメダメ。あの爺さん俺より怖いよ」

凩が言葉を言う前に、闇蝙蝠が素早く口を挟んだ。

「いやあ、確かにあの人は優しいよ。全裸で縛られ方した人に対しては、そりゃあ優しい事を囁いてくれるよ。だけど言ってることは乱暴だから。マジSMだから。叩いたら撫でる、アゲたらオトす。

相手により加減を調整する、あの絶妙な力加減は見ているだけで背筋が凍る」

冗談なのか、本気なのか。いささかおどけたその様子に、フェイアントはいぶかしげな目をむけた。

「闇蝙蝠。貴方、彼に何かされたことあるのですか？」

「いやいや。けど見たことはあるよ。そうだよ。しーちゃあ、いたッ！」

「言わないでください、変なことを。されるでしょう……変な誤解を。言うのは勝手ですけど、私に話を振らないでください！」

「そんなに怒らなくてもいいじゃないか。とにかく、まあそういう事でディザートさんはパスなんだろう」

「全く、よく分かりませんが」

フェイアントは肩をすくめた。

「しかし、指名頂いた以上、やるしかありませんね。了解しました、リーダー。行わせて頂きたいと思います」

座ったままではあったが、静かに右手を胸にあて、一礼する。彼の様子は、まったくいい所の執事が、高級クラブのホストのようだった。凜は続けて、今度はワピチに話を移した。

「それと、ワピチ。あなたが選抜された理由は、これも書いてないので私の完全な想像ですが、治癒の専門家だからでしょう。貴方、カウンセリングの経験は？」

「はい。一応、学校で習いました」

「やはり、そう。……きつと、そのためでしょう。で、皆に聞かぬ。異存はある？」

「と言われても」

先だって、闇蝙蝠が首を振った。

「警察から名指しで指示が来ているんじゃない。しょうがない。カウンセリングと尋問は違うものだというツツコミをしたって、警察の命令には逆らえない」

「そうだねっ。ちよつと残念だけど……」

「でも、ぼくはそれでいいと思うよ」

選ばれなかったピロロが、少し残念そうな顔をする一方、同じく

選ばれなかったえんまは笑顔で言った。続いて、春翹諳もこくと頷いた。

「カウンセリングの経験者と、人生の経験者。いいでしょう……なだめるにはピッタリです」

「おい、それじゃ俺はどうなるんだ。俺の立場はッ」

闇蝙蝠は慥然として呟いた。

「脅すのにピッタリってことが、おい」

「違いますか？ だって貴方、出身者じゃありませんか。戦闘のブコの育成学校、戦教学園の」

「またそれが！」

「……ちよつとごめん、話に入るよ。あのね、思われたんだよ。怖い人だって」

「なんだ、えんじえらん。マジで横槍入れやがって」

闇蝙蝠はますますブスツとした。

「怖い人って、俺が？」

「だって、他に思いつかないじゃん？ だめるのは兎に角として脅し役でしょ。それって、手加減さえ出来ればいいわけじゃん。年齢的な事を考えて、シャオはちよつと無理だとしても、それ以外、誰でもいいでしょ。学園うんぬんを抜かしたら、あたしだって、ピロロロだって、春翹諳だっていいじゃない」

「何だ、すねてるのか。やりたかったのか」

「別にそうじゃないけど」

「ねえ、ぼくは？ えんじえらん。ぼくは？」

「あんたは脅しって感じじゃないよ。だって見た目、温厚そうだなん」

「そう？ ありがとう！」

「お礼を言ってる場合か。畜生、どいつもこいつも！」
にこつとするえんまをよそに、闇蝙蝠はガミガミと言った。

「もう、偏見だッ！ いくら学園の出身者だからって、酷いじゃないか。俺あそんなに危険人物と思われているのか」

「それは違つてでしょう。えんじえらんが言ったでしょう。加減が必要だつて。危険人物だと思つていたなら、しませんよ……名指しをだから、闇蝙蝠。思いなさいな……この事を、誇りに」

「しーちゃん、俺は別に、嫌だつて言つているんじゃない。ただこの選抜の裏において、警察が何らかの偏見に基づいて指名をしたなら、これはゆゆしき問題であり」

「とにかく、はい。皆、静まつて」

騒々しくなる皆に、凜は一喝した。……途端、話しかけの闇蝙蝠を含め、全員が即座に黙つた。凜は咳払いを一つすると、何事もなかったかのように話を続けた。

「指名のあつた三人には、後で手順書を渡します。きちんと読んで分からないことがあつたら何でも私に聞いて下さい。適宜、指示を出した警察の方に確認しますから」

言葉に、闇蝙蝠は密かに、二段階で面倒なことだとぼやいた。だが声は凜には届かず、彼女はしゃべり続けた。

「今はまず、全体連絡をします。ええと　　そうそう、現在の、リオンの拘束場所についてです。彼女ですが、この部屋のすぐ隣にいます」

「ええっ！」

途端、全員が色めきだつた。せつかく静かになつたのに、またワイワイと騒がしくなる。どこだどこだと壁を見渡す隊員に、凜は扉を指差した。

部屋の中、三つある扉。一つは廊下に通じており、後の二つは隣の部屋に通じている。指差されたのは、その中の一つだった。何の変哲もない白い扉だが、その瞬間に皆、恐々と戸を見た。まるで今にも、恐ろしい怪物が飛び出すかのようだった。

「でも、安心して下さい。盗聴防止の魔法をかけているので、こちらの話は一切聞こえません。また二重扉になっていて、扉と扉の間に、警察官が二名、見張りをしています」

「その警察官には、俺らの話は聞こえていますか？」

「いいえ。彼らは今回の捕獲に際し、この建物に、見張りとして来る事になった者ですが、我々の話を聞く権利はありません。交代で、二十四時間はりつきます。後で警察官の顔と名前を載せたリストを、一定期間のみ掲示致します。万が一、警察官に扮した不審者を見つけたら有無を言わず捕まえてください。ただしその場合も、絶対、殺さないで下さい」

「難しい注文を」

ボソリと闇蝙蝠は呟いた。

「殺さずに捕まえるのは、慣れてないなあ」

「見間違えや見逃しをしないよう、リストはキッチリ頭に叩き込んで下さい」

「はい。あのっ、すみません。質問ですっ」

「何ですか、ピロロ」

「どうして、隣室にいるんですかっ？」

「あの部屋はもともと、監禁用の部屋です」

凜はさらりと物騒な事実を告げた。

「脱走防止のため、必要な措置が施されています。リオンが閉じ込められている部屋から外へ出るには、一度この部屋を通る必要があります。万が一彼女が脱走したとしても、我々がこの部屋にいればすぐにでも捉えることが出来るでしょう」

「なるほど」

「先の警察官二名の他、私たちも、昼間は一名、夜は二名で、ローテーションで常時、この部屋に滞在して警備の強化にあたります。場合によっては別の隊　楼閣隊から人が来ます。その場合、身分証を必ず携帯しておりますので、確認してください。誰がいつ見張りを担うかの、リストは、既に出来ています。直近の五日間を表示します」

彼女はポンツと何かボタンを押すと、全員の前にあるモニターに表が現れた。

「今の時間、担当はえんじえらんですね。貴方は、この部屋から離

れないようにしてください」

「はい」

「時間になったら、次の人が来てから帰宅して下さい。なお、当番をシフトすることも可能です。何らかの用事があって来れない場合は、私に連絡してくれば、出来る限り希望に沿うよう致します。」

「……それでは、闇蝙蝠とワピチ、フェアアント。こっちに来て下さい。警察からの指示書を、渡します」

56・ひどく下賤な指示の元。

およそ三十分後。警察からの指示書を全て確認した闇蝙蝠は、フエイアント、ワピチと一緒に部屋を出た。

三人セットで一旦、廊下に出ると、闇蝙蝠はいつものようにブツと言った。ただ今回は少し様子が違い、ひどくまずそうな顔をしていた。

「まさか警察が、こんな方法を提示してくるとは！ 確かに拷問ではないが、不健全すぎやしないか。これのどこが誘導尋問だ！ なあ、そう思わないか、ワピチ」

「は……はい」

「脅すっていうか、これ『襲う』だよな。いくら本当に襲わないとはいえ、かなりギリギリじゃない？ こんなものってあり？」

「警察がいいって言うてるんですから、いいんでしょう」

「フエイアント！ そう清々しい調子で言うな」

「いえ、別にそんなつもりは」

「もういい。だが、考えてみてよ」

二人にむかって、闇蝙蝠はがなりたてた。

「俺が警察の指示で、何をやると思ってんだ？ 力任せに女の子を押し倒すっていう、アレだよアレ！ 強姦！」

ひどくブスツとして、言葉を吐き捨てる。

「例え未遂で済ませるにいても、これが十六歳の青年にやらせる事か。警察も俺を名指しで、こんな事をさせるなんて酷いよ。人を何だと思ってるんだ？ レイプ魔？ ……確かに、俺あ真つ当な生き方はしてないが、それは無い。断じて無い。」

もしこれが原因で後々逮捕されることになったら、テレビクルーの前で喚いてやる。陰謀だって叫んでやるう。事実をかいた自伝も出版してやるウー！」

そう言いつつ、早くも、ほとんど喚いた調子で喋る。ワピチは不

安そうな顔をし、フェイアントは色素の薄い目を少し細めた。

「確かに私も、ひどく不健全だと思います。でも指示である以上、仕方がないことです」

「分かっている。同意書にも、サインしちゃったしな」

闇蝙蝠はやれやれと、ため息がてら腰に手をあてた。一呼吸の間を置いて、ワピチがおずおずと口を開いた。

「そ……それじゃ、手順を確認します。まず闇蝙蝠が中に入って、部屋にいるリオンを……その、むにゃむにゃします」

「もういいよ。誤魔化さなくていいよ。素直に強姦って言えばいいじゃん。まあ、実際には軽く押し倒すだけで、ぶち込みやしねえけどな！ そりゃ〜ウツカリ出来ちゃったら、ごめんじゃ済まない話になるし」

「闇蝙蝠、下品な言葉を言うじゃありません。ワピチが真っ赤になってるじゃないですか」

「おや失礼。へい、続けて」

「そ……その様子を、僕たちは部屋に設置されている隠しカメラで伺います。頃合いを見て飛びこみ、リオンを救出。フェイアントが闇蝙蝠を引きずって退場。その間と後に、僕がリオンをなだめて、落ち着かせます。その後は戻ってきたフェイアントと二人で、少しずつ話を伺います」

「そうそう。だけどねワピチ、正直、うまく行かないと思うよ」

まだやる前なのに、もう呆れた様子で、闇蝙蝠は肩をすくめた。

「別に、お前に能力が無いとは言っていない。ただねえ、リオンの気持ちはMAXだ。その後、話を伺うのも隊員だろ？ いくらお前が女の子でも、話も何もありません」

「そ……それは、僕が、頑張つて何とか」

「まあ一度失敗しなきゃ、警察のバカどもは分からんか」

闇蝙蝠は再びため息をついた。そしていよいよ、心を決めたように前を向いた。

「とまず、流れはワピチが言った通りで問題ない。まず初めに、俺が行く。お前ら二人は、タイミングを見計らって、ちゃんと来てくれよ」

「はい」

「もちろん」

ワピチとフエイアントは頷き、踵を返して別室 隠しカメラの映像が確認出来る場所 に向かった。闇蝙蝠は一人、先に出た会議室を通り、リオンがいる部屋に続く扉をあける。

扉をくぐると、そこは小さな空間があった。前に凜が二重扉だと言っていたが、開けたすぐ目の前には確かに、扉がもう一つある。二枚目の扉の前には見張りの警察官が二人立っていて、暇つぶしに雑談をしていたようだった。が、闇蝙蝠を見るや否や、彼らはぱつと声を潜め、背筋を伸ばして礼をした。

「ご苦労様です。あの、貴方は」

「どうも、ご苦労様です。……チャライ格好で失礼。リオンニアールグレイの尋問で来ました。闇蝙蝠といます」

「闇蝙蝠さんですね。それでは一度、本人確認をさせて頂きます。手を出してもらえますか」

闇蝙蝠がサツと手を出すと、警官はバーコードの読み取り機のような機械を出し、右の親指にあてた。次いで、左の人差し指も同じようにあてる。闇蝙蝠は黙って指を弄らせていたが、内心、もし自分が魔法や薬で容姿を変化させていたら、これはどうなるのかと思っていた。

「認証、終わりました」

警官が言くと、もう一人の警官がカメラを出し、闇蝙蝠の姿を撮影した。そして軽く頷いた。

「身元が確認できました。どうぞ、お入りください」

「ありがとう」

闇蝙蝠は取っ手に手をかけ、ぐいっと横に引いて中に入った。戸

は重厚な造りで重く、闇蝙蝠を通すと勝手にしまり、外部から部屋を遮断した。

部屋の中は、とても簡素な造りだった。白い壁に床、天井。あるのはアクリル製の机と、水の入ったペットボトル、そして、木製のイスが三脚。机をさみ、一対二で向かい合うようにおかれている。それ以外、物は何も無い。窓もなく、上に蛍光灯が二つ並んでいるだけで、ひたすら無機質な空間。闇蝙蝠は内心、一週間もここにいたら、気がおかしくなりそうだと思った。

リオンは、その床にしゃがんでいた。椅子があるのに見向きもしない。手首にも足にも枷かせはないが、首には黒い首輪がついている。どうやらそれが、彼女の魔力を封印しているようだった。

「よう、リオン。俺を覚えているか」

早速、闇蝙蝠は荒っぽい感じで歩いて近寄り、しゃがむ彼女を横柄に見下ろした。

「俺だよ俺、闇蝙蝠だ。はっは！ いい姿になったなあ」

低く、ドスの聞いた声。擲揄を含んではいたが、気弱な人なら一発で怯えたことだろう。

普段間抜けたことを喋っていても、闇蝙蝠はプロの殺し屋。厳しい訓練を乗り越え幾度となく修羅場をくぐってきた経験により、年不相応の迫力を持っている。そして今、警察の純情な犬として、決死の覚悟で此処にいる。

「供述、聞きに来てやったぜえ」

ガタンと音をたて、椅子を引っ張り出して座る。だがまっすぐは座らず、半分あぐらをかいたような姿勢で、横柄な着席だった。

「まず聞きたいのは、お前がどうして、コッチのセキュリティシステムの有様を知ったのか。どこから情報を得た？」

「……」

「他人ひとから聞いたのか、それともお前が、何らかの方法で調べたのか？ どこから聞いた」

「……」

「黙ってばかりいないで、何か言ったらどうなんだい」

話をするよう促したが、あくまでリオンは無言のまま。すると闇蝙蝠は立ち上がり、彼女のズカズカと近寄った。

「オイ、人が話しかけてるんだ。何か言えよ」

重ねて、いらだたしげな様子を見せる。

「てめえ、こら。自分の立場が分かってるのか？ お前は捕らわれたんだよ。捕まったんだよ！ さあ、大人しく白状しな。そうすりゃ、手荒なマネはしない」

だがやはり、彼女は黙ったままだ。闇蝙蝠はチツと舌打ちをした。

「おい。聞いているのか、おい！」

57 - 傍から見れば、それは強姦

闇蝙蝠は呼びかけた後、右手を彼女の顎の下にやり、くいつと上を向かせた。

「ふーん」

彼女は微かに眉をしかめたが、暴れる事も、物をいう事もなかった。その顔を見て、闇蝙蝠は下賤げせんな表情を浮かべた。

「お前、けっこう美人だねえ」

「……」

「何だ。せつかく褒めてやってるのに、つれないな。何か言えよ」

闇蝙蝠は再度、問いかけた。だがリオンは唇をぎゅっとかみしめたまま、口を開こうとしない。すると、彼はわざとらしくため息をついた。

「もう一度聞かず。お前は どうして、この建物のセキュリティシステムの様相を知った？ 答えろ。……素直に答えれば、無体なことはいらない」

「……」

「どうしても、答えたくないか？」

問いかけと同時に手を離すと、リオンは微かに頷いた。闇蝙蝠はため息をついた。

「それじゃあ仕方ない」

その言葉を吐き捨て、ゴキツと手を鳴らした。

「悪いが、俺あ無理にでもお前から供述をとれと言われてるんだ。……ただし、体に傷はつけられん。俺らは殺人は可能でも、拷問は出来ないからね。それを疑われると、後々面倒がかかるんだ。

しかし、もし俺がお前を押し倒して、服を脱がせて襲っても、それだけでは体に傷はつくまい？」

その言葉に、彼女はビクリと腕を動かした。だが、やはり何もしやべらない。闇蝙蝠は言葉を続けた。

「都合の良い事に、悲鳴をあげようと、喘ぎ声をあげようと、声は一切、外には漏れない。どういふ事が分かるか？」

「……」

「此処で起きた事は、誰にも分からないって事さ。お前を襲うのは確かに罪だ。だがバレなければ、俺は罪には問われまい。」

「かすり傷なら拷問にはならないし、処女膜が破れたって、外部からは分からんものなあ？」

刹那、彼女は表情を変えた。いったい何をという困惑、そして恐怖を、顔に浮かべる。闇蝙蝠はニヤリと笑った。

「あはっ、まさか本当にバージンかい？ そりゃあいい！ 男は処女に弱いんだ。……もつとも、優しく出来るといふ保障は無いけどな。俺も夢中になると我を忘れるタイプだからねえ……ふふっ」

「あ、っ」

その時、初めてリオンは声を出した。だが微かで、受け答えには程遠かったの途端、闇蝙蝠は腕を伸ばし、乱暴に彼女を床に叩きつけた。

「折角二人つきりになれたんだぜえ。愉しもうじゃないか！」

急に暴力を振るわれ、さしもの彼女も抵抗した。が、勝負はすぐについた。

闇蝙蝠の方が力が強く、元気もある。リオンはすぐに押し倒され、床にうつ伏せにさせられた。それに彼は馬乗りになり、後ろから彼女の両手首を抑えた。

「どうだい、好きでもない男にやられる気分は。あはっ、だけど抵抗は出来ないだろう。その首輪は魔封じだからな。今、お前は魔法を一切使えまい！ つまり、俺が思うがままって事だ。なあ？」

「や……止めて！」

その時、ようやく彼女は意味のある言葉を口にした。

「止めてっ、何するの。私、こんな」

「ああ、ようやく声をあげたな」

だが闇蝙蝠は容赦なく、また彼女の髪をつかんだ。しかしその手

は若干震えていた。

「言えよ。どこから情報を得たのか、言え。そうすりゃ犯さないでおいてやる」

「嫌っ！ 私は何も知らない！」

「そうかい。じゃあ観念して、俺の女になるんだな」

「あ……あつ、そんな。貴方、本気？」

「ふん、言っただろう」

獣くさをまとわせて、彼は笑った。

「此処でやっていることは、外部にや一切漏れない」

袖から、彼女の服の中に手をつっこむ。素肌の腕を、すーっと撫でた。

「あはっ、鳥肌がたってる。……好きじゃない男に触られるのはそんなに嫌かい？ 触れられるだけでこんななら、犯したらどうなるんだろっねえ。」

「ははは、安心しろ。痛いのは最初だけで、後はとつても気持ちよくなる。俗説も、たまにや信用してみるもんだぜ。己の体でな！」

「い、いや……いやああ！ や、やだっ。私……こ、んなっ、いやあ、来ないで！」

「ギヤアギヤア喚くな。されなくなかったら、大人しく吐け。おら、どこから情報を得たのか言うんだよ！」

「知らない！ 私 私は、ただ言われて」

「言われて？ それは誰に言われたんだ。知っていること、残さず吐け！ ……こら、大人しくしやがれ。つたくもう、行儀の悪い雌犬だな。」

「いいか、言うか犯されるかだ。言わないなら、とつと四つん這いになれ。大人しくしろ。その方が痛みが少ねえぜ」

「や、やめてっ。私は、本当に何も」

「嘘つけ。お前が暗黒軍の重鎮だっというのは分かっているんだ。例え命じられて此処に来たとしても、情報源はどこかくらい聞いているだろう。言え！」

「嫌あ！　お願い、止めて。ほんと　本当に、知らないのっ！
やだあっ！」

「ひやはははっ！　いいねえ、そうやって喚いて泣いていると、暗
怜軍も何もあつたもんじゃない。その辺の単なる雌犬と同じだ。

ほら、言えよ。言わねえと大事な所が傷つくぞ。あははははっ！
闇蝙蝠は高笑いをしたが、若干裏返つた不自然な声だった。

もし今、リオンが冷静になっていれば、彼の顔がひどく引きつっ
ていることに気が付いたかもしれない。命令に従って行動しつつ、
己がしている事の不道德さに、彼はたしかな震撼を覚えていた。

だが、今の彼女にそこまで見る余裕などなかった。闇蝙蝠をオス
の野生むき出してかかってくる相手と見て、ひどい嫌悪と恐怖に我
を忘れていた。

「やだあっ、やめてえ……誰か、誰か助けて。イヤああああ！」

「ばあか、喚いたつて無駄だよ。誰も助けになんて来ねえよ。おい、
暴れるな。暴れると痛いのはお前だぞ」

声だけ聞けば、よほど無体なことをしているように聞こえる。だ
が実際は、闇蝙蝠は背後から腕を伸ばし、彼女の両手首を掴んでい
るに過ぎなかった。いわば普通に取り押さえているだけだった。

とはいえ、触れているには違いない。それだけで、リオンが感じ
る恐怖は何倍にも膨れ上がっていた。

「柔らかい肌してるね。……どう？　欲しくなってきた？　さあ
言え。情報を吐け！」

闇蝙蝠は、同じ言葉を繰り返した。実の所、ここから先どうすれ
ばいいのか、よく分からなかった。力まかせにしたはいいが、下手
に体に障つたらそれこそ　と、思ったその時。

仰々しく扉を開けて、フェイアントとワピチが飛び込んできた。

「あつ？　貴方、何をしていますか！」

早々に、フェイアントが高い声を上げる。

「げっ」

「何 こ、この。け、けだもの！」

続いてワピチが飛び込んで闇蝙蝠をリオンから引き離した。意外にも力が強く、闇蝙蝠はもろにひっくりかえされ背中を床に打ち付けた。

「いでえつ。ちょ、何すんだよッ」

結構な痛みが走り、彼は本当に悲鳴をあげた。だが痛みを^{いたわ}労る間もなく、今度はフェイアントに頭をがしとつかまれた。

「退きなさい、この腐れ外道。貴方、いま何をしていたんです？えっ？」

「え、えーつと……」

「大丈夫ですかっ？」

その間に、ワピチがささとりオンにかけよって助けおこした。リオンはかすかな呻き声をあげ、ようやくと体を起こした。その目じりには涙が浮かんでいた。

闇蝙蝠は一瞬、まるでドラマのワンシーンでも見ている気分になった。が、強く髪の毛を引っ張られ、反射的にギヤツと声をあげる。「いで、いでえよ！」

「何て人だ。男の風上にもおけませんね」

顔をあげると、フェイアントと目があった。本気で怒っているその表情を見て、思わず息をのむ。

「ひッ」

「全く、リオンの供述を取らせるために、入室の許可をしたというのに。誰も見てないのを良い事に、こんな行為をしていたなんて……この変態！ 貴方みたいな奴が同じ隊員だなんて、反吐が出ますね。」

「来なさい。貴方を然るべき所に通報します」

「あ、痛いっ。やめ……いでえ、いでえよ！」

「ワピチ、彼女を頼みます」

「はい」

「こら、さっさと立て。歩け！」

いつになく乱暴な仕事で、フエイアントは闇輪蝠をひっぱり、部屋から追い立てた。

暴れるのをものともせず、フェイアントは力任せに、闇蝙蝠を掴んで引きずった。それはとても、普段事務をやっている人間と思えない程強かった。

二重扉をくぐり、一旦会議室に戻り、そこから人気のない廊下まで出て、ようやくフェイアントは手を離れた。

「ここまで来れば、もういいでしょう。お疲れ様でした」

「何がお疲れ様だ」

闇蝙蝠は痛そうに、掴まれていた場所を摩った。

「もう、加減してくれよ。ハゲたらどうするんだ」

「失礼しました。ですが、生半可な演技では彼女に見破られるかと思ひまして」

「分かっているけど、でも酷いなあ。憎まれ役も楽じゃない」

「それより、どうでしたか、首尾は」

「聞かずとも、カメラを通して見てただろ」

闇蝙蝠は少し肩をすくめた。

「ただ念のために言っておくけど、俺は指示書の通りにやっただけ。あくまで、上の命令に従っただけだからな。」

破廉恥な事は、まずしてない。確かに体に触れはしたが、取り押さえるために手首をつかみ、床に伏せさせたのみ。逃げる泥棒を捕まえる刑事がするのと同じだ」

「そうですか。それだけ？」

「何だよ、その疑いの眼差しは」

「いえ、別に疑っているわけではありません。ただ隠しカメラでは、角度的によく見えなかった箇所がありました」

「冗談じゃない、ちゃんと俺の潔白を証明してくれ！」

闇蝙蝠は慌てたように言った。

「頼むよ。大体、俺はそこまでふしだらな男じゃないッ。あッでも

これは、俺の男性機能がイカれてるわけじゃなくって、正常だけどころちゃんと分別はあるという意味だ。確かにさつきは萎えていたけど、それはひどく緊張していたからであって平素は……とにかく、あんまり変なことをかんぐられると俺の股間にかかわる」

「それを言うなら沽券でしょう。いや、この場合は股間でも　　つて、私にまで下品なことを言わせないで下さい」

フェイアントは若干咳払いをした。そんな彼に、闇蝙蝠はふんと息を吐いた。

「いいんだよ。男なんてみんなケダモノさ。人間だって獣の一部だ、動物だ。その何が悪いんだッ！

因みに俺がさつき興奮しなかったのにはもう一つ、理由がある。そもそも、俺にだって好みがある。

リオンは確かにイイ娘だし、誘われればノる自信がある。だけど元来の、俺の好みとは合わないんだ。

俺の好みは、俺より年と身長が低くて、目が大きくて、どこことなく物憂げな雰囲気、残酷じゃない子ッ！　胸はあってもなくても構わないが、あるにこした事はない」

「はあ」

聞いてないことまでベラベラと喋る。何が自身だとツッコミたくても隙がなく、フェイアントはただ、息を吐く事しか出来なかった。そんな彼を見、闇蝙蝠は一瞬だけ間を置いた。そしてすかさず尋ねた。

「それよか、お前は行かなくていいのか」

「えっ？」

「聞き出しはお前とワピチの役だろ。行かなくていいのか？」

「ああ」

突然話題を変えられて、フェイアントは一瞬首を傾げた。が、すぐに言われた事を理解し、いいえと言った。

「いいえ。行きません。リオンはたった今、男に暴行されそうになったのですよ。私が行ったら、萎縮して喋るところじゃなくなるで

しよう。私はワピチから合図があるまで、待機です」

「そうか。……あーあ、だけどこんな事が公になったら、本当にヤバイよなあ」

闇蝙蝠はまたため息をついた。

本日何度目になるか分からない彼の嘆息に、フェイアントは励ますように声をかけた。

「命令を出したのは警察ですよ。第一、書類に書いてあったじゃありませんか。こちらが指示する方法を厳粛に遵守すれば、何かトラブルがあっても責任は問わない、と」

「そうはいうけど、どんな書類にも抜け穴つてのは存在し　あ、そうだ。書類と強姦未遂で一つ、思い出した事がある」

途端、闇蝙蝠はサーツと顔を青くした。喋ったり尋ねたり顔色を変えたり、とにかくまあ目まぐるしい。

「やばい」

「どうしたんです?」

「20日の会議で、俺達が報告していた話。ほら。関街道に行った時、妙な連中に襲われたヤツだ。覚えてるだろ?」

「そういえば」

話を思い出し、フェイアントは眉をしかめた。

「そんな事がありましたね。えんじえらんが抵抗し、魔法を使ったんですっけ?　しかし私の知る限り、現在、それを叩く話が出ていませんよ」

「だけど時間の問題だよ。ああ、大丈夫かな」

「でも、貴方は魔法を使っていないのでしょうか?」

「俺じゃなくって、えんじえらんが大丈夫かって心配してるの!　それに、俺だって無関係とは言えないさ。確かに魔法を使ってないけれど、彼女と一緒にいたんだ。さらに今、捉えた女子を暴行した。いや暴行って言っても、そんなエロいことはしてないけど!　俺、こう見えて純情だからッ!」

「分かっていますよ」

また話が長くなりそうだと、フェイアントは先回りして理解して胸を伝えたが、闇蝙蝠はしつこい程繰り返し、必死で己の清潔を訴えた。

「あだ名こそ闇という字がついているけれど、俺は、実際は、雪の上には白鳥をおいて更にホワイトターをぶっかけてくらい純白なんだッ。花嫁さんのウエディングドレスより綺麗ななんだッ！ それを分かってもらえないと困る」

「ですから、分かってますって」

「俺も困るし、瀏華隊も困る。何故だが分かるか？ こういう悪癖を持つ輩を隊員にいられている瀏華隊は野蛮人のカタマリかって、批評される危険がある。いや、批評だけならまだいいが、処罰を受けるのは嫌だなあ」

「考えすぎですよ。もう、そればかり言ってますね」

「しょうがないだろ！」

「まあまあ、そんなに気を病まないで下さい」

ぼんぼんと、フェイアントは闇蝙蝠の肩を叩いた。

「えんじえらんだって正当防衛だったのでしょうか？ 加減はしたらしいですし」

「そりゃま、加減してなかったら死人が出たわな」

「とりあえず、貴方にとがめはいきませんよ。で……あ、っと」

フェイアントはサツと、スーツのポケットに手を入れた。探っている様子からすると、携帯電話に触れているようだった。どうやら、ワピチからの連絡らしい。

「そろそろ、リオンの元へ向かいます。それで その。貴方はゆつくり休むといいでしょう。昨日から働きっぱなしで、疲れていませんか」

「うん、疲れてる」

「凜には私から伝えますから」

「ありがとう」

闇蝙蝠はいつになく、素直に頷いて礼を言った。

「それじゃ、帰る。昼寝をしたい。もし用事があったら電話してくれ。テレポですぐに戻るから」

「分かりました」

「じゃ、後はよろしく」

一つ軽い伸びをして、闇蝙蝠はその場でテレポーションをかけ、一足飛びに帰宅した。

テレポーターシヨンの一っ飛びで、闇蝙蝠は自宅の玄関前に到着した。

家の鍵をあけ、靴を脱ぎ、鍵を閉める。部屋に入ると早速着替え、多少ラフな格好になった。着古されたシャツとズボンを穿き、ベッドの上に横たわる。疲れたなあと言ほやき、目を瞑った。まさ

にその時。

ピンポーンと、インターホンが鳴り響いた。だが闇蝙蝠は出迎えるのも面倒くさく、手をひょいっと上にあげ、ランプを一枚召還した。呼び出したそれを魔法で操り、玄関の鍵を開ける。

「はあゝい、開いてますよ。入ってくださいーい」

カチャツという開錠の音を確認すると、彼は自墮落にベッドの上に乗ったまま言った。

すると人の声がして、ドアが開く音が聞こえた。どうやらお邪魔しますと言つて、訪問者が扉をあけて来たらしい。だがかなり低い声で、言葉がよく聞き取れない。

「誰ですかー。大きい声で名前言ってくださいーい。俺、ここにいるんで。まさか宅配じゃないっすよねー？」

分からないまま、マジックレターが普及しているこの時代に、宅配便はあまり無いだろうと踏み、そんな事を言う。不用心この上ないが、もし命を狙う刺客であるなら、こんな風に堂々とはやってこないだろうと思つていた。疲れて、頭があまりよく回らなかったのだ。

全く気にせず、闇蝙蝠は布団の上で目を瞑つていた。すると突然、誰かが胴体の上に座つた。

「ぐえっ！」

「全く、無用心な男だ。私が暗冷軍の暗殺者だったらどうする気だ？」

「う、ぐう」

「刺客なら堂々と登場はせぬだろうと考えているのだろうが、そうとも限らん。逆にそう思ってるだろう相手の心理をツいて来る可能性がある。家にいるとはいえ安心は出来ぬぞ。せめて相手が誰か確認してからドアを開けぬとな。それくらい一般人でもやってることだぞ。いいか」

相手は早々に御託を並べた。だがそれより何より、上に乗られて重くてたまらない。

「お、も……い！」

闇蝙蝠は腕を伸ばし、懇親の力で相手をどけた。

「重いんだよ！　じいさん、わざわざ人の上に乗らなくてもいいじやねえか」

幽霊部員ならぬ、幽霊隊員。訪問者は瀏華隊の最年長者かつ、春翹の育て親でもあるデザイナーだった。闇蝙蝠の苦言に彼はわざとらしく失礼と言い、ベッドの、何も乗ってない所に腰掛けた。

「やれやれ」

ようやく圧迫がなくなつて、闇蝙蝠はため息をついた。そして起き上がり、目を細めて彼を見た。

「こんな時に夜這いつすか。おいおい、やめて下さいよ。俺あ野郎に抱かれる趣味はないんだ」

「今はまだ夜じゃなからう。第一私だつてそんな趣味はない。お前は骨ばつていて抱き心地が悪そうだ」

「言ってくれたな。骨ばってるのはあんだだつて同じでしょうが。大体、俺はそこそこ筋肉がついているから、単なる骨と皮の塊じゃない」

「そりゃあそうだろうよ。瀏華隊の戦闘隊員ともあるう者が、その辺のガキどものように痩せぎすだつたら困るだろうが」

「っていうか、何しに来たんです？」

唐突に、闇蝙蝠は尋ねた。

「口数が多い者同士、喋っていたら埒らちが明かない。簡単に用事を述べて下さいよ」

「ああ。それはな、婦女暴行のうわさを聞いたから飛んできた」

闇蝙蝠の要求どおり、彼はとても端的に言った。だがその直後、闇蝙蝠は大声でどなり、背筋を逆立てた。

「肝心なところが抜けてる！ 俺は警察に名指しで命令を受けたからやっただけだ。それに暴行はしていない。取り押さえただけだ。失敬な！」

泥棒を見つけた番犬のごとく、ギャンギャン言う。するとデザイナーは若干うるさそうに手を振った。

「そんな事はわかってる。ただ簡単に述べるとお前が言うから略しただけだ」

「キーツ！」

「いちいち怒るな。それより、どうだね。瀏華隊の按配あんはいは。私はここ最近ずっとそっちに顔を出してないからサツパリ」

「そうだ。その事について、俺はあんたに一つ聞きたいことがある」
一瞬黙ったかと思うと、闇蝙蝠はじろつと彼を睨んだ。

「どうしてあんた、全然出てこないんだ？ リーダーが何も言わな
いから、俺も他の皆も黙っているけど。このままじゃ給料ドロボーだぞ」

「泥棒とは失礼だな」

デザイナーは腕を組んだ。言葉とは逆に、怒ってはいない。

「だがまあ、そう思われても仕方がない。ここずっと、私は上に呼ばれて本部に行っていたんだ」

「上？ 何ですか、それは」

「何だお前、副リーダーのくせに知らんのか」

一瞬呆れた様子を見せる。だが闇蝙蝠が言い返そうと口を開けた瞬間、すぐ説明に入った。

「本部といたら、帝国軍の本部。上といたら、そこにいる我々

の上司のことだ。瀏華隊のリーダーの、さらに上だ」

「はあ」

先に言葉を言われ、言おうとした台詞を言えなくなり、閻蝙蝠は若干、抜けた返事をした。

「つまり、瀏華隊のリーダーが部長なら、それは専務みたいなもんですか？」

「あまり正しくはないが、上下関係からすれば、そうだ」

「しかし、どうして凜は俺らに説明してくれないんです？」

閻蝙蝠は少し不満そうに言った。

「気になるじゃないですか、どこへ行ったのかなあって。一言でいい、本部に行っているため留守にしていますという知らせがあれば、誰しも納得するだろうに」

「ふん。どうかな」

デザイナーはかなり皮肉っぽい口調で言った。

「何で留守にしているんだとか、いつまでいないんだとか、色々聞くんじゃないのか？」

「誰が？」

「お前がだ。とにかく、私は私で色々忙しいんだ。決してサボっているわけじゃない」

「そうですか」

閻蝙蝠はあっさり頷いた。するとデザイナーは、いささか真剣な顔になった。

「だが、あまり大っぴらに出来る用事ではないんだ。だから皆の前で発表せんのさ」

「……けれど、重要な事なんですよね？」

突然、妙に真面目な顔になった彼に首を傾げ、閻蝙蝠は聞いた。「会議はとにかく、戦闘まで二の次にしなければならぬくらい、重要なことなんですよね？ だって俺らは瀏華隊、戦うための組織だ。それをおしてってことは」

「正直に言おう。私は別に、行きたくて行ってるわけじゃない」

デザイナーは忌々しげに息を吐いた。

「だが、呼ばれる以上仕方ない。それに私は、暗怜軍との戦闘の場には行けぬのさ。これも定めだ」

「定めって、そんな大袈裟な」

「いいや、お前は事情を知らないからそう言えるのさ」

彼は深いため息をついた。だが闇蝙蝠は、相変わらず首を傾げていた。

いまいち、事情がよく分からない。ただ秘密という以上、無理に聞き出すことは出来ない。元より明かせる話なら、とつくに明かしているはず。それに瀏華隊の隊員はしよせん底辺、上の命令には従うしかない。それがリーダーより上の人間とあれば尚更だ。

しかし闇蝙蝠には一つ、どうしても聞きたいことがあった。

「でも、どうして戦闘の場に行けないんですか。あんだ、戦闘隊員でしょう?」

「そうだ。だが、こと暗怜軍に関しては、行けない事情があるんだ」

「それを教えてくれるわけには」

「残念ながら、無理だな。止められているんでね。ただ春翅諳は知ってる」

「春翅諳? ああ、しーちゃんね」

だが名前を聞いた途端、闇蝙蝠はあつと声をあげた。

「あつ、そもそもあんだ、此処に、話を聞きに来たんですよね」

「そうだ」

「どうしてしーちゃんに聞かないんです?」

「……それは」

デザイナーはその時、少しまずそうな顔をした。今まで割と饒舌だったのに突然黙り、目を伏せる。

それを見て、闇蝙蝠はまずいことを聞いたかと思った。彼の表情から、二人が喧嘩をしていたのかも考えたのだ。

「も、もしかして留守だったから?」

慌てて言葉を付け足す。

「そうかもしれないねえ。あの子インドア派に見えて、意外と色々なところを飛び回っているから。先日モリオンとロンウエーがうちの建物に入りそうになった現場、キャッチして知らせてくれたのもあの子だし」

だが次の瞬間、デイザートがあげた大声に闇蝙蝠はひっくり返りそうになった。

60・異父兄（あに）として、父として。

「何だつて！」

「うへえ」

闇蝙蝠は小さく声をあげ、肩をすくめて彼を見た。

「ちょ、デイザートさん。此处アパートなんですから、あまり大きな声は出さないで下さいよ」

隣室の事を考え、軽く注意を促す。するとデイザートは、はっと我に返った顔をした。そして改めて、小さな声で囁いた。

「悪い。その事について、詳しく聞かせてくれ。一体どういう状況なんだ？ どうやって知らせが？」

「はいはい、順番に言うから、ちょっと落ち着いて」

間抜けた返事をしつつ、突飛な彼の反応に、闇蝙蝠は仕方がないと考えた。建物の中に侵入されるなど、デイザートにとっても前代未聞のことだろう。

「24日のことです。俺が今みたいにきもちよくベッドに寝転がっていた時、突然……」

要望に応え、一部始終を言っただけで聞かせる。春翹諳がいきなりやってきた事、わけもわからず連れて行かれ、そこで見聞いたこと。その後凜に事実を伝え、リオンを捕獲したこと。

するとデイザートは意外にも、リオンの事はうつつちやり、その前の、春翹諳の言動について難を示した。

「透明ラッカーだの何だのかんだの、そんなものまでわざわざ使つて。あの子は一体何を考えているんだ？ おい闇蝙蝠、何か聞いてないか」

「話は聞きましたよ。そりゃあもう、色々。でもしーちゃんが考えている事なんて、俺には分かりませんよ」

闇蝙蝠はため息をついた。

「ただあの子は、偶然事実を知ったと言っていました」

「おかしいとは思わなかったのか。どうしてそう都合よく」

「ええ。言ってやりました。だけど譲らないんです」

だがふと、デイザートは怖い顔をした。

「こつは考えられないか。暗怜軍の誰かと接触をしていて、そのために侵入の事実を知ることが出来たと」

「え？」

「つまり、暗怜軍のスパイではないか」

「ああ」

闇蝙蝠は返事をしたが、すぐに首をかしげた。

「血の繋がりが無いとはいえ、自分の子をよく疑えますねえ。家庭より仕事を優先ですか？」

「闇蝙蝠。身内とはいえ、手加減はするなよ」

デイザートは真剣な眼差しを向けた。

「情に流され、公私混合は出来まい。ただでさえ我々の職業は、命のやりとりをする危険なものだ。もしあの子が何かバカな事に手を出しているのなら、お前は兄として、私は親として、止めてやる必要があるだろう」

「なるほど」

闇蝙蝠は軽く頭をかき、頷いて考えた。

もし春翅諳がスパイだとしたら、暗怜軍側にセキュリティシステムの仕様が伝わっていたことも不思議ではない。春翅諳が特にメカに詳しいという覚えはなかったが、瀏華隊の隊員である以上、調べた伝えることは出来る。ただしそうなら、侵入の予告を自分にした意味が分からない。

「けどスパイってのはおかしいでしょう」

考えをある程度まとめたところで、彼はデイザートに言った。

「リオンに協力してセキュリティシステムをダウンさせたなら兎に角、侵入の事実を教えるなんて。そのせいで、リオンは捕まったんですよ。一人とはいえ、人が捕まった事は、暗怜軍にとっては不利

益な事でしょう。仮に、仮にですよ。しーちゃんが暗怜軍の仲間だとしたら、そんな事しますかねえ。勿論、リオンに特別な恨みがあるっていうなら、話は別ですよ。ただ俺なら、そんな方法はとりませんね。だって、そのせいで、自分がスパイしてる事がバレるかもしれないもん」

「確かに。だがお前、案外お人よしだな」

「へ？」

突然、ディザートにあきれた顔でしげしげ見られ、闇蝙蝠はきよとんとした。

「どういう事です？」

「まあいい」

「よくありませんよ。何ですか、面と向かって悪口なんて」

かなり渋い顔になる。そして頭の中でその時の様子の再現を試みた。だが如何せん、疲れがたまっていてよく考えられない。

闇蝙蝠は欠伸を一つして、ベッドの上でうつぶせになった。

「使いツ走りにされてるなあと、思ったんでしょう？ だけど、しーちゃんのおかげで、俺達は事前対策を立てる事が出来たんだ。それには感謝すべきです。春翅諳は春翅諳だ。あの子が何を考えているか、異父兄あにとはいえ全ては分からない。血で心が読めるならいざ知らず」

「血か」

ディザートは宙をにらんだ。

「闇蝙蝠。一つ忠告しておく。血液というのは黒魔術で個人の特定に、大変よくつかわれるものだ。念のため、血を流すときは用心しろ。もっとも戦闘隊員であるお前には、難しいことかもしれないが」

「ふぎゅう」

布団に顔を埋めながら、闇蝙蝠はくぐもった返事をした。ごろんと体を反転させ、今度は仰向けになる。彼はそのまま、暫くゴチャゴチャと潰れたような息を吐いていた。

それを見たディザートは闇蝙蝠の腹をつつき、ふつとため息をは

いた。

「しかし、随分疲れているようだな」

「当たり前だ。もう寝させてくれよ。話なら後でいくらでもしてあげるからさあ。ねえ、どうせなら子守唄でも歌ってくれよ」

「無理だ。軍歌なら歌えるが」

「そんなの聞いたら寝れなくなるだろ。もういいよ、部屋にいてもいいから黙ってて下さい」

闇蝙蝠は顔の前に腕をやり、視界を覆った。が、少しして腕を外し、デイザートを見た。

「ところで一つ、あんたに聞きたい。俺が今話した内容、凜から教えてもらっていなかったのか。それと数ある隊員のうち、どうして俺を訪ねた？」

「簡単に事実を述べたメールは受け取ったが、詳しい話はまだ聞いていなかった。それとお前を訪ねたのは、お前の家しか知らないからだ」

質問に、デイザートはそのまま答えた。

「私が知っているのは、凜の住居とお前の住居だけだ。だが四十代の男が一人で訪問するにあたって、若い女性と男性の家、どっちを尋ねやすいかといったら、そりゃあ後者だろう。先も言ったように、他の野郎どもの家は知らんし」

「ああ、そういう理由ですか」

闇蝙蝠は頭をかいた。割と簡単な理由だったが、同性の者として気持ちは何となく分かった。

「それに凜は、どこにいるか分からない。瀏華隊にいる時もある、警察にいる時もある。お前もそれは分かるだろう？」

デイザートはベッドから立ちあがった。軽く腰を伸ばし、寝そべる闇蝙蝠の頭をぼんぼんと撫でた。

「本当にお疲れのようだな。私はそろそろ帰ろう。話、感謝する。邪魔したな」

そう言うとき彼は、サツとテレポーションでいなくなった。あ

まりの早さに、闇蝙蝠は言葉を返す間がなかった。

唐突に消えられ、少しの間は頭がついていかない。だが少しして、闇蝙蝠は眠りに落ちてゆく意識の隅で、ぼんやりと言った。

「靴、持って帰ったのかなあ……」

61 - 警察からの面倒な書類

昼寝のつもりで、軽くベッドの上に横たわった闇蝙蝠。しかし目を覚ますと、とんでもない睡眠時間をとっていた。

目を覚ますと、時計の針は十一時。それも夜ではなく昼である。つまり日付をまたいで、昼まで寝てしまったのだ。

げえツと声をあげた所で、時間は戻らない。学校は遅刻どころか、午前の授業は全て終わってしまったている。

どうすべきか、闇蝙蝠は少しの間考えた。が、すぐに諦め、今日は学校をサボることに決めた。

そもそも、多忙で危険な職場に勤めているのに、学校に入学したのが間違い。退学になるなら、それはそれで構わないと思った。：正直、あまりに寝すぎた事にシヨックを受け、少々機嫌が悪くなっていた。

気を取り直し、顔を洗って歯を磨き、コーヒーとバランス栄養食を胃袋に入れ、服を着替えて髪を梳かす。ここまで終わるとかなり気分も落ち着いて、鏡台の前に立ったついでに、先日してもらった二つ結びを再現しようと試みた。

カタツムリだのエスカルゴだの色々な事を言われたが、彼本人は、コウモリの翼のようだと思って気に入っていた。が、実際結ぶとなるとなかなか難しい。元々髪の毛が中途半端な流さである上、翼を模した形にするためには、毛を束にしてバランスよくまとめなければならぬ。普段やりつけてない者が、一人でやって綺麗に出来るはずがなかった。

恋する乙女　というよりナルシストか馬鹿みたいに鏡の前でゴタゴタやっているうちに、三十分が過ぎてしまった。

結局、結ぶことは諦めた。だが髪の毛に変なクセがついてしまい、もう一度頭をとかすハメになった。

ブラシでざかざか髪を梳き、抜けた数本を指でつまみ、彼は一人首を傾げた。

「気のせいかなあ。何か俺、髪の毛が伸びるのが早いんだよなあ。別にいいけど」

そんな事をぼやき、ようやく鏡を後にする。だが彼が部屋に戻った途端、待ち構えていたように携帯電話が鳴りだした。確認すると、凜からのメールだった。会議の告知で、時間は今から約一時間後。

闇蝙蝠は携帯電話を置くと、小さな溜息をついた。

「いつも思うんだけど、もう少し時間的余裕をもって呼び出した方がいいんじゃないかなあ。俺はテレポが使えるからいいけど、そうでなかったら結構酷いな。でも皆、いったいどこに住んでいるんだろうっ？」

ふと思えば、隊員仲間のうち、闇蝙蝠が家を知っているのは春翅諳とデイザートだけ。デイザートは凜の住所を知っていると分かったが、闇蝙蝠は知らない。もちろん訪ねたことはない。そして分からないといえ、デイザートの事が、さっぱりよく分からない。

元より彼と知り合いなのは、春翅諳を通してだった。ただ実家の父母は春翅諳と何ら血縁関係がなく、勿論デイザートとも関係がない。彼については分からない事だらけだ。そもそもどうして、養子をとっているのか。……単純に、自分に子がいないためだろうか。

考えても、こればかりは分からない。闇蝙蝠はとりあえず電話を懐にしまった。テレポーションが使えるので、何も今から家を出る必要はない。目覚まし時計をセットして、時間までの間、闇蝙蝠は戦闘用の、軽い練習を行う事にした。

召喚で本を呼び出し　　といっても本棚にあったものを傍に呼んだだけだが　　て、ばらばらとめくる。目的のページを見つけ、彼はそれを広げてベッドに置いた。もう何度も開いていたせいで折り目がつき、勝手にパターンと閉じる事はない。

続けてトランプを一枚呼び出しながら、そこに書いてある記述をブツブツ読み、今出したカードに呪文をかけた。するとトランプは

空中でぐるぐると回転し、小さな風をおこしたものの、そのまま力尽きたように下に落ちた。

闇蝙蝠は続けて、同じことを繰り返した。トランプの数を増やしたり、呪文と一緒に手振りも加えたりする。そのうちに少しずつ、様子が変化してきた、

最初はきりきり舞いをしていたカードが、次第に渦を巻いて回転するようになった。まるで小さなつむじ風に乗ったような動きをするが、実際はカード自体が風を起こしている。その風も最初はあるか無いかという弱いレベルだったが、次第に強まり、扇風機の中程度になった。

本を片手に、闇蝙蝠はせつせと一人で練習をしていた。だがその途中、ベルの音に作業の中断を余儀なくされた。

「おっと」

音は先ほどアラームセットした目覚まし時計だった。闇蝙蝠はカードをシュツと投げてそれを止め、時間を確認した。

「よし、そろそろ行こう」

さつとベッドを降り、玄関に向かう。靴を履き、テレポーターションを使って一瞬で、瀏華隊の建物の前に飛ぶ。後はいつものようにスタスタと、歩いて中に入った。

会議室のドアを開け、挨拶をしようと口を開ける。だがそこに重苦しい雰囲気漂っているのを瞬時に察知し、開けた口をぱくつと閉じた。

闇蝙蝠より先にいたのは、凜とフェイアント、ワピチそして春翹諳だった。時間は少し早く、全員がそろっていないため、会議はまた始まっていない。だがいつもならあるはずお喋りが、全くない。四人が四人、そろって黙り、深刻な表情をしている。視線の先は下で、一冊の書類だった。

状況に戸惑いつつ、闇蝙蝠はそおつと着席した。見ると自分の所

にも、同じような書類があった。全員分、おかれている。

四人の様子から、どうせいい知らせではなかるうと予想しつつ題名を見ると、そこには黒いゴシック体でこう記されていた。

「深多の森において、23日未明から24日に行われた暗怜軍との戦闘により、生じた遺体の鑑識結果。及び、それに対する見地」

撮影：戦教学院生徒 並びに引率教師（各個人名は裏側に記載）

鑑識：セルタンティ―又国東部地警・鑑識部（同上）

堅苦しく、長い。お世辞にも面白そうとは言えないものだったが、闇蝙蝠はとりあえず、手にとって中を見た。

文章と並んで乗っている、多数の写真。それは先日の戦闘で殺された死者のもので、付属の文章は死体の主の性別と年齢、一部の者は名前と経歴。加えて、殺された状況の推察。

モザイクは一切なく、切断面や内臓はアップでモロ見え。屍を見慣れた闇蝙蝠ですら、これには気分が悪くなった。だががいくつかページをめくると、気になる記載を見つけた。

以上に示すとおり、何点かの遺体につきまして明らかに不必要と思われる傷害が行われているのではというのが、当署からの見地であります。

また殺害方法に、上述するように一定のクセがあることから、一人の人物によるものかと推測されます。つきましてはそちらにて、該当者の殺傷を施行した者の特定の上、法令倫理に基づき、然るべき処分を決定して頂きたく存じます。

重ねて、先日19日に関街道で行われた『一般人加害者による火

『炎魔法傷害・暴行事件』につきましても、該当魔法の使用者を確認の上、結果をご報告下さいますようお願い申し上げます。

「げっ、やっぱりきたか」

最後の一文を読んで、闇蝙蝠は思わず声をあげた。

一般人うんたらと難しく書いてあるが、場所と日付からすると、これはえんじえらんがやらかした事件のこと。

過去に何度も危惧していたが、どうやらその心配が本当になってしまったらしい。具体的なことはまだ何も書いてないが、ややこしい話になりそうで、闇蝙蝠は密かに頭を抱えた。

62 - 被虐された屍へ。(前書き)

画像：<http://millions.xrea.jp/this/entrance.html>

62 - 被虐された屍へ。

> i 2 4 6 3 4 — 5 2 8 <

だがそれより先に、気にしなければならぬ事が一つある。

えんじえらんの事件の前に、ゴチャゴチャ述べられている話。不必要と思われる傷害だの、然るべき処分だのとあるが、何のことか。闇蝙蝠は一度深呼吸をして、今一度、ページをめくった。

「男性、十一から十五歳、氏名データなし」

小さな声で読み上げる。隣に載っている血まみれの写真を片手で隠し、闇蝙蝠は文章の方に集中した。

「検死結果、遺体の手足にのこった圧迫痕および、頸部・頭部の傷跡から以下のように推測。

強靱な魔法系まほうじで手足を拘束された後、首に鋭利な刃物をあてられた状態で頭部を数十回にわたり打撃。打撃の衝撃により刃物が頸部に食い込み、結果、頸動脈切断による失血死」

何となく首が痒くなり、闇蝙蝠は思わず、己の喉に手をあてた。

「見地、頸部の攻撃による殺傷は多く行われている。が、鋭利な刃物を首にあてた上、頭部を打撃し刃を食い込ませるといのは例がない。この場合、致死時間が一般的な殺人法に比べ長いと推測される。鋭利な刃物を被害者の首にあてることができたなら、それにより即座に絶命させることが出来たのではないか。……うん、まるでレポートみたいだ」

最後は独り言で締めくくり、闇蝙蝠は目を宙に泳がせ、室内を見た。

いつの間にやら、隣にはピロロが着席していた。同様に、先程までいなかっただえんまとシャオも、ちゃんと来ている。と、ここまで

確認した時、凜が会議開始を宣告し、手元の資料を読むよう命じた。だが闇蝙蝠は読みたくないのが半分、もう読んだのにといい思いが半分で、書類に目を通さなかった。

かわりに、仲間の様子を観察した。正面に座るシヤオを見ると、案の定、彼はきよとんとしていた。いくら賢いとはいえ、所詮は七歳の子供。しかも戦場で生の死体を見ているから、写真にも全く動じない。

勿論死体なら闇蝙蝠も見ているが、年を重ねているせい、余計な事を色々考えてしまう。戦場では自分も必死なのであまり考えないのだが、こうして落ちついて向き合っていると、痛かったのだろくな、彼らにも人生があったのになと、同情を寄せてしまい、辛かった。何よりこのグチャグチャな屍を作ったのが、同じ隊の仲間の誰かと思うと、内心穏やかではられない。

しかし闇蝙蝠は、犯人が誰か、既に勘付いていた。そのせいで気分がかなり重かった。

暫し無言の時間が過ぎた後、凜が話し始めた。まず全員が、書類に目を通した事を確認し、その上で、こう切り出す。

「この書類についてですが、見てのとおり、警察からの鑑識書です」
事務的な口調で言う。

「私たちは、帝国軍のみに許される権限を用いて、警察からの依頼で戦いに行きました。死体が出るのは当たり前で、それについては何ら文句の出る筋はありません。ですがこの書類に書かれている通り、いくつかの死体において、不必要な傷害がありました。それが今回、問題とされています」

「要するに、拷問的だったことですね」
闇蝙蝠はボソツと口を挟んだ。

途端、凜が顔をあげ、視線をまっすぐ向けてきた。闇蝙蝠は口が過ぎたかと少し慌て、言葉を付け足した。

「まあ多少穏やかに言つと、生かしたままじわじわ^{なぶ}翳^{なぶ}っただろうっ

て事さ」

ワピチがビクンツと体をひくつかせたが、闇蝙蝠は努めて無視した。凜はややギクシヤクとした感じで頷いた。

「ええ、まあ……そう。今、彼が言った通りです。ただ皆さん、勘違いしないで下さい。警察は、我々が殺人をしたことを批判しているわけではありません。我々にはそれが出来る特権があります。ただしいかなる場合でも、許されないことがあります。それは拷問および不必要な傷害をへての殺人です。つまり」

「殺すならキレイに殺しましょう」

闇蝙蝠は恐ろしく冷たい口調で言った。

「致死時間、つまり攻撃があたってから相手が致死するまでが十秒以内が理想。それ以上はダメ。何故なら非人道的であるから」

だがその瞬間、シャオがえーつと声をあげた。

「えーつ、同じ殺すでも、そんなのありますですか？」

「おいおい、今更何を言ってるんだ。お前、腐っても隊員だろう。そんなのも知らなかったのか、この」

「闇蝙蝠っ、そんなに責めたら可哀そうじゃないっ」

罵倒の言葉が出る寸前、ピロロが口を挟んだ。

「あのねシャオ。好き勝手に殺せるわけじゃないんだよ。アンタが持つてる技は放電と、人形の操作だけだから、あまり気にしなかつたかもしれない。だけど殺しにもルールがある」

「でも、戦いの最中に、そんなこと気にしていられません」

シャオは口をとがらせた。

「相手は、ボクたちを殺そうと狙ってきている人たちなのに」

「確かに、だけど」

「全く、子供の意見は純粹だねえ」

先程とはうってかわって、闇蝙蝠は彼の頭を撫でかねない、いやに優しい声を出した。

「その通り。相手が無抵抗なら兎に角、暴れまくってるんじゃない、安らかにお眠りさせる事などままならない。だけど適当にバタバタ殺や

ると、色々煩いんだ。誰だって痛いのは嫌だろ？」

「そうですね」

「俺らはセルタンティーヌという国の傘下において、国民全てを代表し、その安全を守るため、やむなく彼らを殺しているんだ。実際はどうでも、立場上はそうなる。そのために規制がある。毎度おなじみ、法律だ」

闇蝙蝠は肩をすくめた。

「現実的じゃないのは分かってる。だけどそれなりに事情があるんだ。大人の事情ってやつだな」

「しかし」

ふと、フェイアントが口を挟んだ。

「法律うんぬんはさておいて、これは本当に酷いですね。誰がやったんです？ 例えば、これ。冗談抜きで、これでは拷問です。」

女性、十一から十五歳、氏名不詳、データなし。木材に強靱な魔法系で四肢および胴体をくりつけられた後、材木ごと加圧による四肢骨折、合計二十三か所。その後、絞首により気道を閉塞することによって窒息およびペティナイフによる腹部刺殺、左の眼球摘出。直接的な死因は失血死」

読んだ後、彼はぶるぶると頭をふった。

「要するに、木に磔はりつけにしておき、その木ごと手足をバキバキに折った拳句、首を絞めながら腹にナイフを刺し、目玉を片方くり抜いたという事ですね。まるで快樂殺人鬼の仕業じゃありませんか。警察から苦言を呈されるのももつともです」

「そうですね」

凜が頷いた。こっちが言おうとしたことを全部言ってくれたねという顔をしていた。

63 - 処分

「ただし、前のページにある通り、処分対象は一人です。つまり」

「事実はどうであれ、処分されるのは一人」

闇蝙蝠がかさず口を挟んだ。

「二人や三人でよっていたかかって殺していた場合でも、一人だけ。そういう事だな？」

「そうです。ただ」

「でもこれ、あくまで推測ですよねっ？」

闇蝙蝠に引き続き、ピロロが手をあげて言った。凜は一瞬迷ったそぶりをみせたが、どうぞという手振りをした。

「まだ確定したわけじゃないんですよ。だったら、そんな事はしてませんとは言えないのになっ」

「隠蔽いんぺいする気ですか？」

フエイアントが鋭く言った。

「けれど、死体が既にあがっていますよ」

「分かっているよっ。けど闇蝙蝠がシャオに言ったように、規則は机上の理論でしょっ？ あまり細かい事をつっこまれると、あたし達もう戦いができなくなっちゃっ」

「しかし証拠があがっている以上、下手な言い訳は逆効果です。…

…違いますか、リーダー？」

フエイアントは凜を仰いだ。彼女は頷いた。

「そう。第一警察は、誰がこれらの死体を作ったか、簡単に知るこ
とが出来るとよ。何故なら、私たちがどのような技を使うか記した
情報を、彼らも取り出す権利があるから。瀏華隊は人数が少ないし、
照らし合わせればすぐ分かる。そもそも、一人だろうという検討を
既につけているもの」

長々と言葉を吐き、最後にため息をつく。

「やるうと思えば、誰かをつきとめ、逮捕状を出すことも可能でし

「ようね」

「じゃあ、どうしてしないのっ？ どうしてあたし達に任せるのっ？」

「大事おおいごとにしたくないからよ。警察も瀏華隊も、国を守るという点では一緒だし、そもそも私たちは、警察から許可をもらってこの戦いをした。今この件で下手にしょっぴくと、私たちに命令を出した彼らも、何らかの面倒を蒙る可能性がある」

「部下の不祥事は上司の咎とが、ってね」

闇蝙蝠が口をはさむ。凜は頷いた。

「本音を言えば、この件は、無かったことにしたいでしょう。でもこれはあまりに殺り方がむごい。隠蔽して、そのまま済めば問題ないわ。問題は、外部に漏れた時。拷問もどきの殺害をした挙句、それをもみ消したなんて知れたら、とんでもない不祥事になる。やったのは一人でも、隠したとなれば連帯責任になりかねない」

「そうだったら、俺らはもうオワリだな」

闇蝙蝠は熟知り顔でため息を吐いた。

「隊としてやっていけない。企業で言えば倒産だ。従業員は全員解雇、路頭に迷い、職安にいつても差別を受けて再就職先がろくに決まらない。だからそうなる前に、内輪で、問題をおこした一人だけを処罰する。幸か不幸か、うちの国では、確か、国家もしくは集団によって一般の国民に対してなされた謀殺、絶滅を目的とした大量殺人、奴隷化、追放その他の非人道的行為っていうのは、戦時、平時に拘わらず、個人の戦争犯罪になるっていうルールがある」

「あの、闇蝙蝠。さいごの、もうすこしわかりやすく言ってくれないかなあ」

本を音読したような発言に、えんまが分かりかねて別言を求めた。闇蝙蝠は一瞬宙をにらみ、少しして、考えながら言葉を言った。

「俺らは集団で暗怜軍を攻撃したけれど、問題の死体を作ったのは一人。だから、その一人だけを処罰しなさい。そうすれば、隊としての責任は免れる」

ややゆっくり、彼なりに、分かりやすさを心がけて言う。

「それに、この件について外部から言及を受けたとき、『確かにそういうことはあったが、該当者は既につきとめ処罰しました』と言った方が、『シバくのが面倒なので野放しでした』よりいいだろう。えんまはそうだねと返事をした。が、すぐに首を傾げた。

「なるほど。でも、なつとくがいかないよ。ごまかしじゃないのかなあ、それ」

「そんなもんだって！ いいか、冷静に損得勘定をしてみる。隊が取り潰しになるくらいなら、一人が処罰される方がずーっとマシだろう」

「でも、だれが処罰されるんだい？」

闇蝙蝠は返事をせず、チラリと隣を見た。えんまは気がつかず、そのまま凜に聞いた。

「これには、ほそい糸つてかいてあります。でも、そんなのつかうひと、いた？」

「あたしじゃない」

えんじえらんが慌てたように言った。

「あたしは大きな炎の剣で、そんな、糸とかペティナイフとかは全然」

「ボクも違いますです。ボクはぬいぐるみと、あと雷で」

シヤオもそれに続く。が、それに闇蝙蝠は舌打ちをした。

「お前ら、盗み食いの犯人探しじゃねえんだぞ。ここはもうちょい大人になろうや」

「ボクは大人です。もう、いつつも子供扱いして！」

「ペティナイフは召喚だろうから、これで特定は出来まい。しかし、糸は？ ほら、開示データを思いだせ」

「それも召喚じゃないの？」

えんじえらんはきよんとする。するとその横で、ワピチがおずおずと言った。

「ち……違うと思います。だって魔法糸まほういとって書いてありますよ」

「その通り。これは訓練しなきゃ身につかない能力だ。で、ほれ」
闇蝙蝠は隣の席に顔を向けた。そこでは春翅諳が、生気のない目をして下を向いていた。

彼は手をのばし、相手の顎をくいっと指先であげた。

「しーちゃん。名乗り出たくない気持ち分かる。だが、隠しきれないぞ。お前は糸を使えるね？ 粘性性はないが蜘蛛の糸のように強靱、人をぐるぐる巻きにするには都合が良い。ただし己の血を原料に作っているから。乱用すると貧血をおこす。……ま、今回の問題に、お前の貧血は関係ないけど」

春翅諳は何も言わなかった。ただ少し青い顔をしていた。闇蝙蝠は続けた。

「なあ、技の名前は何て言ったっけ」

「不可逃糸」

「なるほど。で、身に覚えは？」

春翅諳は少し黙っていた。だがやがて、観念したようにこくんと頷いた。闇蝙蝠はため息をついたが、何も言わなかった。

一方、えんまは信じられないという顔で二人を見た。

「ほんとうなのかい？」

「今、しーちゃんが頷いたの見ただろう。本人が認めているんだ、そうだ」

「けれど、それだけじゃ」

「疑いたくない気持ちはわかる。俺だって気分悪い。だが、こいつ以外に誰がいる？」

闇蝙蝠は書類を開き、折り目をつけてページを固定した。そこにはあちこちに青あざが出来た人間の屍があった。

「糸もそうだが、しばしば鈍器という言葉が出てくる。鈍器といえはハンマーや鎚矛メイスが思い浮かぶが、本だって立派な鈍器になる。しかもしーちゃんは、本を自在に操れる。俺がトランプを操るように」
「だけど」

「しよっぴきたくない気持ちは分かる。だが、さっきリーダーが言

「ただらう」

食い下がる彼に、闇蝙蝠は言い続けた。

「さつき、フエイアントが少し言っただらう。隠蔽は出来ない。バシた時、なお大変なことになるからな。いいか、俺らは人を殺せるが、拷問する権利は持っていない」

机を軽く叩きつつ、最後の言葉を強調する。

「正式に起訴されたら、公務員職権濫用罪をくらかもしれない。だが今のうちに対処しておけば、そこまで厄介なことにならずに済む。……で、リーダー。処分はどのように考えています？」

「まずは、始末書の作成ね」

凜は淡々と返事をした。

「それと、自宅謹慎かしら」

「リーダー、キンシンって何ですか？」

すかさずシャオが尋ねる。

「どういう罰ですか？」

「おいシャオ、それくらい辞書で調べ」

「平たく言えば、職場への出入りを禁止することよ」

闇蝙蝠の言葉を遮って答える。しかしそれに、今度はえんじえらんが声をあげた。

「リーダー。それは逆に、軽すぎるんじゃないですか？ だって、此処に出入りが禁止になるだけでしょ」

「いいえ。拘束よりはマシだけど、軽くはないわ。なぜなら」

「職場への出入りが禁止になれば、仕事が出来ないから」

今度は闇蝙蝠が凜を遮って、しかしかなり真面目に答えた。

「仕事が出来なければ、給料がもらえない。つまり生活に差し支える。期間にもよるが、一般のサラリーマンならえらいことだぞ。もっとも、しーちゃんはデザイナーさんの養子だ。養い親がいるから、生活面では問題なからうが」

軽く肩をすくめ、春翹諳の方を見る。だが、春翹諳は置物のように動かなかった。

闇蝙蝠はやれやれという顔をして、今一度、凜に尋ねた。

「リーダー、期間は何日くらいですか？」

「私の一存では決められないわ。本部に相談をしてみないと。こちらに任せるといっても、この事が大々的に露見すると、私たち瀏華隊のみならず帝国軍まで迷惑がかかる。だから、聞くだけ聞いてみないと。けどおそらく、三十日から九十日の間ね」

「だつてさ」

闇蝙蝠は春翅諳の肩をぼんと叩いた。

「だがしーちゃん。これはまだ軽い方なんだぞ？ 俺らはもともと殺人を犯すのが仕事の団体だし、あの場は戦場で、誰しも必死だった。そういったことを鑑みての減刑だ」

と、ここまでは普通のポリウムで言い、次に闇蝙蝠は声を小さくし、春翅諳の耳元でささやいた。

「まだ処分は決まってるが、今から帰るといい。自主謹慎。どうせ、この場に居づらいだろう？」

「そうですね」

まったく抑揚のない声で、春翅諳は答えた。次いで凜の方を向いて立ちあがり、丁寧に礼をした。

「私の行動がこのような事態を引き起こした事、深くお詫び申し上げます。ご迷惑をおかけしました。私……私、今から謹慎します」

それだけ言うと、春翅諳はそのまま、廊下へ続くドアから出て行った。

64 - すれ違いと鉢合わせ

春翅諳は出ていったが、皆、何も言えずにじっとしていた。だが少しして、闇蝙蝠はトランプを召喚し、ボールペンで文字を書きつけて消した。

消えたトランプは、凜のすぐ前に現れた。突如現れたそれに、彼女は一瞬訝しげな顔をする。が、すぐに手にとり、書かれていた文字を読んだ。

そこには「闇蝙蝠です。すみませんが、しーちゃんと話したいことがあるので、一時退出して宜しいでしょうか」と書かれていた。文字はひどく乱れており、かなり焦った感がある。

凜は小さくため息をつく。闇蝙蝠の方を向いて微かに頷いた。闇蝙蝠は椅子に座ったまま頭を下げると、何も言わず、テレポーションで一気にその場から消えた。

会議室から姿を消した彼は、建物の外に飛び出していた。そこからまた中に入り、出ようとした春翅諳を呼び止める。

外から入ってきた闇蝙蝠を見て、春翅諳はめんくらった顔をした。

「闇蝙蝠、どうして玄関から」

「テレポーションだよ」

闇蝙蝠はそのまま話しかけた。誰も周りにいないことをよく確認し、すいっとそばに寄る。

「はぐらかされたが、どうしても聞きたい」

「何を？」

「なぜあんな残酷なことをした」

隣に寄ったついでに、相手の両肩に手をおき、軽く揺さぶりをかける。春翅諳はそのままガクガクと揺さぶられた。

「死体に慣れてる俺ですら、あの写真には身の毛がよだった。どう

やったらあんなに残酷なことが出来るんだ」

「痛い」

「いいから、答える！ どうしてあんな事をした」

闇蝙蝠が詰問すると、春翅諳は手をぐいっと掴んで動きを強引に止め、若干冷ややかに言った。

「貴方、兄でしよう……私の。それくらい、分かるんじゃないですか」

「出来るか！ 読心術を心得てるわけじゃあるまいし。大体こういう時だけ、兄呼ばわりするんだから」

「失礼ですね。私はいつでもそう思っていますよ」

春翅諳の言葉は、若干トゲがあった。強い口調で問責され、いささか気分を悪くしたようだった。闇蝙蝠はそれに気が付き、声の調子を抑えた。

「いや、待て。落ち着け。こんな所で言い争いは止めよう。……俺が言い過ぎた。でもな、聞いてくれ」

一つ咳払いをし、改めて言う。

「しーちゃん。兄と言っても半分だけだし、何より俺達は、離れ離れで育っている。小さい頃はちよくちよく会って一緒に遊んだけれど、ばあちゃんが死んで、俺が引越して、疎遠になってしまった。だから俺は、お前のことをよく知らない」

「そう」

春翅諳はつまらなそうな顔をした。彼は更に低い声で続けた。

「ただどお前が瀏華隊に入る前、何かヤバい事をしていたのは知ってる」

「誰から聞いたんですか」

「デイザートさんから。彼が昔、お前について、それらしい事を言っていた。ただ、詳しくは知らない。だから責めない。だけど、瀏華隊で拷問もどきをしちゃダメだ！ 次にやったら、お前はもう此処にはいられないぞ。そうになったら、お前、どうするんだ」

「どつって？」

「退職は別として、倫理的な規範に違反して失職した帝国軍の隊員は、その後、安定した就職先が見つからないんだ」

きよとんとする春翹諳とは対照に、闇蝙蝠は真面目な顔で言う。

「一般人になるうとしても、俺らみたいな履歴を持つ危険な人物は滅多に雇ってもらえない。どこを回っても断られ、路頭に迷うことになる。だが、それだけじゃ終わらない。俺らには戦闘力があるから、その能力をかう奴らもいるんだ。ただしそれは、俺らが今まで叩いてきた組織　暗怜軍とか、暗殺剣とか、そういった所だ。だが俺らは、元は奴らの敵だった人間。そう簡単に、深い信頼は得られない。結果、ひどく中途半端な存在になる。これがどういう事が分かるか」

視線をそらそうとする春翹諳の顔をおさえ、彼は相手を直視した。「自分の居場所がなくなる上に、俺らと敵対することになるんだよ！　それに、お前がそうだったらデザイナーさんまで」

「心配してくれるのですか」
「え？」

一瞬、闇蝙蝠は言葉を止めた。

「う……うん。けど別に、お前だけのためじゃない。デザイナートさんや、俺らの母ちゃんが嘆くかと思っつて、それで」

「ありがとう」

春翹諳は背伸びをして手を伸ばし、闇蝙蝠の頭を撫でた。

「しかしそれなら、何故ですか。あの場で私を言及したのは」

「ペティナイフに不可逃系、あんな特徴的な殺害方法じゃすぐ分かる」

闇蝙蝠は少し俯いた。

「俺が言わなくても、いずれ、気がついただろうあ。だが他の誰かに指摘をされるくらいなら、俺がと思っただんだ。で、だ」

バツが悪そうに目をそらし、やや早口で、話題を変えた。

「何故、あんなひどい事をした？」

「ありません。別に、理由なんて」

「嘘だ。絶対ある」

食い下がる闇蝙蝠に、春翅諳は小さくため息をついた。

「無いですっいたら。……強いて言うなら、嗜好性というやつでしょ
うか」

「何だつて?」

「私は残酷な性格じゃありません」

眉をひそめる闇蝙蝠をよそに、マイペースに言う。

「時々見たくなりませんか? 恐ろしい……身の毛がよだつような、
おぞましいものを」

「えっ?」

「普通の人なら、済むでしょうね。ホラー映画やお化け屋敷で。だ
けど私は、血にも死体にも慣れてしまつて。それくらいじゃ怖くあ
りません」

「どついう事?」

「ですから、見たくなるんです。ゾツとするような恐ろしいものを」
「はあ」

闇蝙蝠は生返事をしながらも、相当渋い顔をした。

「だとしても、お前には常識つてもものがないのかい? ……いや、
この際常識なんてなくてもいい。ただ法を知り順守することが大事
だ。そうでなきゃ、自分が困るぞ」

「真面目ですね、貴方は」

返事をしつつ、春翅諳はぽんつと手の上に本を出した。

「とにかく、私は家に帰ります。始末書を書かなきゃなりません」
「ああ……そ、そうか」

闇蝙蝠は特に引き止めなかった。ただし、痛ましいというよう
な顔をした。

「家に帰るなら、フォーテレで送ってやろうか」

「いいんですか?」

「勿論。それじゃ、やるぞ」

闇蝙蝠は強制瞬間移動魔法をかけた。瞬時に場所から場所へと移

るテレポーテーションでは、別れは一瞬で終わる。春翅諳が光りに包まれて消えた後、残された闇蝙蝠はあつとため息をついた。

踵かかとを返し、会議室に戻るうとする。だが先ほど皆の前で春翅諳を言及したこともあり、気分がひどく滅入っていた。すぐには戻る気になれず、凜には悪いと思いつつも一旦、気分転換に外に出た。

外は天気良かった。首を伸ばして空を見て、何となくぼんやりする。だが次の瞬間、彼に全く予期せぬことが起きた。目の前に、いきなり人が現れたのだ。

「うわッ！」

「おっと、すまん」

相手は低い声で謝った。誰だと思ってよく見ると、デザイナーだった。今日はどこへ行ってきたのやら、ビシツとした黒いスーツ姿で、まるで銀行の頭取のようである。だがそんな姿とはうらはらに、彼はダーツとまくしたてた。

「こんな所で、何をボーツとつたっている。日光浴か？ 甲羅干しか？ どっちだって構わんが、多少は場所を考えたまえ。こんな玄関の真ん前でやったら邪魔だろう。あと数センチで貴様と衝突する所だつただろう。もつともテレポーテーションだから障害物があったら自動的に場所はズれるが、それにしたって野郎と間近に体を触れ合わずのは少々ご遠慮願いたいもんだ」

「失礼だな！ 野郎だ野郎だつてそんなに言わなくてもいいじゃないか。そんなに女の子がいいのか、えっ？」

「女の子だと？ 乳臭いメスガキには別に興味ない。私の好みは三十代前半だ」

「あなたの好みなんか知りませんよ。大体、ぶつかるのが嫌なのは俺もだ。しかし、あなたはよく喋るなあ」

自分のことは棚にあげ、闇蝙蝠は肩をすくめた。

「それよか、しまったなあ。あのね、今俺、しーちゃんを家に送り届けた所なんだ」

「うん？」

「あんた達、一緒の所に住んでいるよな。出がけに玄関で会わなかった？ いやもしかして、自室から直接、此处にテレポした？」

「そうだが」

「じゃあ、すれ違ったんだな。……あのさ、聞いてくれ。今会議でかくかくしかじか」

「何？」

一連の事を手短かに話すと、ディザートはビクツと体をひきつらせた。

「本当か」

「俺がこんな嘘をつくか。ヤバイよ、あんたしーちゃんのプロテクト者だろ？ 教育不行き届きとか何とかやられないかな。それに、春翅諳は変態だよ」

闇蝙蝠は深いため息をついた。

「普通の人ならビビって漏らす所を、別のものを漏らしてそう。人がヒイヒイ悲鳴をあげてる傍で、怖がつて震えながらハアハア喘いでいる姿が想像できる。あの子ぜったいレイプされるの好きだよね！ それも一度やられたら癖になるタイプ！」

「親の前で、そういう事を言ってくれるな」

ディザートは渋い顔をした。

「忘れてるなら教えてやるが、私はあの子の養父だぞ。だがまあとにかく、お前の話では、あの子は始末書を作成し、私に事情を話すために帰宅したのだね。なら、私も一度家に帰るよ」

「え？ でもココに来たってことは、用事があったんじゃ」

「それは、会議があると呼ばれたからだ。だがこうなった以上、会議よりあの子の事が重要だ」

ディザートの言葉に、闇蝙蝠は少し考えた。

まだ会議は終わってはいない。だが春翅諳がいなくなった今、後の話はおそらく、先日 of 関街道でのえんじえらんの魔法勃発騒動についてだろう。ディザートには直接関係のない話だし、何より、今

春翹諳を助けてやれる人は彼しかない。

「じゃあな、闇蝙蝠」

闇蝙蝠の言葉を待たず、端的に別れの言葉を告げると、デザイナーはサツとテレポーテーションで消えた。

闇蝙蝠が部屋に戻ると、案の定、会議の真つ最中。じゃまにならないよう扉をそつと開け、姿勢をかがめて席へ向かう。喋っていた凜はわずかに視線を向けたものの、特に何とは言わず、そのまま会議を続けた。

闇蝙蝠はそろそろと椅子をひき、着席した。あいてしまった右隣が、やけに寂しく感じられる。その寂寥感を殺し、凜の話に集中する。

途中から入ってきたので、議題がまず分からない。だがしばらく聞くと、先日の関街道での一件についての話だと分かった。

「炎は人為的なものであり、自然発火ではありません。また規模や発生の状況を調査した結果、一定の訓練を受け、特殊な技能を身につけた人間が、魔法を使わないとおこせないものであると断定されています。勿論、それだけでは我々とは断定出来ません。暗怜軍、暗殺剣などに属する人間の犯行かもしれませんし、瀏華隊ではなく、楼闕隊など他の隊の隊員かもしれません」

凜は流暢に書類を読み上げる。闇蝙蝠は、いつもなら口をはさむ所だったが、今は黙って聞くに呈した。

「このように候補が複数ある中で、瀏華隊のえんじえらんがした事だと推定された理由は、まずは被害者の証言。それと現場に残されていた技の痕跡から、特定されました」

「はい、リーダー。ボク、質問です」

「何ですか、シャオ」

「どうして特定出来ましたですか？ 警察の人は、焼けこげを見て分かるですか？」

「目視では分かりません。しかしコンピューターを使えば、すぐ分かります。現場に残っていた焼け跡の写真をとり、コンピューター

に取り込み、検索をかけるんです」

「ケンサクすれば、何でもでてくるんですか？」

「何でもというわけじゃありません。それは」

「シャオ。あんまり話の腰を折るんじゃない」

少年の質問に、闇蝙蝠は思わず口を挟んだ。いつもの自分は棚に上げ、凜を差しおいて喋り出す。

「開示データに、俺らの使用技がたくさん登録されている。それは、お前も知っているはずだ」

「はい」

「俺達が普段目にするのは、その技の名前と効果だけだ。だが警察のコンピューターにはそれに加え、技を使用した場合、現場にどのような痕跡が残るのかも登録されている」

「それだけで、分かりますですか？」

「分かるさ。勿論、痕跡なんてのは環境によって異なる。しかし既存のデータから、威力や範囲を計算し、シュミレートすることは可能だ」

「……そう。それで断定したというわけ」

必要な説明をすっかり言われてしまい、凜は最後まで締めくくった。

「ですが書類にある通り、この件に関しても、警察は我々の自主性に任せています。被害者は、自分たちが話しかけたことは認めましたが、手を出したことに關しては認めていません。ですが幸いにも警察が、事件直後、彼らの手を調べてくれました」

書類をめくり、また読み上げる。

「それによると、えんじえらん及びワピチ、闇蝙蝠の皮脂と、服の繊維が多数検出されたそうです。これらは触らなければつかないものですから、彼らが直接、こちらに手を出してきた有力な証拠となるでしょう」

「でしょう、ってことは？ ならないことも、あるんですか？」

えんまがぼそりと言った質問に、凜は少々ギクツとした顔をした。

すると珍しく、ピロロが答えた。

「攻撃されたから、自衛のために手を出したと言われる場合があるんだよっ」

「ええ、そんなあ」

「全くねえ」

闇蝙蝠はまた口を挟んだ。

「だから、面倒になる前に、俺らでケリをつけるのさ。春翅諳の時も言ったけど、警察は俺らをしょっぴきたくないんだ」

先ほどまで話しかけていたシャオをうつちやり、今度は納得がない顔をするえんまに、とうとうと言う。

「あの時だつて、警察の要請で俺達は駆りだされたんだしね。それに、ぶつちやけ、帝国軍の軍員が一般人とこつこつ揉め事を起こすこと、ちよくちよくあるんだ。こつちが百パーセント悪ければ、然るべき処罰を公から下されるだろうが、今回は違つ」

するとフェイアントが軽く手をあげ、闇蝙蝠を見て口を挟んだ。

「途中に失礼。で、肝心の処分はどうなるんでしょうか？ まさか春翅諳みたいに謹慎ということはありませんよね。もしそうなら、隊員の増員を本部に頼むことになりますよ」

「それは俺に聞かれても……っていうか、あつ、まずい！」

「どうしました？」

「いやフェイアント、お前じゃなくて。あのう、リーダー！。俺はどうなるんでしょう？」

闇蝙蝠は不安そうな声を出し、少し改まった口調で言った。

「さつきから他人の事ばかり言っていましたか、かくいう俺も、奴らに手を出したんです。それも骨にヒビを入れたり肉離れさせたり。魔法を使つてないというだけで、奴らの怪我の大半は俺がやったものでしょう。これ、大丈夫ですかね？」

「程度によるわね」

凜はすぐに答えた。

「でも特別な魔法を使つてないのなら、正当防衛になると思うわ。」

それに警察は、あなたがした事に関して言及してこない。きっと、大丈夫でしょう」

「なら良かった」

安堵の息をはきつつ、もしかしたら自分がしたことも、えんじえらんがした事になっていいるのではと思った。

あの男達にも、体裁というものがあるだろう。ようやっと第一次成人を終えた若造一人に、全員がやられたとあっては格好悪い。

それは年端の行かない少女が相手でも同じことだが、相手が不可解な炎の技を使ったとなれば話は別。ぐっと誇張させ、あれは少女に化けた熟練の戦士だ等と、のたまう事も出来るかもしれない。

自分がしたことを仲間に被せるのは罪悪感があったが、しかし、面倒がないならその方がいい。

そう闇蝙蝠が都合の良いことを考えていると、突然、ワピチが震えながら声を出した。

「ご、ごめんなさい。僕がすっかりしてなかったから、あの、二人にこんな迷惑を」

「ワピチ？」

「ごめんなさい。み……みんなに、こんな、迷惑かけて」

「あ？ あ、いや違う。ワピチは悪くない。お前は だって、何もやってないし」

闇蝙蝠は気がとがめ、慌てて声を出した。

「ていうか、それを言ったら悪いのは俺だよ。前半見殺しにしていたんだし。それで言ったら、お前は一番悪くなく、法を尊重していたのであってだな」

焦るあまり、闇蝙蝠は自分でも何を喋っているのか分からなくなった。いささか変な言葉だったが、それなりに慰めにはなったように、ワピチはなんとか涙を目から踏み留めさせていた。

「ワピチ。気持ちは分かりますが、貴方が気に病むことはありませんよ」

幾分落ち着いた調子で、フエイアントも言う。

「えんじえらんや、闇蝙蝠が悪い　とは言えませんが、貴方には咎とがは来てないんですから」

「だけど、僕が……し、しっかりしていたら」

「ワピチ、そんな事を言ってもだね、お前は戦闘要員じゃないんだ。しっかりも何も、あの状況下では、お前はとても冷静で良かったと思うよ。ね、ねっ?」

呵責かしゃくから、闇蝙蝠は必死で慰めた。

「思い出せ。お前はあいつらに話しかけられても受け流して、なるだけ喧騒を避けていた。争いを惹起じゃつきさせない、いい対応をしていたよ。お前に能力がないとは言わないけれど、戦闘力はないだろう。自分の力を弁えて、然るべき対処をした。立派なことだ。何も悪くないんだ」

ワピチはそれでもまだ涙目だったが、一応は頷き、黙った。それを見て闇蝙蝠も、ようやっと一息ついた。

凜はワピチを、そして闇蝙蝠の事も、やや気遣い気味に見た。そして会議の終了を告げた。

「では、異常です。何か通達があり次第また連絡します。今日のリオンの見張りはフエイアントです。今日は外部から人が来てくれます。帝国軍西部、楼闕隊ろうけつたいの方です。彼と一緒に、監視を行って下さい。疲れている所申し訳ありませんが、時間まで宜しくお願いします。では、解散」

66 - 死亡者と事件

> i26923 — 528 <

しかし、あけた次の日、27日。

「まったく、何てこつたい！」

闇蝙蝠はぼやきながら、目の前の光景に嘆息を漏らした。

建物の中、廊下。だが上にはぽっかり穴があき、綺麗に青空が見えている。元々天井を塞いでいたものは、今や瓦礫がれきと化し、焼けたように黒くなつた廊下に積み重なっていた。

まるで何か、ひどい戦闘がおきた現場のよう。だが此処は、事もあるうちに、昨日まで無傷だつた瀏華隊の建物の中。今は警察が数人ウロウロし、それぞれ白い手袋をはめ、粉をふつたり、写真を撮つたりの作業を行っている。

「何でこんな事になつたんだ？ しかも いや、だからか、警察がいつぱいいるなあ」

闇蝙蝠はぼやきながら、自分の格好を見た。下はごく普通の黒い長ズボンだが、上は白と黒の横縞模様のカットソーを着ていた。右が長くて左が短いアシメトリーなデザインなので多少は緩和されるものの、遠目には脱獄犯に見える。

「せめて縦縞の服にすれば良かった。 って、そんなのはまあどうでもいい。おい、あの……おねえさん」

「はい。私ですか？」

すぐ目の前にいた、背の高い女性に話しかける。相手はまだ若く、二十がそこらに見えた。黄金色のロングヘアを一本にまとめ、瞳は水色で、見るからに穏やかな印象があつた。だが彼女もまた、周りにいる警官と同じ格好をしていた。胸にセルタンティーヌの紋章のついた、グレーのスーツをビシッと着こなしている。

闇蝙蝠は彼女に言った。

「何がどうしてこうなったのか、端的に説明をしてくれたまえ。どうして此处、瀏華隊の本部が、こんなメチャクチャになったんだ？」

「……それですが、目下、調査中で」

「それじゃあ、分かっている事実だけ」

「事實は、こちらを守っていた警官が二名と、室内にいた捕虜の女性を含む三名が死亡です」

「そうかい。いや……わけが分からん。何にせよ、頭が痛い」

自分が聞いたこととはいえ、筋道たつてない話に、闇蝙蝠は頭を抱えた。だがすぐに、次の質問に移った。

「捕虜の女性っていうのは？」

「リオン＝アールグレイです」

「そうか。……そうだよなあ、俺らが捕まえていた女といったら、あいつ以外にいないからなあ。だけど、解せない」

仲間の様子を見守る彼女をよそに、闇蝙蝠は仁王立ちのまま、首を傾げた。

「警官はまずおいて、こちらら瀏華隊の用心棒が、二人かそこらいたはずだ。奴らはどうした」

「負傷し、病院に運ばれています。肉体的なダメージは少ないのですが、目を覚まさなくて。おそらく何か魔法にかかったものかと」

「何だつて!」

闇蝙蝠は思わず大きな声をあげた。……考え込んだり、叫んだり、全く落ち着きがない。

「それを早く言ってくれ。大丈夫なのか？」

「命に別状はないそうです」

「良かった」

彼女の言葉に、ほっと胸をなでおろす。だがすぐに、別の疑問がわいた。

「その時の当番は？ 誰だったか、分かるか」

「ええと」

彼女は手のひらを上にあげ、何かを召喚しようとした。だがその時、積み重なった瓦礫の近くで、誰かが呼んだ。

「ホワツチイ、すみません、こちらに来てください」

声をかけたのは、まだ少年のような男性だった。短い藍色の髪、日に焼けたような茶色の肌をし、背は低い。ちゃんと立っているのに、周りで中腰になっている捜査員達と頭の高さが変わらなかった。彼はカメラを持ったまま女性を呼び、更に闇蝙蝠に手招きをした。

「ありや、俺もか？」

女性が移動するのと同時に、闇蝙蝠も歩を進め、男性がいる瓦礫の傍に近づいた。

近くでよく見ると、改めてその酷さが分かる。昨日まで白い天井を造っていたそれが、今や見る影もなく真っ黒になり、荒々しく焼け跡をさらしている。

床も似たり寄り寄りであり、内部に入っている遮音マットはすっかり焼き切れ、耐火用のマットも表面が黒く毛羽立っていた。もしこれがなければ一番下の合板までダメージが及び、床が落ちて下の階が瓦礫で埋まっていただろうと思われた。

闇蝙蝠は首を傾げ、なぜこんな事になったのかを考えた。だが何も思いつかない。

あれこれ努力した結果、彼は少々脱線し、まずどうして自分が、警察に混じり、瀏華隊の中で一人だけ、此処にいるのかを思い起しました。

今日は休日で、学校は休み。闇蝙蝠は朝の十時まで寢床でゆっくり過ごし、その後、部屋の片付けをし、掃除をしていた。やがて十二時になり、お腹も空いてきたので、アボガドに醤油をかけてマグロの味を堪能していた。その後、リオンの見張りの当番に行こうとした。だが直前に、凜から電話がかかってきた。

電話とは珍しいと思いつつ出ると、リーダーの代理として、瀏華

隊の本部に行つて欲しいと頼まれた。もとより闇蝙蝠は行く予定があつたので、別段文句は言わなかつたが、それだけに何故、わざわざこんな電話をしてきたのが気になつた。

どうしたのと聞いたが、彼女はひどく慌てた声で、「詳しい話はそつちでされる」とだけ言い、電話をバツツと切つてしまつた。

何が大変な事がおきたのだらうと察し、闇蝙蝠は着替え　実はそれまで寝間着のままだつた　て、テレポーターションで此処に飛んだ。

すると驚いたことに、建物の周りには警官がウヨウヨいる。驚いて戻ろつかと思つたものの、警官に呼び止められ、話をされ、今に至る。だが、何がどうしてこのような事態を引き起こしたのかは不明なまま。

最初見たときは、リオンが逃げ出そうとして暴れたのだと思つた。だが、いくら彼女が強いとはいえ、帝国軍の人員二名と、警官二名の計四人を、武器もなく一人で倒す事は難しい。何より、彼女自身も亡くなつてゐる。

「どうしたもんかなあ」

「あ、お兄さん。お兄さん！」

「あ、はい。どなた？」

ぼうつとしてゐると、男性に声をかけられた。ハツとして下を

声の下から聞こえたから　見ると、先ほど女性を呼んだ背の低い男が立つてゐた。彼は軽く頭を下げ、簡単に自己紹介をした。

「こんにちは。僕　じゃなくって私は、霧春慶喜きりはるけいきといます。宜しく願ひします」

「これはどうも。俺は闇蝙蝠です。出来れば普通にタメで話してください、その方がやりやすい」

相手が小さく、年下に見えるのをいい事に、闇蝙蝠はそんなお願いをした。彼は一瞬怪訝な顔をしたが、その方が喋りやすかつたのか、次の瞬間、かなりフランクに喋り出した。

「じゃ、遠慮なく普通に喋らせてもらうね。今回のこれなんだけど」「ああちよい待ち。その前に聞きたい話が山ほどある」

「え?」

「一体これはどういう事だ? さっきも別の人に聞いたんだが、どうにもハッキリしない。何故、リオンは死んだ。自殺か、それとも他殺か」

「いや、悪いんだけど、それを今、目下調査中なんだ。僕も知りたところさ」

「そうか。お前も分からんか。じゃあ仕方ない」

これが一番知りたいことだったのだが、不明では問いただしても埒があかない。闇蝙蝠は質問をかえ、慶喜に、どういった経緯で此処に来たのかを聞いた。

「呼ばれたのは朝。出社したらずぐに課長に呼ばれた」

彼はスラスラと答える。

「僕だけじゃない、此処にいる皆が、会議室に集められた。そこでこういう報告がされたんだ。瀏華隊の建物に捉えていたリオン＝アルグレイと、警備の警官二名が死亡。瀏華隊の警備者二名は生存しているが、意識不明の重体で、そのまま病院に搬送されたって。で、僕はこの現場を調査し、撮影するよう言われて来たんだ」

彼は持っていたカメラを闇蝙蝠に見せた。大きな一眼レフカメラで、元々身体の小さな彼を、ますます小さく見せている。

「通報したのは、ピロロ＝インガルスという女性らしい。君の仲間だよな?」

「そうだ。多分、朝の当番だったんだな」

「君は? 当番じゃなかったの?」

「まあな。俺はあれやこれやの功績というか、労をねぎらってというか、まあそういう事で、他の人間より当番の割り当て回数が少ない。だけど皆無ってわけじゃない。もしこんな事がなきゃ、今頃扉の前に座り、初めての見張りをケータイでフリーゲームでもしながら過ごしていたはずだ」

「ゲームって、そんな。不真面目だよ」
「怒るな、冗談だよ。だが本当に、えらい事になったなあ」

67 - 現場の様子

闇蝙蝠は肩をすくめた。口に出しては言わなかったが、心のなかでは本当に面倒な事がおきたとぼやいていたのだ。

先日、春翅語が処分通達を出されていなくなった。またえんじえらんの件も、完全には片付いていない。そんな中、新たにこんな問題が起きた。闇蝙蝠は内心、瀏華隊とは戦うための隊ではなく、自ら厄介ごとを引き起こし、その処理に追われているだけの集団ではないかと思った。

「ところで、瀏華隊の中のケガをした奴、誰か分かるか」

「うん。フェイアント」バースイングと、楼闕隊からきた人さ」

「あーっ、フェイアントか！ そういえば昨日の会議で、見張り役として残りなさいって言われていたものな。あれから何時間見張りをしていたのかは知らないが、大丈夫かなあ」

「大丈夫だと思うよ。もう病院に運ばれたそうだし、集中治療室に入ったという話もないから」

慶喜はそう言ったが、闇蝙蝠の「大丈夫かなあ」には、仲間の安否の不安の他に、二つの意味が込められていた。

一つ目は、もとより人数が少ない瀏華隊が、負傷者の発生で更に人数が減ったこと。

二つ目は、警備の不備を後から叩かれるのではないかという危惧からだった。人数のこともあり、元々、瀏華隊は帝国軍の中でも最弱という評価だったが、それが更に酷くなり、立場がなくなる気がしたのだ。

ただ不幸中の幸いで、怪我人二人のうち一人は、楼闕隊からの人間。それで多少、救われればいいと思った。

闇蝙蝠がそんな思惑していると、今度はホワツチイがこちらを呼んだ。

「慶喜、こつちの撮影をお願いします」

「あ、分かりました」

呼ばれた瞬間、彼はぱつとその場にかけてより、カメラを構えた。カメラのボタンをあれこれ弄り、フラッシュをたいてその場を映す。闇蝙蝠はしばし、その様子を黙って観察した。だが少ししてホワッチイの元に寄り、話しかけた。

「おねエさん。あんた、ホワッチイというのかい？」

「あっ、申し遅れました。そうです。私はホワッチイ＝ライト＝クリスタルといいます」

「そうかい。……あんたら警察は、偽名を使わないんだっけ。その名前から判断すると、ヒメールスゲヴィルの出身か」

「はい。こちらでは調査員をさせて頂いています。まだ駆け出しですが」

「なるほど、調査員か。じゃあ早速だが、これについて、どう思う？」

闇蝙蝠はすぐ下の瓦礫を指差した。

「何度も似たようなことを聞いてごめんよ。だが別に、確定した事実じゃなくていい。憶測でいいから、どう思つかを教えてください」

「……予想ですが、これは炎による損傷ですね」
彼女はしゃがみ、じっと床を見た。

「それも、ライターやマツチといった道具を使ったものではありません。魔力探知機に反応がありましたので、魔法を使った出火でしょう」

「ふむ」

「それと、向こうの床に、こんなものが刺さっていました」

彼女は透明な袋に入ったものをぶら下げ、闇蝙蝠の目の前に出した。

袋に入っていたものはペティナイフだった。黒い柄にスツとのびた刃。少し刃が欠けている以外、とりたてた特徴も何もない。だが見た瞬間、闇蝙蝠はゲツと声をあげた。

「これ！ おいまさか、しーちゃんが絡んでいるんじゃないだろうな」

「何か心当たりが？」

「い、いや。失礼、俺の早とちりだ。ペティナイフを使うのは、何もあいつに限らない。誰でも使えるシロモノだしな。……だけど、待てよ。事件当時、この建物に入れる人は限られていたんだよな」

「はい」

「入れるのは誰だ？ 瀏華隊なら誰でも入れたか？」

「ええと」

ホワツチイは一瞬考え込んだ。すると下から、分からないねと答える声が聞こえた。

「見張り役に任命された警官も、瀏華隊の隊員も、出入りすれば記録が残る。けれど入室自体は、可能だろう」

闇蝙蝠は視線を下に向けた。案の定、慶喜がそこに立っていた。

「あれ、いたのか」

「さつきからいたよ。気がつかなかったかい？ 気配で分かると思っただけれど」

「生憎、俺は戦闘時以外でも神経を研ぎ澄ませているほど、真面目な人間じゃないんでね。そんな事をしていたら疲れちまう。見えなものは見えない。目線の高さからして道理だあ。……っと、気を悪くするなよ」

闇蝙蝠は、旧知の友人に対するような口を聞いた。だが慶喜は全く気にする様子なく、構わないよと答え、話を続けた。

「監視カメラを含む、機械類のデータ調査は別の人が担当している。何なら、今聞いて来るかい？」

「いや、邪魔をすることになるからいい。だが何にせよ、身内の犯行じゃなければいいなあ」

闇蝙蝠がついついぼやくと、慶喜もホワツチイも、真面目な顔をして頷いた。現場は瀏華隊の建物とはいえ、出入りした人間の中には警官もいる。心情は、どちらも同じだった。

「うーむ。まるで推理小説の主人公になった気分だ」

闇蝙蝠はコンコンと軽く頭を叩いた。

「だがしかし、鑑識や推理は警察の仕事だ。俺はしよせん、瀏華隊の隊員。命令を受けて人を殺すのが役目だ。頭を使ってあれこれ推測するのは専門外。とりあえず指示に従うまでだ。……しかし俺、いつまで此処にいればいいのかねえ」

「いつまで？ と、言いますと？」

「あのね、俺はそもそも、リーダーの代理で来ているんだよ。しかし此処にいても、俺は何も出来ない。だって、現場を弄る事は許されないし

オーバリアクション気味に、お手上げだというポーズをとる。

「それに、病院に担ぎ込まれた二人が心配だ。居場所、知っているかい」

「この近くの国立病院だよ。そう聞いた」

「なるほど。じゃ俺、そっちに行こう」

「えっ？ で、でも」

「大丈夫、俺はテレポーターだ」

何かあった時に困るといふホワツチイと慶喜に、闇蝙蝠は召喚でトランプを一枚出し、一枚ずつ二人に渡した。

「此処にはいつでも、すぐ戻れる。用事が出来た場合、それを投げてください」

「投げるって、どうやって？」

「紙ヒコーキみたいにすればいい。成功すれば、カードはそこから消えて、俺の元に戻ってくる。消えなかったら、消えるまで投げ続けてくれればいい」

「難しそうだなあ」

「そんな事はない。簡単さ。因みに呼ぶほどでもない用事は、電話でも構わない。カードの縁に番号が書いてあるだろ？ それが俺の仕事用ケータイ番号だから、かけてくれ」

二人がそれぞれ頷くのを確認し、闇蝙蝠はそれじゃあと行って、

テレポーテーションで素早くその場から消え去った。

68 - 病院へ(前書き)

素材：<http://haruka.saijin.net/va>
lkysrie-sword/yggdrasil/

> i27253 — 528 <

闇蝙蝠は白い建物の前に立った。高さはおよそ七階で大きく、少し古い。窓はほとんど全てが同じ形で、だいたい等間隔に並んでいた。だが扉は小さな開き戸で、建物の大きさから照らし合わせても、裏口であるように思えた。

「此処でいいんだよな」

闇蝙蝠は腰に手をあて、扉に近寄り、上に書いてある、緑の文字を読みあげた。

「セルタンテイー又国立病院・来客入口」

ノブに手をかけ、中に入る。途端に、消毒液に似た臭いがした。

闇蝙蝠は一瞬顔をしかめたが、すぐに窓口に話しかけ、身分証明書を召喚して提示し、用件を話した。

教えられた病室は三階だった。エレベーターで上にあがり、白い廊下を少し歩いて、戸をノックする。しかし扉をあけた瞬間、闇蝙蝠は異様なほど、元気のいい声に出迎えられた。

「ユキじゃないか！ 久しぶりだな！ 元気だったか、オレは元気だぞ！ 入院してるけど、じき退院できるって！」

声の主は、ベッドの横たわる男性だった。上半身をおこし、点滴の管をつけ、胴体を包帯でぐるぐる巻きにされながら、闇蝙蝠に手を振っている。

髪の毛から肌まで、まるで闇夜から脱け出たように黒い。唯一目だけが緑色で、闇蝙蝠に似ていた。体つきは筋肉質で、非常にガツシリしている。偉丈夫という言葉がよく似合うが、それにしては子供っぽく、八重歯をよきと出して笑う姿は、さながら幼子おとこのようだった。

彼は布団をぼんぼん叩いて音を出し、隣で寝ていたフェイアントの　この部屋には二人しか患者がいない　注意を引きつけた。
「フェイ、フェイ！　これがオレの弟だ！　カワイイだろ？」

だが闇蝙蝠はフェイアントが何か答える前に、スタスタと病室の中を歩き、黒い男を怒鳴りつけた。

「うるさい！　此処は病院だ、ちよつとは黙れ。それと、布団を叩くのはやめろ。埃がたつ上に迷惑だ」

「ええ〜っ」

男はふてくされた顔をした。闇蝙蝠はムスツとして距離をとり、さらに苦言を呈した。

「いい年した男を捕まえて、かわいいだなんてよく言うよ。テメエはゲイか、アツチ系か？　気色悪いんだよ、俺に話しかけるな。

ああしかし、何故お前がここにいるんだ。楼闕隊から人が来たとは聞いていたが、まさか　？　もう、誰だよ、こんな人選をしたのは！　ああ嫌だ、瀏華隊に入って、ようやくお前から逃げる事が出来たと思ったのに。最悪だ」

流暢な口調で文句を言い、頭をかかえる。言われた本人はぼかんとしていたが、フェイアントは小さな声で囁いた。

「こんにちは、闇蝙蝠。しかし、どうしたんですか。お兄さんと、何かあったのですか」

「大ありだ。大体、なんでこいつが人間の病院にいるんだ。動物病院が相応しいだろうに」

「そんな無茶な」

「それと、あいつをお兄さんと呼ぶのは止める。黒影くろかげと呼べ」

闇蝙蝠は荒々しく言葉を吐き捨てた。次いで男の　黒影の方を向いて、ひどくがなりたてた。

「この度は何をやってさらしてくれとんじゃワレえ。お前が見張りシツカリしないから、人が三人も死んだんだぞ。事の重大さが分かっているのか」

「え？」

「戦場でケガならいざしらず、何て情けない。これが楼閣隊で三本だか五本だかの指に入る男のザマか。しかし、この病院のスタッフはとても心の広い人だなあ。もし俺が経営者なら、こんな男なんてすぐに叩き出すのに」

驚くフェイアントをよそに、闇蝙蝠はまるで、ゴミにたかるゴミブリでも見たような目付きで兄を見た。それに、黒影は少し寂しそうな顔をした。

「そんなに嫌わなくてくれよ。オレ、ユキのこと大好きなのに！」
「気持ちが悪い。オレは男に好かれる趣味はないし、好きになる趣味もない。それにお前に対しては、恨みつらみが山ほどあるんだ。大体、二十歳にもなって掛け算九九が出来ないようなアホが兄だなんて、俺のプライドが許さん」

ありつたけの軽蔑の眼差しを黒影に向ける。しばし睨みを続けた後、闇蝙蝠は今度は、フェイアントアントの方を向いた。

「お前も大変だったな。こんな男と一晩中同室だなんて。俺なら三時間で胃潰瘍を患うところだ」

「大丈夫ですよ、そんな」

フェイアントは少し苦笑いをした。そして小声で囁いた。

「しかし彼は、どうして、貴方のことをユキと呼ぶんですか？」

「それは俺の本名からきているんだ。あいつは頭が悪いから、何度言っても覚えられないのさ。妹でさえ、俺を闇蝙蝠と呼んでくれるのに。……だが、まあいい。お前に言うのは、ただ一つ。あの男の話には、一切耳を傾けるな」

「どうしてですか？ 彼、そんなに」

「で、だ」

言葉を遮り、闇蝙蝠はチャッチャと話題を変えた。

「俺が此処にきたのは、何も世間話をするだけじゃない。それなら花の一つでも持ってくるからな。そうじゃなくって、聞きたいんだ。どうして、お前たちはそんなケガをした」

「それですか？ ああ 全く、こちらの手落ちです」

フエイアントはため息まじりに頷いた。

「反撃の一つも出来ず、一方的にやられるなんて。あまりに情けない話です。……真夜中、一時ごろだったでしょうか。私は黒影と一緒に、会議室の中にいました。すると突然、会議室の戸をあけて、人がきたんです。春翅諳に」

「え、しーちゃんガツ？」

闇蝙蝠は思わず、彼の話を遮って素つ頓狂な声を出した。と同時に、現場に残されていたペティナイフのことが頭をよぎる。

だが、フエイアントは首を振った。

「春翅諳によく似た人です。体つきは、貴方に似ていましたけどね」

「何だつて？ よせよ、そんなの」

「でも本当にそうだったんです。姿勢が良くて、真面目そうで……で、その誰かさんは、私たちに手招きをし、こっちに来てほしいと言いました」

サラツと十闇蝙蝠を褒め、フエイアントは話を続ける。

「私は相手を春翅諳だと思っていたので、黒影に仲間ですと言い、これという警戒をしませんでした。その人は手招きをして、こっちに妙なものがあるから、来てほしいと、私たちを呼びました」

「たちつてことは、黒影も？」

「ええ。で、二人、並んで部屋を出て廊下に行きました。そこで、私は尋ねたんです。どうしてこんな時間に此処にきたんですか。妙な物とは何ですか。って。そうしたら突然、黒影が動きました。

私の前に飛び出し、相手に攻撃をしたんです。その人は咄嗟に、後ろに下がったようでしたが、彼のツメにひっかけられ、ケガを負いました。すると傍の暗がりから、また別の人が飛び出てきました」

「別の？」

「はい。ですが人物をよく確認する前に、私は、妙な現象に遭遇しました。……思い出すだけでも、身震いがするのですが」

彼は少し気分悪そうな顔をした。フエイアントにそんな表情をさせるのはどんなモノだろうか、闇蝙蝠は一瞬考えあぐねた。

「一体何だ？」

「手に、大きな蛆虫が湧いたんです。六センチくらいのが、五、六匹。続いて足、腹、胸などからよきによきと。蛆は私の、全身に広がったようでした。顔を犯され、視界を遮られたせいで、私は何も見えなくなりました」

「おエッ」

その様子を想像し、闇蝙蝠は思わず変な声をあげた。

「それは確かに、寒気がするな」

「ええ。私は、まずいと思って、武器を召喚しました。しかし場所が狭いのと、視界が遮られているので、ろくに攻撃が出来ませんでした。一つ間違えれば、黒影にケガをさせる可能性がありますしね。……で、オロオロしているうちに、背後から刃物で切りつけられました」

フエイアントは喋りながら背中を見せた。病人用のパジャマを着ているその姿は、一見何でもないようだったが、触れると、包帯が巻かれていることが分かった。

「幸いにも黒影が腕を引っ張ってくれて、最悪の事態は免れました。とはいえ、傷を負ったことには変わりありません。私は反撃もろくに出来ぬまま、戦闘不能に陥りました」

「それで、この包帯か」

「ええ。ドクターによると、傷が深すぎて、治癒でもすぐには治しきれないそうです。完治には、やや時間がかかると言われました」

「なら、無理はしない方がいい」

闇蝙蝠は真顔で頷いた。

「細胞を傷めないようにしないと。で、その時、黒影は？」

「それについては、彼から直接聞いた方が良いかと思えます」

「そうかい」

黒影に話しかけるとの言葉に、闇蝙蝠は一瞬不服そうな顔をした。だが、すぐに大人しく引き下がった。

「じゃあ、黒影。で……どうなんだ」

フェイアントの傍から動かぬまま、声をはりあげて黒影に問いかける。必要にかられて話をするにしても、傍にはよりたくないといった風だった。

「包み隠さず答えろ」

「ユキ！ ようやくオレに話しかけてくれたな！ もうそいつとばかり話しているから、お兄ちゃんグレそうになったぞ？」

「いいから、さつさと答えろ。俺をあまりイラつかせるんじゃない」
嬉しそうに声をあげる黒影とは対象に、闇蝙蝠はあくまで冷たい態度を取り続けた。

「まずは、攻撃の理由。フェイアントの話からすると、先制攻撃をしたそうだな。しかし、何故だ？」

「だって、本物のしーちゃんじゃなかったから」

黒影はケロツと答えた。

「しーちゃんなら、オレも知ってる！ ユキが小さいころ、よく遊んだ子だろ？」

「そうだ」

「けど、あいつは別人だった。それに血のニオイがしたから、敵だと思った！」

黒影は自信たっぷり言い放った。だが闇蝙蝠は訝しげなまなざしを向けた。

「判断したのはいいが、血の匂いだけでは動機づけが弱すぎる。何か確固たる理由はないのか？」

「直感！」

「それじゃ答えにならないだろ。いいか黒影、俺達は人の殺傷が出来る権限があるが、法律によって厳しく制限がされてもいる。相手がいくら怪しいとはいえ、威嚇だけならまだしも、物も言わずに切りかかったなんて。バレたら大変なことになる」

「そんなコトいったって」

黒影は困ったように声をあげた。すると見かねたのか、フェイアントが口を挟んだ。

「黒影の判断は、正しかったと思います。そもそも無断で建物の中に入ったこと自体、不法侵入罪になります」

「でも、死に値するほどの罪じゃないだろ」

「ええ。しかし、瀏華隊の建物に入るには、入り口で認証が必要ですよ。我々は普段、普通に入りにしていませんから、あまり実感をしていません。ですが扉の上部には魔力認証センサーがつけてあって、登録者以外の出入りを制限し、また、出入りした人間の記録を二十四時間しています。それをかいくぐってきた時点で、普通の人じゃありません。何か高度なテクニックがいるはずですよ」

「それは、具体的には？」

「まず魔力認識センサーですが、これは人が身にまとっている、魔力の波紋で人を認識します。ほら、一昔前、指紋認証ってあったでしょう。あれと同じですよ」

フェイアントは闇蝙蝠の前に人差し指を向けた。

「指紋は、化ければ変化します。それに対し魔力は、どんなに変装しても、容姿を変えても 極端な話、犬や猫に化けても 一定です。体調や成長によって、力そのものは増減しますが、波は同じです。しかも、人によって違います。それを誤魔化したとは、相当な手練でしょうね。しかもただ誤魔化すだけではなく、登録された人物にまねたとあつては、なおのこと、普通の人間の仕業とは思えません。それに、瀏華隊の一員に、容姿まで似せていたんです。つまり、こちらの情報を持っている人間。只者ではないでしょう」

「だけどいきなり殺しちゃうまずい。ただ、お前がそう言うのなら、

その件については保留にしておく。やっちまったモンはしょうがない」

闇蝙蝠はしぶしぶといった感じで引き下がった。

「で、黒影。その後、そのしーちゃんもどきの人間はどうしたんだ？」

「どっかに行っちゃたよ！」

黒影はやや大げさ気味にため息をはき、闇蝙蝠の質問に答えた。

「そいつはケガをして、よろめいてた。オレは殺そうとしたんだけど、暗闇から、桃色の男の子が飛び出してきて、邪魔された！あれがなければ殺せたのに！」

「だから、何でもかんでも殺せばいい話じゃないんだって。分かってないんだから」

「桃色のヤツは、フェイにナイフを向けた。だからオレは、慌ててフェイの腕を引っ張った！」

「でもその時、フェイアントは蛆に犯されていたんだらう？」

闇蝙蝠は少しまずそうな顔をした。

「こう言っちゃ何だが、よく腕をつかんだな、お前」

「あん？ 蛆なんて、そんなのなかったぜ。ただフェイのやつ、ジタバタしてて、危ないのに動かないんだ！ だから手を貸して、後はオレとガキとの一騎打ちさ。で、二人でチャンバラやってたら、警官がやってきた。オレに加勢するつもりだったらしい。けどその時、天井が崩れて、廊下が火の海になって、それに飲み込まれちゃった！ オレがそれに気を取られていたら、しーちゃん似のヤツも、桃色の髪の毛のヤツも、いつの間にか消えてた！」

「随分と隙が多いな」

「いいんだよ、オレの体は人の十倍くらい頑丈だから！ で、えーっと……そうだ。そいつらは消えたけど、フェイがケガをしていたから、助けなきゃって思ってたさ！ 背中にかついで、外に出て、安全なところに置いたんだ。で、その後また建物の中に戻った」

「戻ったって、燃え盛ってる建物の中に？」

「だって、まだ人がいたんだぜ！ オレたちが見張りをしていた女の子。見捨てることは出来ないだろ？」

黒影は当然のように言ったが、闇蝙蝠は肩をすくめた。

「どうかね。俺がお前なら、フェイアントをかついだまま、女の子を リオンを 助けて、二人一緒にかついで外に出るけどね。」

お前は力が強いし、体格も良い。二人を同時にかつぐことは出来るはずだ」

「ああ、なるほど！」

黒影ははっとした顔をした。

「ユキ、お前はやつぱり頭がイイ！ でもゴメン、オレにはそんなこと、思いつかねえや」

「だろうね。そういえばお前、掛け算九九が出来ないんだっけ」

「そう！ で、戻ったら何故か、火が消えててさ！」

バカにされたにもかかわらず、黒影はちつとも気にしてない様子で続けた。

「捕まえてた女の子が消したのかなあとと思って、付近を少し歩きまわったんだ」

「消すわけないだろ」

闇蝙蝠は呆れた声を出した。

「リオンが消火するなんてありえない。火が出たのは廊下だし、リオンは別の部屋に、魔封じをされた状態でいたんだ。その状態で、どうやって消すんだよ」

「あつ、そうか。……いやあ、ユキは本当に頭がいいな！」

「普通だ。お前がバカなんだッ。だが、まあいい。その後のことを話せ」

「ウン。で、廊下が真っ黒焦げでさあ。天井も崩れてて、そりゃあ酷いアリサマだった！ オレは心配になって、女の子がいる部屋を見に行った。そうしたら、あの子、血を流して死んでいた！」

「血を？ 殺されたのか、リオンは」

「さあ？ ただオレが彼女にかけようとした瞬間、誰かがオレの

背中に火をつけたんだ！ 振り返ったら、水色の男が立っててさ。斧みたいなものを向けてきて、オレを切るうとしていた。……で、一対一のガチ勝負！」

「背中のは？」

「放置さ！ オレの皮膚は頑丈だから、そう簡単に燃えやしないと
思っ！ 水もなかったし！」

「バカだろ。お前、バカだろ」

闇蝙蝠はブツブツ言った。

「お前だから助かったんだ。しかしその水色の男、どうやって火をつけた？ 魔法か、それともガスボンベでも背負っていたか」

「分かんない！ けどオレ、その次に、足元を凍らされて、身動きを止められた。何かね、喋って、黒いのに向けて、ばーんって！」

黒影はボデイランゲージを試してみせた。しかしその手振りにはムチヤクチャで、闇蝙蝠の目には、瀕死のコウモリが水中でもがいているようにしか見えなかった。

「そいつ、オレを殺そうとしてた！」

「どうやって？ 何か道具を使って？ それとも魔法で？」

「道具。それも黒いの！ 斧みたいだけど、持つところが竿みたいに長かった。何ていう武器なのか、分からない。そいつはね、オレを何度も切りつけてきたよ！ でもオレの皮膚は頑丈だから、全然歯がたつてなかった。オレも、身動きを止められてたから、反撃が全然出来なかったけどね！」

「そう……」

「そいつは、しばらくオレに攻撃してきた。だけど途中で電話に出た！ そんで、喋っていたと思ったら、足元に氷の塔を出して、それに乗って、天井の穴から行っちゃった」

「電話は携帯電話だな。天井の穴って……それは」

「穴だよ！ 女の子の部屋にもあいてたんだよ！ っていうか、部屋と廊下にまたがってた」

「なるほど」

闇蝙蝠は返事をしつつ、先程見た現場の様子を思い出していた。

その間にも、黒影は話し続けた。

「オレ、氷のせいで身動きがとれなかった！ でも背中に炎をしょってたから、少しして、氷はとけた。でもすっかり背中を火傷しちゃってさ！ いくら頑丈っていつても、やっぱり限度があるんだな！」

「当たり前だ」

「氷がとけて、水ができたから、仰向けになって冷やしたんだ！

けどそうしたら、意識が遠のいて……で、気がついたらここにいた」

「急に水を浴びたから、体が反動を食らったんだな。しかしよく生きていたもんだ」

70 - 嫌う理由

闇蝙蝠は深々と息を吐いた。これで生還できたのは奇跡だと、心のなかでぼやく。すると、フェイアントが口を挟んだ。

「ところで、彼らは何を目的としていたのでしょうか」

「へ？」

「侵入者の目的ですよ」

彼は繰り返した。

「まず考えられるのはリオンの口封じです。しかし、リオンが捉えられたのは25日。侵入事件がおきたのは27日の午前一時ですから、口封じにしてはやや遅い」

「下調べや支度に時間がかかったんじゃないかねえの。遅くても、やらないよりはマシと思ったとか」

「そんなものでしょうか？」

「それか、お前や黒影を殺すためとか。どうせたくさん恨まれていくだろう」

闇蝙蝠はさらっと失礼なことを言った。だがフェイアントは頷いた。

「確かに、私も黒影も帝国軍に属していますから、人から恨みはたくさん買っているでしょう。ですが、それなら戦場にまぎれて狙えばいいじゃありませんか。建物に侵入したり、黒影と同等に戦う能力があつたくらいですから、十分可能でしょう。それに我々は、おそらく近いうちに、また戦いに出ます。暗怜軍との決着が、まだ完全についていませんからね。私や黒影を個人的に狙うのであれば、その時にやればいいはずですよ」

「言われてみれば、確かに」

きよとんとしている黒影をよそに、闇蝙蝠は深々と唸った。

「帝国軍の一員とはいえ、戦場以外で殺されたなら、殺人事件として警察が捜査をする。もし捕まれば懲役を食らうし、リスクが高い。

……じゃ、やつぱりリオンを狙ったのか？」

「と、思いますね。ただ解せないのは、彼女が死んだ後にも、黒影が襲われたことです。彼女を殺すのが目的なら、さっさと撤収するのが筋なはずですが」

「姿を見られたからじゃねえの？ 水色の野郎は兎に角として、桃色の髪の少年が」

闇蝙蝠は肩をすくめた。

「だが何にせよ、そういう調査は警察、あるいはリーダーやそれ以上の役職の人の仕事だ。悔しいが、俺達のようなヒラが出る幕じゃない」

「ですが」

「もしかしたら、何かもつと、ヤバいのが裏にあるかもしれんぜ」
フエイアントの言葉を、半ば強引に遮る。その上で、闇蝙蝠はやや気遣わしげに言った。

「ところでお前、蛆は大丈夫だったのか」

「大丈夫ですよ」

フエイアントは手を軽くふってみせた。

「言いそびれましたが、あの蛆は、どうやら幻覚だったようです。黒影が言っていたでしょう、蛆なんてなかったと。私だけが見た幻です」

「そうか」

闇蝙蝠は心底ほっとした顔をした。だがフエイアントが苦笑するのを見て、軽く弁解を始めた。

「戦教学園で処理をさせられたから、ある程度は大丈夫だが、蛆つてのはどうしても好きになれない。大量にモゾモゾ蠢く様子なんて想像しただけでメシが不味くなる。だろっ？」

「まあ、そうですね」

「大体、蛆といえば不衛生の代表じゃねえか。俺はキレイ好きなんだ、蛆だの埃だのは気に入らん。そんなのを幻覚の題材に使うとは、随分いい趣味をしてるじゃねえか。しかしやつぱり、只者じゃない

な。そりゃあ立体映像みたいなボンヤリしたものなら素人でも出来るが、視界を覆い、さらに本物が偽物かの区別がつかないほどの出来となると、それ相応の訓練を受けなきゃ不可能だ」

相手が相槌をうつて聞いてくれるのを良いことに、ベラベラと喋る。だが突然、闇蝙蝠の前に青い魔法陣が現れ、中からトランプが一枚出てきて、パラリと床に落ちた。

「おや、何ですかこれは」

「さっき警察に渡したカードだ」

フェイアントが首を伸ばして見るのをよそに、闇蝙蝠は立つたまま、落ちたそれに手をかざした。するとトランプはフツと消えた。

「俺を呼んでいるらしい。……それじゃ、フェイアント。慌ただしくて悪いんだが、俺、建物に戻るぜ」

「戻るのですか？」

「ああ。まあゆっくり養生してくれ。そうそう、黒影。あまりフェイアントに迷惑かけるなよ。それじゃあな！」

端的に言い残すと、闇蝙蝠はテレポーションでその場から消えた。

後に残されたフェイアントと黒影は顔を見合わせ、ふつとため息をついた。

「忙しそうですね、貴方の弟さんは」

「そうだな。もうちょっとゆっくりしていけばいいのに！」

黒影は残念そうな顔をした。彼はそのまま何をかブツブツ言っていたが、やがて、フェイアントにぼつぼつと話しかけた。

「ユキサ、そっちでちゃんとやってる？」

「ええ。なんせ瀏華隊の中でテレポーションが使えるのは、彼とあと一人だけです。やたら使われて、大変なようですよ。私も会得しようと思っっているのですが、なかなか」

「テレポーションは難しいよ！ オレも、とろうと思ったコトがあったけど、結局出来なくて諦めた。あれって頭が良くないとダ

「メなんだよなッ！」

「そうですね。繊細な技術が必要です。……そういえば、闇蝙蝠は貴方とは別々に暮らしているようですが」

「フェイアントは軽く眼鏡をあげた。いささかインテリっぽい仕事だった。黒影はこくと頷いた。

「ウン。オレは実家にいるけど、闇蝙蝠はコツチにアパートを借りて一人暮らしだ」

「どうですか。彼、実家に帰省とかしますか？　こういう職業ですから、休みが不定期なのですが……」

「いや。ユキのやつ、全然家に帰ってこないんだ」

「えっ？」

「母ちゃんも父ちゃんも妹も、みんな、会いたがっているのに」

「黒影は両手をあわせ、ぱつと開いた。すると小さな魔法陣が現れ、そこから写真が一枚出てきた。

それには、合計で五人の大人と子供が映っていた。大人は、三十歳くらいの男性と、女性の合計で二人。女性は赤ちゃんを両腕に抱えており、隣には、十歳くらいの男の子が笑顔で立っていた。その反対側、男性の傍には六歳くらいの青髪の男の子がいたが、こちらは少し怯えた顔で、隠れるようにして映っていた。

「家族写真ですか？」

「フェイアントは首を伸ばし、写真を見た。黒影は黙って写真を彼に渡し、ぽつぽつと言った。

「どんなに忙しくたって、テレポーションが使えるんだから、家に帰ることはできるはずだ。でもユキが家に帰らないのは、オレのせいだ。オレが実家にいるからだ」

「胸体に巻かれた包帯をいじって、ボソリと吐く。フェイアントが何故と聞くと、黒影はやや辛そうに答えた。

「十年くらい前のコトだけど、オレはケンカが大好きで、近所の子をしょっちゅうやっつけてたんだ。同級生はモチロン、年上も容赦なく殴ってた。悪気はなかったし、一応、手加減はしてた。でもそ

のせいで、あつちこつちから恨みを買った」

布団の上で手を組み、溜息をつく。

「負けたヤツは、オレに挑んでも勝ち目がないってんで、ユキにあたったんだ。ユキは大人しい子だったから、格好のエモノだったんだろう」

「その時、妹さんは？」

「あいつはまだ小さくて、家の中にいたから影響なかった。ただユキは小学校で、いじめられて、いっつも泣いてた。誰かに殴られたとか、突き飛ばされたとか言ってる。ユキねえ、小学校に行かなくなっちゃったんだよ。まあ結局は、戦教学園に入って、卒業したわけだけだ」

黒影は肩をすくめた。

「昔のコトは、もうどうしようもできない。でもこれから先のコトなら、いつくからでも出来るだろ？ だからオレ、あいつのために、何かやってあげたいんだ！ できれば守ってあげたいんだ！ 折角コツチに来たんだし！ ……でもユキ、嫌がるだろうな」

「そうですね。彼は一般人ではありませんし、プライドがあります。表だって守られるのは、嫌がるでしょう。でも兄として、陰から見守ることは出来ると思いますよ」

フェイアントは微笑んだ。黒影はまだ少し悲しそうな顔をしていたが、やがて表情を変え、頷いた。

「そっか！ じゃあオレ、見守ることにするよ！ ユキを陰から守ることにする！」

「そうですね。……でもまず先に、自分の体を治さなければなりませんね」

服の中に手をつっこみ、フェイアントは傷の具合を自分で確かめた。

「早く復帰しないと、仕事に差し支えます。ただでさえ、うちは人数が少ないのですから」

71 - 黒い部屋と三人の人

「リオンが死んだそうですね」

四方は、黒く色塗られた壁。それに、ギツシリと本をつめこまれた大きな本棚がくつついていて。長い窓に、かかっているのは銀のレースのカーテン。部屋の中央には、黄色い地に黒いレースがあみこまれた絨毯があり、透明な丸テーブルがあった。

そのテーブルを前に、白衣のように白い服を着た男が一人、立っていた。瞳は黒く、右目の下には泣きぼくろが一つある。容姿は柔和で、優男やさめいと言っても良かった。水色の髪の毛はうねっており、腰までの長髪。丁寧にとかされてはいるが、あちこちに枝毛や切れ毛がある上、毛先がパサついている。しばしば引っ張られているようにも思えた。

彼は目の前にいる人に尋ねた。

「あなたの考えですか、死い謳さん」

「いいえ、バルティエバルティエの案です。……こうすれば、暗怜軍と瀏華隊は早く戦うでしょう、と」

答えた相手　死謳は彼のすぐ前にいる。着ているのは黒いコートで、フードを深くかぶっており、よっぱど覗きこまないと顔が分からない。

死謳は続けて答えた。

「さつき情報を貰いました。警察は、こう考えているようです。リオンを殺したのは暗怜軍で、理由は口封じだと」

「二日もたっているのに？」

「聞いて下さい……話は、最後まで」

「失礼しました、どうぞ」

「警察は、かなり焦っているようです。警備にあたっていた警官が二名殺されましたし、何より、建物に侵入されました。今回はたまたま、瀏華隊の建物が壊されただけで済みましたが、次は分かりま

せん。民間に被害が出る可能性もあります。そうなったら、セルタンティーヌの警察は何をしているという話になります」

「警察は非難を恐れているのですか？」

「というより、警察への不信から、治安が悪化することを恐れています。……で、ここからが肝心な話。前の戦いのおかげで、暗怜軍の城の場所は分かっています。ですから、特攻はいつでもかけることが出来ます。ただ攻めるには、人数も情報も、まだ不足しています」

死謳は淡々と言う。

「戦うのは警察ではなく、瀏華隊です。でも今戦えば、瀏華隊側は、多大な被害を出すでしょう。しかし瀏華隊に死人が出るのは、その任務と性質上、当然のこと。肝心なのは一般人の保護と、地位警察ですが、の保護です。なのできつと、警察は指示をするでしょう。近いうちに、二度目の特攻をかけるように」

「そうですね」

男はボソリと呟いた。

「瀏華隊は気の毒ですね。文字通り捨て駒じゃありませんか」

「警察にとって、どうでも良いのです。彼ら隊員の命など」

死謳は吐き捨てるように言う。口調には確かに、苦々しさが含まれていた。

「一方、暗怜軍側はこう思っています。瀏華隊が、外部の犯行に見せかけ彼女を殺したと」

「それは誰の情報ですか？」

「彼ですよ。あの水色の。で、リオンの死亡を知り、レミラはかなり怒っているようです。そして、彼は思っています。リオンの殺害は、瀏華隊からの挑発であると」

「でもリオンが死んだのは今日ですよ。しかも、新聞にもテレビにも報道されていません。なのに何故、レミラはリオンが死んだことを知っているのです？」

男は首を傾げた。

「バルティーヌが教えたのですか？ それとも、水色の彼が？」

「私がそうしているように、彼も、放っていますよ。警察の中に……スパイを数名」

「ああ、そっちですか」

男は妙に上ずった声で答えた。そして突然、我と我が身を腕で抱きしめた。

「もうすぐ戦闘が勃発するのですね。ひいつ、何て恐ろしい！ ねえ死謳さん。僕はねえ、死体とか血とかダメなんです。もう怖くて怖くて。だけど何故か、そういったモノに対して興奮を覚えます」

男は恍惚とした声をあげる。

「妄想の種はつきません。でも可愛い子が戦場の恐怖にこらえきれず、その場で失禁嘔吐その他イロイロなことをしちゃう様子を想像すると ああ、ダメだ。体が疼くっ！」

「相変わらずですね」

死謳は顔をあげ、フードの奥からチラッと彼を見た。

「よく思いつきますね、そんな事。でも……私は遠慮します」

「あはっ、そんな蔑んだ目で僕を見ないでください。僕、勃っちゃうじゃないですか！ はあ、はあっ。ああんっ。んうっ……」

男は妙な具合に喘ぎ、やたら甘い吐息をはきはじめた。死謳は数歩後ろに下がったが、それを彼は追いかけて、がしつと両肩を掴んだ。
「もう我慢できませんっ！ ねえ、いいでしょう？ 今、二人つきりですよ」

「だから何です？」

「僕といい事しませんか。ほらあ……もうこんなになっちゃってますよ？」

カチャカチャと微かな音をたて、男は自身のズボンのホックに手をかけた。嫌な予感を覚えたのか、死謳はぶるつと震えた。

「貴方が相手じゃ病気になるそう」

「そんなコトありません！ 皮は既に剥いてありますし毎日綺麗に掃除してます」

「ジャガイモみたい」

「ジャガイモじゃありません。むしろ」

だが男が放送禁止用語を口にしようとした瞬間。部屋の中を何か黒いものが横切り、ガンツと痛そうな音をあてて彼の頭に直撃した。そして、部屋中に怒声が響いた。

「昼間ツからサカつてんじゃねえよ、このボケ！ 相変わらずだな、
十夜」

物を投げた主は、四十代ほどの男性だった。十夜は痛そうに頭を押さえ、自分に直撃した黒いもの 時計だったが を見、次に自分を怒鳴った男を見た。

「ギスターチ。いたんですか？」

「いたんですかじゃねえ、今来たんだ。テレポの光も気が付かなかったか？ ったくよう、ビビったぜ」

ギスターチはカリカリと頭をかきつつ、かなり渋い顔をした。

「いくら部屋の中とはいえ、此処はテレポの限定解除がされた部屋だ。いっどこから、人が来るか分からだぞ。そりゃあ来る人は決まっているが、ビビるじゃねえか。三十にもなった男が下半身を露出し、穢れた塔を勃ててハアハア言いながらガキに迫ってるんだから」

「ガキって、それは私のことですか」

「そうだよ、死謳！ お前以外に誰かいるか？ …… 十夜、さっさとズボンを穿け。そんな汚ねえモン、見たくない」

「そ、そこまで言います？ あなただつて同じものがついて」

「じゃああしいツ！ 俺は出す時と場所を考えてるからいいんだよツ。大体、人が来たのにどうして気にしないんだ？ 普通は即座にしまっだろ」

「見られると僕、ますます興奮しますから」

「うっせえよ。黙れよ。まったく下品なんだから。見る、死謳がド
ン引きしてるぞ」

ギスターチは死謳を指さした。見ればなるほど、死謳は見事なま

での直立不動で、不自然なほど動かなかつた。硬直しているようだったが、それを見て、十夜は嬉しそうに笑う。

「あはっ、かわいい！ 固まった姿も素敵ですよ。ほら、僕の股間もかたまっ」

だが最後まで言葉を言う前に、ギスターチが素早くケリを入れた。十夜はウツと唸り、そしてようやくズボンを穿きはじめた。

「い……ッう。ちよつと、ギスターチ。お願いですから加減して下さい。使い物にならなくなったら困るじゃないですか。僕はまだこれから子作りを頑張らなきゃならないんですから」

「うっせえよ。いちいち下ネタを口走るな！」

ギスターチはもう一度彼にケリを入れた。十夜はまた痛そうな音をたて、衝撃で床に転がった。だがビクビクと、不自然に身体をひきつらせ、甲高い喘ぎ声をあげた。

「キシヨい声出すんじゃねえや。そういう声を出して許されんのは年頃の女^{スケ}だけだ。失せろ、目障りな」

「そ、んな……コト、言わないでくださあい」

「ああ、もう。バカは死ななきゃ治らんか」

ギスターチはボリボリと頭をかいた。かなり面倒くさそうな顔をしつつ、今度は死謳に尋ねる。

「ところで、お前は どうして そんな 恰好 をしている？ 部屋の中くらい、フードをとれ」

「彼が」

死謳は床にすつころがつている十夜を指差した。

「興奮しにくいかと思っただんです。私の顔、見えない方が」

「なるほど。……だが、無駄だぜ」

ギスターチもまた、見下した視線を十夜に向けた。

「十夜はお前の声だけで十分又ける変態なんだよ。声どころか血の一滴、いや髪の毛一本でもオカズにするからな。おい十夜、いつまで寝ている。いい加減、その穢らわしい肉竿をひっこめろ。キモいんだよ。下品なんだよ！ 同じ男として見ちゃいられん」

言いつつ、彼は十夜の股間を踏みつけた。十夜は死にそんな声をあげたが、快感に浸っているようでもあった。

「同性に踏まれても興奮するか。てめえはホモか、ええ？ 相手は誰でもいいのか。おい答える！」

「んっ、ああんっ……も、はうっ！ ち、違い、ますう。ほ、僕はあ、あんっ！」

「ああ気色悪い。ゴキブリよりひでえな。こんな野郎を父親にもつた子は不幸だ。非常に不幸だ」

罵られても、十夜は舌を突き出してハアハアと喘ぐ。ついに、死謳が見かねてギスターチを止めた。

「罵らない方が良いでしょう。そんな事をする、彼……悦びますよ。生粋のマゾですから」

「わかっている。だがこいつは、単純に、俺に踏まれて興奮しているわけじゃない」

ギスターチは十夜から足を離し、腰に手をあてた。

「お前に醜態を見られることに、興奮を覚えているんだ。どうせこんな恥ずかしいトコロを大好きな子に見られて、あーっ気持ちイ！」てな具合だ。くそっ、鳥肌が立つぜ」

「と言いつつ、貴方も悦んでいませんか。人を虐めることに」

「そりゃあ俺はSっ気があるが、十夜を殴ってもサンドバッグと変わらんぜ」

「そう。……で、あの。此処に来たのは何故ですか？」

「あ！」

彼はぱつと腰から手を離した。

「そうだ。大事な用件があったんだ。十夜があまりにキモいからつい言いそびれていたが、バルティー又がヤバイ事になった。レミラがマジギレして、彼女を檻にぶち込んだ」

「檻？」

死謳は短く声を発した。

「彼女を？」

「ああ。何とかしなきゃ、そのうちバルティー又は殺されるぞ。あの女、ムチャな作戦を押し通しすぎた。データを取る。ただそれだけのために訓練中の子供がたくさん死んだ。もちろん戦闘は覚悟の上だが、瀏華隊側は一人も死ななかつたからな」

バルティー又は肩をすくめた。

「作戦が甘かつたんじゃないかとか、そもそも根本がなつちやいな
いとか、暗怜軍の中でも非難の声が高くなってきた。でも死謳、それはお前のせいなんだぞ。バルティー又はお前に協力して、こうなつたんだから」

「手を打ちましよう、早急に」

死謳は早口になった。

「殺させません、暗怜軍なんかに大事な彼女を。いくら時間を戻す
とはいえ、可哀そうですね」

「でも、どうやって」

「身代わりです」

短く答える。

「出します……後で、指示を。だからそれにしたがって、して下さい。
行動を」

72 - 誘拐、そして変身

夜。大きい通りから少し離れた、小さな道。車の音が響くものの、それは遠く、この道に走るものではない。両脇には田んぼや民家が立ち並び、ところどころに藪がある。その藪にギスターチと十夜は、身をひそめてしゃがんでいた。だがただじっとしているわけではなく、小声でヒソヒソ喋っていた。

「全く、死謳のやることは八チャメチャだぜ。ところで、おい。ししとつ」

「僕の名前は嗣獣しゅうじゅう十夜じゅうやです。ししとつじゃありません」

「お前はなぜあのガキに協力する」

「ん？」

十夜が首を傾げると、ギスターチは苛立たしげに言った。

「お前は変態だが、頭は良いし魔力もある。そんなお前が、なぜあんなガキに従う？」

「なあんだ、そんなことですか」

彼の問に、十夜は笑った。そして、いつそ清々しい笑顔で言った。「愛の力です！ 僕は死謳さんが大好きなんです。本気で愛しています、結婚も考えています」

ギスターチが引きつるのをよそに堂々と言い、そして少し懐かしそうな顔をした。

「僕はある子が一歳の時から知っています。学生時代、バイトで子守をしていましたねえ。その時お世話をしていたのが、死謳さんなんです。だからもう、可愛くてしょうがないんです。今はすっかり大きくなって、僕の手は離れちゃいましたけど、また昔みたいに、全部お世話をしてあげたい」

「全部って？ い……や、待てよ。でもあいつは、もう赤ん坊じゃないぞ」

「ええ。今、あの子は可愛くて残忍な子になりました。それがまた

堪らないんです。僕は怖がりな人間ですから、平気で人を殺傷出来る人が、恐ろしくて仕方ありません。でも同時に、惹かれます。凄いなあって。まあ要するに、僕はあの子の全てが好きなんです。それはそうと、あなたは何故」

「待て。人が来たぞ」

話の途中だったが、ギスターチはピタツと声を止めた。同時に十夜も、喋るのを止める。

少し離れたところから、かすかな足音が近づいてくる。音からして、一人のようだった。

「ちょうどいい。子供だ。だがこんな夜更けに一人か。親は？」

「いや、違います。あれは大人ですよ。それも、男の人ですね」

「嘘だろ。この暗さと距離でそんなことが分かるか？ かるうじて人影が分かる程度だぜ」

辺りに街灯はない。明かりといえば民家の窓の隙間から漏れる僅かな蛍光と、月明かりくらいのもの。しかも、対象との距離はまだ五十メートルはある。人影は何とか確認できても、性別までは分からない。

「俺も夜目は利く方だが、そんなことは……」

訝しむギスターチに、十夜は得意げに言った。

「僕はとても夜目が利くんです。だからこそ、死謳さんにこの任務を命じられたんです。あと、ストーリーカー経験がありますから。足音だけでも子供が大人か、男性か女性か、すぐに分かるんです。更には」

「やめろ。それ以上聞きたくねえよ！ ……じゃなくって、静かに相手に気がつかれるだろう」

「あ、失礼」

「まあいい。やるぞ」

対象は、もう十メートルと離れていない。だが二人の存在に気づかず、そのまま普通に歩いている。そして、二人の潜む藪の傍を通

った、その時。

いきなり、十夜が飛び出した。音を聞きつけて男性が振り向くと同時に、素早く、みぞおちに拳をいれる。

「ぐッ」

相手は呻き声をあげると、そのままフラツと体を傾けた。その体を十夜は抱え、ぱつと辺りを見渡した。すると、ギスターチが声をあげた。

「よし、よこせ！」

だが、姿はない。かわりに地面がボコツともりあがり、手がよきつと突き出ている。

十夜はすぐさま、抱えた男性をその手に渡した。手は気絶した体を掴むと、そのまま地面に入っていった。

手も、襲われた男性も、まるで水中に沈むように消える。一分もたたぬうちに、地面は何事もなかったかのように平らに戻った。たった今、男性が歩いてきたことなど嘘のようだった。

ギスターチがいなくなり、一人残された十夜は軽く周囲を確認すると、ふつと息を吐いた。

「よし、それじゃテレポーションを……つと」

彼は小さく手を叩いた。すると手の中に魔法陣が現れ、機械が一つ召喚された。テレビのリモコンに似ているが、上部に横長の液晶画面がついていて、電卓を細長くしたようにも見える。

誰でも手軽に使えるが、高価であるが故、この国ではあまり普及していないテレポーション用の機械。十夜がボタンをいくつつか押すと、足の下に白い魔法陣が現れ、彼をその場からかき消した。

+++

十夜が次に姿を現したのは、古い建物の前だった。集合住宅のようだが、外のコンクリートは塗装されておらず、既にボロボロになっている。

出入口、数段ある階段を上り、彼は建物の中に入った。建物は古かったが、入るとすぐ右手に、小さなエレベーターがあった。

十夜はそれに乗ると、3を押した。そのまま上にあがり、目的の階でおりると、一番奥の部屋を目指す。部屋の扉は重厚感のある、鉄製の扉だったが、彼がドアに手をかざすと、ノブに光がともり、何をせずともガチャリと開いた。

十夜は中に入って靴を脱ぐと、声をはりあげた。

「ただいま！ ギスターチ、いますか。ギスターチ！」

スタスタと廊下を通り、つきあたりにある扉を開ける。

本棚がくつついている、黒い壁の部屋。そこは前、彼が死謳としゃべっていた部屋だった。だが今死謳の姿はなく、男性 先ほどの通行人 が、一人、転がって喚いていた。

「離せ！ 僕をどうする気だ」

男性は手足をガツチリ縛られ、身動きが取れない状態にされている。しかし猿轡はかまされてないので、声だけはとにかく威勢が良かった。

「お前は誰だ。何でこんな事をするんだ。わかっているのか、これは犯罪だぞ。誘拐だ！」

「うるさい」

喚く男性に、ギスターチが鬱陶しそうに一括した。

「黙れ、クソガキ！」

「ガキじゃない。僕は大人だ。背が低いからって馬鹿にするな」

「馬鹿にはしてない。ただ黙れと言っただけだ。クソうるせえ」

「何だつて！ おい、答える。僕をどうする気だ」

「死んでもらうのさ」

男性の問いかけに対し、ギスターチはさらっと物騒なセリフで答えた。

「今からお前を、薬を使って、ある女に変身させる。お前には、その女の身代わりになって死んでもらう。それだけ」

「なっ」

言われた言葉に、男性は一気に青ざめた。それをよそに、ギスターチはさっさと次の作業に入ろうとした。

「おい十夜、猿轡もってこい。召喚しろ」

「ちよつと待つてください。あなた、彼がどこの誰か、聞いたんですか」

「いや。でもこれを持ってた」

ギスターチは自身の懐に手をつっこむと、小さな手帳を取り出した。

「警察手帳だ。名前は、霧春慶喜きりはるけいき。それがこいつの正体さ。……だろっ、慶喜？」

「そうだ。ぼ、僕を殺してみろ。そんなことをしたら、警察が黙ってないぞ。逮捕されるぞ！」

「子どもっぽい脅し文句だな。逮捕なんて、そんなこと、別に怖かねえや。あと、声が震えているぜ」

ギスターチはおどけた調子で返す。慶喜は必死に叫んだ。

「とにかく、こんな事をしてただで済むと思うなよ。これは犯罪だ」「しつこいな。言われなくても分かっただろ。……おい十夜、さっさとやれ」

「もう、人使いが荒いですね。自分で召喚すればいいじゃありませんか」

「馬鹿野郎。猿轡の場所が分からないから出来ねえんだよ！ほら、俺は薬を出すから」

「分かりましたよ」

溜息を吐きつつ、十夜はサツと動いた。

まず小刀を召喚して慶喜の服を切り裂き、脱がせて、上半身を裸にする。次に猿轡を召喚してかませ、続いて椅子を持ってきて、そこに座らせる。さらに手錠と足かせを調節し、全く動けぬよう固定した。

時間にして、わずか数秒。その間に、ギスターチは薬を召喚していた。魔法陣が床に現れ、液体が満たされたバツク付きの点滴の台が現れる。

「おい、薬はこれでいいよな」

「はい」

「それじゃ、点滴開始。十夜、注射はお前に任せていいな？」

「ええ。注射と坐剤は任せて下さい」

笑顔を見せ、十夜は針を持ち、射った。慶喜は怯えた目をしたが、もう声を出すことは出来ない。もちろん、体を動かすことも出来ず、完全に、されるがままだった。

「さて十夜、ここから何分だ？」

作業を十夜に任せる一方、ギスターチは懐中から時計を出し、時間を見た。

「この変身薬の効き目は、確か、体の大きさによるんだよな」

「はい。この方は小柄ですから、薬剤の効きも早いでしょう。十分ほどで変身が終わると思います。ただ点滴そのものは、最後までしなければなりません。大体三十分ですね」

「ふむ。それじゃあ気長に待つとするか」

ギスターチは椅子を二つ召喚し、その片方に座った。十夜は空いている方に座り、二人はじっと、慶喜の様子を観察した。

慶喜の体は、二分過ぎたところから段々と様子が変わりだした。ま

ず髪がじわじわと黒くなり、若干ウェーブがかかる。目の色が茶色になり、睫毛も伸び、肌の色も薄くなる。また背が伸びて、胸が女性のように膨らんだ。

体の変化を見ながら、十夜は少しずつ、拘束具を調整した。そして十分が経過した頃には、慶喜は、もう彼ではなかった。全く別の人間　バルティエヌⅡカラスになっていた。頭の先から爪の先まで、全くもって、瓜二つ。

「おい、そろそろいいんじゃないか？　もう外見は彼女にクリソツだぜ」

ギスターチはじーつと慶喜を見、召喚で新しい服を取り出して着せてやりながら言った。

「しかしバルティエヌⅡって、いい乳してるな。意外なところでお目にかかったぜ」

「彼女が聞いたら怒りますよ。それと、点滴はやめてはいけません。今やめたら、一時間後には元の姿に戻っちゃいます」

「やれやれえ」

ギスターチは暇そうに伸びをした。

「飽きた。……おい十夜、ちよつと席を外していいかい？」

「構いませんが、どこへ行くんです？　遊びに行く気ですか」

「ちげえよ。バルティエヌⅡに、この事を伝えようと思ってな」

返事をしながら、一人、部屋の出口に向かう。

「遊びに行くわけじゃない。すぐ戻る。なあに、あと二十分あるだろ。そいつの事は、お前に任せる」

73 - 身代わりと遺書(前書き)

素材：<http://neo-himeism.net/>

73 - 身代わりと遺書

> i29982 - 528 <

ギスターチは玄関に出ると、靴箱の中から小型の懐中電灯を二つ取り出した。それを片手に靴をはき、その場で直接、テレポーターシヨンをする。

光に包まれた一瞬の後、彼は深多の森に姿を現した。だが、森のド真ん中ではない。暗伶軍の城の一部である、地下牢へと続く通路の前だった。

古びた石の階段が、地面の下に続いている。明かりは一切なく、ただ真つ暗な闇があるだけ。大きな怪物の口にも見えて、薄気味悪い。

彼は溜息を一つつくと、持ってきた懐中電灯のうち、一つに明かりをつけた。足元を照らして階段を下り、埃くさいドアノブに手をかける。

触れた瞬間、ノブはわずかに緑色の光を灯し、カチャリと音をたてて開いた。彼が中に入ると、まるで自動ドアのように、勝手に閉まる。

中は暗く、空気は湿って滞留していた。外と同じく明かりはなく、ギスターチが手に持っている懐中電灯が唯一だった。床、壁、天井、四方どこを見ても、冷たい石がずーっと続く。

「相変わらず、居心地の悪い場所だ」

ギスターチは少しぼやくと、通路に沿ってまっすぐ進んだ。そうしていくつか角を曲がり、分岐を超えると、檻が姿を表した。格子で左右と前の三方が囲まれ、正面には頑丈な扉がついている。だがいずれも空で、明かりも人の気配も、まるでない。しかしさらに進

むと、一つだけ、微かに明かりがついている檻があった。ギスターはその前で立ち止まると、声をかけた。

「おい、起きているか。俺だ、ギスターチだ」

「ああ」

返事をしたのはバルティー又だった。服装は囚人のような黒いワンピースで、疲れた表情をし、膝を抱えてしゃがんでいる。中にあ
る明かりは小さなロウソクで、炎が頼りなくゆらゆらしていた。

ギスターチの姿を見て、彼女は檻の中からため息をついた。

「どうして此処にきたんだい」

「きちや悪いか」

「いいや。嬉しいよ」

言いつつ、バルティー又は重苦しい溜息をついた。

「空気は悪いし、暗いし、やることがない。三日もいたら鬱を発症しそうだ。ギスターチ、ねえ。何とかしてくれないかい」

「弱音を吐くなんて、お前らしくねえな。ほれ、懐中電灯をやるよ。少し喋ろう」

ギスターチは持ってきた懐中電灯のうち、使っていない方を、格子の隙間にすべらせた。バルティー又は心なしかほっとした表情でそれを受け取り、早速、明かりをつけた。

「ああ、これで大分明るくなった。ありがとう」

「どういたしまして。いやしかし、こんな場所じゃ気が滅入るのも無理はねえな」

「全くだよ。暗いのか湿っているのか、どっちかにしてくれればいいのに。僕は力エルじゃないんだ。こんな場所はごめんだね」

「確かに。お前は白衣を着て研究室に閉じこもっているか、スーツを着て動き回っている姿が似合う」

ギスターチはその場にしゃがみ、自分の懐中電灯の明かりを消した。

「だけどたまには、ボディコン的な衣装もいいんじゃないのか」

「何で突然、そんなことを？」

「いやあ」

彼はニヤニヤと笑った。先ほど慶喜の変身姿で、はからずも、彼女の体を見てしまっている。だがバルティエー又はそのことを知らず、変な顔をしていた。

「だがまあ、そのくらいにしておこう。セクハラで訴えられるのもしまらん話だ。とにかく、安心しろ。その黴臭い檻からは、じきに出られる。死謳が、お前をそこから出そうと努力しているからな。俺はその使いだ」

言いながら、今度は手に魔法陣を宿し、ノートに鉛筆、消しゴム、ボールペン、そして小瓶を出す。瓶の中は薄い青色の液体で満たされていたが、よく見ると、小さな時計が入っていた。

「内容はこうだ。今、変身薬で、お前とソックリな人間をつくっている。その人間を殺し、お前を檻から出すと同時に、この中に入れる。ほら、受け取れ」

懐中電灯と同じく、出したものを格子の隙間から滑らせる。だがバルティエー又はすぐには受け取らず、ひどく訝しげな顔をした。

「何だい、これは」

「おい、そんな顔をするな。此処には監視があるんだ、演技でいいから、嬉しそうな顔をしる。いいか、お前には遺書を書いて欲しい」「遺書？ それは、いったい」

「責任をとって死ぬことにしましたと、そういう旨を書くんだ。そうすれば、誰もお前の死を疑わんだろう。死体は速やかに埋葬され、墓場に持っていかれる。だが実際死ぬのはお前じゃない、別の誰かだ。で、お前は晴れて自由の身さ」

「でも、こんなのを僕に渡していいのかい」

出された道具を一式手にとりはしたものの、彼女は戸惑いを見せた。

「筆記用具は、もともと此処にはないものだ。どこから入手したんだって話になるよ」

「受け取っておいて今更だな」

ギスターチは肩をすくめた。

「さつきも言ったが、此処には監視カメラがついているだろう。録画した映像を見れば、誰か一発で分かるじゃねえか。後は、素直に言えば良いんだ。懐中電灯を持っていった時、所望されたので渡しましたと」

「どうして懐中電灯を持っていったのと聞かれたら？」

バルティーヌの質問に、彼は先程まで、牢屋内唯一の明かりだったロウソクを指さした。

「ロウソクなんて危ねえだろ。この地下牢は謳歌軍の根城に直結してるから、火事になったら大変だ。そりゃあ、燃えるものはないが、万が一ってことがある」

そこまで言つて、彼はぐつと声を潜めた。

「この口実を作るために、わざとロウソクを用意したんだ。いつでも、俺じゃねえけどな」

「なるほど。道理で、今時ロウソクなんて珍しいと思ったよ」

バルティーヌはふつと息を吐いて炎を消した。

「この牢の中には電球がない。魔法が使用できないよう仕込まれているから、魔法火も焚けない。だけど廊下にはランプがある。それをつけずに、どうしてロウソクと想っていたけど……そういうことか」

頷き、バルティーヌは早速、筆をとりはじめた。

「それじゃ、確認しよう。一連の責任をとって死ぬことにしましたと、これに書けばいいんだね？」

「そう。鉛筆で下書きして、ボールペンで清書だ。バレないように本気で書けよ。ついでに身代わりの人間は毒殺する。その毒が、時計になっている小瓶だ。本物だから、くれぐれも飲むなよ」

前後しつつも、ギスターチは説明をする。

「明け方には死体を持つてくる。遺書はそれまでに書きあげる。時間は時計で計ればいいが、あまりジロジロと見るなよ。それは、あくまで毒だ。そのために、見た目をわざわざ加工したんだ。ぱつと

見、時計だとは思えねえだろ？」

「確かに、よく出来ているよ。だけど撮影された映像を拡大したら、これが時計だと分かってしまうかもよ」

「だから、行動に気をつけるっていうんだ。見る方だって、怪しいことがなきゃ、わざわざ拡大しねえだろ」

「僕が出て、身代わりが入る時は？」

「十夜がカメラに細工をかける。心配ない、あいつは監視カメラを誤魔化すプロだ」

一人が自分の身代わりとして殺されるというのに、バルティエ
又は顔色一つ変えない。むしろ当然のように事を進める。

「それじゃあな」

ギスターチはそのまま踵を返し、残されたバルティエ又は檻の中で、もくもくと遺書を書き続けた。

74 - 死体と同衾？

翌日28日、午前十時。暗怜軍の城、最上階で、レミラは深い溜息をついていた。

「スレイヴ、それは本当ですか」

「そうです」

前にはスレイヴが、彼にしてはややかしくまった顔で立っている。

「自殺だそうで」

「バルティーヌが？」

「はア」

「やれやれ」

レミラは肩をすくめ、苛立ちながらも呆れた様子で、傍の机を軽く叩いた。

「そんなことを言われても、信じられません。大体、どうやって死んだのですか。牢の中に、自決用の道具を置いていたのですか？」

「さ、さあ。オレも見てねエから分かりますが」

「そうですか」

レミラは冷たく言い放った。それに、スレイヴは気まずそうに、自分は伝達係だからと言った。

「その、だから」

「御託は結構。こうしていても、埒があきません」

レミラはぱつと立ち上がり、数歩歩くとスレイヴの腕を掴んだ。

「現場を見ましよう。貴方も来なさい」

スレイヴの返事も待たず、彼は赤い魔法陣を足元に出し、部屋からぱつと消えた。一足飛びに牢屋まで飛び、牢屋の前に、湿っぽい床に立つ。

到着した瞬間、スレイヴはやや吐きそうな声をあげた。漂っているよどんだ空気に加え、心の準備もなしに乱暴なテレポーテーションを受けたせいで、酔ってしまったようだった。

「うえッ……ね、レミラ様は、城の中を自由自在にテレポ出来んですかア？」

「寝ぼけているのですか」

気分悪そうな様子を見せる彼に、レミラは同情の欠片もなしに言う。

「私は此処の幹部ですよ、当たり前でしょう。それより」

牢屋の前にはスレイヴとレミラの他に、二人の男がいた。だが退くよう指示をされると、さっと場をあげた。

レミラは、牢屋の中で倒れているバルティーヌを格子越しに見、二人に尋ねた。

「死亡した彼女を第一に発見したのは誰ですか？」

「彼です、レミラ様」

先ほど牢屋の前にはいた二人のうち、一人が仲間を指さした。指された男はすぐ、レミラに一礼して喋りだした。

「ギスターチと申します。今回のバルティーヌの死に関しては、俺に責任があります。俺が、毒を彼女に渡しました」

「毒ですって？」

レミラは怪訝な顔をして、オウム返しに聞き、スレイヴに聞いた。

「彼女は服毒自殺をしたのですか。何故言わなかったのです」

「そんなことを言われてもなア……オレも、それは初耳です」

「全く、誰もかれも」

レミラはことごとく苛立たしげな素振りを見せた。

「ギスターチ、どうしてそんなものを」

「彼女が望んだからです」

ギスターチは丁寧に答える。年は彼の方が、レミラより二倍近く上なのだが、そんなことは全く関係なく平服している。

「レミラ様、バルティーヌは死ぬ前に言いました。瀏華隊の奴らに、この城の接近を許した上に、たくさんの仲間を死においやった、その責任を取らなければならぬと」

「責任？」

「はい。大勢の仲間を死に追いやり、自分が生きているわけにはいかない。レミラ様にも、死んでいった仲間にも申し訳がたたない。そう言っていました」

レミラは何も答えなかった。ただ少し目を細め、牢屋の中に目を向けた。

中にはバルティーヌがいるが、既に骸と化していて、全く動かない。ギスターチも同じように彼女を見て、どうして毒を渡すことになったのか、そもそも、自分がどうして牢屋に行ったのかを、つぶさに説明した。

「……というわけで、火は火事の危険があります。なので、懐中電灯を渡しに行きました。そうしたら、彼女は私に懇願したのです。自分を殺してくれと」

「殺せ？」

「はい。ですが私は、殺すことは出来ないと言いました。でも彼女は どうしても言い、それならせめて、遺書を書くための筆記用具と、致死量の毒をくれと言いました。それで」

「渡したのですか？」

渋い顔をするスレイヴを隣に、レミラは鋭い声で言った。ギスターチは頂垂れて謝罪し、弁解した。

「ですがあのまま放置しておいたら、彼女はきつと、舌を噛んでいたのでしよう。そんなことをさせるくらいならと、そう思って」

「いつそ、そうして死ねば良かったんです」

憐憫の情を言葉ににじませる彼とは別に、レミラは吐き捨てるように言った。

「私の命もなく、勝手なことを。……ギスターチ！」

「は、はい」

「こんなことをして、ただで済むと思っっていますか？」

「いいえ」

「そう。ならいい」

全然良くなさそうな調子で、レミラは言う。そして、黙ってギス

ターチの隣にいた男に声をかけた。

「バルティーヌが書いたという遺書は？」

「牢の中です。手をつけず、そのまま置いてあります」

「そう」

レミラは軽く返事をする、スレイヴについてくるよう指示し、牢屋の取っ手に手をかざした。緑色の光を灯し、鍵なしで錠を開ける。

「綺麗な死に顔だなア」

後について入ってきたスレイヴは、レミラの後ろから覗き込んで嘆息を吐いた。

「眠っているみたいだ」

実際、そこにあつた遺体の顔は穏やかだった。冷たい石畳の上に横向きの姿勢で倒れてはいるが、外傷はなく、表情は静かで、今にも寝返りをうちそうだった。

だがレミラは死体の腕を掴むと、曲がっている方向と逆向きに力を込めた。それは結構乱暴で、やがて圧力に耐え切れなかった関節が、バキツと嫌な音をたてて折れた。後ろでスレイヴが顔をしかめたが、全く気にとめない。続いて、召喚で小さなペンライトを取り出した。遺体の脛をこじあげ、中を照らす。

「体は硬いし、瞳孔も縮小しない。これは確実に死んでいますね」

瞳孔の開き具合を確認した後、灯りを落とし、出した時と同じく魔法でライトをその場から消す。終始様子を見ていたスレイヴは、バルティーヌの折れ曲がった腕を見て、ボソリと言った。

「レミラ様。普通、腕より先に瞳孔を見るんじゃないですか」

「黙りなさい。それより、遺書を持ってきなさい」

「はア」

スレイヴは、遺体の傍にたたまれていた紙を取り、差し出した。レミラは中を開くと、ざっと目を通し、しばらく沈黙した後、それをスレイヴに見せた。

「この字、どう思います？」

「どうもこうも、随分ビツシリと書いてあるなア」

「そうではなく、筆跡です」

紙には、流れるように綺麗な字が、ビツシリと等間隔に書かれていた。どうにも几帳面な字面で、簡単にまねできる文字ではない。スレイヴは少し首を傾げた後、確かにバルティーヌの筆跡ではないかと言った。

レミラはざつと中に目を通すと、魔法を使って紙を消し、スレイヴの腕を引っ張って牢から出た。

だが、その直後。彼はとんでもないことを言った。

「ギスターチ。貴方にはこの牢に入って、一週間、屍と一緒に過ごしてもらいます」

「何い？」

あまりのことに、ギスターチはつい素の口調で問い返した。

「あ……えつと。あの、レミラ様」

「聞こえなかったのですか。バルティーヌの死体と一緒に、一週間過ごせと言ったのです」

そう言うや否や、彼はギスターチの背中を押し、牢の中に入れて錠をかけた。

「レミラ様！ 何を」

「恋人か友人か分かりませんが、情けをかけた相手と一緒にいれて嬉しいでしょう？」

うるたえるギスターチをよそに、冷たく笑う。

「一週間もすれば、立派に腐敗するでしょうけど」

「そんな」

ギスターチは本気でうるたえた様子を見せた。スレイヴはぼかんと口を開け、先程ギスターチと喋っていたもう一人の男は、気の毒そうな顔をしたものの、何も言わなかった。元より、幹部にやめろと、意見する権限はない。

「食事は一日一回です。足りなければ、その死体でも食べることですね。一週間たったら、出してあげます。その後で、腐った死体を

埋葬しなさい。貴方、一人で」

それだけ言うと、レミラはスレイヴともう一人の腕を掴み、テレポーションでいなくなった。

三人そろって、引き止める間もなく、あっという間に姿を消す。後には檻の中に、死体と、ギスターチ一人が残された。

75 - 訪問

警察の調査に立ち会ってから二日あけて、29日。

闇蝙蝠は学校が終わった後、ある所へ向かっていた。そこは学校から五キロほど離れた場所だったが、移動は例のごとく、テレポーションを使って一瞬で済ませる。バスも電車も使わず、手間も時間もお金もかからない。

飛んだ先は、手入れのされた森の中だった。だがすぐ前には家がある。

森の中にふさわしく、土塀に囲まれ、門から玄関へは石が敷きつめられている。庭が造ってあるが、放置ではなくきちんと手入れされており、屋根は瓦で、平屋だった。闇蝙蝠は玄関へと足を進めたものの、途中で立ち止まり、やや重苦しい息を吐いた。

「でもなあ、何て声をかければいいかなあ」

頭につけたコウモリの髪飾り 仲間には、死骸だのなんだのと言われたものを、弄りながらブツクサ言う。

「人がいいよな、俺も。つたく、ガラにもない」

ポケットに手をつっこんで、携帯電話を取り出し、一通のメール画面を呼びだす。そこには丁寧に、春翅諳のことをよろしく頼むと書いてあった。

メールの差出人は、湖春うみはるという名で登録してあった。いささか他人行儀だが、闇蝙蝠、そして春翅諳の実の母である。春翅諳が謹慎をくらったことを聞きつけ、心配してメールをよこしてきたのだ。それに従って此処に来たのだが、しかし、悩んでいた。

闇蝙蝠はあの場で、春翅諳のことを言及した。意地悪をしたつもりは決していない。他の誰かに言われるくらいなら自分がと思ったのだが、しかし春翅諳にしてみれば、顔を付き合わせたくない相手かもしれない。来るなど追い払われるならまだいい方で、もし泣かれたら、どうやって慰めればいいのか。

考えあぐね、闇蝙蝠は目の前の家を見つめた。だが、己に言い聞かせるように呟いた。

「いや、でも俺は、何も悪いことはしてない。しーちゃんだって、デザイナーさんだって、分かってくれているはずだ。母さんからメールをもらったから、様子を見に来たよって、それでいいんだ。そもそも、俺は兄貴だ。仕事で懲罰くらった妹の心配くらいするさ。

……よし」

思いきったように、入り口の横にあるインターホンを押す。すぐに、ピンポンと音が響いた。

だが、誰も出ない。闇蝙蝠は渋い顔をして、もう一度押した。また音が鳴ったが、やはり誰も出ない。

「おい、留守か。何だよ、人がせつかく訪ねてきてやったのに！」腹立たしくなり、よせばいいのに、何度も連続でボタンを押す。すると突然、ガタンと音がして怒鳴り声が響いた。

「じゃかあしいッ！ そんなに連打せずとも聞こえとるわ、馬鹿もん。闇蝙蝠だな、全く、なんだその恰好は。頭にくつつけているのはコウモリの死骸か？」

玄関近くのギロチン窓をガツと開け、顔を出したのはデザイナーだった。挨拶は一切抜き、言いたい言葉を羅列するという、なかなか非常識な対応をとる。

普通の人なら驚くところだが、闇蝙蝠は苛立っていたこともあり、負けじと言い返した。

「なんだ、いたんですか、師匠さん。もう、いるなら早く出てくたさいよ。俺だって何度もボタンを押して、指がいい加減痛えんだよっていうか、第一声から失礼だなあ。何が死んだコウモリだって？

この髪飾りのことか。せめて生きた蝙蝠と言ってほしいね。俺のかわいいスアンドちゃんに何てことを言うんだ」

「名前があつたのか。そのような無機物に名前をつけるとは、なかなか乙女な趣味だな」

「乙女じゃなくても名前くらいつけるさ。だって、これは唯の飾り

じゃない。武器だ。俺の命令で、武器に変化する特殊なものだッ」

「お前、そんなワザを持っていたのか。開示データで見た覚えは無いが」

「ああ、そうだろうな。だって申請してねえもん。それよか、あの家にあがって良いですか」

「入れ」

デイザートはその場でひょいっと手を動かした。すると、玄関の扉が開いた。闇蝙蝠はおじやましますと一言声がけをして入った。

内装は比較的新しいが、外と雰囲気は違たがわない。石造りの床に、一段あがってフローリングの床。右横には茶色い木の靴箱が据えられ、上には羊の置物がおいてある。デイザートがあがれといったのを幸いに、闇蝙蝠は座って靴を脱ぎにかかったが、ふと、玄関に小さな靴があることに気がついた。

ぱつと見、どこにでもありそうな黒い靴。だがサイズは小さく、デイザートは勿論、同居人の春翹諳のものとも思えない。

「誰か来ているんですか」

尋ねると、デイザートは頷いた。

「そうだ。だが気にしなくていい」

「この靴のサイズからして、相手は子供か」

「かどわかしてきたとでも言いたいのか。そんなに人をロリコン扱いにしたいか」

「俺、そんなことまで言ってますよ。え、でもまさか、本当に小さい女の子？」

「それ以上馬鹿を言うと、翼にクギを打ちつけて、門の前に磔はりつけにするぞ」

デイザートはムスツとして言う。

「何がロリだ。何がシヨタだ。私から見れば、貴様もその域を出んぞ」

「だから、俺あそこまで言ってますんって。それに、勘弁して下さい」

いよ。十六歳でシヨタはねえよ。それに俺は明日、30日で十七になるんだ！……そうだ。せつかくなんで何か誕生日プレゼント下さい」

闇蝙蝠は話半分、冗談めいてお願いした。するとデイザートは、真顔になつて考え始めた。

「といつても、お前の欲しいものだと分からぬぞ。そうだ、馬券があるが、いるか？」

「それって当たりの券ですか？」

「分かん。レースは来週だ」

「そうですか。じゃ、いいや」

「何だ、つまらん。それじゃあ、後で何か送つてやる。洗剤か、ティッシュか、調理用の油でいいかね」

「お中元じゃあるまいし、誕生日にティッシュはないですよ。……いや、お気持ちだけで十分です、滅相もない」

闇蝙蝠はやや恐縮して答えた。多少乱暴な言葉を吐いても、デイザートは大先輩にあたる。あまりに無下には出来ない。

しかし、こうして喋っていると、インターホンを押す前に躊躇したのが馬鹿みたいである。何も、いつもと変わっていない。少なくとも、デイザートは。

「それよか、あの。しーちゃんいますか」

「いるぞ。……おい、春翅諳。おい！」

早速、デイザートは後ろを向いて声を張り上げた。すると返事があり、部屋の奥から、すーっと春翅諳が出てきた。しかし、一人ではなかった。

春翹諳は子供をつれていた。十歳くらいのボーイッシュな女の子で、瞳は真つ黒、髪は金髪で短く、両サイドを茶色のゴムで縛っている。服は、髪の色とおそろいのつもりか、黄色のシャツとハーフパンツ、茶色のハイソックスを着用していた。

ディザートは二人と入れ替わるように部屋の奥にひっこみ、少女は、闇蝙蝠の姿を見ると、軽く会釈をした。

「初めまして。僕、レウ＝レヴィエンといいます」

「僕？ あ……ああ。こちらこそ、初めまして。闇蝙蝠です。言いにくかったら蝙蝠とでも呼んでくれ。名前からして、ヒメールスゲヴィルの人間か？」

尋ねると、少女はこくと頷いた。闇蝙蝠はしばらく彼女を見ていたが、すぐに、傍で立っている春翹諳に話を振った。

「お前がこんな女の子と知り合いなんて、初めて知ったぞ。どこで知り合いになった？」

「遊びに来ているのです。この家の近くに、いるそうです。彼女の……親戚が」

「そうだったの？ だけどここの家の近くって、一番近い家でも二百メートルは離れてい」

「近くは近いです。あんまりゴチャゴチャいうと、コウモリ忌避スプレーをかけますよ」

「おいおい！ 随分と非道なことを言うなあ。ディザートさんと同じノリだな。全く短気だったらありやしない。それに、何だよ。忌避スプレーって」

「これです」

春翹諳は召喚で、右手にスプレー缶を呼び出した。紫色をで、妙にリアルな黒いコウモリの絵が描いてあり、上にデカデカと「コウモリ忌避スプレー 強烈なハッカの香り」と書いてある。

説明書きを見る限り、臭いでコウモリを追い払うものであり、これといった毒性はない。だがそれを見た瞬間、闇蝙蝠はギャツと声をあげた。

「おい、やめろ。俺はハツカが大嫌いなんだ。ちょ、ノズルをこっち向けるな」

本物のコウモリよろしく、ばたばたと暴れる。

「待てよ、俺がいったい何をした？」

「何も」

「じゃあ、どうしてそんなのを召喚したんだ。早く消去魔法でどっかにやっちまえ！ 大体、なんでそんなものを持っているんだよ。そんなに俺のことが嫌いなのか？」

「別に」

嫌がる闇蝙蝠に対し、春翅諳はノズルの先をぴったりと向ける。

「おい、しーちゃん……」

「貴方を追い払うために購入したわけじゃありません。ただ、いるんですよ。換気扇に、本物のコウモリが」

「そのままいさせてやれよ。自然と共存しろよ。コウモリは益虫なんだから」

「益虫ではなく、益獣です」

「そんな細かいことは捨ておけ。可哀想じゃないか、追いはらうなよ」

「別にいてもいいのですが、嫌でしょう？ 何かの拍子で中で死に、そのまま腐ったりすると。あと、困るでしょう？ 換気扇の裏に、コウモリの卵がいっぱいだと」

「ゴキブリじゃあるまいし、卵なんてあるか。ていうかお前、さっき蝙蝠は虫ではなく、獣だって言ってたじゃねえか」

「そうでしたっけ」

「そうでした！」

闇蝙蝠はがなりたて、春翅諳はどこかすつとぼけた答えをかます。「卵といえば、コウモリの卵とじ」

「そんなゲテモノがあつてたまるか。とじるな、開け、心の扉を！」
「だしまき卵のおいしい作り方。その一、まずダシにコウモリを」
「心の扉に関するツツコミは無いのか？」

「コウモリの上に卵をかけて、あとはしらたきとネギ、しいたけ、豆腐で」

「すき焼きじゃないツ。全く、デザートさんといいお前といい、変な話しかしないんだから。漫才やってるんじゃないぞッ！」

春翹諳はやや物憂げに首を傾げた。かと思うと、じっとしている少女を呼び、命令する。

「レウ、抑えなさい。闇蝙蝠の、右手首を」

「はい」

少女は素直に返事をし、前にでて闇蝙蝠の右手首をぱつと掴んだ。そのまま、クイツと動かし、彼の手を上に向けさせた。

「ちよ、待つて」

闇蝙蝠は一瞬、そのまま振り払おうかと思つた。相手は一般人の少女で、力も大したことはない。手を離させることは容易だが、しかし、怪我をさせるわけにはいかない。一瞬、躊躇する。

その隙に、春翹諳はスプレーを噴射した。飛び出た中身が腕にかかり、闇蝙蝠はひどい叫び声をあげた。

「うわああアアッ、やりやがったな！ ひどい、俺なにもしてないのに！ 手に、手にハツカの匂いがッ。今すぐ消臭剤の中に手をつつこまなきやハツカが俺を襲うウ！」

「落ち着きなさい」

「ゼリーの中に手をつつこんで臭いを吸着させなきや、いやいつそ煮沸か、火炎放射か。いやダメだ、そんなことをしたら手が焦げる」
「落ち着きなさい。貴方、本当に嫌いなんですね……臭いを嗅いでごらんなさい」

その時、レウがぱつと彼の手を離した。圧迫がなくなり、闇蝙蝠は少し落ち着きを取り戻した。

恐る恐る、嗅いでみる。すると、全く臭わない。ただよく見ると、

ほんのわずかに、白い粉のようなものがついていた。

闇蝙蝠は濡れた粉を指にとり、これは何だと聞いた。だが春翅諳は気にするなと言っただけだった。

「そんなことを言われても、気になるだろ。何か有毒なものじゃないのか」

「まさか。しませんよ……戦場以外で、そんなことは」

「ああ、いい度胸だ」

春翅諳の頭のとっぺんに、闇蝙蝠はぐりぐりと右手の拳を押し付けた。

「これは一体、何のイヤガラセだ？ この前の仕返しのもりか、

おい」

「痛い」

「俺の心の方がもっと痛い。こいつめ！」

ぱつと手を離す。春翅諳はその部位を少し撫でた。

「冗談ですよ。ちょっとからかっただけじゃないですか」

言いながら、レウにスプレー缶を渡す。彼女はそれを大人しく受け取ると、先ほどのデザイナーよりしく、部屋の奥にひっこんだ。

「ところで、何故ここに来たんですか、貴方は」

「あつ、そつだ」

デザイナー然り、春翅諳然り、どちらも滅茶苦茶な対応をしてくれるせいで、本来の目的がすっかり頭から飛んでいた。闇蝙蝠はぶるつと頭を振ると、やや目線をそらし、小さめの声で言った。

「べ、別に。何も用事はないけど、ただ、どうしているかと思っただけだ」

「そつでしたか」

春翅諳は落ち着いて答えた。

「そんなに心配してもらわなくても、わきまえていますよ。大丈夫です」

「誰か心配なんて！ 俺はただ、湖春さんに言われたから」

「ああ、お母さんに。……電話ですか」

「メールだ」

素早く携帯電話を出し、先ほどのメール画面を見せる。春翹諳はそれを見て納得した様子を見せたが、ふっと思いついたように聞いた。

「しかし貴方、何故彼女をお母さんって呼ばないのですか」

「俺の母親は別の人だから。生みの親より育ての親って言うだろ」

「悲しみますよ……母が聞いたら」

「まあとにかく、元気そうで何よりだ。お前、いま何しているんだ」
少々無理やりだったが、話を戻す。闇蝙蝠は早口気味に言った。

「レウの遊び相手として、ままごとにでも興じているのか。それとも師匠さんと一日中ベッドの上で乳繰りあっているとか？ 大人のおままごとをしているとか」

「何を言っているんですか。私は調べていましたよ、暗怜軍について、真面目に」

下ネタをふられて腹立たしくなったのか、春翹諳は最後の「真面目に」を強調し、やや皮肉っぽく答えた。

「で、ありましたよ。小さいですけど、発見が。折角来たんですから、持って帰りませんか、情報」

「俺が？」

直後、闇蝙蝠は何か裏があるのではないかと勘ぐった。単純に考えれば、敵の情報を調べて上司に教えることは、良い働きである。だがその情報が間違いや嘘だった場合、迷惑がかかるし、場合によっては迷惑だけでは済まされない。下手したら、何らかの責任を負うことになる。

もしかして、春翹諳はこの前のことを恨み、こちらに嘘の情報を教え、自分を陥れようとしているのだろうかと思う。だが自分がいなくなった所で、犯した罪過や謹慎がとけるわけではない。また、兄妹そろって懲罰を食らったら、実母を心配させることになる。

ただまともな情報なら、春翹諳が自分でリーダーに伝えるのが筋はず。謹慎中でも緊急時は復帰できるし、伝える手段はいくらで

もある。でないと、闇蝙蝠が手柄を横取りすることになる。

「どうしました？　もしかして、思っていますか？　畏だとか」

闇蝙蝠の心情を読んだように、春翅諳は言う。

「心配しなくても、何もありませんよ。私が兄を陥れるわけがないでしょう」

「そんな事は言っていない。けど、自分で言えはいいいじゃないか」

「大きい情報なら、そうします。けれどこれは、本当に小さなものなのです。わざわざ改まって言うほどのことでは」

「何じゃそりゃ」

闇蝙蝠は首を傾げた。

「どういう意味だ？　例えば暗怜軍の幹部はイカスミパスタが好物だとか、風呂で体を洗う時は右腕から洗うとか、巨乳よりつるぺたが好きだとか？」

「流石にそこまでふざけてはいません。けれど、似てはいます。個人に関する情報です。まあ、いらっしやい、私の部屋に。そこで話をしますから」

春翅諳は先に立ち、軽く手招きをした。闇蝙蝠は少し迷ったが、すぐにその後が続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8342n/>

Fight?with the DARKNESS! -闇と共に戦う

2011年9月29日03時24分発行